

SDGs 活動報告書

2022 年度

- 目次 -

• 全体計画	001
• 教務部門	079
• 研究推進部門	081
• 社会貢献部門	229
• 国際貢献部門	289
• 環境部門	316
• 広報部門	318

活動計画タイトル（キーワード）

学校法人東洋大学 SDGs 行動憲章の具現化

① 活動計画の概要

2021 年度に制定した SDGs 行動憲章の下で開始された各取り組みを継続するとともに活性化・高度化する本格的な運用の年度と位置付け、以下の 4 つの計画を実施する。

計画① 学校法人東洋大学 SDGs 行動憲章に基づくアクションの具体化

計画② SDGs アンバサダーの育成と活動の本格化

計画③ 参加型イベント「Toyo SDGs Weeks」の充実

計画④ THE「Impact Ranking2023」へのエントリーとスコア向上

② 数値的な目標の達成状況と得られた成果

計画① 学校法人東洋大学 SDGs 行動憲章に基づくアクションの具体化

会議体である東洋大学 SDGs 推進委員会を発展的改組し、行動憲章に謳われる各領域を具体的に実行するプロジェクトを設置する組織として「東洋大学 SDGs 推進センター」を 2022 年 10 月 1 日に設立。同時に「カーボンニュートラル推進プロジェクト」を設置した。同プロジェクトでは、2021 年 7 月に設立され本学も参画する文部科学省・経済産業省・環境省による「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション」に基づきカーボンニュートラルを組織的に推進するため、文部科学省「大学の力を結集した、地域の脱炭素化のための基盤研究開発」に東京大学などとともに採択された研究プロジェクト「地域の脱炭素社会の将来目標とソリューション計画システムの開発と自治体との連携を通じた環境イノベーションの社会実装ネットワークの構築」の本学グループ代表である荒巻俊也教授（国際学部）をプロジェクトリーダー（兼・SDGs 推進センター副センター長）に就任した。

同 22 日にはセンターの設立を記念したシンポジウム「SDGs×カーボンニュートラルーいま、わたしにできること。」を開催。シンポジウムでは、カーボンニュートラルをテーマとした東京大学の平尾雅彦教授による基調講演、荒巻副センター長による講演に加え、附属高校からも登壇者を迎え、結果報告を行った認知度調査においても附属高校・中学校を対象とするなど、全設置校を含めた学校法人東洋大学全体の行動憲章であることの具現化を図っている。

また、12 月には「ダイバーシティ&インクルージョン推進プロジェクト」を、金子律子教授（生命科学部）をプロジェクトリーダーとして設置。教育支援や研究支援、環境整備など各領域での取り組みの収集・整理を行うとともに、研究領域を中心に本学のダイバーシティおよびインクルージョンを推進する。

計画② SDGs アンバサダーの育成と活動の本格化

コロナ禍の 2021 年度途中に創立された SDGs アンバサダーの本格的な活動を開始する年と位置付け、2022 年 4 月に前年度からの継続として個人 19 名と新規 5 団体を認定し、5 月に 59 名の新規の個人アンバサダーの認定を行った。2022 年度は、「子ども支援」「ジェンダー」「環境問題」「フードロス」「被災地支援、防災」「SDGs ワークショップ」「SDGs カフェ」「学祭出展チーム」の 8 テーマを設定し、「SDGs の学内認知度向上への貢献 (SDGs マインドの育成)」「学生発の SDGs アクションの創発」を活動の軸とし、学生たちが自ら考え、企画等を検討し、学生目線での SDGs の発信、学生発の SDGs アクションを実施することとした。導入にあたる座談会を皮切りに、学園祭や SDGs Weeks など年間を通じて様々なイベントを開催した。（※各企画の詳細は社会貢献部門の報告を参照）

計画③ 参加型イベント「Toyo SDGs Weeks」の充実

シンポジウムや研修プログラムなど SDGs 関連イベントを積極的に開催し、SDGs への関心を高める集中期間とする「Toyo SDGs Weeks」を 2022 年度も継続・拡充し実施した。2022 年度は 10 月 10 日から 11 月 6 日の 4 週間を開催期間とし、35 企画を実施し、延べ 3,960 名の参加を得ることができた（期間内：28 企画 3,264 名、期間外：7 企画・696 名）。映画の試写会や SDGs アンバサダーによる企画など多様な企画が実施され、各企画の関連する SDG についても、SDGs の全ての目標に関連した企画が開催されている（各企画の詳細は添付 3-2 を参照）

- ・ 2021 年度実績：26 企画の実施・延べ 2,775 名の参加
- ・ 2022 年度実績：35 企画の実施・延べ 3,960 名の参加

2023 年度についても継続・拡充するとともに、附属高校・中学校においても SDGs イベントを集中的に実施する日程を設定していただけるよう、各学校長と調整を進めている。

計画④ THE「Impact Ranking2023」へのエントリーとスコア向上

2022 年 4 月 28 日に公表された THE「Impact Ranking 2022」の結果（本学は世界 601-800 位、国内 36 位。詳細は別紙 1-4 を参照）を受け、学内の各 SDG への取り組み状況、国内他大学のエントリーや得点状況を分析し、より高得点を狙えるエントリー先として「Impact Ranking2023」においては下記の 6 項目を選定した。

- ・ SDG 6：安全な水とトイレを世界中に【新規エントリー】
- ・ SDG 8：働きがいも経済成長も
- ・ SDG 9：産業と技術確認の基盤をつくろう【新規エントリー】
- ・ SDG12：つくる責任つかう責任
- ・ SDG16：平和と公正をすべての人に
- ・ SDG17：パートナーシップで目標を達成しよう

管財課（環境部門）、研究推進課（研究推進部門）、広報課（広報部門）等の協力により、エビデンスの収集および学外への公開作業を行い、2022 年 11 月 11 日にエントリー作業を完了した。

結果は 2023 年 4 月下旬から 5 月上旬の間に公表予定である。

③ 2022 年度活動内容		添付資料(※)
4 6 月	<ul style="list-style-type: none"> ・2022 年度東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）の認定（2021 年度からの更新者） ・2022 年度東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）の認定 ・2022 年度 SDGs 認知度調査の実施（大学） ・THE「Impact Ranking 2022」結果公表 ・2022 年度東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）の認定（新規） 	添付 1-1 添付 1-2 添付 1-3 添付 1-4 添付 1-5
7 9 月	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都「情報発信情報発信プラットフォーム」への情報掲載 ・2021 年度一般研究報告における SDGs 関連研究（集計報告） ・全学総合科目「SDGs 実践講座 -17 ゴールへの第一歩」の開講 ・2022 年度 SDGs 認知度調査の実施（附属中学校・高校） 	添付 2-1 添付 2-2 添付 2-3 添付 1-3
10 12 月	<ul style="list-style-type: none"> ・東洋大学 SDGs 推進センター発足 ・カーボンニュートラル推進プロジェクトの設置 ・2022 年度 SDGs Weeks 開催 ・映画「桜色の風が咲く」特別先行上映会の開催 ・SDGs 推進センター設立記念シンポジウムの開催 ・THE「Impact Raking 2023」エントリー ・2023 年度 SDGs 留学生アンバサダーの認定 ・ダイバーシティ&インクルージョン推進プロジェクト ・京区内大学サステナビリティ関連交流・意見交換会登壇（センター長・アンバサダー-学生） 	添付 3-1 添付 3-1 添付 3-2 添付 3-3 添付 3-4 添付 3-5 添付 3-6 添付 3-1 添付 3-7
1 3 月	<ul style="list-style-type: none"> ・2023 年度東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）の認定（2022 年度からの更新者） ・2023 年度東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）の認定 ・SDG 大学連携プラットフォーム公開シンポジウム参加（センター長） ・SDGs 教育に関する国際会議（AIU 主催）登壇（副センター長） 	添付 4-1 添付 4-2 添付 4-3 添付 4-4

※活動実績となる成果物や資料（チラシ・ポスター・報告書等）がございましたら、併せてご提出ください。
 その際、表中の添付資料欄に番号等の記載をお願いします。

2022年4月13日

東洋大学 学長
矢口 悦子 殿

東洋大学 SDGs 推進委員会 委員長
川口 英夫

2022年度 東洋大学 SDGs アンバサダー（個人・更新）の推薦について

2022年度東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）につきまして、2021年度から更新を行う者を2022年4月13日開催の東洋大学 SDGs 推進委員会において適任と認めましたので、下記の通り推薦いたします。

記

1. 被推薦者人数 19名
2. 東洋大学 SDGs 推進委員会 開催日
2022年4月13日
3. 被推薦者名簿
別紙の通り
4. 認定期間
2022年4月1日 ～ 2023年3月31日
5. 添付資料
 - ・2022年度「東洋大学 SDGs アンバサダー（個人・更新）」名簿
 - ・東洋大学 SDGs アンバサダー制度に関する要項

以上

2022年度「東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）」更新者名簿

No.	学籍番号	氏名	学部学科	学年
1			経済学部 経済学科	4年
2			国際学部 グローバル・イノベーション学科	3年
3			文学部 史学科	4年
4			生命科学部 応用生物科学科	4年
5			社会学部（第2部）社会福祉学科	3年
6			国際学部 グローバル・イノベーション学科	4年
7			国際学部 国際地域学科	2年
8			国際学部 国際地域学科	4年
9			社会学部 社会福祉学科	4年
10			文学部 教育学科	2年
11			ライフデザイン学部 生活支援学科	3年
12			法学部 法律学科	3年
13			国際学部 グローバル・イノベーション学科	2年
14			国際学部 国際地域学科	2年
15			生命科学部 生命科学科	3年
16			社会学部 社会福祉学科	2年
17			経営学部 経営学科	4年
18			社会学部 社会福祉学科	3年
19			経営学部 マーケティング学科	4年

2022年4月13日

東洋大学 学長
矢口 悦子 殿

東洋大学 SDGs 推進委員会 委員長
川口 英夫

2022年度 東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）の推薦について

2022年度東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）につきまして、2022年4月13日開催の東洋大学 SDGs 推進委員会において適任と認めましたので、下記の通り推薦いたします。

記

1. 被推薦団体数 5団体
2. 東洋大学 SDGs 推進委員会 開催日
2022年4月13日
3. 被推薦団体名簿
別紙の通り
4. 認定期間 : 2022年4月1日 ~ 2023年3月31日
5. 添付資料
 - ・2022年度「東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）」名簿
 - ・東洋大学 SDGs アンバサダー制度に関する要項

以上

2022年度「東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）」認定団体

NO.	団体名	参加学生数	関連するSDGs	代表者学籍番号	代表者
1	Smile F Laos	11	1.貧困をなくそう 4.質の高い教育をみんなに 10.人や国の不平等をなくそう 12.つくる責任 つかう責任		
1	活動概要				
	【活動する目的】 ①フェアトレードの社会的経済的影響の検討 ②コーヒー販売から得た収益をもとに実施する国際協力活動				
	【活動内容】 ①の目的を達成するために、ジャイコーヒー農協同組合（JCFC）に加盟する複数の家庭を訪問し、家計調査を実施する。また、農家の生活を内面的に知るために、1日、農家においてホームステイし、コーヒーの収穫を体験する。 ②の目的を達成するために、渡航前に数か月かけてプロジェクトを企画し、渡航中にJCFC加盟農家および小学校の生徒を対象にワークショップを実施する。2022年度は農家向けにコンポスト研修、生徒向けに怪我の応急措置の方法を伝えるプロジェクトを実施する。				
2	学ボラ 気仙沼復興支援班（夏・春）	5	3.すべての人に健康と福祉を 11.住み続けられるまちづくりを		
2	活動概要				
	①夏季 【活動する目的】 東日本大震災から今年で11年が経過し、震災の記憶が風化されつつある。そのため実際に現地でのボランティア活動や視察を通じて、震災の風化防止に努める。また、活動したことを多くの人に発信することにより、防災や減災に関する意識を高め、私たちにできることや、「変化する支援の形」というものを考えていく。 【活動内容】 ・「けせんぬま おひさま保育園」でのボランティア活動 一園の清掃や園児のお世話をさせていただく。 ・「気仙沼復興協会」でのボランティア活動 イチゴやネギ農園での収穫など農園での作業をさせていただく。（2019年の活動内容） ・「災害公営住宅」でのボランティア活動 ・視察を行う（例年 気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館、奇跡の一本松） ②春季 【活動する目的】 実際に現地でのボランティア活動や視察を通じて、震災の風化防止に努める。活動したことを多くの人に発信することにより、防災や減災に関する意識を高め、私たちにできることや、「変化する支援の形」というもの考えていく。夏季に引き続き春季でも保育園や気仙沼復興協会でのボランティア活動を行うことで、より持続・継続した支援を行うことができる。 【活動内容】 ・「けせんぬま おひさま保育園」でのボランティア活動 一園の清掃や園児のお世話をさせていただく。 ・「気仙沼復興協会」でのボランティア活動 イチゴやネギ農園での収穫など農園での作業をさせていただく。（2019年の活動内容） ・「災害公営住宅」でのボランティア活動 ・視察を行う（例年 気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館、奇跡の一本松） 過去の活動内容を参考にしているため、「夏季」の申請と同様の内容となっている。 夏季に引き続き、春季にもボランティア活動を行うことにより、継続した支援を行うことが可能となる				
3	学ボラ川越（山古志部門）	2	11.住み続けられるまちづくりを		
3	活動概要				
	【活動目的】 中越地震で被災された方々への追悼の意を示すとともに、中越地震の知識を深め、これまでの山古志の歩みを知る。また、本団体の原点である中越地震の追悼式に参加することで、本団体と山古志のつながりを再確認し学ボラの一員として活動することへの責任感をもたせる。また、今後の他の活動への参加を促し、それも合わせて地域の活性化に努める。そして、ボランティアに参加することで、学生の力がどれだけ必要とされているのか現地の方との関わりの中で実感すること目的の1つとしている。 【活動内容】 追悼式の前日から山古志へ行き、追悼式の式典の準備を行う。そして、追悼式当日には式典の運営補助を行いつつ、式典に参加し被災者へ追悼の意を示す。また、これらの準備・運営補助と同時にビデオの視聴・現地の方のお話を聞くことで地震当時の山古志、そして現在の山古志についての理解を深める。追悼式後は撤収作業のお手伝いをして活動を終える。				
4	学ボラ（大船渡）夏クール	4	14.海の豊かさを守ろう 15.陸の豊かさを守ろう 11.住み続けられるまちづくりを		
4	活動概要				
	【活動目的】 東日本大震災で被災をした岩手県大船渡にて、震災の被害はほとんど復興しているが観光面での復興がまだ進んでいないため、観光拠点となるホタテデッキ、ホタテ食堂等の建設や支援を行う。観光拠点は今後も増えていく予定のため継続的に支援をしていく。また、大船渡の広報支援も学祭などを通じて行っていく。さらに、参加者全員が感じる現地の方々の温かさ、つながりを次世代につないでいくこと。 【活動内容】 ・恋し浜ホタテデッキとホタテ食堂の建設・修復・装飾 一建設・修復では、外装はほとんど完成しているため、主に内装のお手伝いを行っています。装飾はホタテチップというホタテの貝殻が割れて、海で削られて小さくなったものを壁に貼り付けてデザインしています。 ・浮きのランプ作成→漁で使わなくなった浮きをドリルなどを使って穴をあけ模様を描き、中にライトを入れイルミネーションとして用います。 ・地元の方々と交流→震災当時の話を伺ったりしています。 ・大船渡市視察				
5	フードプロジェクト ぶくしま	19	3.すべての人に健康と福祉を 11.住み続けられるまちづくりを 14.海の豊かさを守ろう 15.陸の豊かさを守ろう		
5	活動概要				
	【活動目的】 このサークルは、国際学部国際地域学科のボランティア実習（いわき）参加者が中心となって結成されました。国際地域学科の学生は、すでに2012年からゼミ、学部プロジェクト、ボランティア実習、そして全学の企画等で、福島県いわき市（と隣接する双葉郡）を訪問してきました。参加した学生の総数は200名を超え、その中には20名を超える留学生も含まれています。震災から10年以上経ちましたが、いわきがずっと抱える問題の一つとして、食の安全に対する人々の懸念があります。私たちの先輩は、実際にいわきを訪問し、畑で放射線の測定を行ったり、JAの検査施設を見学するなどして、土地と生産物の安全を確認してきました。そのうえで、いわきのために何が出来るかを考え、サークルを立ち上げて、いわきの農産物や海産物を使った調理会を留学生と一緒に、継続的に行うこととしました。私たちもその趣旨に則って、コロナ禍ではありませんが、いわきの食のPRと留学生との交流会をミックスさせた調理会イベントによって、楽しみながら福島県の食の安全を考えていく機会を提供します。少しずつ、福島県全体の食へと対象を広げることが視野に入れて、サークル名はFood Project Fukushima（フードプロジェクトぶくしま）としています。今回は、この情報発信に関わる部分に関して助成を申請しています。 【活動内容】 サークルのメインの活動は、東京で情報発信をすることです。これは、いわきの農家やNPOの関係者が「学生に東京でやってもらいたい」と考えていることです。特に、外国語での情報発信が決定的に弱い部分であり、留学生に対する期待は大きなものがあります。現時点で、20以上の言語で160本超の動画をYoutube上で発信しています。コロナの状況を見ながら、すでに交流のある社会人ボランティアにもイベントに参加してもらい、活動が定着してきたら、テレビや新聞等の記者を調理に招待したいと考えています。調理会ごとにテーマを設定して、福島県産の食を楽しみながら発信していきます。たとえば、「オリーブを使ったシリア料理」では、日本で暮らすシリア人を招待し、「ホットなスリランカ・カレー」では、スリランカ人の留学生がリーダーとなって調理します。				



東洋大学

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs認知度調査2022 結果報告

東洋大学SDGs推進センター



アウトライン

- 調査概要
- 調査結果

3つのポイント

- ① SDGs認知度
- ② 興味・関心のあるゴール
- ③ SDGsに関する行動

- おわりにかえて
—— 行動へ繋げるためには…？

調査概要

1. 調査対象

学校法人東洋大学の設置する大学・
高等学校・中学校の学生・生徒

- ▶ 東洋大学
- ▶ 東洋大学附属姫路中学校・高等学校
- ▶ 東洋大学附属牛久中学校・高等学校
- ▶ 東洋大学京北中学高等学校

2. 回答期間

大 学：2022年4月18日～5月10日

附属校：2022年9月01日～9月22日

3. 調査方法

Webアンケート
(Googleフォームを利用)

4. 質問項目数

6問または7問 (回答分岐による)

5. 調査内容

- ▶ SDGsの認識度
- ▶ SDGsへの共感度
- ▶ SDGsゴールについての関心度
- ▶ SDGs活動についての関心度
- ▶ SDGs活動についての参加意欲

有効回答数

学校種別回答数

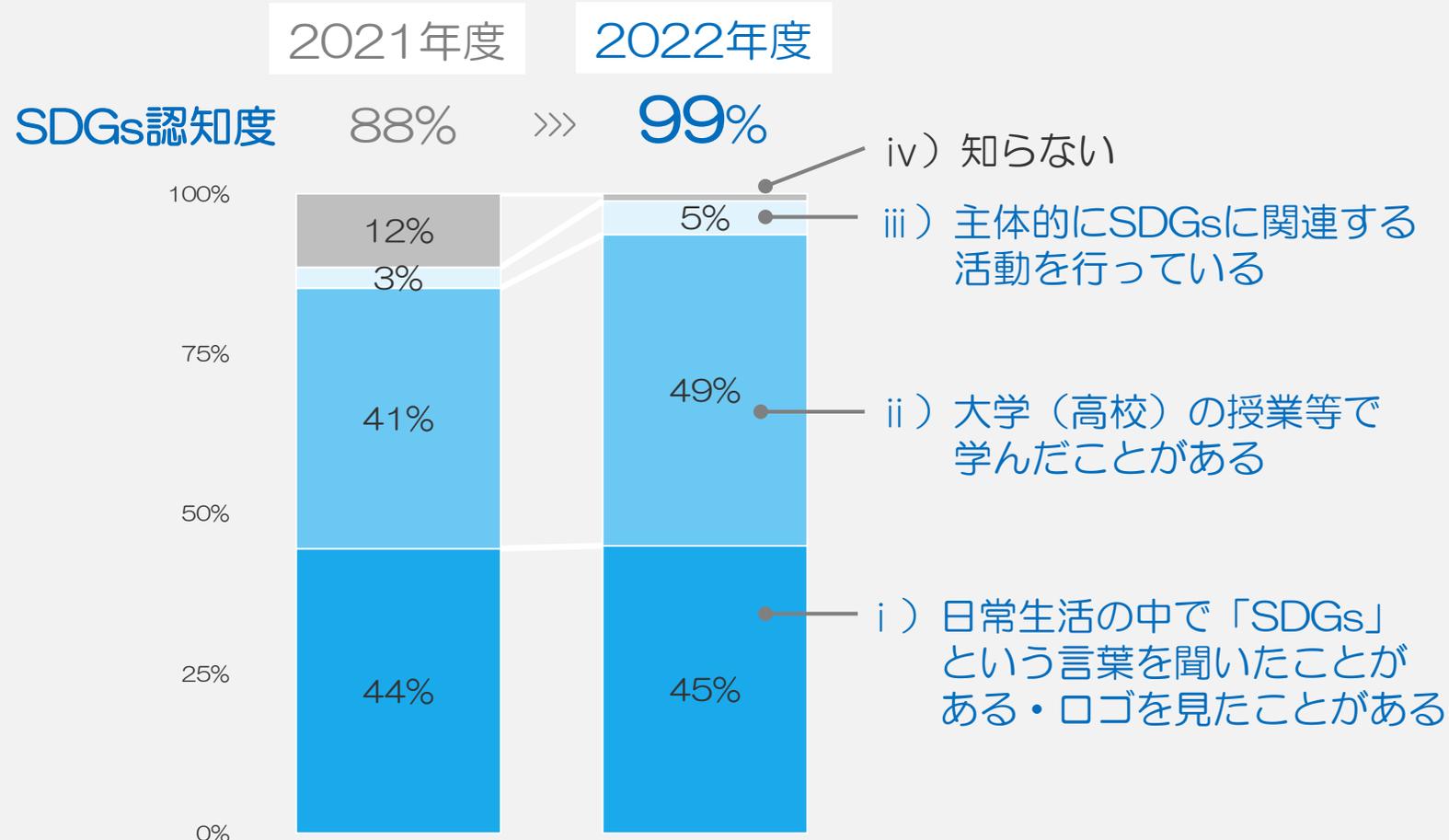
学校名	回答数	小計
東洋大学附属姫路中学校	222	884
東洋大学附属牛久中学校	260	
東洋大学京北中学校	362	
東洋大学附属姫路高等学校	765	3,061
東洋大学附属牛久高等学校	1,469	
東洋大学京北高等学校	827	
東洋大学	781	781
合計：		4,686

学年別回答数

学年	回答数	小計
中学 1 年生	284	884
中学 2 年生	280	
中学 3 年生	280	
高校 1 年生	1,065	3,061
高校 2 年生	842	
高校 3 年生	1,154	
大学 1 年生	432	758
大学 2 年生	138	
大学 3 年生	130	
大学 4 年生	58	
大学院生	23	23
合計：		4,686

SDGs認知度 一経年比較-

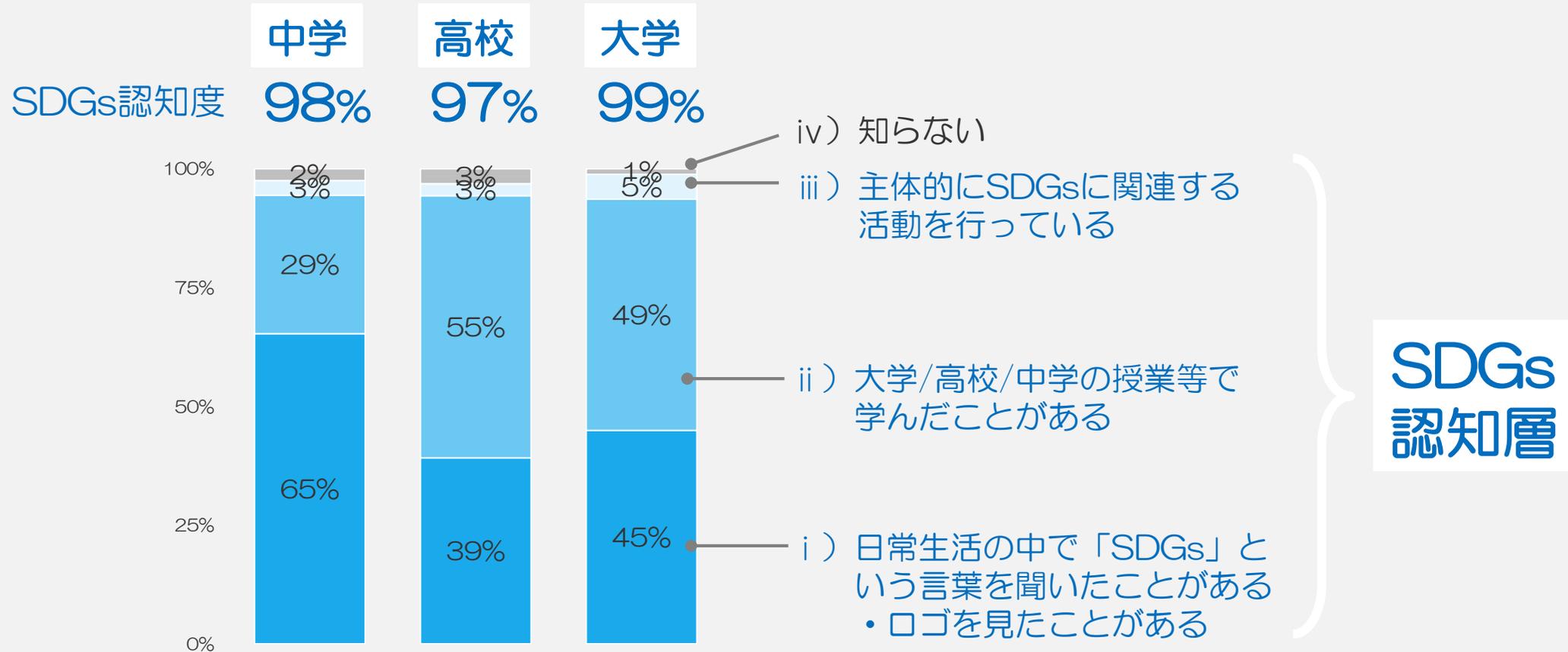
大学生のSDGs認知度 99%に到達



SDGs
認知層

SDGs認知度 -課程別-

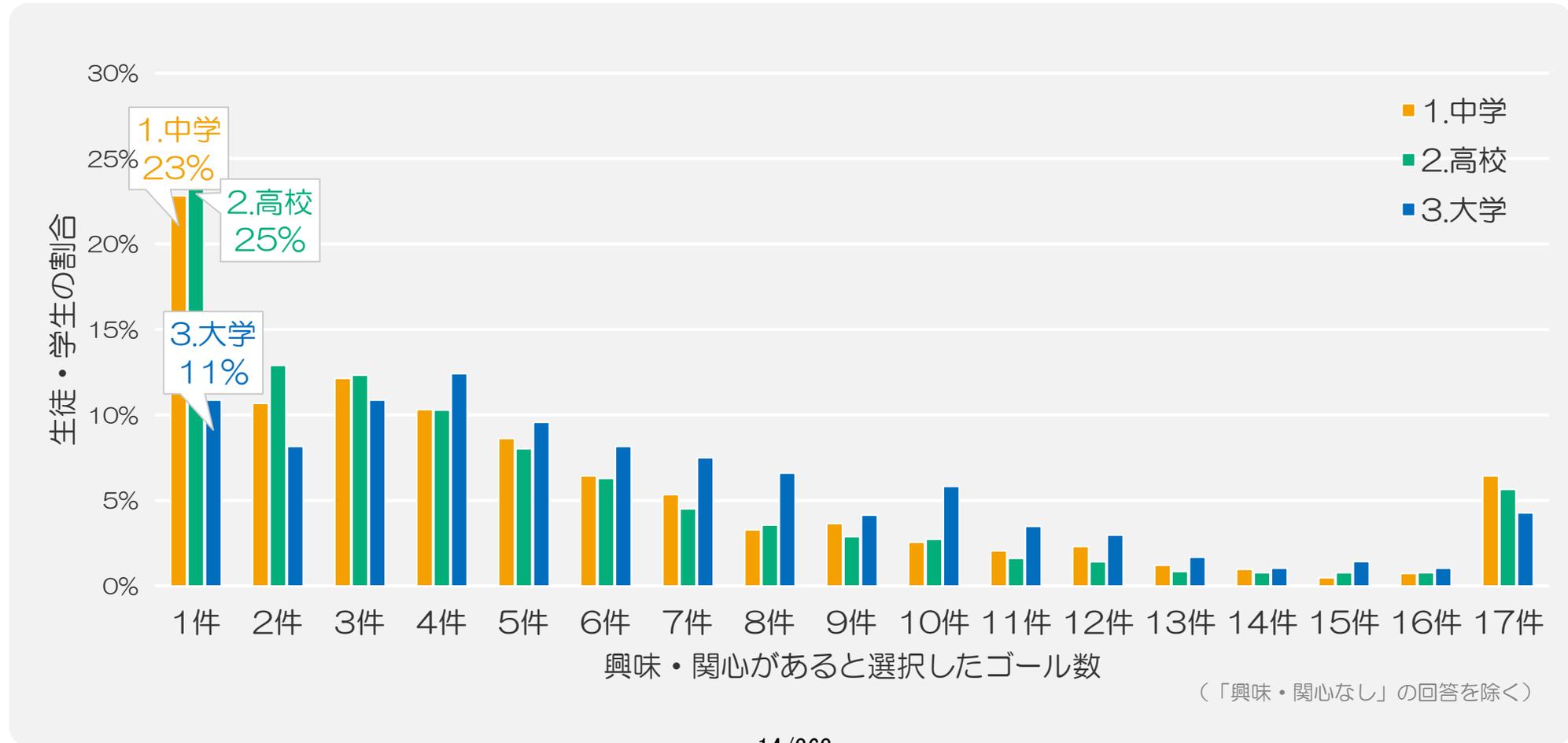
すべての課程において SDGs認知度97%超



興味・関心のあるゴール

- 興味・関心のあるゴール数から見た中高大の比較 -

- ✓ 中高生は大学生と比較して、1つのゴールに興味・関心を持っている層が多い



興味・関心のあるゴール -大学学部別-

各ゴールで上位3項目入ってる学部の色付け

【凡例】 ▲ 人文学・社会科学系の学問分野を学ぶ学生が興味・関心を持つ傾向
 ▼ 自然科学系の学問分野を学ぶ学生が興味・関心を持つ傾向
 ◎ その他

		◎ 1	◎ 2	◎ 3	▲ 4	▲ 5	◎ 6	◎ 7	◎ 8	▼ 9	▲ 10	◎ 11	◎ 12	◎ 13	▼ 14	▼ 15	◎ 16	▲ 17	興味・関心なし	
		貧困をなくそう	飢餓をゼロに	健康と福祉	質の高い教育	ジェンダー平等	安全な水とトイレ	エネルギー	働きがい/経済成長	産業と技術革新	人や国の不平等	まちづくり	つくる/つかう	気候変動	海の豊かさ	陸の豊かさ	平和と公正	パートナーシップ		
学部全体(n=758)		43%	38%	39%	47%	48%	39%	26%	27%	15%	47%	32%	31%	44%	41%	35%	49%	17%	2%	
学部	文(n=121)	43%	35%	37%	58%	55%	31%	18%	21%	11%	47%	30%	23%	41%	35%	31%	47%	17%	5%	
	経済(n=35)	46%	34%	26%	51%	54%	40%	29%	31%	11%	37%	20%	20%	37%	31%	23%	43%	11%	3%	
	経営(n=49)	37%	41%	24%	41%	31%	51%	27%	35%	16%	39%	31%	35%	41%	39%	35%	35%	35%	8%	2%
	法(n=67)	40%	40%	39%	48%	52%	34%	19%	31%	18%	46%	37%	30%	36%	37%	31%	46%	46%	19%	1%
	社会(n=102)	53%	38%	48%	49%	58%	40%	23%	28%	14%	62%	31%	34%	50%	38%	34%	51%	21%	21%	2%
	国際(n=43)	70%	53%	28%	47%	63%	63%	23%	21%	9%	63%	40%	44%	60%	40%	19%	65%	26%	26%	0%
	国際観光(n=18)	33%	28%	28%	50%	56%	28%	28%	44%	17%	72%	50%	44%	56%	39%	39%	78%	28%	28%	0%
	ライフ(n=36)	42%	31%	56%	53%	47%	31%	22%	19%	6%	56%	36%	31%	28%	39%	31%	56%	14%	14%	0%
	総合情報(n=74)	42%	35%	42%	45%	43%	45%	34%	30%	19%	38%	32%	28%	39%	42%	38%	53%	15%	15%	0%
	情報連携(n=8)	38%	50%	25%	38%	63%	50%	25%	25%	13%	50%	38%	38%	38%	50%	50%	75%	13%	13%	0%
	理工(n=60)	38%	37%	42%	50%	43%	48%	45%	32%	28%	37%	40%	43%	50%	47%	47%	52%	17%	17%	0%
	生命科学(n=126)	34%	36%	37%	36%	37%	33%	27%	27%	18%	40%	24%	25%	46%	49%	42%	40%	16%	16%	2%
	食環境(n=19)	47%	68%	47%	32%	47%	42%	11%	21%	5%	42%	47%	53%	37%	68%	58%	58%	11%	11%	0%

興味・関心のあるゴール -課程別の傾向-

中学

14：海の豊かさ	43.5%
16：平和と公正	43.1%
10：人や国の不平等	40.6%
5：ジェンダー平等	39.6%
1：貧困をなくそう	37.9%
13：気候変動	34.4%
3：健康と福祉	34.2%
6：水とトイレ	34.0%
15：陸の豊かさ	32.8%
2：飢餓	30.8%
4：質の高い教育	25.8%
11：まちづくり	25.8%
7：エネルギー	24.3%
12：つくる/つかう	22.3%
8：働きがい/経済成長	21.7%
17：パートナーシップ	17.1%
9：産業と技術革新	12.8%
18：興味・関心なし	3.9%

高校

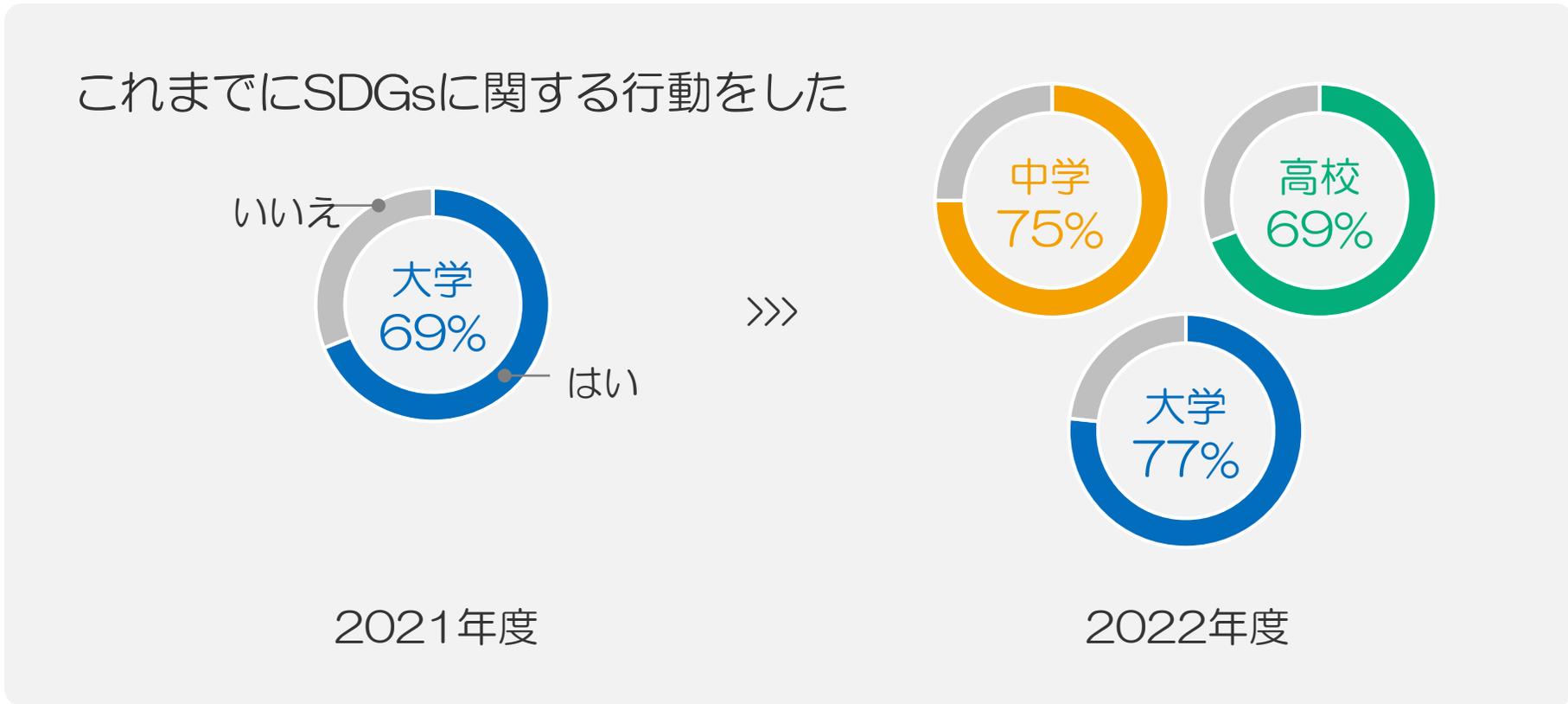
5：ジェンダー平等	37.8%
14：海の豊かさ	37.4%
1：貧困をなくそう	36.7%
10：人や国の不平等	36.5%
16：平和と公正	36.0%
3：健康と福祉	34.1%
2：飢餓	33.9%
6：水とトイレ	32.5%
13：気候変動	28.9%
4：質の高い教育	28.8%
15：陸の豊かさ	26.4%
11：まちづくり	25.9%
8：働きがい/経済成長	23.4%
12：つくる/つかう	19.1%
7：エネルギー	19.0%
17：パートナーシップ	13.9%
9：産業と技術革新	12.0%
18：興味・関心なし	4.1%

大学

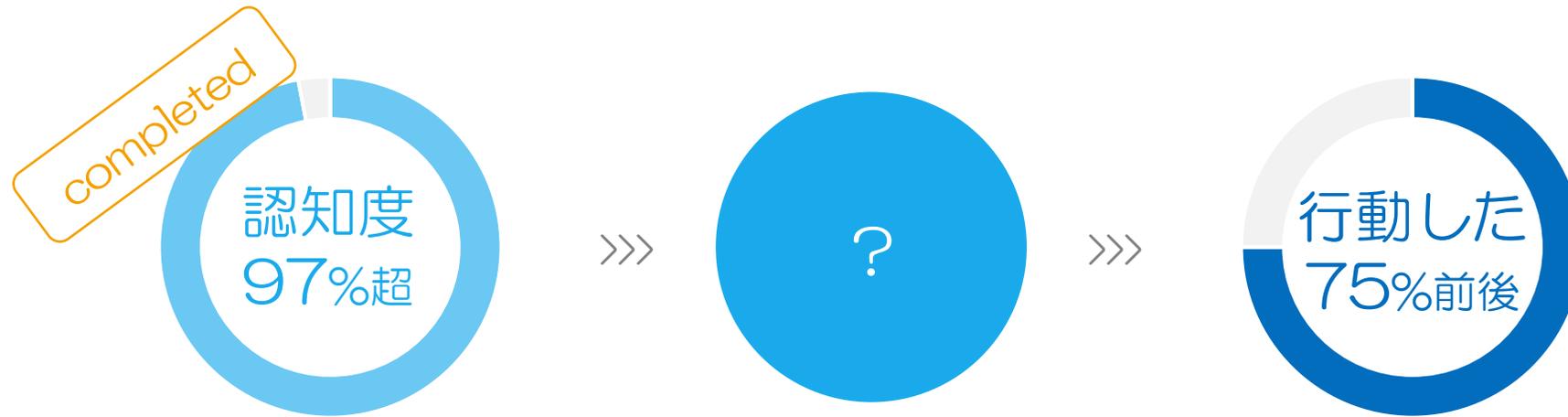
16：平和と公正	48.8%
5：ジェンダー平等	48.3%
4：質の高い教育	47.4%
10：人や国の不平等	47.0%
13：気候変動	43.8%
1：貧困をなくそう	43.1%
14：海の豊かさ	41.2%
6：水とトイレ	39.3%
3：健康と福祉	39.1%
2：飢餓	38.3%
15：陸の豊かさ	35.6%
11：まちづくり	32.5%
12：つくる/つかう	31.0%
8：働きがい/経済成長	27.8%
7：エネルギー	26.0%
17：パートナーシップ	16.8%
9：産業と技術革新	15.6%
18：興味・関心なし	1.8%

SDGsに関する行動 -課程別-

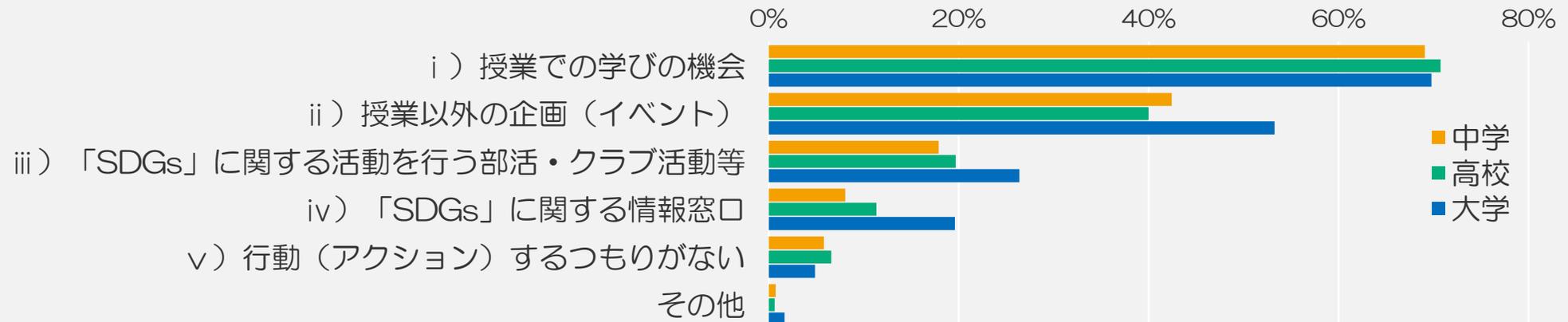
- ✓ 昨年度と比較して、SDGsに関する行動をした大学生増
- ✓ SDGsに関する行動をした生徒・学生は75%前後に及び



おわりにかえて — 行動に繋げるためには…？



SDGsへの行動をするために、学校（大学・高校・中学）でどのようなきっかけがあればよいと思いますか？



Times Higher Education
Impact Rankings2022
結果報告

学長室

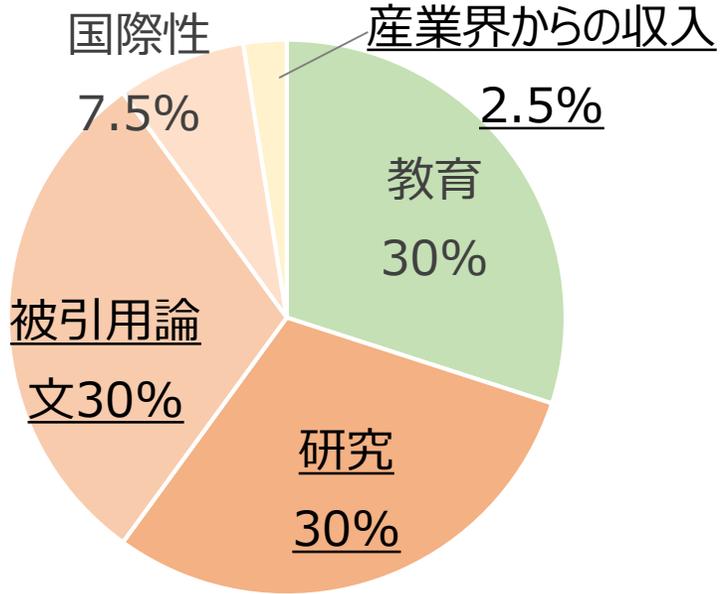


東洋大学

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT GOALS

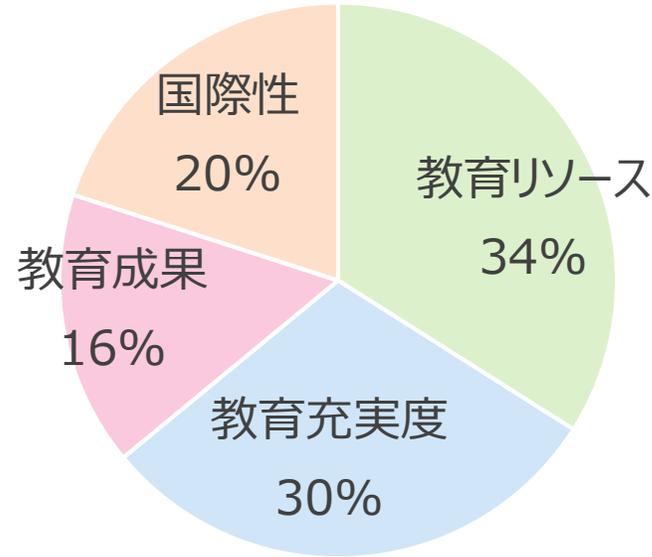
1. THEによる3つのランキング

世界版ランキング：研究重視



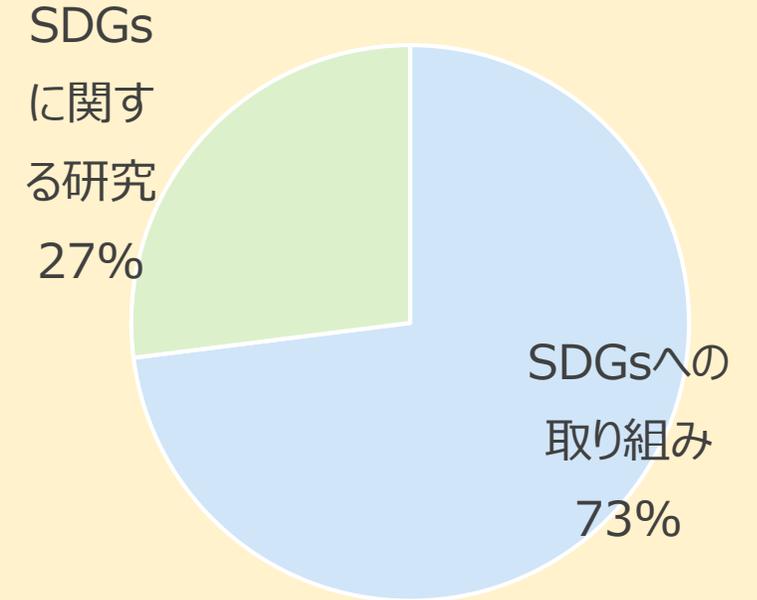
(参考) <2022>
 世界：1201+
 日本：111位 (推定)
 私大：44位 (推定)

日本版ランキング：教育重視



(参考) <2022>
 日本：73位タイ (前年77位)
 私大：26位 (前年28位)

インパクトランキング：社会貢献重視



<2022>
 世界：601-800 (前年401-600)
 日本：36位タイ (前年17位タイ)
 私大：9位タイ (前年4位タイ)

世界版は『研究』を、日本版では『教育』を評価の中心とするのに対し、インパクトランキングはSDGsの枠組みを使い『社会貢献』を評価している

2. エントリー方法

- ▶ 「THE Impact Rankings」は国連のSDGs（Sustainable Development Goals＝持続可能な開発目標）が掲げる17の目標（ゴール）に合わせて設定。大学は自学の強みに合った目標を選んでエントリーを行う。
- ▶ 「総合ランキング」に参加する場合は「SDG17（パートナーシップ）」を必須項目とし、これに加えて3つ以上のSDGについてデータを提出し、「SDG17」とスコアの高い3つの目標がランキングに反映される。



▶ 3年間のエントリー数の遷移

	Impact Rankings 2022		Impact Rankings 2021		Impact Rankings 2020	
	世界の大学	日本の大学	世界の大学	日本の大学	世界の大学	日本の大学
総合ランキング対象	1,406	76	1,117	75	768	63
エントリー大学数	1,524	84	1,240	85	857	72



3. 東洋大学のエントリー

- ▶ 目標「1」「8」「11」「12」「16」および 必須項目の「17」においてエビデンスを提出した。
- ▶ そのうち「8」「11」「16」および 必須項目の「17」が評価対象となった。（昨年度と同様）

		エントリー項目（3つ以上を選択）					必須項目
		×	○	○	×	○	
SDG							
		SDG1 貧困をなくそう	SDG8 働きがいも経済成長も	SDG11 住み続けられるまちづくりを	SDG12 つくる責任つかう責任	SDG16 平和と公正をすべての人に	SDG17 パートナーシップで目標を達成しよう
設問		1. 貧困に関する研究 2. 経済的支援を受けている学生数 3. 学生向け経済的支援策 4. コミュニティの反貧困プログラム	1. 経済成長と雇用に関する研究 2. 雇用慣行 3. 従業員1人当たりの支出 4. 1か月以上の就業を行っている学生の割合 5. 安全な契約を結んでいる従業員の割合	1. 持続可能な都市とコミュニティに関する研究 2. 芸術・遺産の支援 3. 文化遺産の記録・保存 4. 持続可能な取り組み（交通・住居）	1. 責任ある消費と生産に関する研究 2. 運用（法令等）面での対策 3. リサイクルされた廃棄物の割合 4. 持続可能報告書の公表	1. 平和と正義の研究 2. 大学のガバナンス施策 3. 行政との連携 4. 法と民事執行分野の卒業生の割合	1. 目標達成のためのパートナーシップの研究 2. 目標を支えるための関係性 3. SDG報告書の発行 4. SDGsのための教育

4. 東洋大学の結果概要

▶ Times Higher Education (THE) は2019年より、大学の『社会貢献』の取り組みをSDGsの枠組みを使って可視化する“THE University Impact Rankings”を公表している。

▶ 本学は2020年からエントリーを開始。

▶ 2022年は世界1,406機関、日本国内76大学が総合ランキングにエントリーを行った。(2021年は世界1,117大学、国内75大学)

Impact Rankings 2022 国内大学ランキング								
1位・2位 (1-100)	北海道	京都						
3位-7位 (101-200)	広島	慶応義塾	神戸	東北	筑波			
8位-14位 (201-300)	熊本	九州	名古屋	岡山	大阪	立命館	早稲田	
15位-26位 (301-400)	愛媛	茨城	三重	名古屋市立	大阪府立	信州	帝京	徳島
	東京理科	富山	山口	横浜国立				
27位-35位 (401-600)	秋田	香川	龍谷	琉球	上智	東京農業	鳥取	宇都宮
	横浜市立							
36位-48位 (601-600)	東洋大学							
	千葉	中部	中央	群馬	順天堂	神奈川	金沢	関西
	新潟	島根	東京都市	山形				

東洋大学の順位・得点 (本年-前年)		
ランキング範囲	2022順位	2021順位
世界	601-800位	401-600位
日本国内	36位タイ	17位タイ
国内私立大学	9位タイ	4位タイ

		2022得点		2021得点
総合点		61.0	↑	60.8
SDG 得点	8	47.7	↓	50.1
	11	61.3	↑	56.1
	16	60.0	↑	53.4
	17	68.3	↓	71.0

※順位の(カッコ)内は世界での順位。赤文字の大学名は私立。今年、東京大学がエントリーをしていない。

5. 総合ランキングにおける国内大学

▶ 総合ランキング対象の国内76大学 ※大学名が赤色は私立大学を表す。 ・国公立大学が上位を占めている。

Impact Rankings 2022			大学名	前年度		大学ランキング順位				
世界順位	国内順位	総得点		世界順位	国内順位	世界版2022	日本版2022			
10	1	96.2	北海道大学	76	1	501-600	6			
19	2	94.9	京都大学	101-200	4	61	5			
101-200	3	82.1-88.5	広島大学	101-200	4	801-1000	10			
			慶應義塾大学	301-400	14	601-800	11			
			神戸大学	—	—	601-800	14			
			東北大学	97	3	201-250	1			
			筑波大学	101-200	4	501-600	9			
201-300	8	76.9-82.0	熊本大学	601+	39	1001-1200	31			
			九州大学	—	—	501-600	7			
			名古屋大学	201-300	9	351-400	8			
			岡山大学	201-300	9	1001-1200	21			
			大阪大学	401-600	20	301-350	3			
			立命館大学	101-200	4	1201+	31			
			早稲田大学	101-200	4	801-1000	13			
301-400	15	72.0-76.7	愛媛大学	—	—	1201+	94			
			茨城大学	—	—	1201+	101-110			
			三重大学	401-600	20	1201+	88			
			名古屋市立大学	201-300	9	1201+	61			
			大阪府立大学	—	—	1201+	68			
			信州大学	201-300	9	1201+	47			
			帝京大学	—	—	801-1000	131-140			
			徳島大学	401-600	20	1201+	97			
			東京理科大学	301-400	14	1201+	29			
			富山大学	—	—	1201+	87			
			山口大学	201-300	9	1201+	56			
			横浜国立大学	301-400	14	1201+	26			
			401-600	27	65.0-71.9	秋田大学	—	—	1201+	55
						香川大学	401-600	20	1201+	98
龍谷大学	—	—				1201+	101-110			
琉球大学	401-600	20				1201+	111-120			
上智大学	401-600	20				1201+	20			
東京農業大学	601+	39				1201+	151-200			
鳥取大学	401-600	20				1201+	67			
宇都宮大学	401-600	20				1201+	64			
横浜市立大学	401-600	20				401-500	34			
601-800	36	57.3-64.9				千葉大学	301-400	14	1001-1200	21
						中部大学	—	—	1201+	151-200
			中央大学	401-600	20	1201+	48			

Impact Rankings 2022			大学名	前年度		大学ランキング順位	
世界順位	国内順位	総得点		世界順位	国内順位	世界版2022	日本版2022
601-800	36	57.3-64.9	群馬大学	601+	39	1201+	72
			順天堂大学	—	—	801-1000	76
			神奈川大学	601+	39	1201+	141-150
			金沢大学	301-400	14	1001-1200	19
			関西大学	601+	39	1201+	69
			新潟大学	401-600	20	801-1000	50
			島根大学	401-600	20	1201+	90
			東京都市大学	401-600	20	1201+	141-150
			東洋大学	401-600	20	1201+	73
			山形大学	—	—	1201+	65
801-1000	49	50.3-57.2	千葉商科大学	—	—	—	—
			国際基督教大学	601+	39	Reporter	12
			武蔵野大学	601+	39	Reporter	131-140
			大阪市立大学	401-600	20	1201+	50
			足利大学	601+	39	Reporter	201+
			千葉工業大学	601+	39	1201+	151-200
			中京大学	601+	39	—	121-130
			羽衣国際大学	601+	39	Reporter	201+
			白鷺大学	601+	39	Reporter	—
			日本経済大学	—	—	Reporter	201+
1001+	53	9.2-50.2	関西医科大学	0	0	601-800	151-200
			恵泉女学園大学	601+	39	Reporter	151-200
			北九州市立大学	401-600	20	—	91
			駒沢大学	—	—	—	—
			京都産業大学	601+	39	1201+	101-110
			名城大学	—	—	1201+	141-150
			武庫川女子大学	601+	39	Reporter	151-200
			名古屋商科大学	—	—	Reporter	101-110
			大阪医科薬科大学	—	—	1201+	151-200
			広島県立大学	—	—	—	—
			立命館アジア太平洋大学	—	—	Reporter	24
			山陽小野田市立山口東京理科大学	—	—	—	201+
			成蹊大学	401-600	20	—	151-200
			芝浦工業大学	601+	39	1201+	28
			創価大学	401-600	20	Reporter	69
			東北学院大学	601+	39	Reporter	151-200
東海大学	301-400	14	1201+	131-140			
常磐大学	—	—	—	—			

6. 国内上位25大学の評価項目

他大学が比較的高得点を得ている項目番号に ○

▶ 総合ランキング国内上位25大学における評価項目および得点（オレンジ色はSDG別ランキングのトップ100にランクイン）

	SDGs																
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
北海道大学		91.4							95.7						90		97.7
京都大学		89.3							99					89.7			91.2
広島大学	76.6					72.8			96								92.2
慶應義塾大学						79					79.8					87	91.2
神戸大学		79.8										78.8				88.9	83.1-90.6
東北大学						69.1			99.7		84						83.1-90.6
筑波大学	81										79.7			82.4			94.2
熊本大学			80.2			68.7					69.2-78.6						94
九州大学									70.1-85.4			75.6		74.1			76.7-83.0
名古屋大学		55.2-65.8	68.7-73.8						98.3								76.7-83.0
岡山大学			81.6						70.1-85.4							71.3-78.4	83.1-90.6
大阪大学			68.7-73.8						99.6								71.3-78.4
立命館大学	79.1	69.2															71.3-78.4
早稲田大学	72.8										69.2-78.6	64.4-75.5					76.7-83.0
愛媛大学			68.7-73.8					59.6-64.6				64.4-75.5					70.3-76.6
茨城大学								59.6-64.6						71.3		71.3-78.4	83.1-90.6
三重大学		67.8	63.7-68.6									64.4-75.5					83.1-90.6
名古屋市立大学			88.5					55.3-59.5			60.1-68.9						83.1-90.6
大阪府立大学		68				56.6-68.1			70.1-85.4								76.7-83.0
信州大学	72.1		63.7-68.6								60.1-68.9						70.3-76.6
帝京大学			73.9-79.6								60.1-68.9					80.9	58.8-70.2
徳島大学			86						70.1-85.4		60.1-68.9						70.3-76.6
東京理科大学								45.0-55.2	86.9			54.0-64.2					83.1-90.6
富山大学			63.7-68.6			56.6-68.1								70			83.1-90.6
山口大学		69.7				56.6-68.1									73.7		83.1-90.6
東洋大学	47.5							47.7			61.3	46.5				61	68.3

7. 東洋大学への評価 と 今後の戦略

		2022			2021		
		得点	国内順位	世界順位	得点	国内順位	世界順位
総合点		61.0	36位タイ (私大9位タイ)	601-800位	60.8	17位タイ (私大4位タイ)	401-600位
SDG 得点	SDG 8	47.7	13位タイ	401-600位	50.1	10位タイ	301-400位
	SDG 11	61.3	12位タイ	201-300位	56.1	11位タイ	201-300位
	SDG 16	60.0	20位タイ	301-400位	53.4	18位タイ	301-400位
	SDG 17	68.3	38位タイ	401-600位	71.0	9位タイ	201-300位

▶ 総得点の評価

前年より総合点は0.2ポイントアップ。エントリー大学が増加した分、順位は落としたものの、世界全体で見れば、上位39%に入っている

▶ SDG別の評価

「SDG11.住み続けられるまちづくりを」「SDG16.平和と公正をすべての人に」において前年より得点の向上が見られた。エントリー大学が増加した分、全ての項目で国内順位を落としている。

▶ 今後のエントリーに向けた戦略等

- SDGs行動憲章制定後の、年間を通じたシンポジウムの開催、認知度調査の実施、学生アンバサダー制度の設置、SDGsウィークイベントなど、一連の企画をより充実させる。
- 世界で総合10位の北海道大学（「SDG 2」で世界1位）、世界で19位の京都大学の取り組み等を調査し、エビデンスの精査・ブラッシュアップを行う。
- 中期的には、学生がSDGsを自分事として捉えることのできる正課、課外での施策をより充実させる。
また、研究面においてもSDGsに資する本学教員の研究活動や成果について、情報発信を継続的に取り組んでいく。

參考資料

▶ トップ層の順位が大きく変動

ウェスタンシドニー大学は前年17位からトップに躍進した。昨年トップ10の大半はオセアニアが占めていたが、トップ10にアジアの大学が3つ食い込むなど、大きく順位が変動している。また、上位100大学の顔触れも前年から34大学が入れ替わった。



算出方法「高スコアの3目標で評価」から、同じ大学であっても年によって評価項目が同一ではないため、順位は安定しにくい。

▶ 世界ランキングとの違い明確に

世界ランキング上位校が本ランキングでは上位を獲得できない。



研究重視の世界ランキングとの差別化を意図した設計。SDGsに資する取り組み、行動が評価される。

上位25大学（前年順位、国名、総合点、世界大学ランキング2022順位）

Impact Rankings		国名	大学名	総合点	World University Rankings 2022
2022	2021				
1	17	オーストラリア	Western Sydney University	99.1	237
2	9	アメリカ	Arizona State University (Tempe)	98.5	132
3	52	カナダ	Western University	97.8	202
4	46	サウジアラビア	King Abdulaziz University	97.5	191
4	39	マレーシア	Universiti Sains Malaysia	97.5	696
6	9	ニュージーランド	University of Auckland	96.7	137
7	5	カナダ	Queen's University	96.6	289
8	15	イギリス	Newcastle University	96.5	148
9	1	イギリス	University of Manchester	96.4	50
10	101-200	日本	Hokkaido University	96.2	571
11	64	カナダ	University of Alberta	96	125
12	101-200	カナダ	University of Victoria	95.9	329
13	13	カナダ	University of British Columbia	95.8	37
13	54	韓国	Kyungpook National University	95.8	791
15	初	オーストラリア	University of Technology Sydney	95.6	143
16	23	タイ	Chulalongkorn University	95.2	899
16	101-200	カナダ	University of Guelph	95.2	590
18	85	インドネシア	University of Indonesia	95.1	973
19	初	イギリス	University of Glasgow	94.9	86
19	101-200	日本	Kyoto University	94.9	61
19	4	オーストラリア	La Trobe University	94.9	219
22	3	オーストラリア	RMIT University	94.7	322
23	19	イギリス	University of Leicester	94.6	187
24	11	イギリス	King's College London	94.4	35
25	76	オーストラリア	University of Tasmania	94.3	319

▶ エントリー数が多い日本の大学

総合ランキングにエントリーした大学数は、日本はロシアに次ぐ76大学。世界の中でもSDGsへの関心の高さが読み取れる一方で、トップ100のランクインは3%となっている。（2021は0%）

▶ 強みを活かしたエントリー

- ロシア、パキスタン
→ エントリー数が多い一方で、トップ100へのランクインがない。
- イギリス、オーストラリア、カナダ
→ エントリー数も多く、上位へのランクインも多い。
- デンマーク、スウェーデン、ニュージーランド
→ エントリー数こそ少ないが、高い確率で上位へとランクイン。
強みを活かして評価を勝ちとる戦略的エントリーが、上位へのランクインに有効に働くことが示唆される。

総合ランキング 対象大学数		トップ100ランクイン大学数		ランクイン率				
1	Russian Federation	94	1	United Kingdom	20	1	Denmark	100%
2	Japan	76	2	Australia	17	2	New Zealand	88%
3	Pakistan	63	3	Canada	16	3	Australia	68%
4	India	61	4	New Zealand	7	4	Canada	67%
5	Turkey	58	5	United States	6	5	United Kingdom	38%
6	United Kingdom	53	6	South Korea	5	6	Ireland	30%
7	Thailand	51	7	Ireland	3	7	South Korea	28%
8	Brazil	48	8	Italy	3	8	Sweden	20%
9	Iraq	47	9	Denmark	2	9	Portugal	15%
10	Taiwan	45	10	India	2	10	Italy	15%
11	United States	42	11	Indonesia	2	11	United States	14%
12	Spain	41	12	Japan	2	12	Netherlands	14%
13	Egypt	36	13	Portugal	2	13	South Africa	13%
14	Uzbekistan	30	14	Taiwan	2	14	China	8%
15	Indonesia	28	15	Thailand	2	15	Indonesia	7%
16	Iran	27	16	Brazil	1	16	Mexico	6%
17	Ukraine	26	17	China	1	17	Saudi Arabia	5%
18	Australia	25	18	Egypt	1	18	Taiwan	4%
19	Canada	24	19	Malaysia	1	19	Malaysia	4%
20	Malaysia	23	20	Mexico	1	20	Thailand	4%
21	France	22	21	Netherlands	1	21	India	3%
21	Saudi Arabia	22	22	Saudi Arabia	1	22	Egypt	3%
23	Colombia	21	23	South Africa	1	23	Japan	3%
24	Chile	20	24	Sweden	1	24	Brazil	2%
24	Italy	20						

▶ 総合ランキング

- 総合ランキングで北海道大学が10位、京都大学が19位タイと大きく順位を伸ばした。（過去3回における日本勢の最上位は2020年の北海道大学の76位）
- 私立大学では、総合ランキングにエントリーした39大学の中で、本学は9位タイ。

▶ SDG別ランキング

- SDG別ランキングのトップ100は、前年の39校から73校に大幅増加。
- 「SDG2（飢餓）」で11校、「SDG6（水・衛生）」8校「SDG9（技術革新）」7校がトップ100入りしており、世界の中でも卓越した技術力により、リードしていることを示唆。

▶ THEの見解

「2022年版では、110の国・地域から過去最多の1524校（前年から23%増）が参加。

世界の高等教育機関においてSDGsの重要性が高まっている」

「日本での取り組みは前進」

- ▶ Times Higher Education 公式サイト（英語）
「Impact Rankings 2022」

https://www.timeshighereducation.com/impactrankings#!/page/0/length/25/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/undefined

- ▶ THE 世界大学ランキング日本版 公式サイト
「THEインパクトランキング2022」で北海道大学が総合ランキング10位

<https://japanuniversityrankings.jp/topics/00214/index.html>

別添. SDG一覽



2022年5月27日

東洋大学 学長
矢口 悦子 殿

東洋大学 SDGs 推進委員会 委員長
川口 英夫

2022年度 東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）の推薦について

2022年度東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）につきまして、2022年5月26日から同27日に開催（メール会議）の東洋大学 SDGs 推進委員会において適任と認めましたので、「東洋大学 SDGs アンバサダー制度に関する要項」第2条第3項に基づき、下記の通り推薦いたします。

記

1. 被推薦者数
59名
2. 東洋大学 SDGs 推進委員会 開催日
2022年5月26日から同27日（メール会議）
3. 被推薦者名簿
別紙の通り
4. 認定期間
2022年6月1日 ～ 2023年3月31日
5. 添付資料
 - ・2022年度「東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）」新規登録者名簿
 - ・東洋大学 SDGs アンバサダー制度に関する要項

以上

2022年度「東洋大学SDGsアンバサダー（個人）」新規登録者名簿

NO.	学籍番号	学部名	学科名	学年	氏名	設問1) 今回SDGsアンバサダーに申し込む理由(動機)を教えてください
1		社会学部 第2部	社会学科	3年		SDGSを学生にとって身近な存在にしたい。 アンバサダーになることでサポートスタッフの活動をより多くの人に知ってもらえるのではないかなと思うから。
2		文学部 第1部	英米文学科	2年		私は、2年生になってから、自分のためではなく、誰かのためにできることはすべてやりたいと強く思うようになりました。SDGSではありませんが、ウクライナの人の助けになればいいと少しではありますが、5000円寄付するなど行動を起こしてきました。なので今度は、SDGSアンバサダーとして、誰かの役に立てるならと思い、今回申し込むことにしました。決して、就活のためではなく、誰かのためにできることならすべてやりたいという強い思いから、今回申し込むことを決めました。
3		経営学部 第2部	経営学科	2年		興味があったから
4		理工学部	都市環境デザイン学科	1年		SDGSに力を入れている会社に就職したいため、学生のうちにSDGSへの知識理解を深めたいと思っているから。
5		経済学部 第1部	経済学科	3年		SDGSをよく耳にする機会がありますが、実際よくわからないなと思っていました。国際的にも取り上げられている話題であるため、この機会に知りたいと思い、申し込む運びとなりました。
6		経済学部 第1部	経済学科	3年		私が大学に行く理由が地元で貢献したくて、別の大学の人ではあるけれど沖縄の貧困問題について色んな取り組みを聞く機会があったので、最近耳にするSDGSにも関連があるのかなと思い、まだあまり知らないのでよく知るきっかけになればいいと思いました。
7		生命科学部	生命科学科	1年		SDGSとそれに関係する活動に興味があるから
8		社会学部 第1部	国際社会学科	2年		自分はボランティアや社会活動に興味を持って、特に子どもの支援とジェンダーに関する活動は関心を持っている。将来もNPOやNGOなどの組織で働いて、人を助けて、社会問題を解決したいと思って、今回のTOYO SDGSアンバサダーを申し込んだ。大学でたくさん活動を参加して、経験を重ねたいと思っている。
9		国際観光学部	国際観光学科	2年		SDGSが注目されている現代で、自分自身この言葉や内容は知っているけど実際に自分の生活で意識できていることが少ないのでこの活動を機に実践に移せたらよいと思った。また大学では興味を持ったことは何事も挑戦したいと思ったため。
10		国際観光学研究科	国際観光学専攻 博士後期課程	博士1年		持続可能な発展は、地球にとって人も人類にとっても、重要なことです。私の専門分野でも、持続可能な観光を常に注目していて、音楽観光の観点から持続可能な観光の発展性を述べています。
11		法学部 第1部	法律学科	2年		時間のある二年生のうちに勉強以外のことに力を入れたいため。
12		社会学部 第1部	社会学科	2年		SDGSに元から興味があり、活動を行ってきたため大学でも継続して活動しようと考えたため。
13		経済学部 第1部	国際経済学科	1年		大学生活でさまざまな経験をしたかったから。
14		経済学部 第1部	経済学科	3年		大学でSDGSの取り組みを全面に押し出しているがその大学に所属している学生が本当にSDGS達成に向けて取り組んでいるのか気になったから
15		法学部 第2部	法律学科	4年		SDGSについて世間で言葉だけが一人歩きしていて、その言葉の意味を本当に理解し、持続可能な社会に変えていこうと実際に活動している人が少ないと感じたから。
16		法学部 第1部	企業法学科	4年		私は昨年度までNPOのボランティア団体で活動しており、今学期から自身が個人としてどのように周りを巻き込むか、どのように社会問題と向き合っていくかを考えていた。そのときに、募集しているのを知り、様々な人と意見交換をし自分で創り上げる第一歩になるのではないかと考え申し込みを決めた。
17		国際学部(地域総合専攻)	国際地域学科	2年		SDGSには高校生の頃から興味があり、具体的な取り組みとしてアルバイト先などで環境に配慮した働き方などを行ってきましたが、今回この活動をもっと広い範囲で行いたいと思ったからです。
18		経済学部 第1部	国際経済学科	3年		SDGSに実はあまり関心がなく、こういったものなのか説明しろと言われてもできない。しかし、2020年代SDGSは、当たり前のように問われ、常識になっていく、欧米よりも今後、日本はその色がますます濃くなっていくと予想される。常識として、問われる時代に、SDGSを研究しておくのはとても有益なことだ。最近、私の専門分野においても問われ始めている。今後、社会にとって貴重な存在になるであろうという人たちと、真剣に活動してみたいと思った。私は知るためにここにいる。
19		理工学部	応用化学科	3年		笠原さんに勧められました SDGSの特に水問題に興味があるから
20		総合情報学部	総合情報学科	3年		総合情報学部ではSDGSに関する講義があり、こういった講義を通してSDGSに対して興味を湧いたから。
21		経済学部 第1部	総合政策学科	1年		高校生の時に、全国1000人を超える女子高校生と一緒に身の回りの社会問題や環境問題に対して、高校生という立場だからこそできるアクションを考え、実行する活動や企業、大学生、地域の住民と共に高校付近の水環境を守る活動をしていた。その時にはできなかったことや大学生になったからこそできる行動を起こしたい、考えたいと思っているから。
22		文学部 第1部	日本文学文化学科	4年		教師を目指しているが、就職を希望している学校がSDGS活動にかなり力を入れているため、より学びたいと感じた。
23		社会学部 第2部	社会学科	1年		今、地球自体はあと50万年、いやそれよりも早く無くなってしまおうと言われていて。それなら、SDGSはしなくていい、関係ないという、風潮も徐々に始まってくる。でも、私はそれでもやっぱり、世界や日本、そして、自分たちがより良く生活をする上でも、このSDGSについて考え、自分も周りも住みやすく、生きやすく、より良い環境でいられるように行動をすることが大切だと考える。具体的にどうしたらいいかは、まだよく分からないけれど、たくさんの人たちとコミュニケーションをして、障がい者、健常者関係なく、みんなで一緒にSDGSを大切にしていってより良い生活を目指したいと思った。
24		国際学部	国際地域学科	2年		学外でSDGSについての活動をしているが、いつも同じイベントへの参加や主催なので、新しい場所に挑戦したいと思ったため。
25		国際学部	グローバル・イノベーション学科	2年		以前からSDGSに関心がありました。また、授業でもSDGSがよく取り上げられていて、もっと深く知りたいと思いました。
26		文学部 第1部	東洋思想文化学科	1年		今まで自分が得ていた知識やこれから得ていく知識を何かしらの形にしたいから。

2022年度「東洋大学SDGsアンバサダー（個人）」新規登録者名簿

NO.	学籍番号	学部名	学科名	学年	氏名	設問1) 今回SDGsアンバサダーに申し込む理由(動機)を教えてください
27		文学部 第1部	哲学科	1年		高校くらいからよく聞くようになったSDGsというものが、地球温暖化や砂漠化を止めて、地球を守ることに繋がるならやってみたくと思ったため。
28		法学部 第2部	法律学科	1年		SDGsに関する本を読んで共感できることだったのでこの活動を通してより理解を深めていきたいです
29		法学部 第1部	企業法学科	2年		食堂で感じたフードロスの多さ。ひどすぎてびっくり。(さすがフードロス世界一位二位を誇る日本...) 学生が事前に店員さんに量を減らして注文すればいいのにそれをできない?しない?ので、気軽に量を減らす注文をできるんだよっていうことを、パーティーにメモ?的なのを張り付けるとかで示したいと思ったから。さらに、高校・専門学校でSDGsについて学んで、自分もわずかではあるがプラスチック製品のもの(カトラリー等)を受け取らない努力や、マイボトルの持参、ごみの分別を心掛けているから。
30		経済学部 第1部	総合政策学科	3年		SDGsを達成させる社会のいちメンバーとして、自発的に行動するため。また、SDGsについて概念だけを理解するのではなく、身をもって理解し、考え方を構築していくため。
31		社会学部 第1部	社会心理学科	1年		SDGsに興味があり、何か活動したいと思ったから。
32		法学部 第1部	企業法学科	1年		ボランティアに興味があったから
33		社会学部 第2部	社会学科	3年		今日の日本ではSDGsというワードを様々な場面で聞く機会が多く、持続可能な社会を目指す上で、自分にも何か出来ることがあるのではないかと考えたことが理由です。ですが、自分自身もSDGsに対して専門的な知識があるわけでもないため、この活動を通して、自分自身のSDGsに対する理解を深め、それをより多くの人に知ってもらいたいと考えています。
34		社会学部 第2部	社会学科	3年		物心がついた辺りから地球温暖化やオゾン層破壊というワードをよく耳にすることが多くなり、今地球は大変なことになっているというのが印象にあった。また社会学をやっていくと平等や社会への貢献をしてみたいという意欲が向上したので、まだ分からない点もあるが、チャレンジしたいと思った。
35		法学部 第2部	法律学科	1年		SDGsにとっても興味がある
36		社会学部 第1部	社会心理学科	3年		児童福祉論の授業で募集していることを知りました。私はセクシュアルマイノリティに関心があります。私自身も少し悩んでいる部分があります。そのため、項目5のジェンダー平等に興味を持ったのが動機です。大学を卒業し、これから社会に出ていく中で、性別を理由に自分が傷つきたくない、誰かを傷つけたくない、そう思います。SDGsについての知識は正直あまりありません。私と同じように、SDGsという言葉聞いたことはあっても、どういうものなのか、何をしているのか、わからない人が大半だと思います。SDGsについてよく知り、誰かに聞かれた時にSDGsをきちんと説明できるように、興味を持ってもらって広められるようになりたいです。この活動の資料を見ていて、子ども支援やフードロスなど、ジェンダー以外の活動にも興味を持ちました。私は飲食物の物販のバイトをしています。売れ残りや不良品など、毎日たくさんロスが出ています。とても心苦しい状況です。この活動に参加することで、私の行動が誰かの役に立つ、誰かを救うこと、私たちが住む地球の未来を救うことに繋がるなら、この機会を逃したくないと思います。
37		社会学部 第1部	社会心理学科	3年		SDGsについて様々な機会に聞いたことはあったものの、具体的な取り組みや活動に取り組んだことはありませんでした。大学生のうちに自らが主体となって動く力を身につけたいと考えたと同時に、今や多くの企業や団体で着目されているSDGsについての知識を蓄えたいと思い、今回TOYO SDGsアンバサダーに申し込みをしました。
38		文学部 第1部	東洋思想文化学科	3年		SDGsという言葉をよく耳にするようになり、それを理解し自分にできることを少しでも実行するべきだとは思いますが、具体的にどんなことをすればいいのかわからなかった。メンバーとして活動することで、SDGsに対する理解を深めたいと思ったから。
39		法学部 第1部	企業法学科	1年		元々SDGsへの関心はあったため、学校規模で活動できるのであればいい機会だと感じたから。
40		社会学部 第1部	社会学科	1年		元々SDGsに興味を持ち始めたのが高校3年生の時でしたが、本やネットで学ぶだけで実践的なことは何も出来ていませんでした。今回このようなSDGsアンバサダーがあると知って、初めて自分がSDGsに関わりを持ってなにか役に立てるのであれば是非参加したいと思ったので申し込みました。
41		食環境科学部	食環境科学科	2年		大学に入って何かに挑戦してみたかったから。
42		法学部 第1部	企業法学科	1年		これまでも興味はありさらに友達に誘われたから
43		文学部 第1部	英米文学科	3年		SDGsに興味があること、またボランティア活動をしたいと思ったから入りため
44		社会学部 第1部	社会文化システム学科	3年		SDGsについて自分で調べて覚えるよりも、アンバサダーという団体で実際に行動できた方が知識が定着し良い経験になると思いました。また、大学卒業後、どの職業についたとしても必ず関わってくることだと思うので、今のうちに学んで取り組めるようになりたいと思います。
45		国際観光学部	国際観光学科	2年		世界中でSDGsが注目されているため、社会勉強も兼ねて何か取り組みをしてみたいと思ったから。
46		経済学部 第1部	総合政策学科	3年		社会問題を考えるワークショップへの参加、運営を大学のうちに経験しておきたいため。
47		経営学部 第1部	マーケティング学科	3年		ガクチ力がないから
48		経済学部 第1部	総合政策学科	1年		将来環境問題に関わる仕事に就きたいと考えているが、まだ具体的に自分が何に興味があるのかや、何の職業に就きたいのかがはっきりしていないため、それを探さきっかけになればいいなと思ったから。
49		国際学部	国際地域学科	1年		SDGsの17ゴール達成のために私も何か行動を起こしたいと考えたからです。
50		社会学部 第1部	社会心理学科	2年		今までSDGsの取り組みに参加したことはなかったけれど、自分自身が主体的に能動的に関わることによって目的を理解し課題解決に向けて働きかけることが出来ると思ったからです。
51		文学部 第1部	国際文化コミュニケーション学科	4年		学外の活動で、既にSDGsについて動いているため、その取り組みを還元したかったから。また、自分の卒論がジェンダーについてであり、SDGsのゴールとも関わりあると考えたから。
52		経済学部 第1部	総合政策学科	2年		自分は環境問題に関する目標に興味があり、そのことに関して勉強し、自分から何か行動できるようになりたいと思っているからです。
53		文学部 第1部	日本文学文化学科	2年		これまでSDGsについて考えることはあっても実際に動いてみることはしたことが無かったため。

2022年度「東洋大学SDGsアンバサダー（個人）」新規登録者名簿

NO.	学籍番号	学部名	学科名	学年	氏名	設問1) 今回SDGsアンバサダーに申し込む理由(動機)を教えてください
54		総合情報学部	総合情報学科	3年		もともとSDGsについては興味があり、東洋大学で主催しているイベントに参加したことがありましたが、自分で何か多くの人に情報配信をしたり、企画を運営したことはなかったため、SDGsアンバサダーとして、多くの人にSDGsについて知ってもらうためのアクションを起こしたいと思ったからです。大学3年生になった今、一方的に学ぶのではなく、発信する立場にも挑戦したいと考え、応募しました。
55		社会学部 第1部	社会福祉学科	1年		本年3月まで在籍していた私が通学していた高校では、3年間を通してSDGsに関する授業があり、SDGsに関心を持つようになりました。私は将来的には地方公共団体で社会福祉関連の仕事に従事したいと考えています。特に私の住んでいる市では全部門の活動をSDGsのゴールと関連付けて定義しており、SDGsへの取り組み意識が高いと思います。私も大学生の立場で「TOYO SDGs アンバサダー」の活動に参加させていただき、社会に役立つ人材になれるように頑張りたいと考えています。よろしく願いいたします
56		経済学部 第1部	総合政策学科	3年		もともと環境系のボランティア活動に関心があり、ボランティアはSDGsとも密接に関わってくるものだと思います、自らSDGsについて学ぶと共に、ボランティアの魅力を伝えてSDGsの認知を広めていきたいと思ったため。
57		文学部 第1部	史学科	3年		私がSDGsに対して強い関心を抱いたきっかけは学内で行われたSDGsコンテストです。動画作成を通してSDGsの目標達成に向けたアクションを実践する楽しさを実感し、SDGsを身近に感じられるようになりました。ただ、それだけではなくこのコンテストで賞を受賞したことで、もっとSDGsに対する学びを深めないといけないという使命感が現れ、SDGsに強い関心を持ちました。SDGsアンバサダーでの活動を通してさらにSDGsに対する知識を養っていききたいです。また私はこれまで参加したDiversity voyageや井上円了リーダー哲学塾といった活動を通して様々な学部学科の人と関わる楽しさを学んだので、SDGsアンバサダープログラムを通じてたくさんのつながりを作っていきたいです。
58		文学部 第1部	英米文学科	3年		大学一、二年生の時に履修していた留学支援制度のLEAPの授業で長期間に渡りこのテーマを扱ってディスカッションを行ったことがあったのですが、そこで私が知らないことがあまりにも多かったことに衝撃を受け、社会に出る前に能動的に知っておきたかったということとこういったスケールの大きい課題に関しては他人事になりがちですが、自分にできることはないかと探し取り組むという経験をしたと感じ、志望いたしました。
59		ライフデザイン学部	子ども支援専攻	3年		フードロス削減のために何かできることはないのか疑問に思っているからです。私はフルーツサンド専門店アルバイトを行っているのですが、どうしても廃棄が沢山でてしまいます。貧困でご飯もろくに食べられない人達がいるのに、日本にもそのような人達がいるのに、食品ロスが止まらないのはいかなるものかと考えています。そのため、何か支援出来ることはないのか、一緒に考えていく機会があればと思い申し込みさせて頂きました。



都の基本計画 都庁横断の取組 国・自治体との連携 国際戦略の推進

国際金融都市
特区・外国企業誘致

戦略的な広報 その他の情報 子供政策連携室

東洋大学

[TOP](#) > [都の基本計画](#) > 大学との定例懇談会

都の基本計画

[「未来の東京」戦略](#)

[未来へつなぐTOKYO 2020の記憶](#)

[構造改革の推進](#)

[東京ベイeSGプロジェクト](#)

[#シン・トセイ 都政の構造改革ポータルサイト \(外部サイト\)](#)

[#シン・トセイ 都政の構造改革推進チームnote \(外部サイト\)](#)

[#シン・トセイ 都政の構造改革推進チームTwitter \(外部サイト\)](#)

[ダッシュボード \(外部サイト\)](#)

[都市強靱化プロジェクト \(仮称\)](#)

[SDGs実現への取組](#)

[大学との定例懇談会](#)

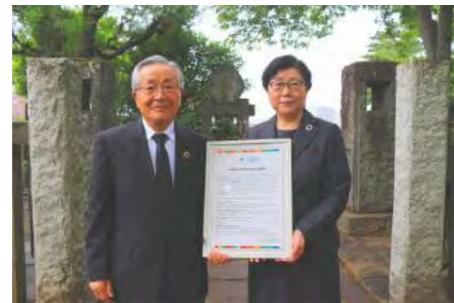
[大学との共同事業](#)

[過去の計画等](#)

東洋大学

「学校法人東洋大学SDGs行動憲章」を制定

SDGsの理念に賛同し、地球社会の明るい未来づくりに貢献するために、「教育」「研究」「社会・国際貢献」「環境貢献」「ダイバーシティ&インクルージョン」の5領域において行動することを掲げる「学校法人東洋大学SDGs行動憲章」を学校法人東洋大学理事長の安齋隆と東洋大学学長の矢口悦子の連名により制定し、東洋大学創立者・井上円了の命日（103回忌）にあたる2021年6月6日（日）の学祖祭において発表しました。



創立者・井上円了の墓前で憲章を掲げる安齋理事長と矢口学長

リンク

[学校法人東洋大学 SDGs 行動憲章](#)

SDGsの目標達成に向け取り組んでいる研究や活動をNewsLetterで紹介

東洋大学は"知の拠点"として、SDGsの目標達成に向けた研究をはじめとする様々な活動を行っています。それら各取り組みを紹介する「SDGs News Letter」を2020年から東洋大学公式Webサイト内SDGs特設ページで公開しています。気候変動やエネルギー、ジェンダーなど、SDGsに関連するテーマで大学教員が最新の研究成果や学問的見解を分かりやすく解説しています。年間10本前後の記事を公開しておりますので、大学の"知"に触れてください。



東洋大学公式Webサイト「SDGs News Letter」

🔗 リンク

🎓 [東洋大学"SDGs News Letter"](#)

産学連携により、学生チームが資生堂開放特許を用いた化粧品を開発

国際学部の北脇秀敏教授と生命科学部の三浦健准教授の研究室に所属する学生有志による学生団体「TOYO SDGs Students Project ～SUGOMORI BOISEN Project～」は、株式会社資生堂の持つ特許のライセンス提供を受け、学生の視点から考える化粧品を企画し、株式会社シーエスラボと開発・生産を進め、2022年3月に試作品としてハンドセラム「BOISEN」を開発しました。



試作開発したハンドセラム「BOISEN」

🔗 リンク

🎓 [【産学連携】学生チームが資生堂開放特許を用いた化粧品を開発しました](#)

東洋大学とSDGs

東洋大学は知の拠点としてSDGsに積極的に取り組むことを通じて、地球の未来に大きく貢献する大学となることを目指しています。学校法人東洋大学行動憲章を制定し、SDGsの達成に貢献する研究を対象の推進や、小・中・高校、特別支援学校に通う未来を担う子供たちへのSDGs目標達成の学習を支援するための講師派遣プログラムなど様々な取組みを実施しています。



Toyo University supports the Sustainable Development Goals

🔗 リンク

🎓 [東洋大学のSDGsへの取組](#)

令和2年度「東京都と大学との共同事業」

災害時における大学キャンパスを活用した避難手法の検証

参加大学 法政大学、東京工業大学、東洋大学

地震などの災害発生時に、大学キャンパスでの屋外キャンプが、体育館等での集団避難とは異なる、

家族単位での避難をする場所として、新たな地域の避難拠点となり得るか、実証実験等を通じて検証しました。大学キャンパスは様々な点で人間らしい避難生活に適しており、本件をモデルとした「新しい避難生活拠点」を提案しました。



大学キャンパス内での実証実験の様子

リンク

[法政大学・東洋大学・東京工業大学と共同研究「"CAMP in Campus for well-being"～大規模災害時の人間らしい避難生活をキャンパスで～」について－法政大学多摩キャンパスにてシンポジウム開催\(3/13\)](#)

[「"CAMP in Campus for well-being"大規模災害時の人間らしい避難生活をキャンパスで」の実証実験を実施](#)

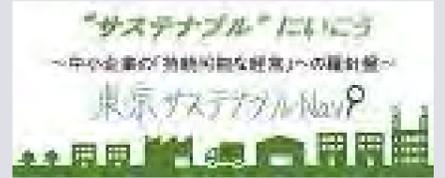
大学名(五十音順)		
青山学院大学	お茶の水女子大学	國學院大學
国土舘大学	駒澤大学	順天堂大学
上智大学	専修大学	中央大学
津田塾大学	帝京大学	電気通信大学
東海大学	東京大学	東京医科歯科大学
東京外国語大学	東京藝術大学	東京工業大学
東京都立大学	東京農工大学	東京理科大学
東洋大学	日本体育大学	一橋大学
法政大学	立教大学	早稲田大学



お問い合わせ

計画調整部プロジェクト推進課

 **03-5388-2088**



[お問い合わせ](#)

[サイトポリシー](#)

[アクセシビリティ方針](#)

[個人情報保護方針](#)

[サイトマップ](#)

東京都庁：〒163-8001 東京都新宿区西新宿2-8-1 電話：03-5321-1111（代表）

Copyright (C) Tokyo Metropolitan Government. All Rights Reserved.

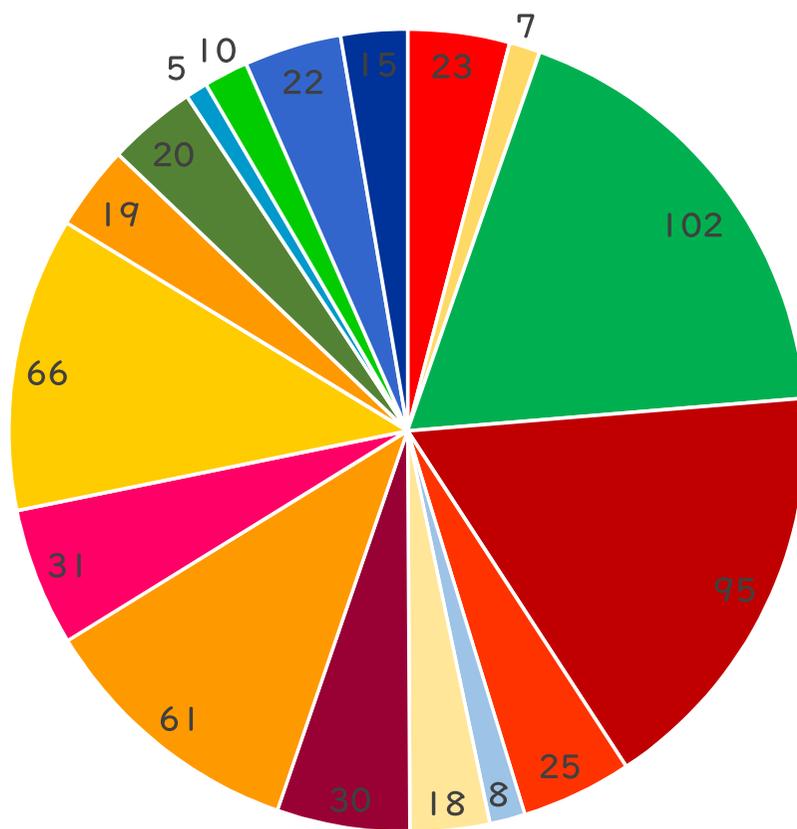
2021年度一般研究報告における SDGs関連研究

SDGs推進委員会



SDGsに関連する研究テーマ数

計557件 / 対象教員数=762名 (平均0.73件)



- 1. 貧困をなくそう
- 2. 飢餓をゼロに
- 3. すべての人に健康と福祉を
- 4. 質の高い教育をみんなに
- 5. ジェンダー平等を実現しよう
- 6. 安全な水とトイレを世界中に
- 7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- 8. 働きがいも経済成長も
- 9. 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 10. 人や国の不平等をなくそう
- 11. 住み続けられるまちづくりを
- 12. つくる責任つかう責任
- 13. 気候変動に具体的な対策を
- 14. 海の豊かさを守ろう
- 15. 陸の豊かさも守ろう
- 16. 平和と公正をすべての人に
- 17. パートナーシップで目標を達成しよう

※2021年度一般研究 研究報告書に基づく集計 (新任教員を除く)

研究活動でテーマとなるSDG項目

2021年度 一般研究		
順位	SDG	件数
1st	3.すべての人に健康と福祉を	102
2nd	4.質の高い教育をみんなに	95
3rd	11.住み続けられるまちづくりを	66
4th	9.産業と技術革新の基盤をつくろう	61
5th	10.人や国の不平等をなくそう	31
6th	8.働きがいも経済成長も	30
7th	5.ジェンダー平等を実現しよう	25
8th	1.貧困をなくそう	23
9th	16.平和と公正をすべての人に	22
10th	13.気候変動に具体的な対策を	20
11th	12.つくる責任つかう責任	19
12th	7.エネルギーをみんなにそしてクリーンに	18
13th	17.パートナーシップで目標を達成しよう	15
14th	15.陸の豊かさも守ろう	10
15th	6.安全な水とトイレを世界中に	8
16th	2.飢餓をゼロに	7
17th	14.海の豊かさを守ろう	5

※Impact Ranking2022エントリー項目

上位3目標は

健康と福祉 教育 まちづくり

- ▶ **SDG 3. すべての人に健康と福祉を**
あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
- ▶ **SDG 4. 質の高い教育をみんなに**
全ての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する
- ▶ **SDG 11 住み続けられるまちづくりを**
都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靱かつ持続可能にする

学部別

研究が盛んな目標 (各学部上位2目標)

※Impact Ranking2022エントリー科目

学部等	1.貧困	2.飢餓	3.健康と福祉	4.教育	5.ジェンダー	6.水質環境	7.エネルギー	8.経済成長	9.産業と技術革新	10.平等	11.まちづくり	12.つくる責任	13.気候変動	14.海を守ろう	15.陸を守ろう	16.平和と公正	17.パートナーシップ	SDG合計	教員数
文	1	1	5	19	5	0	0	2	0	5	0	0	0	0	1	2	0	41	85
経済	0	0	4	4	1	1	2	5	8	1	6	0	3	0	1	2	0	38	65
経営	5	1	1	6	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	11	26	68
法	0	0	5	5	2	0	1	5	1	3	2	0	1	0	0	5	0	30	54
社会	4	0	14	7	8	0	1	5	1	12	10	1	1	0	0	8	1	73	82
国際	5	0	3	6	3	0	2	1	2	5	11	2	4	0	0	1	1	46	41
国際観光	0	0	3	6	0	0	0	4	4	1	9	2	0	1	1	1	1	33	35
理工	0	1	13	9	2	2	8	1	23	0	11	4	4	1	2	0	0	81	91
総合情報	0	0	3	5	0	0	0	1	6	1	3	2	1	0	1	1	1	25	33
生命科	0	2	7	3	0	3	1	1	5	0	0	1	0	3	2	0	0	28	30
食環境科	0	1	13	5	1	0	0	0	1	0	0	5	0	0	1	1	0	28	34
ライフ	2	0	27	10	2	0	0	1	1	1	10	1	0	0	0	0	0	55	71
情報連携	0	0	3	5	0	1	0	2	5	1	2	1	5	0	1	1	0	27	46
大学院等	6	1	1	5	1	0	3	1	4	1	2	0	1	0	0	0	0	26	27
合計	23	7	102	95	25	8	18	30	61	31	66	19	20	5	10	22	15	557	762

目標別

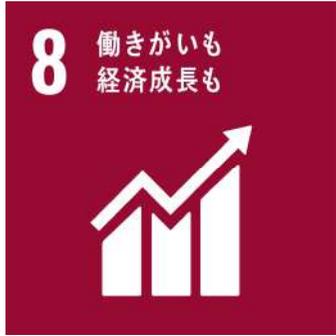
研究が盛んな学部 (各目標上位2学部)

※Impact Ranking2022エントリー科目

学部等	1.貧困	2.飢餓	3.健康と福祉	4.教育	5.ジェンダー	6.水質環境	7.エネルギー	8.経済成長	9.産業と技術革新	10.平等	11.まちづくり	12.つくる責任	13.気候変動	14.海を守ろう	15.陸を守ろう	16.平和と公正	17.パートナーシップ	SDG 合計	教員数
文	1	1	5	19	5	0	0	2	0	5	0	0	0	0	1	2	0	41	85
経済	0	0	4	4	1	1	2	5	8	1	6	0	3	0	1	2	0	38	65
経営	5	1	1	6	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	11	26	68
法	0	0	5	5	2	0	1	5	1	3	2	0	1	0	0	5	0	30	54
社会	4	0	14	7	8	0	1	5	1	12	10	1	1	0	0	8	1	73	82
国際	5	0	3	6	3	0	2	1	2	5	11	2	4	0	0	1	1	46	41
国際観光	0	0	3	6	0	0	0	4	4	1	9	2	0	1	1	1	1	33	35
理工	0	1	13	9	2	2	8	1	23	0	11	4	4	1	2	0	0	81	91
総合情報	0	0	3	5	0	0	0	1	6	1	3	2	1	0	1	1	1	25	33
生命科	0	2	7	3	0	3	1	1	5	0	0	1	0	3	2	0	0	28	30
食環境科	0	1	13	5	1	0	0	0	1	0	0	5	0	0	1	1	0	28	34
ライフ	2	0	27	10	2	0	0	1	1	1	10	1	0	0	0	0	0	55	71
情報連携	0	0	3	5	0	1	0	2	5	1	2	1	5	0	1	1	0	27	46
大学院等	6	1	1	5	1	0	3	1	4	1	2	0	1	0	0	0	0	26	27
合計	23	7	102	95	25	8	18	30	61	31	66	19	20	5	10	22	15	557	762

THE Impact Rankingsについて(参考)

▷ 本学のImpact Rankings2022エントリー項目

S D G	 <p>1 貧困をなくそう</p>	 <p>8 働きがいも経済成長も</p>	 <p>11 住み続けられるまちづくりを</p>	 <p>12 つくる責任 つかう責任</p>	 <p>16 平和と公正をすべての人に</p>
	あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる	包摂的かつ持続可能な経済成長及び生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する(一部省略*1)	包摂的で安全かつ強靱(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する	持続可能な生産消費形態を確保する	平和で包摂的な社会・司法へのアクセスを提供・効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築(一部省略*2)
設 問 例	<ul style="list-style-type: none"> ・貧困に関する研究 ・経済的支援を受けている学生数 ・学生向け経済的支援策 ・コミュニティの反貧困プログラム 	<ul style="list-style-type: none"> ・経済成長と雇用に関する研究 ・雇用慣行 ・従業員1人当たりの支出 ・1か月以上の就業を行っている学生の割合 ・24か月以上の契約を結んでいる従業員の数 	<ul style="list-style-type: none"> ・持続可能な都市とコミュニティに関する研究 ・芸術・遺産の支援 ・文化遺産の記録・保存 ・持続可能な取り組み(交通・住居) 	<ul style="list-style-type: none"> ・責任ある消費と生産に関する研究 ・運用(法令等)面での対策 ・リサイクルされた廃棄物の割合 ・持続可能報告書の公表 	<ul style="list-style-type: none"> ・平和と正義の研究 ・大学のガバナンス施策 ・行政との連携 ・法と民事執行分野の卒業生の割合

*1 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用(ディーセント・ワーク)を促進する

*2 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する

総合ⅢB／全学総合J（SDGs実践講座 —17ゴールへの第一歩—）

担当者	川口 英夫(カワグチ ヒデオ)、小野 道子(オノ ミチコ)、北脇 秀敏(キタワキ ヒデトシ)、小瀬 博之(コセ ヒロユキ)、高山 直樹(タカヤマ ナオキ)、矢口 悦子(ヤグチ エツコ)、内田 塔子(ウチダ トウコ)、水村 容子(ミズムラ ヒロコ)、廣津 直樹(ヒロツ ナオキ)、清水 宏(シミズ ヒロシ)、南野 奈津子(ミナミノ ナツコ)、久米 功一(クメ コウイチ)、堀本 麻由子(ホリモト マユコ)、佐野 崇(サノ タカシ)				
年度	2022	授業コード	100AB14001	科目ナンバリング	
対象年次	1～4	授業形態	講義・演習	単位数	2
時間割	秋金5	開講キャンパス	白山	教室	A101教室
主たる使用言語	日本語		実務教員科目		
授業科目区分					
授業回数					
受講対象学科					

【サブタイトル】

「SDGs実践講座 —17ゴールへの第一歩—」

【講義の目的・内容】

「SDGs（Sustainable Developmental Goals）」とは、2015年9月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でより良い世界を目指す、17項からなる国際目標である。本講義の目的は、このSDGsについて、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶことである。さらに、この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に变化させて行く」ことで、在学中、あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長することを目指す。

なお、本講義受講期間中にSDGsに繋がる活動をスタートしていただく。社会貢献センター(ボランティア支援室)等で実施する活動、若しくは自身での活動を通じて、本講義の学びを「自分ごと」にする。これらの活動を踏まえ、グループでの最終発表および各自の最終レポートをまとめる。

また、本講座終了後、受講者には東洋大学SDGsアンバサダーへの登録を推奨します。

【学修到達目標】

受講生は、以下の力を涵養し獲得することが期待される：

1. SDGsの理念と具体的な取り組みを「自分ごと」として理解する力
2. 「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力
3. 課題・問題を発見する力
4. 他者と関わりチームとして成果をあげる力

【講義スケジュール】

1. 1) 学長講義(矢口 悦子 学長)
- 2) 本学、他大学のSDGs取り組み状況説明等(川口 英夫 生命科学部教授、副学長、東洋大学SDGs推進委員長)
- 3) アイスブレイク(清水 宏 法学部教授)
2. ワークショップで考えるSDGs「本当に地球にやさしいって なんだろう？」(仮) (外部講師 NPO Dear)
3. 世界と日本の子どもの貧困について考えよう(小野 道子 社会学部准教授)
4. 見える飢餓と見えない飢餓—植物科学からの挑戦—(廣津 直樹 生命科学部教授)
5. 移民・難民と私たち：共生社会へのカギ(南野 奈津子 ライフデザイン学部教授)
6. 気候変動対策とエネルギー・陸域生態系の保全(小瀬 博之 総合情報学部教授)
7. うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」する意味と意義(外部講師JICA高田健二)
8. 対話的な深い学びへのアプローチ(堀本 麻由子 文学部准教授)
9. 開発途上国の生活環境改善に向けて(北脇 秀敏 国際学部教授)
10. 学校の中のジェンダーと子どもの権利(内田 塔子 ライフデザイン学部准教授)
11. 人工知能と人間社会(佐野 崇 情報連携学部講師)
12. 海の豊かさを守ろう～イルカ、クジラの世界から見つめるSDGs～ワークショップ(外部講師 アイサーチ・ジャパン)
13. 住み続ける社会のデザイン(水村 容子 ライフデザイン学部教授)
14. 日本人の働き方と働きがいはいこれからどうなるのか(久米 功一 経済学部教授)
15. 最終グループ発表

【指導方法】

- ・授業は学内外の講師による講義と質疑応答、および受講生によるグループ・ディスカッションを中心とする。
- ・ディスカッションに際しては、ファシリテーター、タイムキーパー、書記などの役割を分担し、全員でグループ運営の責任を担ってもらう。
- ・授業終了後、リアクションペーパーを提出してもらい、文章作法の観点から添削を行った上で返却することで文章力の向上を図る。
- ・なお本科目は、秋学期金曜日5限に「全学総合J」として授業を実施する。

【事前・事後学修】

- ・事前学習については、各回の講義のレジュメを事前にToyoNet-Aceにアップするので、それを講読し必要に応じて参考文献を参照すること。(15～30分)
- ・事後学習については、授業の内容を振り返り、疑問点や自分の意見等をまとめたリアクションペーパーを作成して提出すること。また、添削後返却されたリアクションペーパーを検討すること。さらに、学期末にはグループでの議論をまとめ、グループ発表を行うこと、そして授業全体を通して学んだことを最終レポート（各自）にまとめて提出すること。

【成績評価の方法・基準】

- ・成績評価は、①授業への参加度（発言の度合いやディスカッションに積極的に参加しているかどうか）30%、②リアクションペーパー（30%）、③グループ発表（20%）、④最終レポート（20%）、①+②+③+④=100%で評価する。
- ・成績評価の基準は「東洋大学成績評価基準」に基づく。

【受講要件】

- ・この授業の対象学年は1～4年の全学年である。
- ・この授業では受講者の事前申し込み制とし、申し込み多数の場合は志望理由などで選考し履修を決定する。

選考方法・履修登録については、ToyoNet-Gまたは学内掲示等で必ず確認をすること。

【テキスト】

- ・特定のテキストは使用しない。必要に応じて資料を提供する。

【参考書】

授業中に指示するもの。

【関連分野・関連科目】

【備考】

【添付ファイル1】

【添付ファイル2】

【添付ファイル3】

【リンク】

東洋大学SDGs推進センター

センター長：SDGs推進委員会 委員長

SDGs推進委員会（委員）

教育（正課）部門

教務部長（事務局：教務部）

教育（課外）部門

学生部長（事務局：学生部）

研究部門

研究推進部長（事務局：研究推進部）

社会貢献部門

社会貢献センター長（事務局：エクステンション部）

国際教育・国際貢献部門

国際教育センター長（事務局：国際部）

国際共生社会研究センター

環境部門

管財部長（事務局：管財部）

広報部門

総務部広報担当部長（事務局：広報課）

SDGs推進プロジェクト

- 第7条 委員会は、第2条各号に掲げる事項を学内外の組織と連携し、専門的に推進するプロジェクトを設置することができる。
- 各プロジェクトに、プロジェクト・リーダーを置き、プロジェクトリーダーが当該プロジェクトを統括する。
 - プロジェクト・リーダーは、本学の専任教職員とし、委員会の承認を経てセンター長が指名する。
 - プロジェクト・リーダーの任期は、各プロジェクトごとに別に定める。
 - プロジェクト・リーダーは、センター長と協議のうえ、必要に応じ、プロジェクトメンバーを加えることができる。
 - プロジェクトに関する事項は、委員会において別に定める。

カーボンニュートラル推進プロジェクト

プロジェクトリーダー：荒巻 俊也

担当部門：研究部門・環境部門

ダイバーシティ&インクルージョン推進プロジェクト

プロジェクトリーダー：金子 律子

SDGsに関連する重点研究プロジェクト

- 極限環境微生物の先端科学をSDGs達成のために社会実装する研究（プロジェクトリーダー：伊藤 政博）
- レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究（プロジェクトリーダー：松丸 亮）

東洋大学TOP > ニュース > SDGs > 【開催報告】映画『桜色の風が咲く』（2022年11月4日から全国劇場公開）の特別先行上映会を開催しました

【開催報告】映画『桜色の風が咲く』（2022年11月4日から全国劇場公開）の特別先行上映会を開催しました

2022年10月13日、映画『桜色の風が咲く』（11月4日から公開）の特別先行上映会を白山キャンパス井上円了ホールで開催しました。

この映画は、9歳で失明、18歳で聴力を失いながらも世界ではじめて盲ろう者の大学教授となった、東京大学先端科学技術研究センター福島智さんの生い立ちを描いた実話です。特定非営利活動法人アース・アイデンティティ・プロジェクトから本学の学生・教職員を対象とする特別先行上映の機会をご提案いただいで実現。約200名の学生・教職員が観覧しました。

スペシャルゲストとして、本映画の製作総指揮兼プロデューサーの結城崇史さん、監督の松本准平さん、福島智さんを演じた俳優の田中偉登さんをお招きし、上映会終了後にトークセッションを行いました。



【結城崇史さんからのメッセージ】

この映画を通じて、「生きるとはどういうことなのか」「人の人たる所以はということなのか」といったことをもう一度考え直してみて、いろいろな人と共有してほしいと思います。

【鑑賞した学生の感想】

- 自分の人生の苦悩と重ねて、主人公のように強く、明るく生きていこうと思いました。早く家に帰って家族に会いたいと思えるような映画でした。
- この映画を見て私は、人の強さを感じました。人間には考える力がある。この映画を見た後にも考え強い人間になりたいと思いました。

【関連リンク】

映画『桜色の風が咲く』公式サイト

<https://gaga.ne.jp/sakurairo/>

【映画「桜色の風が咲く」特別先行上映会 概要】

- 主 催：東洋大学SDGs推進センター
- 共 催：特定非営利活動法人アース・アイデンティティ・プロジェクト
- 日 時：2022年10月13日(木) 16:30～19:30
- 会 場：白山キャンパス 井上円了ホール
- 対 象：東洋大学 学生・教職員
- 内 容：①映画「桜色の風が咲く」上映会
②トークセッション
- ゲスト：結城 崇史 氏（製作総指揮／プロデューサー）
松本 准平 氏（監督）
田中 偉登 氏（俳優・福島 智 役）

東洋大学SDGs推進センター設立記念シンポジウム
SDGs × カーボンニュートラル
— いま、わたしにできること。 —

開催報告

2022年11月9日
東洋大学SDGs推進センター
2022年度第2回 東洋大学SDGs推進委員会

■ 概要

1. 主催 東洋大学SDGs推進センター
2. 配信日時 2022年10月22日（土）13:30～16:30
※配信後は録画映像をアーカイブ公開中
3. 開催方法 オンライン配信（Youtube Liveを利用）
4. 公開先
本学SDGsサイト内「東洋大学SDGs推進センター設立記念シンポジウム」特設ページ
<https://www.toyo.ac.jp/sdgs/center/sympo2022/>
5. 次第および登壇者（敬称略）

1. 学長挨拶
東洋大学 学長 矢口悦子
2. 東洋大学の取り組みの紹介
 - ① SDGs認知度調査 結果報告
東洋大学 社会貢献センター長 高山 直樹
 - ② SDGs取り組み報告
『SDGs Students Project 学生起業に向けて』
東洋大学 国際学部 教授 北脇 秀敏
『Smile F LAOS』
東洋大学SDGsアンバサダー（団体）Smile F LAOS 佐藤 一平
『高校生による自然活用型社会を目指した活動』
東洋大学附属姫路高等学校 地域活性部 顧問 矢木 由香子、生徒 宮下 陽大
 - ③ パネルディスカッション
ファシリテーター：東洋大学 社会貢献センター長 高山 直樹
パネラー：7名
進研アド 取締役 田邊 心技
東洋大学 国際学部 教授 北脇 秀敏
東洋大学 SDGsアンバサダー（個人）星 光優、猪股 星良、朝原 優真
東洋大学附属姫路高等学校 地域活性部 顧問 矢木 由香子、生徒 宮下 陽大
3. シンポジウム
 - ① 基調講演『ライフサイクル思考で実現するカーボンニュートラル社会』
東京大学 先端科学技術研究センター ライフサイクル工学分野 教授 平尾 雅彦
 - ② 講演『地域の脱炭素化と市民の貢献』
東洋大学 SDGs推進センター 副センター長／国際学部 学部長 荒巻 俊也
4. 質疑応答
5. 総括
東洋大学 SDGs推進センター センター長 川口 英夫

■ 当日の様子



■ 公開先Webページ・映像について

1. Webページへのアクセス状況

< アクセス解析結果 >

	PV数
10/22~11/6	836
10/22 当日 (内数)	338

海外からのPV数

- United States 6
- Sweden 1
- Vietnam 1

年齢別のPV数

- 18-24 : 28.97 %
- 25-34 : 24.60 %
- 35-44 : 24.60 %
- 45-54 : 21.83 %

性別PV数

- male : 66.79 %
- female : 33.21 %

2. 映像の再生状況

< Youtube視聴回数 >

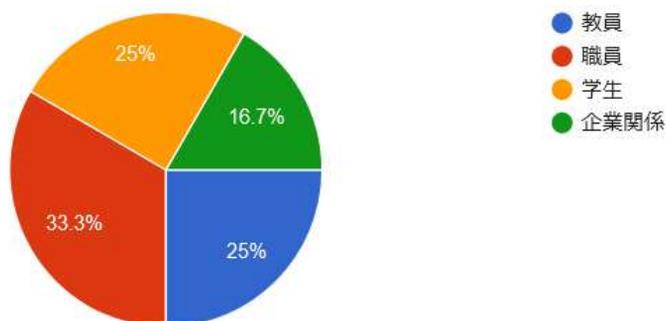
	視聴回数
アーカイブ視聴	379
ライブ配信	161



■視聴者アンケート（回答数：12）

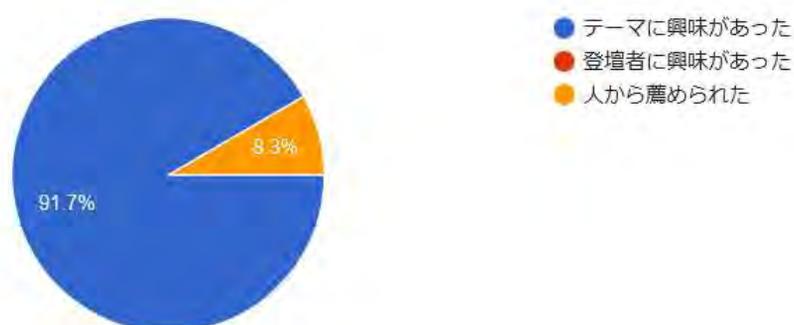
区分（身分等）

12件の回答



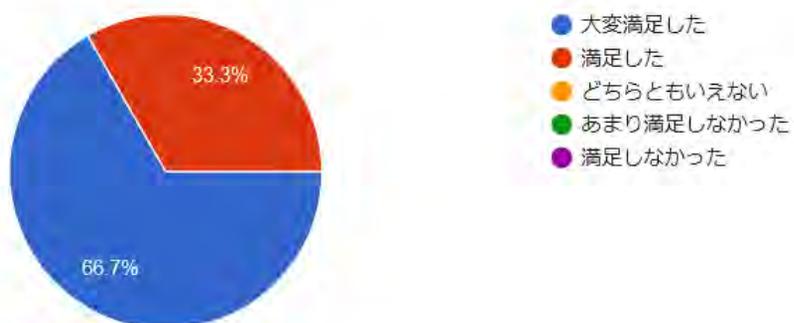
1.本シンポジウムへ参加された理由を教えてください。

12件の回答



2.本シンポジウムの内容（講演等）はいかがでしたか？また、感想がございましたらご記入ください。

12件の回答



感想（自由記述）

3件の回答

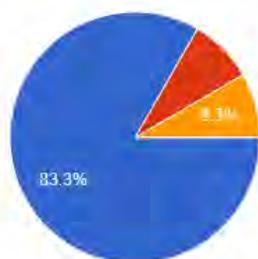
テーマを分けて、二回にしてもよかったのではないかと思います。

高校生の取り組みの多様さと熱量に驚きました。

高校生、大学生がSDGsの概念をベースに様々な地球的課題を自分事として捉え、様々な活動をしていることに大きな刺激を受けた。

3. 本シンポジウムの運営はいかがでしたか？また、感想がございましたらご記入ください。

12 件の回答



- 大変満足した
- 満足した
- どちらともいえない
- あまり満足しなかった
- 満足しなかった

感想（自由記述）

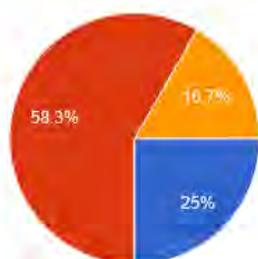
2 件の回答

質問時間が短かったので、より深く理解することができなかった。

とても参加しやすい運営でした。ありがとうございました。

4. 『SDGs認知度調査結果報告』はいかがでしたでしょうか。また、感想がございましたらご記入ください。

12 件の回答



- 大変満足した
- 満足した
- どちらともいえない
- あまり満足しなかった
- 満足しなかった

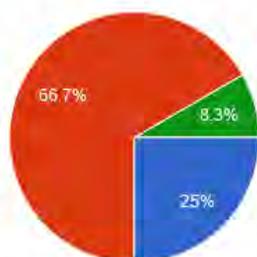
感想（自由記述）

1 件の回答

アンケートだけでなく、今後どうすれば良いかも知りたかった。

5. 『SDGs Students Project 学生起業に向けて』の報告はいかがでしたでしょうか。また、感想がございましたらご記入ください。

12 件の回答



- 大変満足した
- 満足した
- どちらともいえない
- あまり満足しなかった
- 満足しなかった

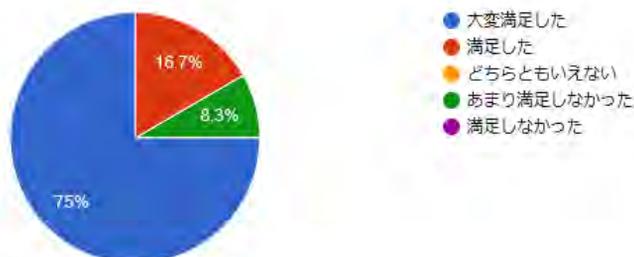
感想（自由記述）

1 件の回答

よく理解できました。

6. 『Smile F LAOS』の報告はいかがでしたでしょうか。また、感想がございましたらご記入ください。

12件の回答



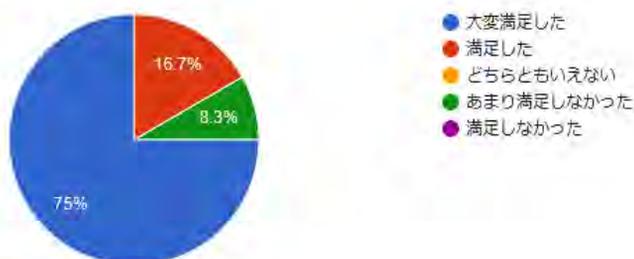
感想（自由記述）

1件の回答

取り組みも多角的で良かったと思います。

7. 『高校生による自然活用型社会を目指した活動』の報告はいかがでしたでしょうか。また、感想がございましたらご記入ください。

12件の回答



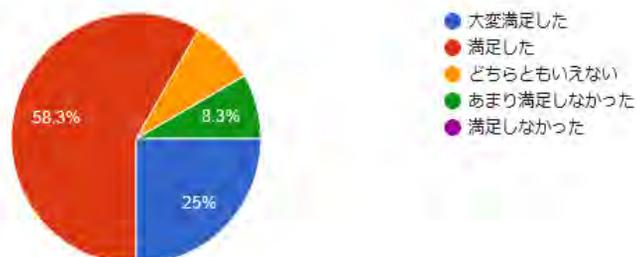
感想（自由記述）

1件の回答

よく理解できました。

8. パネルディスカッションはいかがでしたか？また、感想がございましたらご記入ください。

12件の回答



感想（自由記述）

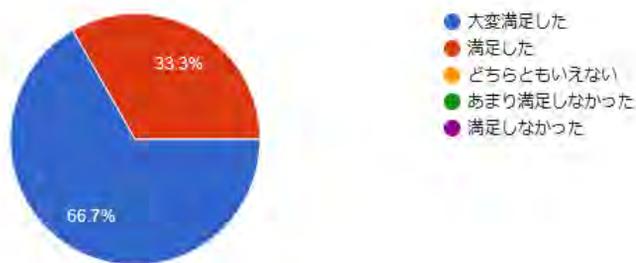
2件の回答

学生の積極性に感動しました。

高校生、大学生がSDGsの概念をベースに地球的課題を自分ごとと捉え、様々なアクションを起こしていることに大きな刺激を受けました。ありがとうございました。

9. 基調講演『ライフサイクル思考で実現するカーボンニュートラル社会』はいかがでしたか？また、感想がございましたらご記入ください。

12件の回答



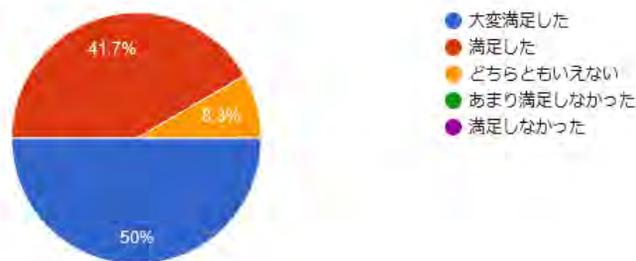
感想（自由記述）

1件の回答

わかりやすかったです。

10. 講演『地域の脱炭素化と市民の貢献』はいかがでしたか？また、感想がございましたらご記入ください。

12件の回答



感想（自由記述）

1件の回答

地方の取り組みの実情とどうすれば良いかが理解できました。

11. 今後、本学のSDGsに関するシンポジウムや講演会で取り上げてほしいテーマがあれば記入してください。

5件の回答

SDGsに関する企業の先進的な取組事例について知りたいです。

SDGsの実情

哲学教育

SDGsの成果、高等教育機関の役割変化

SDGsは2030年までに達成可能なのか。

■ 告知関連

< Webサイト キービジュアル >



< 告知物 (チラシ) >

東洋大学SDGs推進センター 設立記念シンポジウム

SDGs
×
カーボンニュートラル

いま、わたしにできること。

2022.10.22 (土)
13:30 ~ 16:30

13:30-13:35 学長挨拶
笑口 悦子 (東洋大学 学長)

13:35-14:45 東洋大学の取り組みの紹介

① SDGs 認知度調査 結果報告
高山 直樹 (東洋大学 社会貢献センター長)

② SDGs 取り組み報告
・北藤 秀敏 (東洋大学 国際学部国際地域学 教授) 「SDGs Students Project 学歴起業に向けて」
・東洋大学 SDGsアンバサダー (団体) 「Smile F LAOS」
・東洋大学附属短路高等学校 地域活性化部「高校生による自然活用型社会を目指した活動」

③ パネルディスカッション
ファシリテーター: 高山 直樹 (東洋大学 社会貢献センター長)
パネラー: 田邊 心扶氏 (連研アド取締役) / 北藤 秀敏 (東洋大学 国際学部国際地域学 教授)
東洋大学SDGsアンバサダー学生 / 東洋大学附属短路高等学校 地域活性化部

14:55-16:10 シンポジウム

① 基調講演 「ライフサイクル思考で実現するカーボンニュートラル社会」
平尾 雅彦 氏 (東洋大学先端科学技術研究センターライフサイクル工学分野 教授)

② 講演 「地域の脱炭素化と市民の貢献」
齋藤 雅也 (東洋大学SDGs推進センター 副センター長 / 国際学部 学部長)

16:10-16:25 質疑応答

16:25-16:30 総括
川口 美夫 (東洋大学SDGs推進センターセンター長)

申込不要・参加無料

オンライン開催
視聴はこちらから
<https://www.toyo.ac.jp/sdgs/center/sympo2022/>

お問い合わせ
東洋大学SDGs推進センター事務局 (ml-sdgs@toyo.jp)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

THE Impact Raking 2023 へのエントリーについて（報告）

▶ Impact Rankings 2023 概要

エントリー締切：2022年11月11日
 ランキング発表：2023年 5月（予定）
 エビデンス基準年度：2020年度

▶ Impact Rankings 2023 エントリー項目

	6 安全な水とトイレ を世界中に	8 働きがいも 経済成長も	9 産業と技術革新の 基盤をつくらう	12 つくる責任 つかう責任	16 平和と公正を すべての人に	17 パートナーシップで 目標を達成しよう
SDGs						
	すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する	包摂的かつ持続可能な経済成長及び生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する（一部省略）	強靱なインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る	持続可能な生産消費形態を確保する	平和で包摂的な社会・司法へのアクセスを提供・効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築（一部省略）	持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する
設問例	<ul style="list-style-type: none"> 水に関する研究 一人あたりの水消費量 水の利用およびケア 水の再利用 コミュニティー内の水 	<ul style="list-style-type: none"> 経済成長と雇用に関する研究 雇用慣行 従業員1人当たりの支出 1か月以上の就業を行っている学生の割合 24か月以上の契約を結んでいる従業員の数 	<ul style="list-style-type: none"> 産業、革新、インフラストラクチャーに関する研究 大学の研究を引用する特許 大学スピンオフ 商工業からの研究所得 	<ul style="list-style-type: none"> 責任ある消費と生産に関する研究 運用（法令等）面での対策 リサイクルされた廃棄物の割合 持続可能報告書の公表 	<ul style="list-style-type: none"> 平和と正義の研究 大学のガバナンス施策 行政との連携 法と民事執行分野の卒業生の割合 	<ul style="list-style-type: none"> 目標のためのパートナーシップに関する研究 目標をサポートするための関係 SDG 報告書の刊行 SDG 教育

▶（前年度参考）Impact Rankings 2022 エントリー項目

	1 貧困をなくそう	8 働きがいも 経済成長も	11 住み続けられる まちづくりを	12 つくる責任 つかう責任	16 平和と公正を すべての人に	17 パートナーシップで 目標を達成しよう
SDGs						
	あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる	包摂的かつ持続可能な経済成長及び生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する（一部省略）	包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する	持続可能な生産消費形態を確保する	平和で包摂的な社会・司法へのアクセスを提供・効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築（一部省略）	持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

2023年度SDGs留学生アンバサダーの認定について

▶ 認定者数 : 3名

2022年11月25日(金)開催の2022年度 第4回 東洋大学SDGs留学生アンバサダー運営委員会にて承認

<内訳> タイプA : 国際学部グローバル・イノベーション学科 : 2名

タイプB : 総合情報学部総合情報学科 : 1名

タイプ	所属	試験区分	国籍	英語能力基準 適否	入学試験 合否	留学生アンバサダー 認定
A	国際学部 グローバル・イノベーション学科	外国人留学生入試 (オンライン利用2タイプA)	中華人民共和国	適合	合格	認定
A	国際学部 グローバル・イノベーション学科	外国人留学生入試 (オンライン利用2タイプA)	フランス共和国	適合	合格	認定
B	総合情報学部 総合情報学科	外国人留学生入試 (オンライン利用2タイプB)	大韓民国	適合	合格	認定

▶ 合格発表日 : 2022年12月 1日(木)

▶ 入学手続締切日 : 2022年12月14日(水)

▶ 入学年月日 : 2023年 4月 1日(土)

文京区内大学 サステナビリティ 関連取組紹介のための 交流・意見交換会

日時 | 2022年12月21日(水)

15:00～17:30 (14:50 受付開始)

会場 | ・東京大学 本郷キャンパス
福武ホール 地下2F 福武ラーニングシアター
・オンライン参加可能

対象者 | 文京区内の大学で

同分野の活動に従事している教職員・学生

※区外の教職員・学生、同分野の活動に従事していない教職員・学生も歓迎

参加費 | 無料

【参加申込方法】

下記リンク先フォームからお申し込みください。

<https://forms.gle/MW6T6EMdGBqXhYHw9>

※締切：12月20日(火)13:00 参加受付締切

※後日、オンライン参加用URLを含む詳細案内が
登録されたメールアドレスに届きます。

※現地参加人数には限りがあります。



2023年3月9日

東洋大学 学長
矢口 悦子 殿

東洋大学 SDGs 推進委員会 委員長
川口 英夫

2023年度 東洋大学 SDGs アンバサダー（個人・更新）の推薦について

2023年度東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）につきまして、2022年度から更新を行う者を2023年3月8日開催の東洋大学 SDGs 推進委員会において適任と認めましたので、下記の通り推薦いたします。

記

1. 被推薦者人数 21名
2. 東洋大学 SDGs 推進委員会 開催日
2023年3月8日
3. 被推薦者名簿
別紙の通り
4. 認定期間
2023年4月1日 ～ 2024年3月31日
5. 添付資料
 - ・2023年度「東洋大学 SDGs アンバサダー（個人・更新）」名簿
 - ・東洋大学 SDGs アンバサダー制度に関する要項

以上

2023年度「東洋大学 SDGs アンバサダー（個人）」更新者名簿

※学年は2022年度現在

NO.	学籍番号	氏名	学部 学科	学年
1			文学部 英米文学科	3年
2			経済学部 国際経済学科	3年
3			経済学部 国際経済学科	1年
4			経済学部 総合政策学科	3年
5			経済学部 総合政策学科	3年
6			経済学部 総合政策学科	3年
7			経済学部 総合政策学科	1年
8			法学部 法律学科	3年
9			社会学部 社会心理学科	3年
10			社会学部 社会心理学科	3年
11			社会学部 国際社会学科	2年
12			生命科学部 生命科学科	3年
13			生命科学部 応用生物科学科	4年
14			理工学部 応用化学科	3年
15			理工学部 都市環境デザイン学科	1年
16			総合情報学部 総合情報学科	3年
17			国際学部 グローバルイノベーション学科	3年
18			国際学部 グローバルイノベーション学科	2年
19			国際学部 国際地域学科	1年
20			国際観光学部 国際観光学科	2年
21			社会学部 二部社会学科	3年

2023年3月9日

東洋大学 学長
矢口 悦子 殿

東洋大学 SDGs 推進委員会 委員長
川口 英夫

2023年度 東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）の推薦について

2023年度東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）につきまして、2023年3月8日開催の東洋大学 SDGs 推進委員会において適任と認めましたので、下記の通り推薦いたします。

記

1. 被推薦団体数 3団体
2. 東洋大学 SDGs 推進委員会 開催日
2023年3月8日
3. 被推薦団体名簿
別紙の通り
4. 認定期間 : 2023年4月1日 ~ 2024年3月31日
5. 添付資料
 - ・2023年度「東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）」名簿
 - ・東洋大学 SDGs アンバサダー制度に関する要項

以上

2023年度「東洋大学 SDGs アンバサダー（団体）」名簿

NO.	団体名	参加学生数	関連するSDGs	代表者学籍番号	代表者
1	Smile F Laos	19	1.貧困をなくそう 4.質の高い教育をみんなに 10.人や国の不平等をなくそう 12.つくる責任 つかう責任		
	活動概要				
2	学ボラ川越（山古志部門）	12	11.住み続けられるまちづくりを		
	活動概要				
3	ふえーご（健スポAKABANE）	17	3.すべての人に健康と福祉を		
	活動概要				



添付4-3

UNITED NATIONS
UNIVERSITY

UNU-IAS

SDG UP



THE GLOBAL GOALS

SDG大学連携プラットフォーム
公開シンポジウム

SDGs達成への取組みを通じた 大学における行動変容を考える

SDG大学連携プラットフォーム（SDG-UP）では、大学がSDGs達成に積極的に貢献することを通じて、**大学・教職員・学生それぞれの行動変容**につなげていくことを目指しています。本シンポジウムでは、4つのテーマを取り上げ、日本の大学の未来について考えていきます。

多くの方のご参加をお待ちしております。

開催概要

▼日時

2023年

3/29 (水) 13:00-17:00

オンライン

参加費無料

▼視聴対象者

大学・教育関係者、大学経営者、
大学マネジメント部門担当者、
大学との連携に関心のある企業・
自治体関係者、学生等

▼申込方法（オンライン参加）

下記短縮URLまたは二次元バー
コードのフォームより**事前登録**
をお願いいたします。

【申込締切：3月24日（金）】

シンポジウム参加者
申込フォーム

<https://onl.bz/QSHfT4i>



プログラム

※プログラム詳細、登壇者は
次頁参照

13:00- 冒頭挨拶

13:10- セッション1（大学マネジメント）

SDGsの実現に貢献する大学経営に向けて

14:05- セッション2（SDGカリキュラム）

大学連携サティフィケート・プログラム
「国連SDGs入門」

15:00- セッション3（大学評価とアカウンタビティ）

大学評価におけるTHEインパクトランキングの意義
と課題—世界の大学の取組みと日本との比較

15:55- セッション4（大学間等連携）

大学連携を通じたSDGsの達成

16:40- 総括、2023年度のSDG-UP活動、新規募集ご案内

総合司会：福士謙介（UNU-IAS）

※後日配信、資料配布はございません。

※本講演の様子は国連大学での広報・記録用として後日使用するとともに、
参加者の個人情報を登壇者に共有することもありますので予めご了承の上申
込ください。

【主催】国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS）／【後援】調整中

【お問い合わせ】SDG大学連携プラットフォーム事務局 sdgs-up@unu.edu

69/363

プログラム詳細

13:00- 冒頭挨拶

山口しのぶ SDG大学連携プラットフォーム・チェア、UNU-IAS所長
(予定) 文部科学省大臣官房国際課

13:10- ▷セッション1 「SDGsの実現に貢献する大学経営に向けて」
進行：加藤宏（国際大学副学長）

-パネル1：SDGsへの貢献に向けての具体的な取り組み

大塚耕司（大阪公立大学副学長）
沖 大幹（東京大学総長特別参与）
岡田英史（慶應義塾常任理事）

Sali Augustine（学校法人上智学院総務担当理事）

-パネル2：SDGsに貢献する大学経営に向けての体制のあり方

石田洋子（広島大学I D E C国際連携機構教授）
岡田英史（前出）
加藤重治（沖縄科学技術大学院大学事務局長・副理事）
横田 篤（北海道大学理事・副学長）

14:05- ▷セッション2 大学連携サティフィケート・プログラム「国連SDGs入門」

- 「国連SDGs入門」プログラム実施報告 毛利勝彦（国際基督教大学教授）
濱西栄司（ノートルダム清心女子大学准教授）
- 追加コンテンツ紹介 日高京子（北九州市立大学教授）
- 2023年度における個別実施のご案内 毛利勝彦（前出）

15:00- ▷セッション3 大学評価におけるTHEインパクトランキングの意義と課題
—世界の大学の取り組みと日本との比較
進行：杉村 美紀（上智大学総合人間科学部教授）

-報告 日本と世界の大学比較と各SDGトップ5大学の取り組み
相生芳晴（上智大学IR推進室長）
-指定討論 池田 潤（筑波大学副学長）
和佐 榮（大阪医科薬科大学顧問）

15:55- ▷セッション4 大学連携を通じたSDGsの達成

-報告 SDGsに関する取り組み 根本 慎太郎
(大阪医科薬科大学社会貢献・SDGs推進室長)

SDG大学連携プラットフォーム

「SDGs推進に積極的な大学が連携し、取り組みの共有、国際社会で活躍できる人材育成、国内外への発信を通じて、日本の大学のSDGsの取り組み及びステークホルダーとの関係強化と国際社会でのプレゼンス向上を図ることで、日本及び世界の持続可能な発展に貢献する」ことを目的に2020年設立 <https://ias.unu.edu/jp/sdg-up>

【参加大学（32大学）】

愛媛大学、大阪大学、大阪医科薬科大学、大阪公立大学、岡山大学、沖縄科学技術大学院大学、お茶の水女子大学、神奈川大学、金沢大学、関西学院大学、九州産業大学、慶應義塾大学、北九州市立大学、国際大学、国際基督教大学、上智大学、昭和音楽大学、創価大学、千葉商科大学、筑波大学、東海大学、東京大学、東京外国語大学、東京工業大学、東京都市大学、東京理科大学、東洋大学、奈良教育大学、ノートルダム清心女子大学、広島大学、北海道大学、龍谷大学



ESD-Net 2030 Learning Webinar Series on ESD Pedagogy – Version 20/03/2023

Higher Education & ESD

Taking a transdisciplinary approach to teaching based on SDG 4 and ESD at universities

Date: 30th March, 1 pm CEST, duration: 120min (90 min breakout session, before and after UNESCO with all participants)

Zoom Unesco, [registration here](#).

Thematic focus:

In 2022, the 3rd UNESCO World Higher Education Conference 2022 (WHEC2022), the UN High-Level Political Forum (HLPF), and the UN Transforming Education Summit (TES) reaffirmed the important role of education for sustainable development (ESD) and, more broadly speaking, education's role in transformations needed to pave the way towards a more sustainable future. The UN 2030 Agenda and associated SDGs are a framework for higher education institutions (HEIs) to contribute to such transformation through their core activities of Education, Research, Community Engagement and Campus operations. Not only are HEIs educating the citizens of today and the leaders of tomorrow; they are important actors at the local level, and inform policy nationally and globally.

In line with the objectives mapped out in the ESD Roadmap for 2030, this event will look at HEIs and their teaching practices for ESD. Special attention will be paid to teaching ESD through a transdisciplinary approach. We will also discuss Whole-Institution Approaches to (E)SD.

The webinar will present and discuss:

- **ESD Practices and activities** at higher education institutions,
- **Different approaches and strategies for SDG 4**, - how it impacts university curriculum, teaching and learning and activities on and beyond the university campus,
- **Key Competencies and Skills around ESD**: enabling students of all disciplines to understand sustainable development and the interconnectedness of SDGs, and critically engage with sustainability questions and motivate them to contribute to finding innovative solutions to challenges faced.

Session structure:

After a short welcome by IAU, an 'icebreaker' poll (or question in chat) to the participants will be used. This is followed by input presentations (5min each) and a moderated panel discussion, which will include perspectives from experts in different positions and based at universities around the globe.

The central question to panellists and participants will be:

Why and how to teach ESD through a transdisciplinary approach?

After this first part of the session (30 min), the participants will be invited to answer the following questions:



- What are new opportunities offered by ESD?
- What did you find challenging when integrating ESD into pedagogy/teaching practices?
- Which obstacles prevented you (until now) from doing so and how did you overcome these?
- The session will be moderated by IAU; participants will have the opportunity to ask questions and engage with the speakers, through polls, the chat box and similar tools.

A selection of challenges will be shared with the discussants who will address these and propose ways to overcome them.

Facilitators (follow link for bio):

- [Hilligje van't Land](#), PhD, Secretary General, International Association of Universities (IAU)
- [Isabel Toman](#), Programme Officer, Sustainable Development, IAU

Presenters and discussants from universities (5 min input each):

- [Charles Hopkins](#), Charles Hopkins, Unesco Chair, York University, Canada, SDG 4 IAU HESD Cluster
- [Toshiya Aramaki](#), Deputy Director, SDGs Promotion Center; Dean, the Faculty of Global and Regional Studies, Toyo University, Japan
- [Rosie Latchford](#), Students organising for Sustainability (SOS-UK)
- [Daiva Penkauskienė](#), MRU Associate Professor at the Faculty of Human and Social Studies, Institute of Educational Science and Social Work, Mykolas Romeris University, Lithuania

Session Flow:

Time (CEST)	Segment	Speakers
13.15 approx	Welcome to breakout room, IAU introduction	Hilligje van't Land
<i>Engagement tool</i>	Poll to ask for expectations of the participants in the breakout room	Isabel
13.20	Presenting the structure, introductions (<i>depending on the number of participants likely via the chat</i>)	Isabel Toman, all participants
13.25	Input presentation from York University	Charles Hopkins
13.30	Input presentation from Toyo University	Toshiya Aramaki
13.35	Input presentation from Mykolas Romeris University	Daiva Penkauskienė



13.40	Input presentation from Student organisation SOS	Rosie Latchford
13.45	Summarising and opening the floor for questions from participants to presenters	Hilligje van't Land, Isabel Toman
<i>ongoing</i>	Questions to participants and presenters	Speakers/participants (moderated by Isabel Toman)
<i>Engagement tool</i>	'Ideas board' on key points to take away of the participants in the breakout room	Isabel
14.30 approx	Summarising the main point of the discussion, closing and invitation to return to main room	Hilligje van't Land

The **International Association of Universities (IAU)** has advocated for the role universities and other higher education institutions (HEIs) have played in support of sustainable development since the early 1990s. Already in 1993, the *IAU Kyoto Declaration* called for higher education leaders to better articulate HE's work to achieve a sustainable future. This was reaffirmed in 2014 with the *IAU Iquitos Statement* in which the IAU called for stronger connection between knowledge systems, including indigenous knowledge systems around the world IAU was one of the strongest advocates for the inclusion of higher education as a key stakeholder for achieving Agenda 2030 and the SDGs. IAU was one of the Key Partners in UNESCO's Global Action Programme on Education for Sustainable Development (GAP ESD 2014-2019), and is currently a partner to the follow-up initiative, the *ESD for 2030 Global network*.

IAU's strategic priority [Higher Education and Research for Sustainable Development \(HESD\)](#) includes surveys on HESD, the IAU Global HESD Cluster Network, specialized publications, the IAU HESD portal, representation at events and more around sustainability in higher education.

See also: <https://iau-aiu.net/>, <http://www.iau-hesd.net/>



Toyo's Initiatives for SDGs Promotion

Deputy Director of SDGs Promotion Center,
Dean, Professor, Faculty of Global and Regional Studies,
Toyo University, Japan

Toshiya Aramaki





About Toyo University

History

- ◆ Founded in 1887
as Private Academy of Philosophy

Our educational principles

- To have one's own philosophy
 - To think deeply in search of true essence
 - To tackle social issues proactively
- ◆ Pioneer in Distant Education
1888 - First lecture notes sent to those keen to learn but unable to attend classes
 - ◆ Pioneer in Education of Women
1916 - First private university in Japan to enroll female students

Key numbers

- ◆ 13 faculties and 45 programs
with diverse academic disciplines
(including humanities, social sciences,
engineering and other major fields of
study)
- ◆ 5 campuses
Different cities in Tokyo and its suburbs
- ◆ 30,000+ students
One of the largest universities in Japan

Initiatives for SDGs Promotion

◆ Charter of Conduct for SDGs

(Jun, 2021)

- Commitment by President and Chancellor
- 5 key components: Education, Research, Social and Global contribution, Environment, Diversity & Inclusion

◆ SDGs Promotion Center

(Oct, 2022)

- as a initiator and supporter for university-wide actions

Practical Exercises of SDGs

- ◆ University-wide transdisciplinary course
 - All students with a variety of majors can take this course and add it to their graduation credits
 - Hyflex style for students in different campuses
- ◆ Not “Lecture”, but “Practical Exercise”
 - Along with our educational principles
 - A short lecture and group discussion for a wide range of topics under SDGs, offered by experts
 - Make specific action plans with the group

SDGs Ambassadors

SDGs Ambassadors

- Students and student groups who voluntarily undertake activities to promote the SDGs on their own initiative
- Support from the university for their activities

Toyo SDGs Ambassador Program for International Students

- For outstanding students with keen interests in the SDGs and related fields
- Expected to do some actions for SDGs by educating and leading our University's communities
- Scholarship package with tuition waiver and accommodation, on-campus part-time job opportunity

Start from this April !!



Thank you for your attention!!



活動計画タイトル (キーワード)

教育課程における SDGs 学習の導入

① 活動計画の概要

教育課程における SDGs 学習を着実なものとするため、次の 3 事項を継続して実施する。

- 1 各授業科目における「持続可能な 17 のゴールとの関連」の明確化
- 2 SDGs に関する学習科目の開講
- 3 東洋大学 SDGs 行動憲章を踏まえた 3 つのポリシーのあり方の検討

② 数値的な目標の達成状況と得られた成果

各事項にかかる数値的な目標は、次のとおりとする。

1 各授業科目における「持続可能な 17 のゴールとの関連」の明確化

シラバスの作成マニュアルを点検し、すべての授業科目のシラバスにおいて、「持続可能な 17 のゴールとの関連」を明示するしくみの導入と徹底を図った。目標値である、17 のゴールとの関連を記載したシラバスの割合を 80% 以上とすることについては、現在、集計中であるが、ほぼ達成できたのではないかと思料している。

2 SDGs に関する学習科目の開講

学部長会議や研究科長会議を通じて、SDGs に関する学習科目の開講数をできる限り増やしていくことを、呼びかけた。17 のゴールの全部または一部に密接に関連した授業科目を履修できる機会を、学部及び大学院の学生の 80% 以上に対して設けることを目標値としたが、SDGs 関連の全学総合科目などが開講されたことから、目標値は達成されている。

3 東洋大学 SDGs 行動憲章を踏まえた 3 つのポリシーのあり方の検討

次期のカリキュラム改訂 (2025 年度～) を見据えながら、全学カリキュラム委員会において、東洋大学 SDGs 行動憲章を踏まえた授業運営のあり方を検討し、17 のゴールとの関連を記載することを、シラバスの作成マニュアルに明記した。なお、3 つのポリシーのあり方の検討については、全学カリキュラム委員会の所掌を超える部分があることから、授業運営やシラバスに反映できることについての整理を行った。また、SDGs の考え方をふまえながら、2025 カリキュラム改訂の基本方針の素案を取りまとめを行った。

③ 2022 年度活動内容

添付資料(※)

4	◇実施内容名	
	・授業運営の考え方のとりまとめと通知	
6		
月		

7 9 月		
10 12 月	・各授業科目における「持続可能な 17 のゴールとの関連」の明確化を規定したシラバスの作成マニュアルのとりまとめ	
1 3 月	・2025 カリキュラム改訂の基本方針の素案のとりまとめ	

※活動実績となる成果物や資料（チラシ・ポスター・報告書 等）がございましたら、併せてご提出ください。その際、表中の添付資料欄に番号等の記載をお願いします。

活動計画タイトル（キーワード）

東洋大学重点研究推進プログラム及び東洋大学次世代研究者挑戦的研究プログラム
 「人間の安全保障分野における研究成果の社会実装支援プロジェクト」による
 SDGs 関連の研究の推進と支援

① 活動計画の概要

2019 年度から実施されている東洋大学重点研究推進プログラムは、「東洋大学重点研究戦略」を具体化し、本学のブランドとなり得る先端的かつ独創的な研究プロジェクトを重点的に助成する制度である。募集要項で 9 つの趣旨を掲げているが、SDGs についても、「(5) SDGs の達成に貢献する研究、または同課題達成に向けたテーマ性を有する研究」とし、積極的に募集を促している。

現在、採択されている研究プロジェクトで、この趣旨を掲げているのは、国際共生社会研究センターの「開発途上国における生活環境改善による人間の安全保障の実現に関する研究－TOYO SDGs Global 2020-2030-2037－」、生体医工学研究センター／工業技術研究所の「バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくり」、生命科学研究科（東洋大学バイオレジリエンス研究プロジェクト）の「極限環境微生物の先端科学を SDGs 達成のために社会実装する研究－Extremophiles × SDGs × Toyo Grand Design 2020-2024－」である。

これらの研究プロジェクトについては、学校法人東洋大学中期計画「TOYO GRAND DESIGN 2020-2024」における「I. 研究に関する中期計画」において、個々の目標達成が策定されている。

2022 年度以降についても、新たな課題を募集し、新規プロジェクトを発掘するとともに、東洋大学重点研究戦略会議において、研究の進捗・成果を評価し、助言を行っていく。

さらに研究プロジェクトでの研究を基にした、共同研究・受託研究の締結の支援、知的財産の権利化と社会実装化の支援について専門人材を中心とした産官学連携推進課のチームが支援していく。

また、2021 年 12 月に、国立研究開発法人科学技術振興機構「次世代研究者挑戦的研究プログラム」に採択された本学の「人間の安全保障分野における研究成果の社会実装支援プロジェクト」においても、選抜された博士後期課程学生の SDGs に関連する研究について支援していく。

② 数値的な目標の達成状況と得られた成果

東洋大学重点研究推進プログラムにおける各研究プロジェクトは、申請段階で、以下の研究成果の数値目標を設定し、その進捗について以下に示す。

- (1) 学問領域の垣根を越えた学際的な研究アプローチ、学内外、国内外の研究の融合・研究者の連携。
 →次年度新規重点研究推進プログラムとして、新たに2つのプロジェクト「東洋大学のブランド力向上のための分野横断型アスリートサポート研究」「生育の diversity を生むメカニズムの解明と well-being な社会の実現に向けた支援体制の構築」を採択した。なお、2023 年度募集から年間助成額を 2 種類の上限（3000 万円と 1500 万円）として、制度の見直しも行った。
- (2) 国内外の研究機関や産業界・官界と連携したオープン・イノベーションによる研究。
 →「安心な水を未来へ～有用細菌による排水処理技術の開発と普及に向けて～」をベースとした、太陽石油「石油化学系汚染物質を分解する有用微生物の探索」、日立プラントサービス「アナモックスシステムによる下水処理連続運転の安定性に関する検討」、西原環境「担体法を用いた Annamox プロセスの性能評価」などでの研究が

行われた。

(3) ポスドクや本学大学院博士後期課程在学の RA の雇用による若手研究者等の育成。

→2022年9月28日にPD等を対象とした「トランスファラブルスキル醸成のためのキャリア講演会」を実施、あわせて関連するサイトなどの情報提供を行った。

(4) 国際的に通用する研究成果をより多く創出するために、国際共同研究の実施、国際共著論文の執筆、国際的学術誌への論文発表。

→2022年度は2023年3月10日現在で、77件の助成を実施した。また、2023年度は1人あたりの助成上限を40万円から50万円に増額し、折からの円安や投稿料の値上げに対応できるように制度を見直した。

(5) 重点研究推進プログラムを足がかりにした、大型の研究資金の自立的な獲得

→「バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくり」を足掛かりとして、公共機関での大型外部資金の獲得が実現した。

別添PDF「重点研究推進プログラム研究成果報告会スケジュール」ならびに「研究成果報告会資料【1】～【7】」参照

③ 2022年度活動内容	添付資料(※)
4 6 月 ・5月13日「レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究」をベースとした成果報告会となる「第1回 CeSDeS Open Seminar on SDGs」の開催	https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/research/labo-center/orc/publication/list1047-5466/open-seminar/Open-seminar20220513.ashx?la=ja-JP
7 9 月 ・8月29日第1回 重点研究戦略会議 ・9月20日大学等コアリッション総会（オンライン） ・9月28日PD等を対象とした「トランスファラブルスキル醸成のためのキャリア講演会」	https://uccn2050.jp/cms/wp-content/uploads/2022/09/%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E7%AD%89%E3%82%B3%E3%82%A2%E3%83%AA%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3_0920_0901web_.pdf 別添 PDF「 トランスファラブルキャリア講演会02 」参照
10 12 月 ・10月8日「バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくり」による成果報告となる「Answer 文理融合（理工学・経営学・教育心理学）」開催 ・10月31日「レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究」をベースとした成果報告会となる「第2回 CeSDeS Open	https://www.toyo.ac.jp/news/research/labo-center/bme/20221020/ https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/research

	<p>Seminar on SDGs」の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・12月3日「安心な水を未来へ～有用細菌による排水処理技術の開発と普及に向けて～」による成果報告となる「水のシンポジウム」開催 ・12月5日第2回 重点研究戦略会議 ・12月10日「多階層的研究によるアスリートサポートから高齢者ヘルスサポート技術への展開 ～社会実装に向けての研究組織連携の構築～」をベースとした若手研究者育成成果報告会「JST 次世代ワークショップ」開催 ・12月26日第3回 重点研究戦略会議 	<p>/labo-center/orc/publication/list1047-5466/open-seminar/Open-Seminar20201031.ashx?la=ja-JP</p> <p>https://www.toyo.ac.jp/news/research/labo-center/riit/20221203symposium/</p> <p>https://www.toyo.ac.jp/news/research/labo-center/bme/20221205/</p> <p>別添 Excel「東洋大学重点研究推進プログラム 2020～2023年度選定プロジェクト 一覧表」参照</p>
1 3 月	<p>・2月1・7日「2022年度重点研究推進プログラム成果報告会」の開催</p> <p>・2月4日「レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究」をベースとした成果報告会となる「第3回 CeSDeS Open Seminar on SDGs」の開催</p> <p>・2月24日「バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくり」や「次世代研究者挑戦的プログラム」をベースとした「カロリンスカ研究所学際研究ワークショップ」の開催</p> <p>・3月1日「多階層的研究によるアスリートサポートから高齢者ヘルスサポート技術への展開 ～社会実装に向けての研究組織連携の構築～」をベースとした成果報告会「第一回 東洋大学バイオレジリエンス研究プロジェクト国際シンポジウム」開催</p> <p>・3月1日「極限環境微生物の先端科学をSDGs達成のために社会実装する研究 –Extremophiles × SDGs × Toyo Grand Design 2020–2024–」成果報告会</p> <p>・3月30日入試部主催、「入試プレス発表会」でのポスター・サンプル展示</p> <p>・3月30日「2022年度重点研究推進プログラム成果報告会」動画公開のプレスリリース</p>	<p>https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=21480</p> <p>https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/0204/</p> <p>https://www.toyo.ac.jp/news/research/labo-center/bme/20230215/</p> <p>https://www.toyo.ac.jp/news/research/labo-center/bme/20230207/</p> <p>https://www.toyo.ac.jp/news/academics/faculty/lsc/bio-resilience_20230203/</p> <p>別添画像「20230330 入試プレス発表会 研究成果展示」参照</p> <p>https://www.u-presscenter.jp/article/post-50373.html</p>

※活動実績となる成果物や資料（チラシ・ポスター・報告書 等）がございましたら、併せてご提出ください。
その際、表中の添付資料欄に番号等の記載をお願いします。

2022重点研究推進プログラム 研究成果報告会スケジュール

開催場所: 125記念ホール

1. 概要

- ①実施日時
- ・2023年2月1日(水)14:30~16:25 (集合時間 14:25)
 - ・2023年2月7日(火)09:30~11:30 (集合時間 9:25)
- ②実施内容
- ・研究プロジェクトについての成果報告(10分)→スケジュール黄色部分(Webexによる学内報告)
 - ・質疑応答(15分)→スケジュール緑色部分
- ③対象プロジェクト
- 2月1日(水)実施
- ・生命科学研究科(伊藤政博先生)2021.4~2024.3
 - ・情報連携学術実業連携機構(中村周吾先生)2022.4~2025.3
 - ・福祉社会開発研究センター(志村健一先生)2022.4~2025.3
- 2月7日(火)実施
- ・工業技術研究所(井坂和一先生)2022.4~2025.3
 - ・国際共生社会研究センター(松丸亮先生)2022.4~2025.3
 - ・生体医工学研究センター(合田達郎先生)2021.4~2024.3
 - ・生体医工学研究センター(加藤和則先生)2020.4~2023.3

2. 当日スケジュール

①2023年2月1日(水)14:30~16:25(所要時間1時間55分)

14:30 ~ 14:35	学長 開会の挨拶
14:35 ~ 14:45	研究成果報告(10分)伊藤先生
14:45 ~ 14:55	研究成果報告(10分)中村先生
14:55 ~ 15:05	研究成果報告(10分)志村先生
15:05	閉会
15:10 ~ 15:25	重点研究戦略会議 質疑・応答(15分)伊藤先生
15:25 ~ 15:40	重点研究戦略会議 質疑・応答(15分)中村先生
15:40 ~ 15:55	重点研究戦略会議 質疑・応答(15分)志村先生
15:55 ~ 16:25	重点研究戦略会議(まとめ30分)

②2023年2月7日(火)9:30~11:30(所要時間2時間)

9:30 ~ 9:35	学長 開会の挨拶
9:35 ~ 9:45	研究成果報告①(10分)井坂先生
9:45 ~ 9:55	研究成果報告②(10分)松丸先生
9:55 ~ 10:05	研究成果報告③(10分)合田先生
10:05 ~ 10:15	研究成果報告④(10分)加藤先生
10:15	閉会
10:20 ~ 10:35	重点研究戦略会議 質疑・応答(15分)井坂先生
10:35 ~ 10:50	重点研究戦略会議 質疑・応答(15分)松丸先生
10:50 ~ 11:05	重点研究戦略会議 質疑・応答(15分)合田先生
11:05 ~ 11:20	重点研究戦略会議 質疑・応答(15分)加藤先生
11:20 ~ 11:30	重点研究戦略会議(まとめ10分)

2022年度 東洋大学 重点研究推進プログラム

研究成果報告会

多階層的研究によるアスリートサポートから 高齢者ヘルスサポート技術への展開 ～社会実装に向けての研究連携組織の構築～

**対象研究課題：（3）健康寿命延伸の観点からの医療・健康福祉・
生命科学分野等の先進国をリードする研究**

東洋大学 生体医工学研究センター センター長
加藤 和則

2023年2月7日（火）

86/363

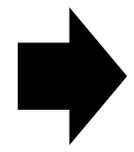


東洋大学

重点研究プロジェクトの背景

「多階層的研究によるアスリートサポートから高齢者ヘルスサポート技術の展開」

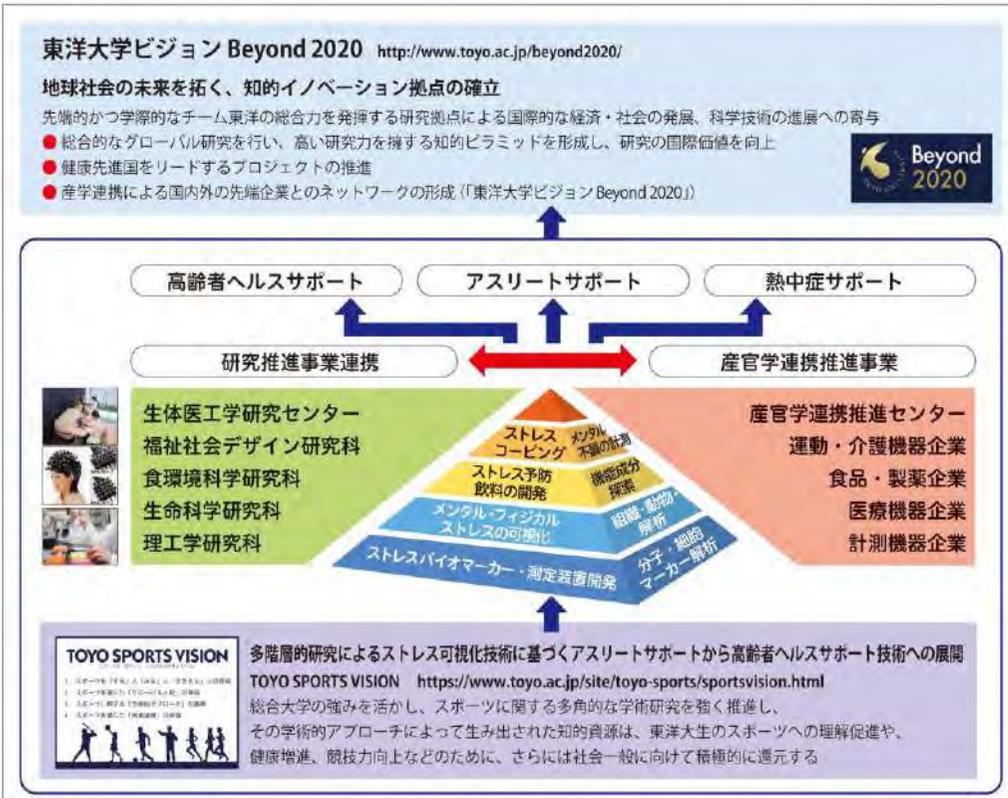
文部科学省研究助成金：
私立大学研究ブランディング事業
(2017～2019年度)



東洋大学：
重点研究推進プログラム
(2020～2022年度)

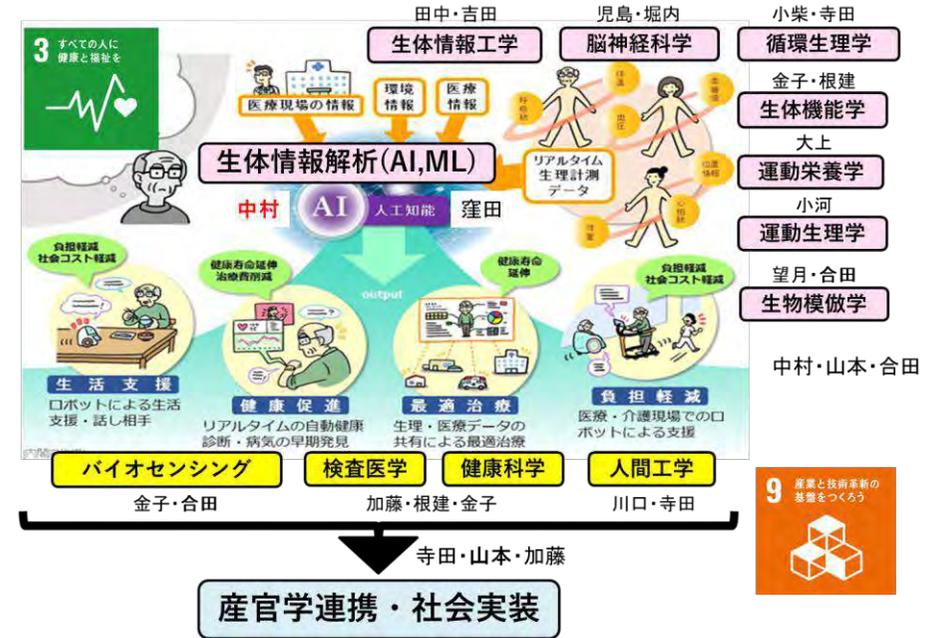
- 生体医工学研究センターが主体となり、15名の教員で学部横断型の研究組織を構成
- 「東洋大学ビジョン Beyond2020」の“知的イノベーション拠点の確立”を目指す

- 私大研究ブランディング事業の研究成果を産官学連携で社会実装を目指す
- 若手研究者（大学院生、研究助手）の育成と活性化（3つの好循環の達成）



重点研究プログラムとSociety5.0「医療・介護」分野

① 各種基盤研究のデータを機械学習(ML)を用いて解析



② 文理融合型の産官学連携による社会実装&モノづくり

私大ブランディングの基盤研究成果 ⇒ 実用化研究 社会実装



研究目的

東洋大学生体医工学研究センターは、学部・キャンパスを横断した教員から構成されており、国民の健康の維持・増進を図り、幅広く社会に還元することを目的に

① アスリートのサポート技術の開発研究

(運動生理学・機能栄養学的・生物模倣的観点から)

② 熱中症対策研究

(分子生物学・細胞生物学・生体機能学・医工学的観点から)

③ 高齢者の健康福祉増進研究 (ヘルスケアサポート研究)

(モノづくり・システム開発の観点から)

以上の3つ柱の研究プロジェクトを継続して実施してきた。

少子高齢化を迎えた我が国では、今後、健康寿命の延伸や生産年齢人口の拡大が不可欠である。その実現のためにも、**健康福祉・生命科学・医療工学分野の研究**においては、国連が提唱している**持続可能な開発目標SDGs**に加えて、センシング技術や情報処理技術(AI)などの**スマート社会(Society5.0)**に関連する分野の開拓が必要であり、さらにそれらの社会実装のためには、**異分野融合型のオープンイノベーション**を通じた産業界との連携が重要となってくる。そこでこの目的の達成のために、前述の3つの柱の研究課題を継続しながら、新たな研究分野への融合を構想している。特に、これまで各教員が蓄積してきた知識と経験および研究成果を、産官学連携によってスピーディーに**社会に還元(社会実装)**することと、科学技術大国日本を支える**次世代の若手研究者を支援し育む**ことを目指す。



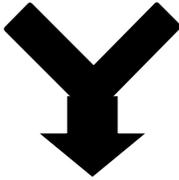
①アスリートサポート技術の開発研究 代謝エネルギーとパフォーマンス評価システム

運動特性研究

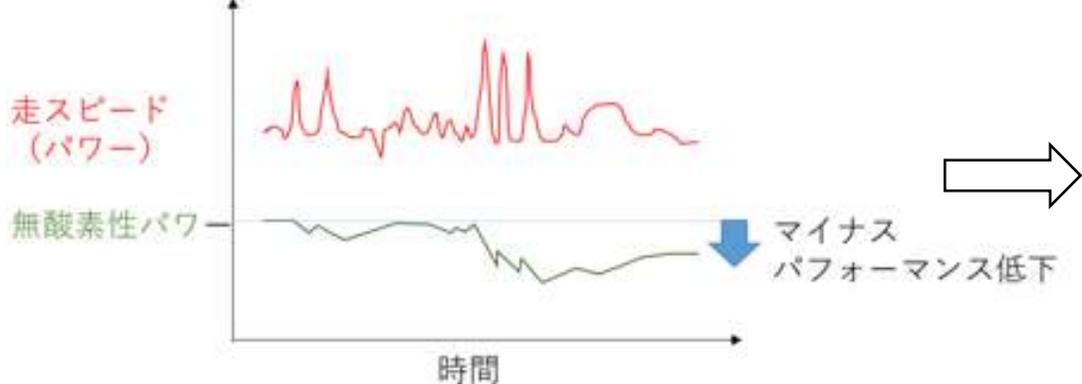
東洋大研究室で代謝エネルギー
(有酸素/無酸素運動)測定



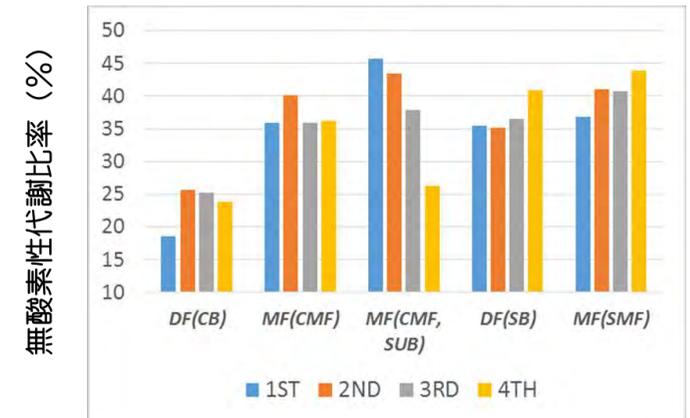
スポーツ現場でGPS装置を用いた
走スピードの経時的測定



試合中の走スピードと無酸素性代謝の可視化



ポジション別の無酸素性代謝の変動



選手個人の試合中の無酸素性エネルギー代謝の変化が可視化 ⇒ 試合中の個人のスプリント能力 (疲労回復能力) の評価

女子プロサッカーチーム(ASエルフィン埼玉)で
実証研究を実施

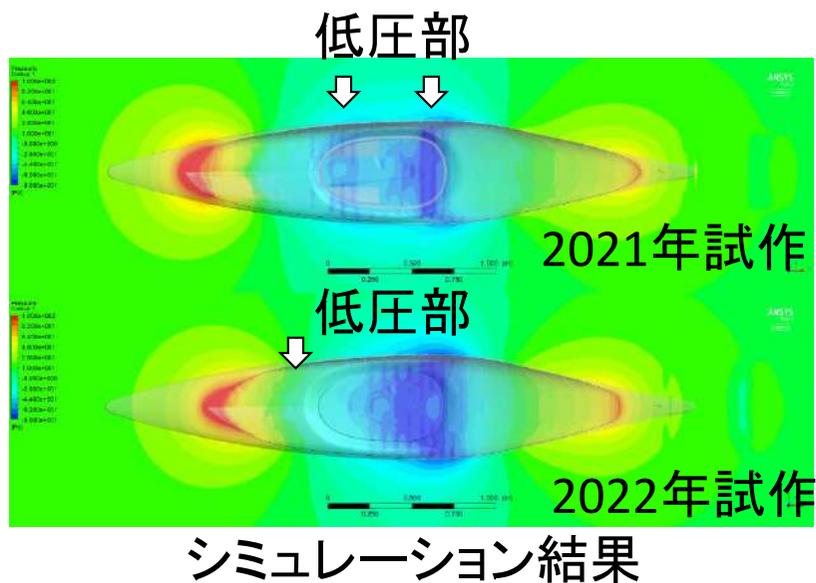


東洋大学

① アスリートサポート技術の開発研究

競技用国産カヌー開発に関わる研究

- カヌー性能のシミュレーションによる定量化
 - ✓ 流体力学にもとづく知見が特許査定(カヌー, 特許第7054501号, 22年4月)
 - ✓ 船体表面の圧力分布(特に低圧部)と操舵性の関係について評価し試作。(日本代表から操舵について工学的知見で意見を求められる)
 - ✓ 評価結果を反映した船艇製作と選手の主観的評価と定量的評価から体性感覚の理解



シミュレーション結果を可視化し実艇評価



工学的観点からカヌー競技を教育

国産カヌー(東洋大学製)の開発改良と
日本代表・ジュニア選手の育成



東洋大学

②熱中症対策研究

多階層的な熱中症対策研究と社会実装を目指して

産官学連携・社会実装

モニタリング試験の実施

熱中症対策食品の開発

暑熱行動異常モデルマウスの作製

食品・機器開発

ウェアラブル測定機器の開発

暑熱耐性神経細胞の誘導

ヒト試験 (アスリート・高齢者)

暑熱バイオマーカーの発見

動物試験 (マウス・ラット)

疑似血管の作製

暑熱耐性遺伝子の発見

細胞解析 (神経・血管・血液)

細胞保護成分の発見

遺伝子・蛋白質・代謝解析

暑熱ストレス

分子・細胞・動物・ヒト試験⇒製品開発へ



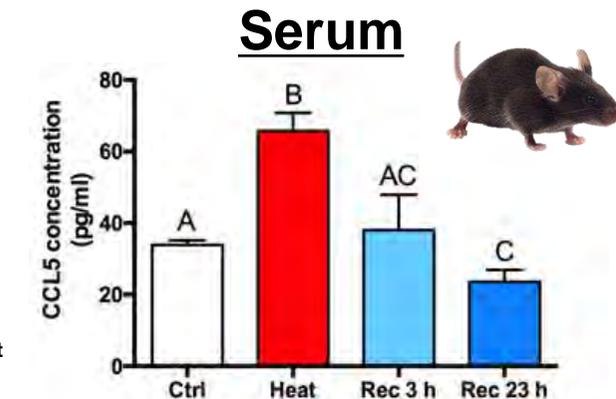
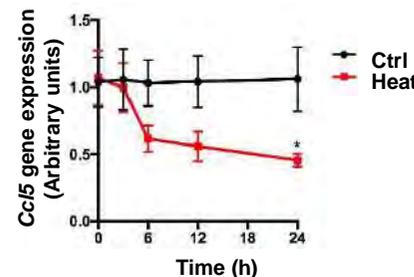
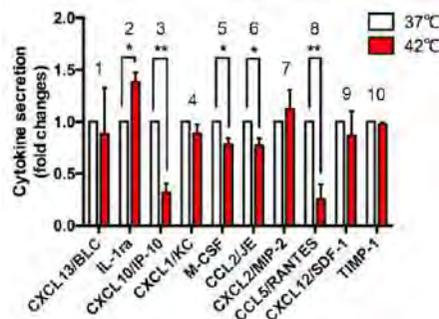
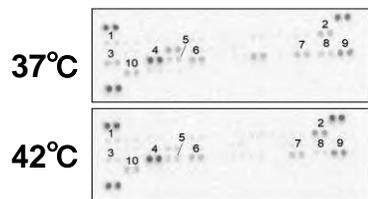
東洋大学

②熱中症対策研究（分子）

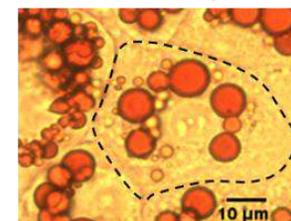
熱中症・生活習慣マーカーとしての骨格筋マイオカイン

- (1) 急激な温度上昇によってCCL5の血中濃度が増加、熱中症の重症度と相関するバイオマーカーとなる。
- (2) 一方、適切な温熱刺激は、骨格筋から分泌されるCCL5量を減少させることで血糖値を下げる。

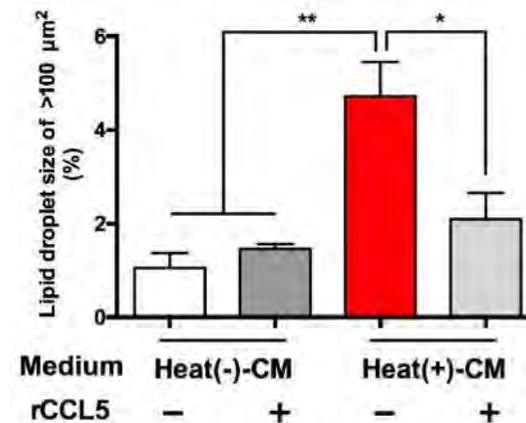
Muscle



Adipocyte



Large lipid droplet



	高脂肪食 高カロリー食(1)		温度上昇	
	運動(2)	短期的(3)	長期的(3)	
骨格筋CCL5	↑	→	↓	
血中CCL5	↑	↑	↓	
末梢での糖取り込み	↓	?	↑	

モデル

肥満
糖尿病

適切な
運動

熱中症

適切な
温熱刺激



熱中症マーカー及びその利用
出願番号: 特願2019-99156
発明者: 根建 拓
出願人: 学校法人東洋大学

現在1社と共同研究協議中

熱中症および生活習慣病マーカーCCL5の
新規同定と実用化研究への発展



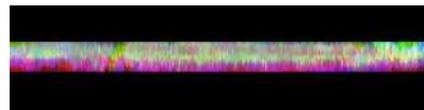
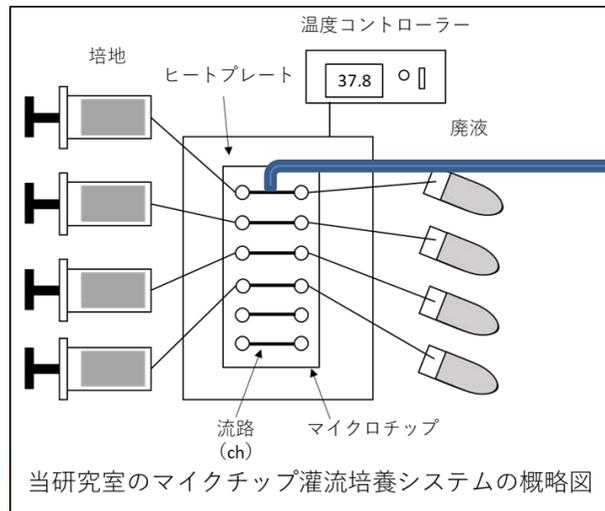
②熱中症対策研究（細胞）

熱ストレスによる血栓形成メカニズムの研究 ～マイクロチップ寒流システムの開発～

コロナウイルス感染による発熱および重症患者の約13%で発生した「血栓症」
夏に起こり易くなる「血栓症（夏血栓）」など



高温に晒されることにより血栓が形成されやす



流路内の底部に血管壁を模した細胞壁を作製

緑：血管内皮細胞層
赤：平滑筋細胞層

熱ストレスによる以下の変化の計測

- (1)血液が固まったり溶解したりするのを調節する因子（凝固線溶系因子）
- (2)細胞の分化および脱分化マーカー（動脈硬化と同じことが起きている？）
- (3)凝固線溶系因子の遺伝子発現量
- (4)細胞内カルシウムイオンの濃度

血管平滑筋細胞が影響して血栓形成が進む

マイクロチップを用いた、熱ストレス評価に
有用な疑似血管の作製に成功

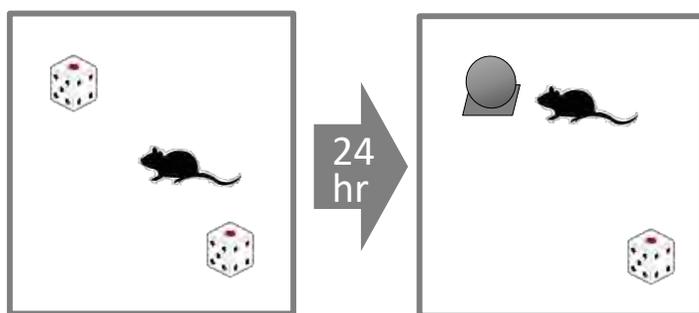
②熱中症対策研究（動物）

暑熱ストレスによる腸内細菌叢の変化とその影響

慢性の暑熱ストレスはからだに耐性をもたらすが、認知機能の低下などの脳内への影響がある。また、慢性暑熱負荷により腸内細菌叢の組成の変化と脳機能（記憶機能等）との相関があることが知られている。

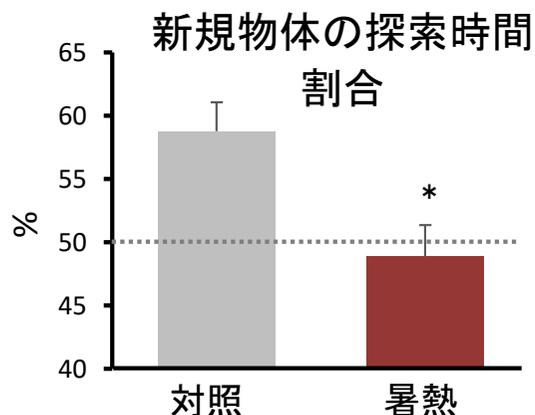
■ マウスの学習行動への影響

新規物体識別テスト



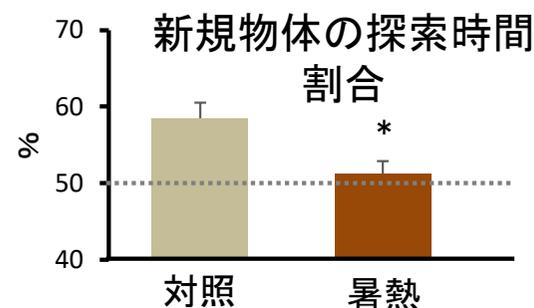
トレーニング

テスト



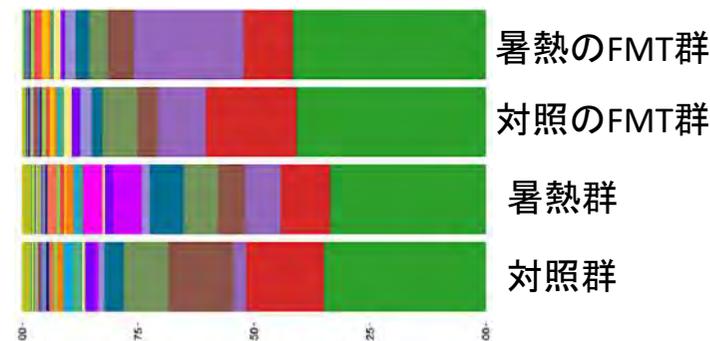
4週間の慢性暑熱(45°C @30分間を2回/日)負荷したマウスにおける新奇物体識別の記憶障害

■ 糞便移植(FMT)マウスの学習行動への影響



慢性暑熱負荷マウスの糞便を移植したマウスにおける記憶障害

腸内細菌叢の組成(属レベル)



FMTマウスにおける腸内細菌組成

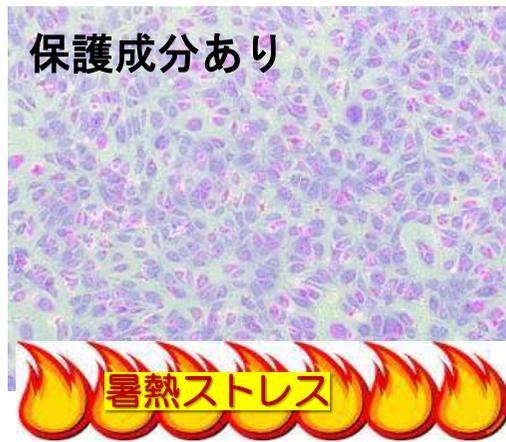
熱ストレスによる脳機能障害と腸内細菌叢の変化との相関を解明



東洋大学

②熱中症対策研究（ヒト試験）

暑熱ストレス抵抗性の細胞保護成分の発見と産学連携

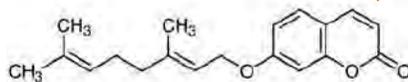


機能成分配合のスポーツ飲料・食品の開発とヒト試験の実施

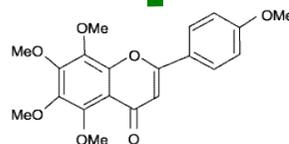


企業との産学連携研究

特許成立済（日本・米国）



外部資金（研究費）の獲得



特許出願予定

特許出願予定



特許出願予定

特許出願予定

血管保護効果の機能性表示食品を企業と共同開発



東洋大学

②熱中症対策研究（連携事業）

熱中症対策研究を活用した産官学連携事業の推進



紀の川市と包括連携協定を締結



ハッサクプロジェクトHPの開設



「アグリビジネスフェア」展示



「知」の集積と活用場のプラットフォーム



「健康博覧会」サンプル配布



**重点研究の研究シーズを活かした地域創生
産官学連携事業と社会実装**

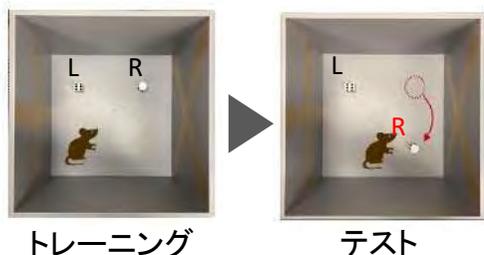


③ヘルスケアサポート研究（脳機能）

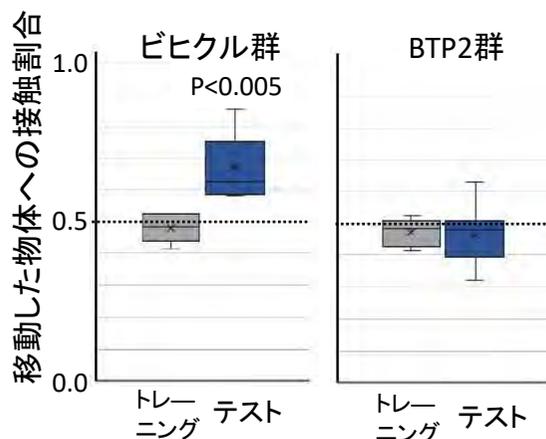
脳機能におけるドレブリンの役割の解明

ドレブリンはニューロンの樹状突起上にある小突起（樹状突起スパイン）に局在するアクチン線維結合タンパク質で、認知症の脳で早期から減少することが知られている。本研究では、脳機能におけるドレブリンの役割を明らかにすることを細胞・動物レベルで解析した。

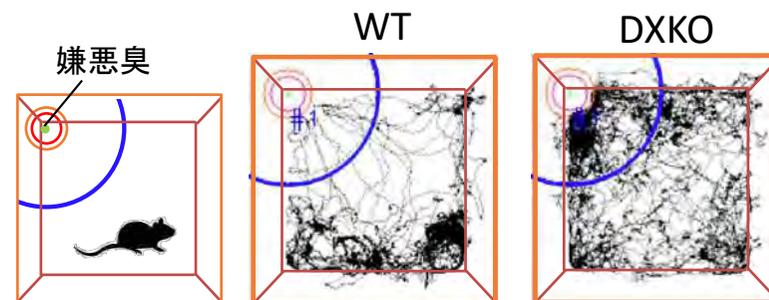
■ マウスの学習行動への影響



BTP2の脳室投与による物体の位置識別に関する学習障害

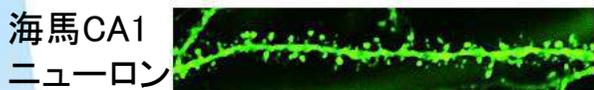


■ マウスの嗅覚への影響

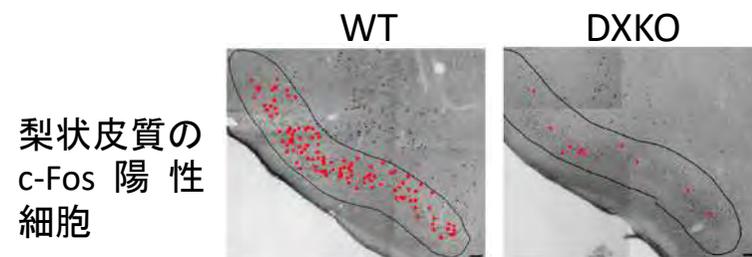
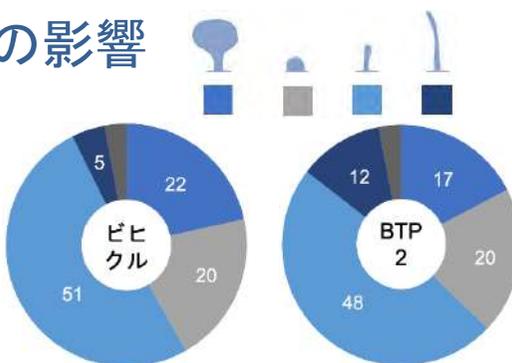


ドレブリン欠失 (DXKO) マウスの嫌悪臭に対する忌避反応の欠如

■ 樹状突起スパイン形態への影響



BTP2の脳室投与による細く未熟なスパインの増加



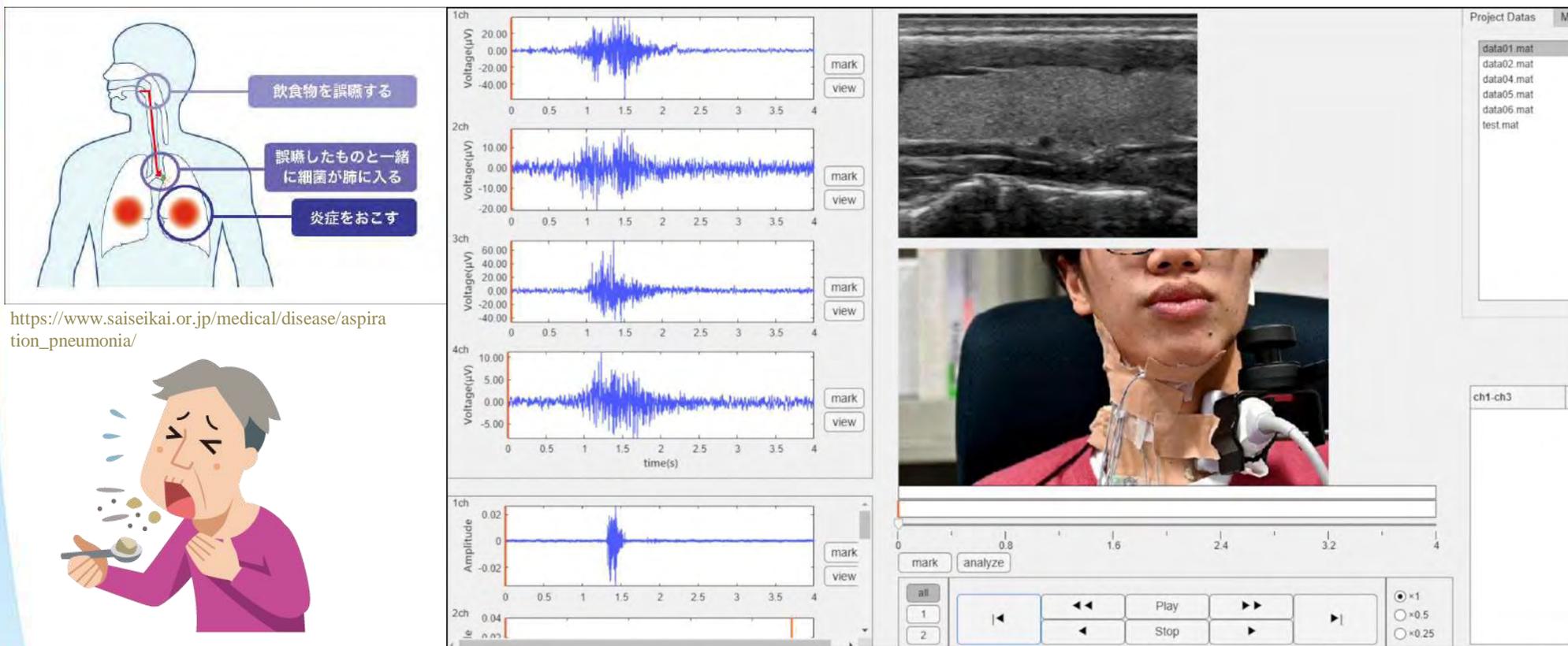
DXKOマウスの嫌悪臭に対する脳内神経活動の低下

**ドレブリンは認知機能や嗅覚機能に重要
⇒発現制御による脳機能回復研究へ進展**

③ヘルスケアサポート研究（嚥下機能）

嚥下機能評価のためのマルチモーダル解析

日本における死因の第四位は肺炎である。その中でも誤嚥性肺炎は高齢による嚥下機能低下により引き起こされることが多い。従来の嚥下評価法は侵襲的であるが、本研究では非侵襲計測により嚥下機能評価を行う。その結果、嚥下音、嚥下筋電図、超音波動画像、カメラ動画を同時計測し、解析を行うためのグラフィカルユーザインタフェースを開発に成功した。



高齢者で多い嚥下機能の低下を、非侵襲的に計測・解析できるシステムの開発



東洋大学

重点研究推進プログラムで目指す3つの好循環

知の好循環

学部横断型の研究

- ・ 4キャンパス横断教員組織

Scopusに掲載学術論文

- ・ 年間30報以上

国内外学会発表

- ・ 年間60件以上

SDGsに関する取組

- ・ 健康・福祉と産業技術革新

資金の好循環

競争的研究費（文科省・厚労省）

- ・ 大型研究費（科研費A, B, AMED）
- ・ 科研費研究代表者数の増加

共同・受託研究費（企業）

- ・ 年間10件

学内外研究費（審査あり）

- ・ 井上円了研究助成金、財団助成金

東洋大学重点研究
推進プログラム

生体医工学
研究センター

人の好循環

専任研究員の雇用

- ・ ポスドク研究員雇用

大学院修士・博士進学

- ・ 大学院進学者 25名/年

学術振興会(DC,PD)&JST

- ・ DC1,DC2新規採用

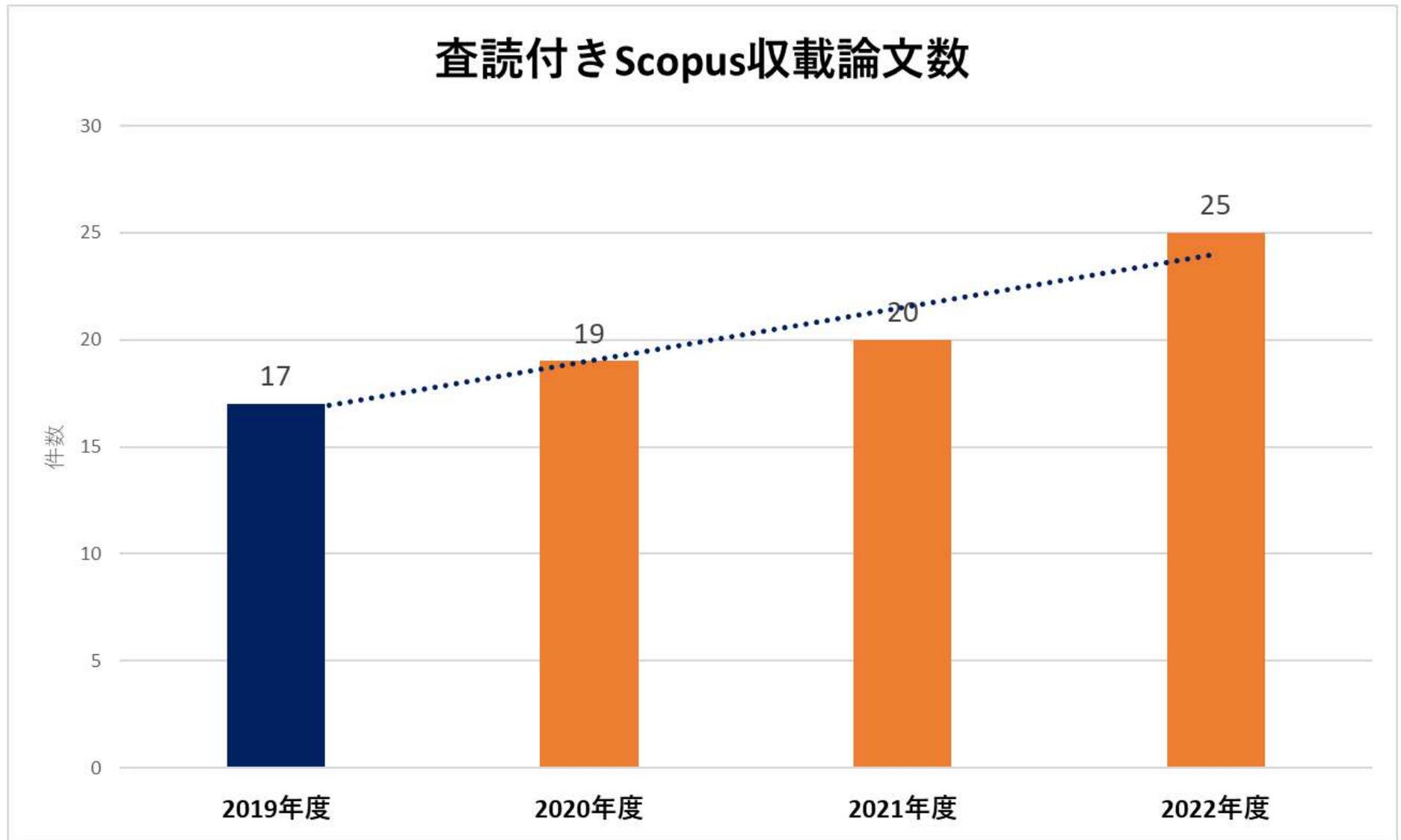
国内外研究員との協業

- ・ 共同研究実施の増加



東洋大学

重点研究推進プログラムで目指す知の好循環

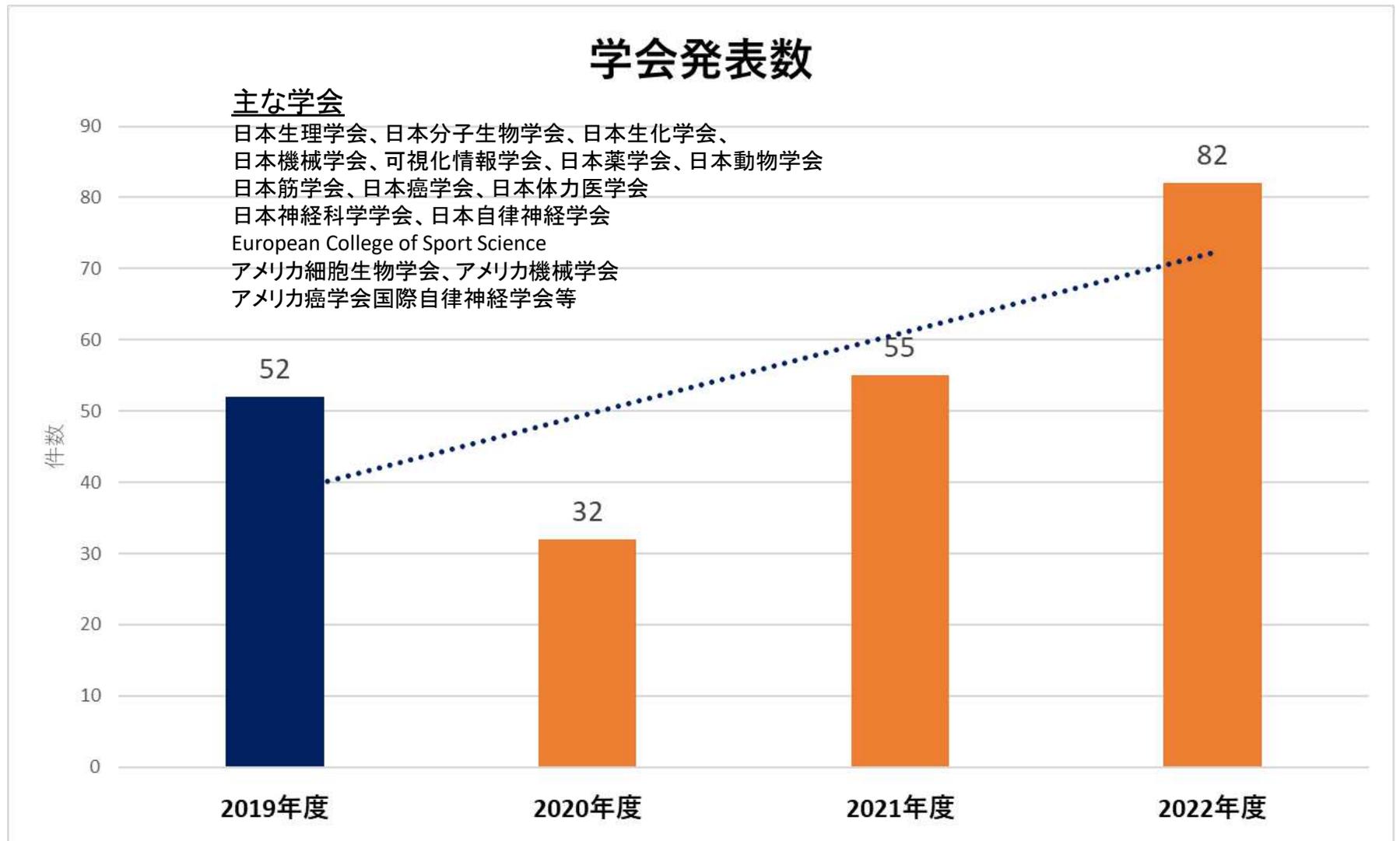


Scopusに収録学術論文・年間30報以上 → △



東洋大学

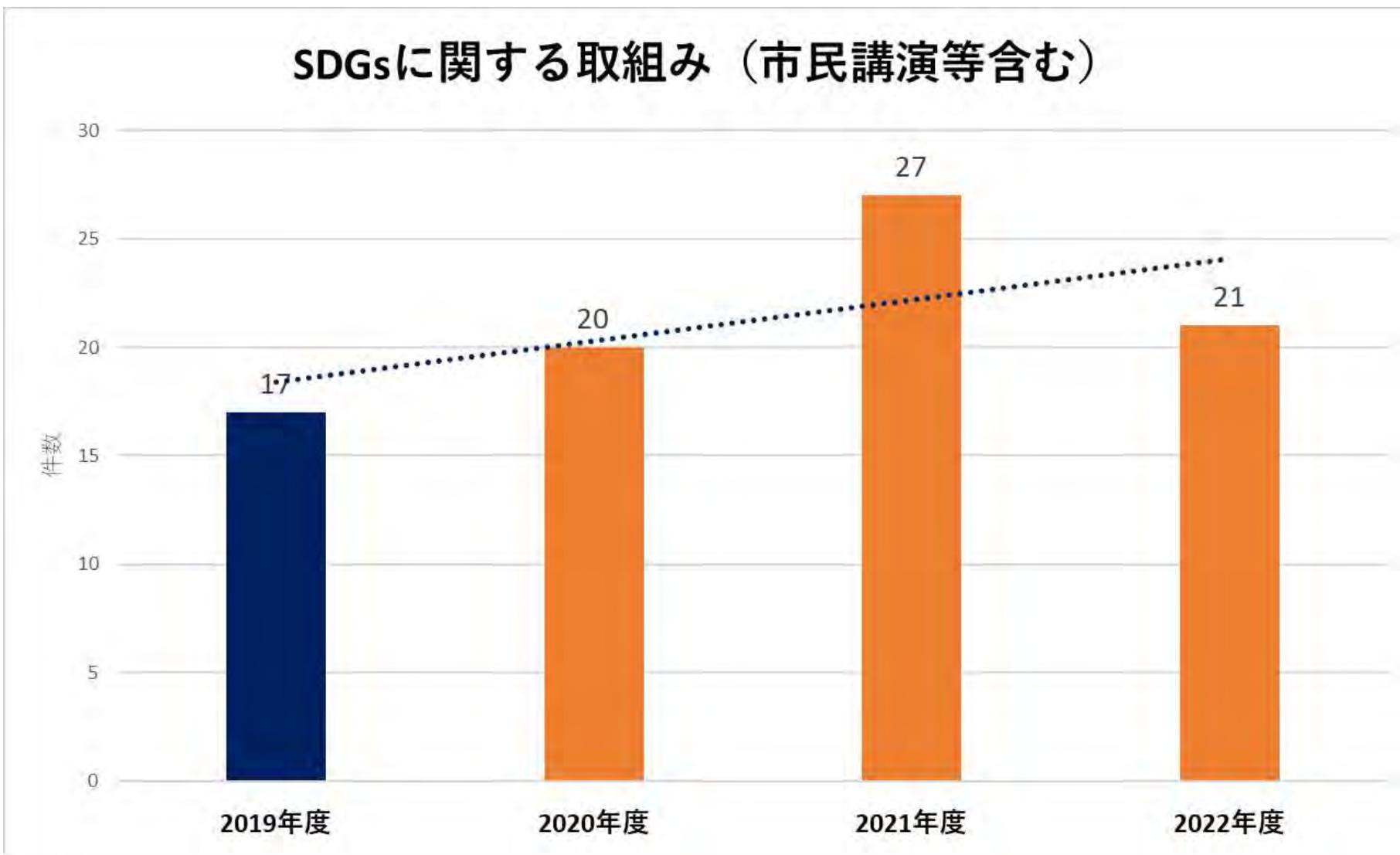
重点研究推進プログラムで目指す知の好循環



国内外学会発表 ・ 年間60件以上 → ◎



重点研究推進プログラムで目指す知の好循環



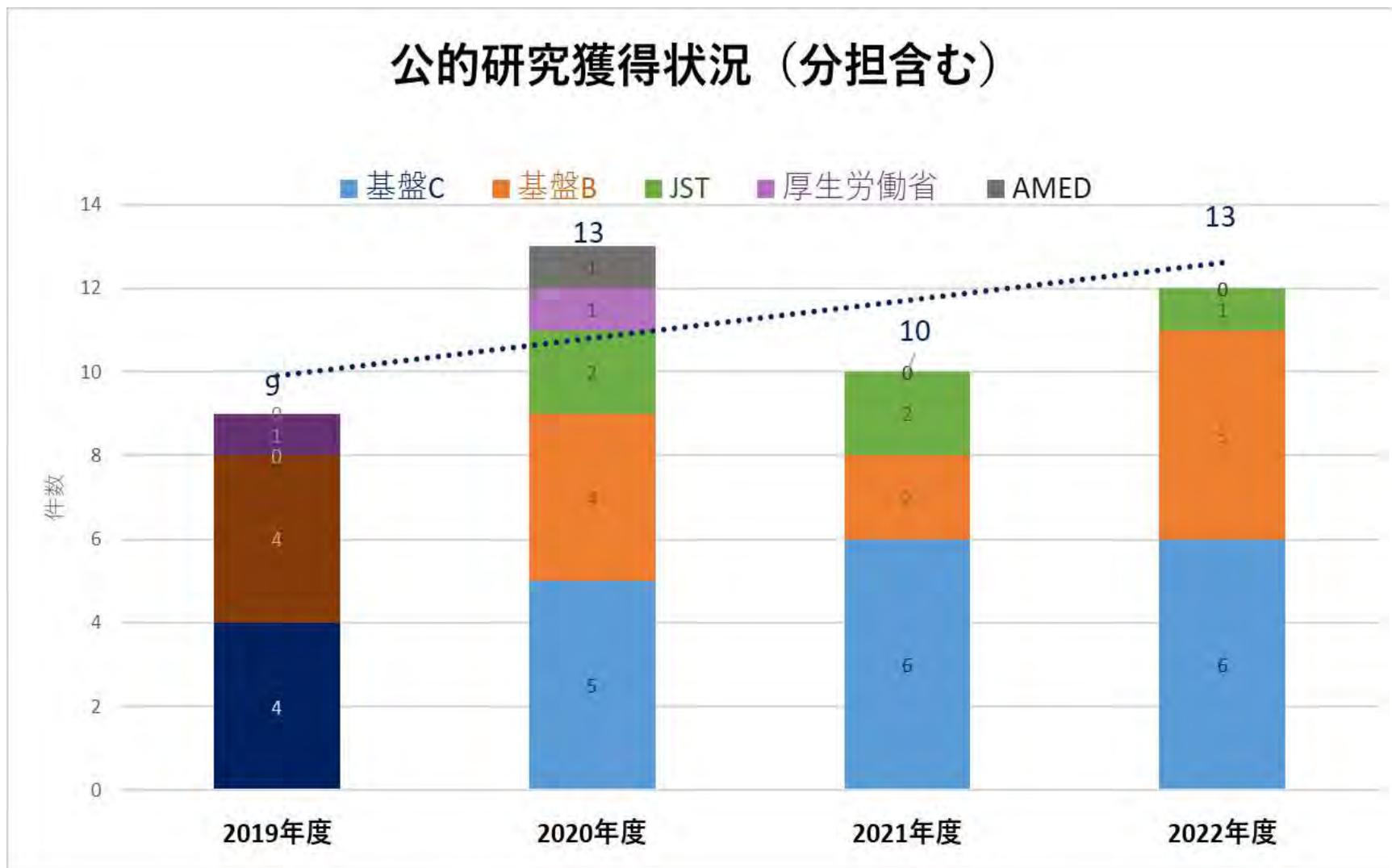
学部横断型の研究 ・ 4キャンパス横断教員組織 → △

SDGsに関する取組 ・ 健康・福祉と産業技術革新 → ◎



東洋大学

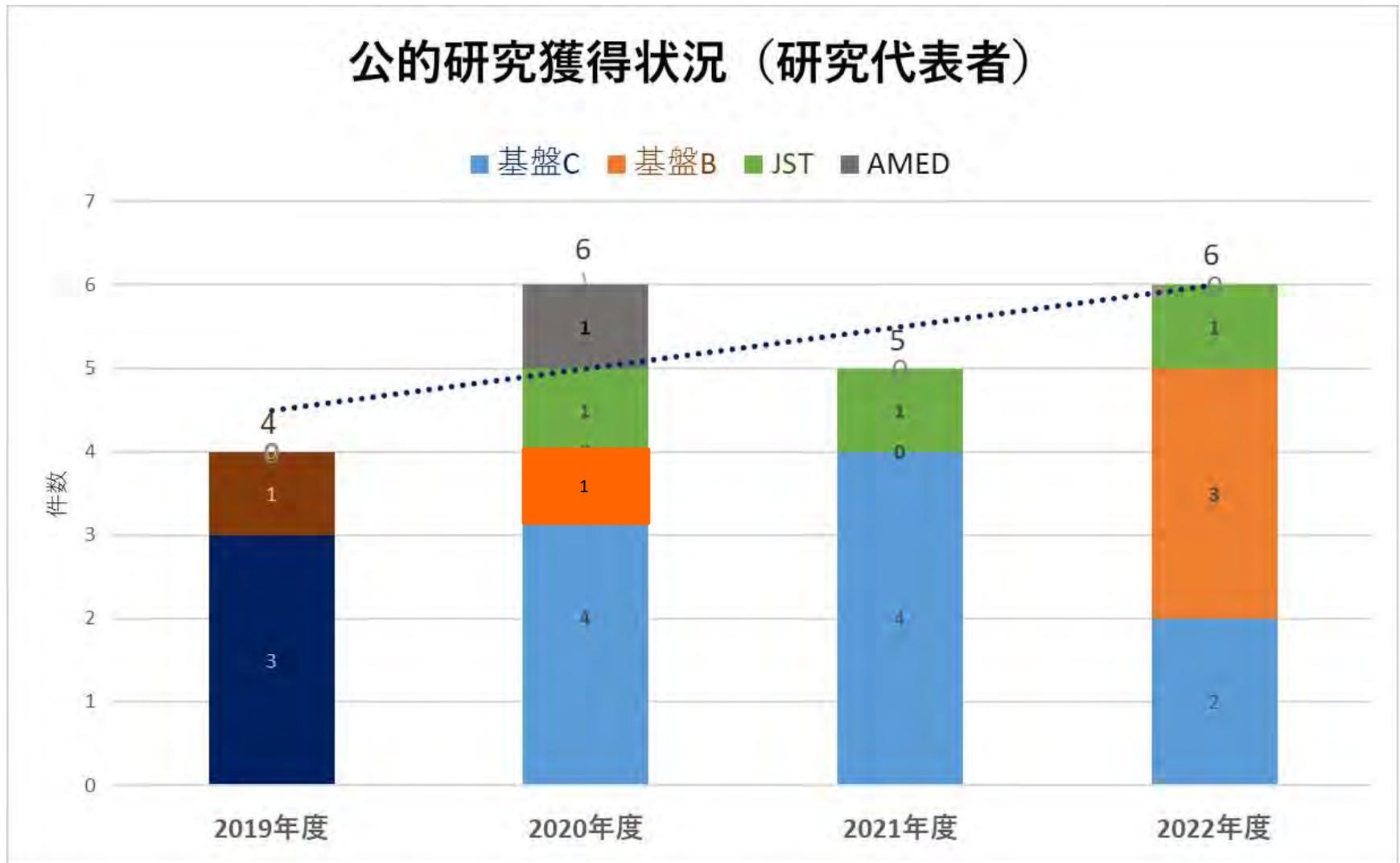
重点研究推進プログラムで目指す資金の好循環



競争的研究費（文科省・厚労省）

- ・ 大型研究費（科研費A, B, AMED） → ○
- ・ 科研費研究代表者数の増加 → ○

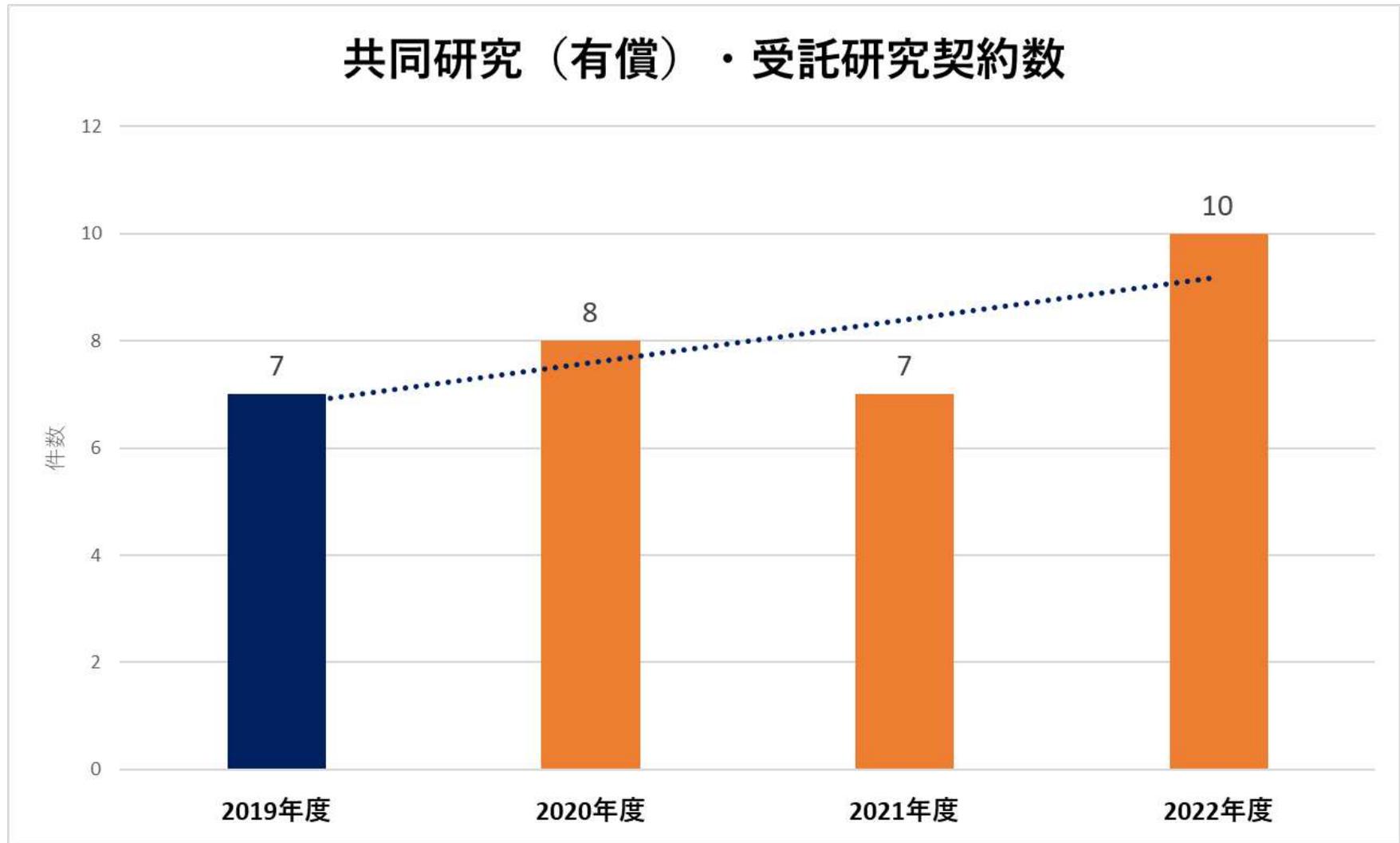
重点研究推進プログラムで目指す資金の好循環



競争的研究費（文科省・厚労省）

- ・ 大型研究費（科研費A, B, AMED） → ○
- ・ 科研費研究代表者数の増加 → ○

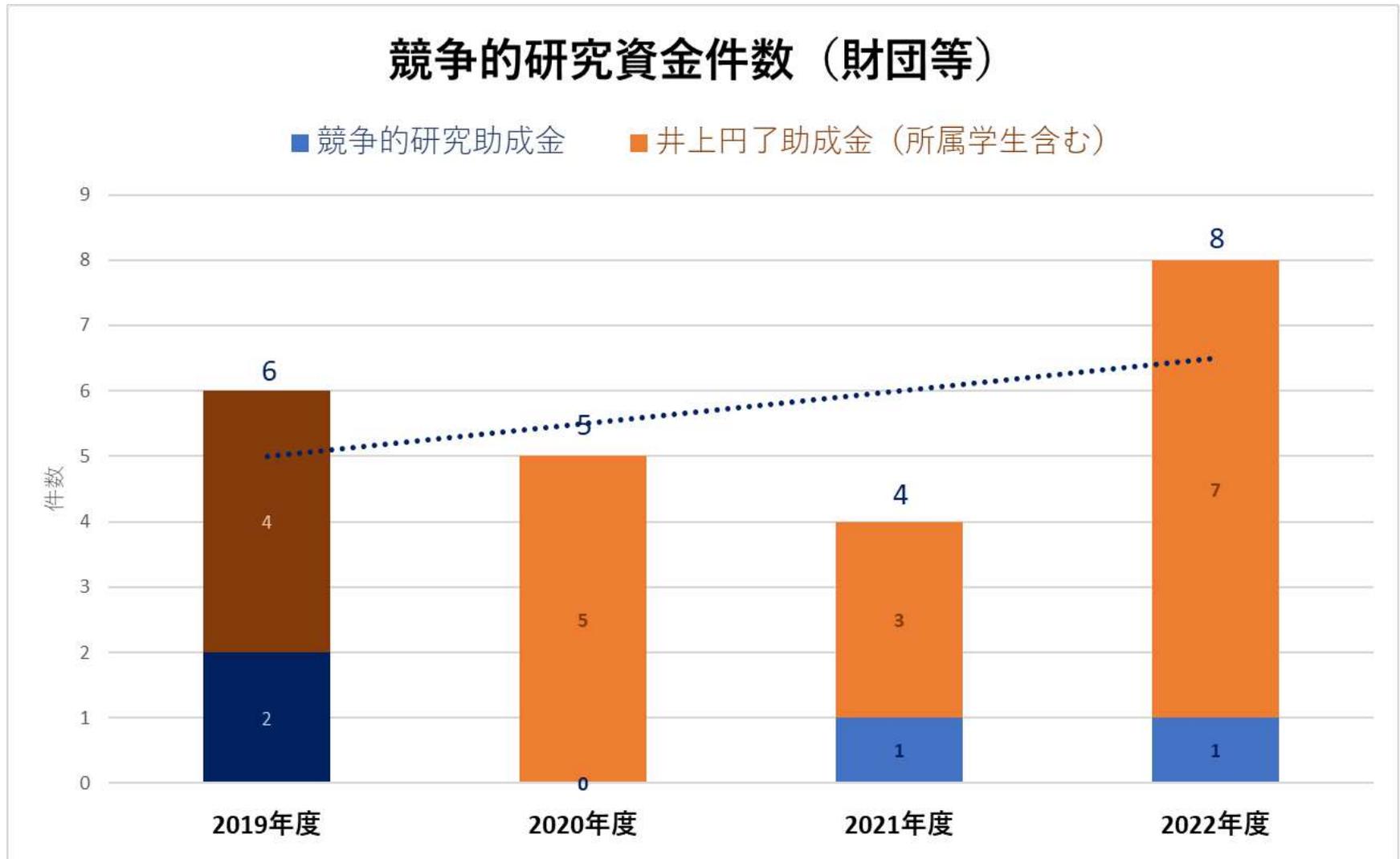
重点研究推進プログラムで目指す資金の好循環



共同・受託研究費（企業） ・年間10件 → ◎



重点研究推進プログラムで目指す資金の好循環



学内外研究費（審査あり）

- ・ 井上円了研究助成金・財団助成金 → ◎



重点研究推進プログラムで目指す人の好循環



目標：

KPI

達成度

- 専任研究員の雇用 ・ ポスドク研究員雇用 → ◎
- 大学院修士・博士進学 ・ 大学院進学者 25名/年 → ◎
- 学術振興会&JST ・ DC1,DC2新規採用 → ◎
- 国外研究院との協業 ・ 共同研究の実施 → ○



東洋大学

重点研究推進プログラムで目指す人の好循環

若手研究者のためのキャリアパスWORKSHOP

主催 生体医工学研究センター / 共催 JST次世代研究者戦略的研究プログラム

2022年12月10日 川越キャンパス4号館421教室

生体医工学研究センター/JST次世代研究者挑戦的研究プログラム

若手研究者 キャリアパスWORKSHOP

2022 12.10 Sat. 13:00~17:00

川越キャンパス4号館421教室



本プログラムにおける若手研究者育成の一環として、若手研究者のキャリアパスを考えるワークショップ型のイベントを開催致します。このワークショップでは、博士前期課程から後期課程への接続、博士号取得後のキャリア形成を主旨として、講演とディスカッションで構成してまいります。

期間限定
オンデマンド
配信予定

プログラム

- 13:00 ~ 13:10 開会あいさつ 生体医工学研究センター副センター長/生命科学科 教授 児島 伸彦
- 13:10 ~ 13:15 JST次世代研究者挑戦的研究プログラム 本学におけるプロジェクトの取り組みについて 生命科学科 教授 川口 英夫
- 13:15 ~ 13:30 長時間の座位姿勢が脳血管内皮機能に及ぼす影響 理工学研究科博士後期課程 1年 齋藤 祥太郎
- 13:30 ~ 13:45 カビ毒トリコテセンの生合成経路解明とその応用利用可能性 理工学研究科博士後期課程 1年 小泉 慶明
- 13:45 ~ 14:00 悩める博士のキャリアデザイン 理工学研究科博士後期課程 1年 伊藤 悠風
- 14:00 ~ 14:15 休憩
- 14:15 ~ 14:30 分野融合的視野で拓くキャリアパス 理工学研究科博士後期課程 1年 杉山 和輝
- 14:30 ~ 14:50 心臓再生を目指した心筋細胞増殖制御メカニズムの解明 生命科学科博士後期課程 3年 片野 直
※理工学研究科博士後期課程 3年 松山 美緒さんはオンデマンド配信にて発表いたします。
- 14:50 ~ 15:20 多様なキャリアパスを考える～夢と志とプライド～ 生体医工学研究センターPD研究助手 岩澤 卓弥
- 15:20 ~ 15:50 質疑応答
- 15:50 ~ 16:00 閉会あいさつ 生体医工学研究センター副センター長/生体医工学科 教授 加藤 和則



東洋大学

問合せ

生体医工学研究センター事務局
bme@toyo.jp

JSTプログラム 取り組みの紹介



パネルディスカッションの様子

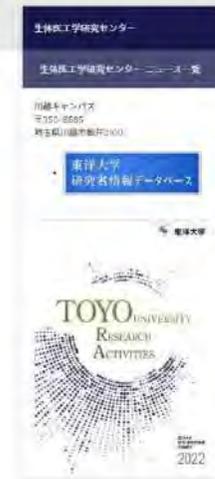


登壇者：
ポスドク 1名
DC3 2名
DC1 4名
博士後期課程の学生
はいずれもJST-
SPRING採用学生



アーカイブ配信中

WORKSHOP開催報告とアーカイブ配信



若手研究者のためのキャリアパスワークショップを開催しました

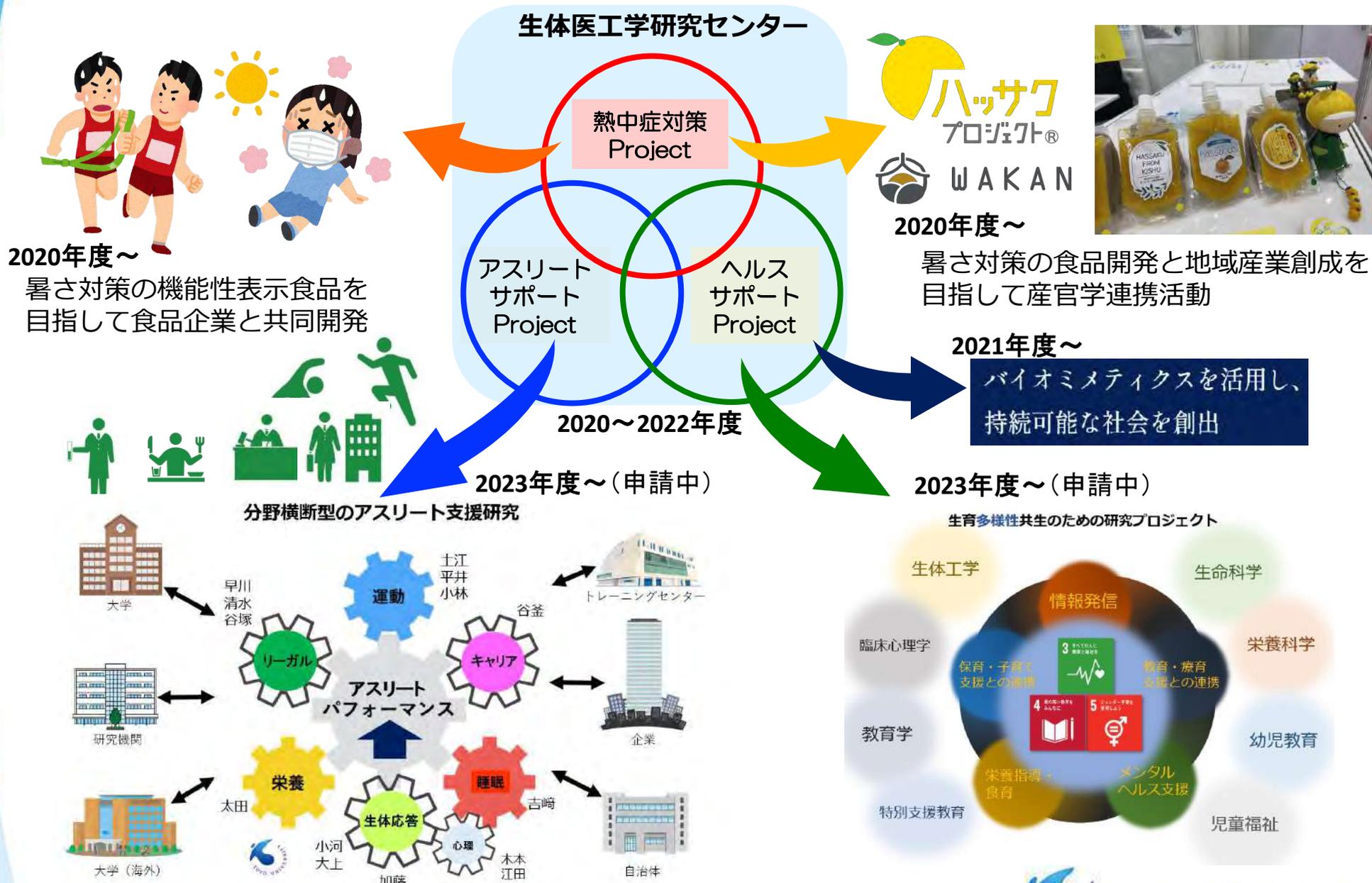
2022年12月10日、生体医工学研究センター・JST次世代研究者挑戦的研究プログラムの共催により、若手研究者のためのキャリアパスワークショップが開催されました。今日は学内者限定的な対面で開催され、東洋大学教職員・学生が参加しました。

当日の講演は期間限定にてオンデマンド配信致します。下記URLよりのみご視聴頂けます。是非ご覧ください。※音声の一部聴き取り難くっております。ヘッドフォン等を利用した聴講を推奨いたします。

配信期間：2022/12/14～2023/3/31

- 【2022年度 キャリアパスWORKSHOP 講演会オンデマンド公開】 <https://youtu.be/rU@mu0ngli8k4w>
- 【2022年度 キャリアパスWORKSHOP 松山美緒】 <https://youtu.be/somBiu3u0eE>
- 【2022年度 キャリアパスWORKSHOP 齋藤祥太郎】 <https://youtu.be/02E0uqyqpb0>
- 【2022年度 キャリアパスWORKSHOP 小泉慶明】 <https://youtu.be/9b0vRlUq5K8>
- 【2022年度 キャリアパスWORKSHOP 伊藤悠風】 <https://youtu.be/S0nQAUh420k>
- 【2022年度 キャリアパスWORKSHOP 杉山和輝】 <https://youtu.be/H5D3SdSPBU0>
- 【2022年度 キャリアパスWORKSHOP 片野直】 <https://youtu.be/2CC2r6mQ3U>
- 【2022年度 キャリアパスWORKSHOP 岩澤卓弥】 <https://youtu.be/obv8kwnj16>
- 【2022年度 キャリアパスWORKSHOP パネルディスカッション】 <https://youtu.be/Aw0z2dck888Q>

重点研究推進プログラム(第1期)を終えて 生体医工学研究センターを中心とした各プロジェクトの飛躍的發展



謝辞：

本研究を進めるにあたり、研究メンバー・研究助手・支援者・大学院生の協力、そして研究推進部各課の方々に多大なるご支援を賜りましたこと、改めて御礼申し上げます。





バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくり

(High-performance and Sustainable Manufacturing by Utilizing Biomimetics)

重点研究課題名：（5：SDGsの達成に貢献する研究、または同課題達成に向けたテーマ性を有する研究）

2021年4月

～

2024年3月

	所属・職	研究者名	研究プロジェクトにおける役割（担当）
研究 代表者	理工学部 生体医工学科 教授	合田 達郎 博士（工学）	研究統括、生物模倣科学によるバイオ工学研究
	理工学部 機械工学科 准教授	窪田 佳寛 博士（工学）	生物の構造と形に倣うものづくり研究
研究 分担者	理工学部 建築学科 講師	高岩 裕也 博士（工学）	生物に倣う建築耐震工学
	食環境科学部 食環境科学科 教授	宮西 伸光 博士（水産学）	糖鎖構造解析、生物共生活動模倣型素材開発・応用研究
	国際学部 国際地域学科 教授	坪田 建明 博士（経済学）	社会実装支援、国際協力
	経営学部 経営学科 教授	山本 聡 博士（経済学）	社会実装支援、中小企業支援、産官学連携
	文学部 教育学科 教授	谷口 明子 博士（教育学）	教育へのフィードバック 110/363

本プロジェクトの目的

生物が進化の過程で獲得してきた構造・機能・生産方法・物質循環から着想を得て、それらを科学、医学、産業などに生かす

- ①生物の構造や形に着想した高機能なものづくり（窪田、高岩）
- ②生物の有する持続可能な生産方法に倣ったものづくり（合田、宮西）
- ③生物がおこなう情報プロセシングの活用（合田、窪田）
- ④バイオミメティクスによるイノベーション推進（坪田、山本）

重点研究課題（5）：SDGsに貢献

3. すべての人に健康と福祉を
8. 働きがいも経済成長も
9. 産業と技術革新の基盤をつくろう
11. 住み続けられるまちづくりを
12. つくる責任つかう責任



本学の研究力強化・国際化推進、若手育成、新産業創出に貢献

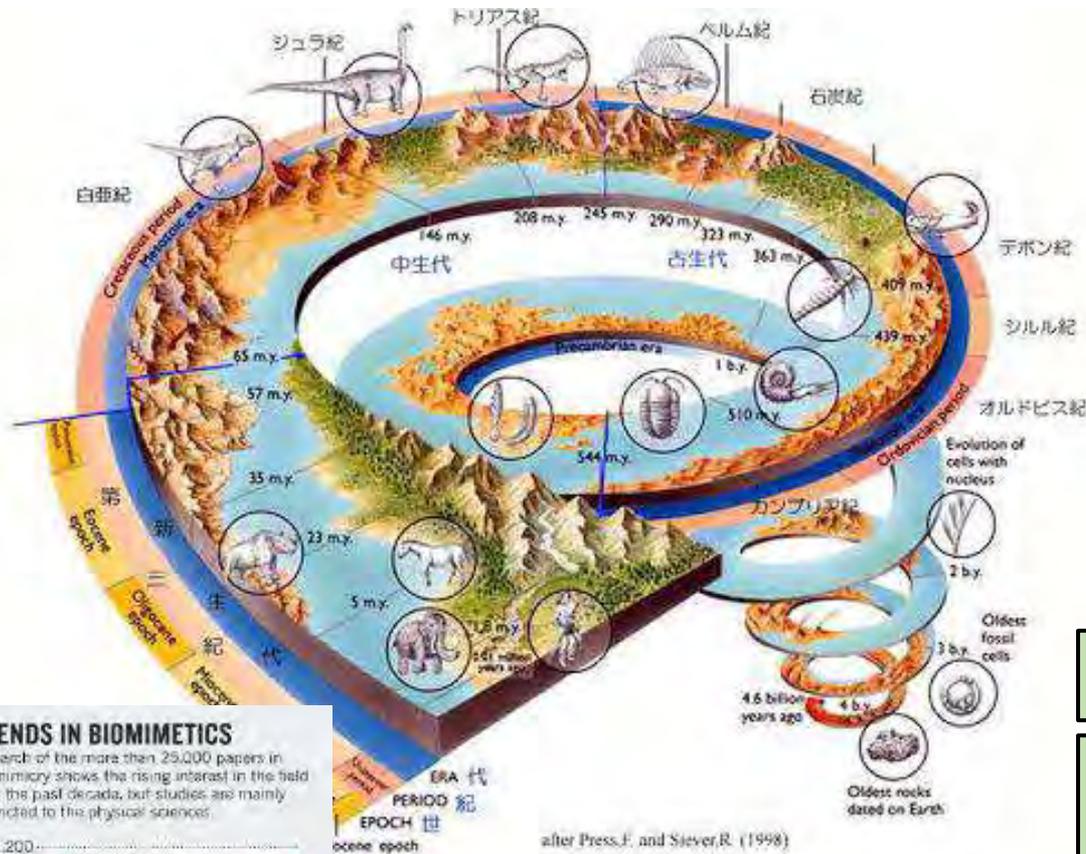
- 文理融合研究推進
- Scopus掲載国際学術論文数の増加
- 国際学会での英語口頭発表
- 外部資金獲得
- 拠点会議・シンポジウム開催
- 国内外研究者ネットワークの構築・拡大
- 企業との共同研究実施
- 大学院進学者数・博士研究員数の増加

東洋大学重点研究推進プログラムで加速する3つの好循環



バイオミメティクスとは？

生物が進化の過程で獲得してきた構造・機能・生産・情報処理から着想を得て、それらを科学、医学、産業などの様々な分野に生かそうとする概念



バイオミメティクス 1.0



バイオミメティクス 2.0

- 2007 ドイツ「生物多様性に対する国家戦略」
動植物をヒントに革新的技術を開発
- 2009 日本経団連「生物多様性宣言」
自然の摂理と伝統に学ぶ技術開発を推進
- 2010 サンディエゴ動物園「Da Vinci Index」
2025年に米国で3000億ドルのGDP
- 2013 文科省 新学術領域「生物模範工学」

2011 ドイツ政府
バイオミメティクスの国際標準化提案

2015 バイオミメティクス国際標準制定 (ISO/TC 266)
ISO 18458:2015, ISO 18459:2015, ISO 18457:2016

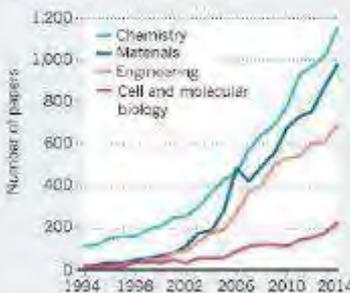
2018 日本政府 (環境省)
第五次環境基本計画：持続可能性を支える技術の開発・普及としてバイオミメティクス

バイオミメティクス 3.0

「生物の生き残り戦略にヒントを得て人類の未来を築く」
「持続可能性へのパラダイム変換と技術革新」

TRENDS IN BIOMIMETICS

A search of the more than 25,000 papers in biomimetics shows the rising interest in the field over the past decade, but studies are mainly restricted to the physical sciences.



Data obtained by searching the Web of Science Core Collection with the term "biomim* or biomimicry". ©nature

生物学者の参入は8%未満

150万種の真核生物のなかで生物模倣はごく一部

ゲノム編集技術によってさらに活性化

バイオミメティクス/バイオミミクリ：自然界のモノづくり・システムから学ぶ

スケール

km



m



mm



μm



nm

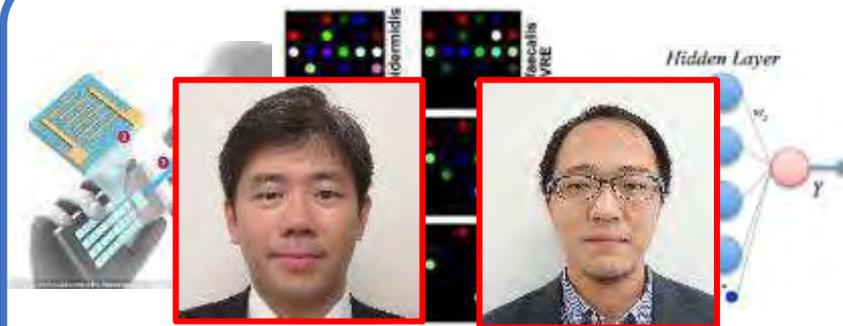


高機能・高性能なものづくり

113/363



生分解性
持続可能な生産プロセスに倣う



パターン認識による“におい”のセンシング

生物のシステムに倣う

ガントチャート

研究計画	FY 2021	FY 2022	FY 2023
①生物の構造や形に着想した高機能なものづくり (窪田、高岩)	スポーツギアの開発、競技用カヌーの事業化に向けた船艇開発	伝統木造建築物の架構の変遷調査	バイオミメティクス耐震補強効果の定量化
②生物の有する持続可能な生産方法に倣ったものづくり (合田、宮西)	高機能ウェアラブル型エレクトロニクス開発	生体親和性・生体吸収性の導電材料開発	糖鎖情報に基づく生分解性有機材料探索、ケミカルセンサ・バイオセンサの開発
③生物が利用する情報プロセッシングを活用したものづくり (合田・窪田)	生体情報プロセッシング技術開発	ウェアラブル呼気診断デバイス開発	複眼型マルチセンサ開発、生活支援システムの開発
④バイオミメティクスとイノベーション推進 (坪田、山本)	バイオミメティクスを用いた国際協力、バイオミメティクスによる自然資源の再評価	バイオミメティクスの中小企業製品開発活用探索、産官学連携プロジェクトへの展開	
拠点会議（2回／年）、シンポジウム開催（1回／年）			
外部資金 産学連携 共同研究			
	大型競争的資金（科研費A、国際共同研究基金、AMED等）応募、産学連携		
	新しい生活様式におけるヘルスケア支援システムの創出（JST未来社会創造事業：合田、窪田、山本他）	非侵襲バイオセンシングで健康維持を支援する高分子デバイスの開発（A-STEP：合田、窪田、宮西、坪田、山本他）	国産カヌー開発（ミズノ株、東京の中小企業5社、日本カヌー連盟、東京東信用金庫、東洋大学）

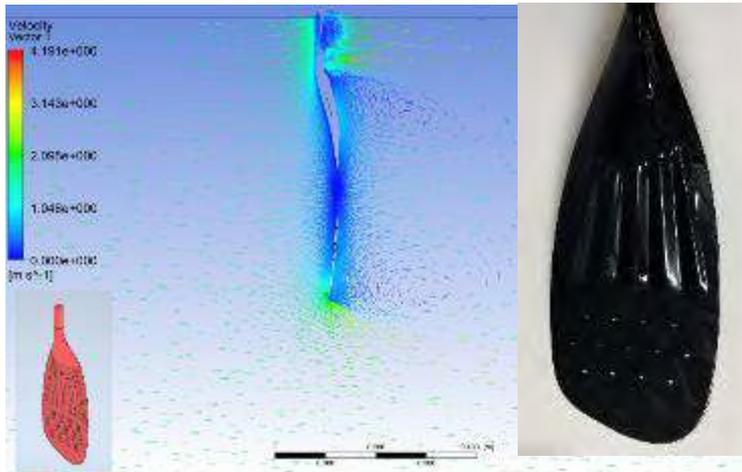
研究

生物の持つ構造や形に着想した高機能なパドル開発（窪田+ミズノ・ニベア）

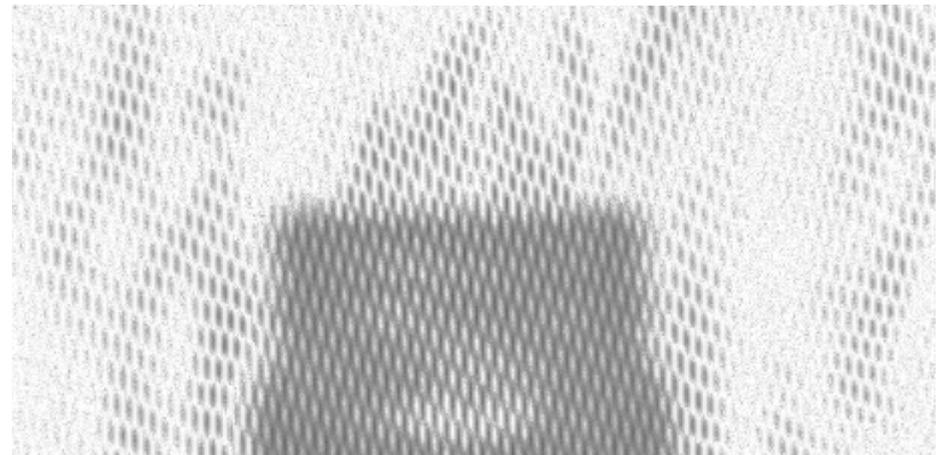
- カヌーのスラローム競技用パドルを開発（ミズノ）
 - パドリング時の抵抗最適化
 - パドルの水中への突入抵抗低減
 - 操舵動作を考慮した流体力の最適化
- 葉の給水、花卉のペタル効果といった機能により化粧品用保湿クリーム機能向上を目指したニベア花王社との共同研究（ニベア）



機械工学科
窪田



試作パドル
(ミズノ社と共同開発)



BOS (Background Oriented Schlieren) 法による流体の密度変化の可視化.

ツバメの巣の模倣による伝統土塗り壁の再評価（高岩）

生物の生み出す構造で、かつ土塗り壁の壁土と同様の材料で構成されているツバメの巣の繊維径・長さ・配向・体積含有量・硬化剤に着目し、バイオミメティクスの観点から土塗り壁の再評価をおこない、実際の木造建築物の耐震補強に活用する。



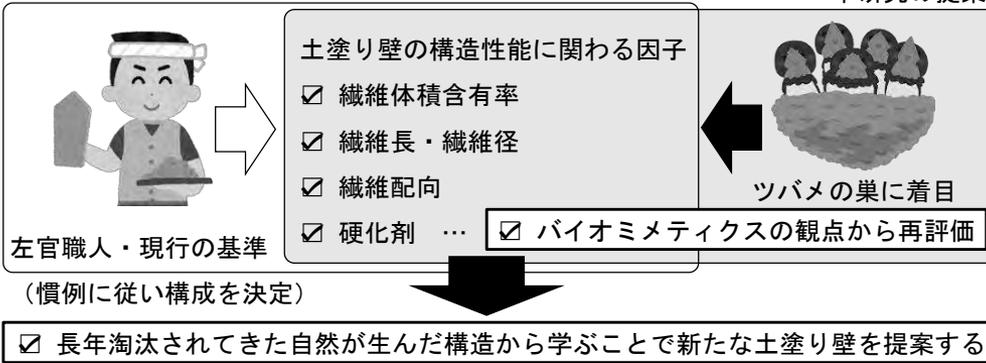
建築学科
高岩

※川越蔵の会との受託共同研究を実施

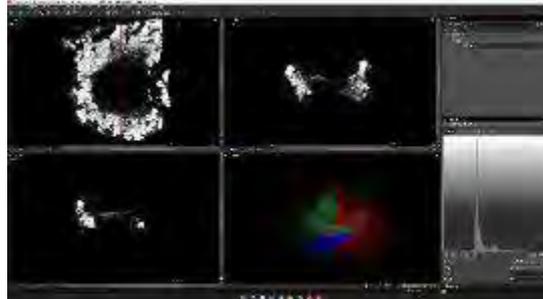
※高岩研究室の瀧澤日菜さんが日本建築学会大会学術講演会で『若手優秀発表賞』を受賞

既往研究が扱っている土塗り壁の領域

本研究の提案



☑ 研究概要

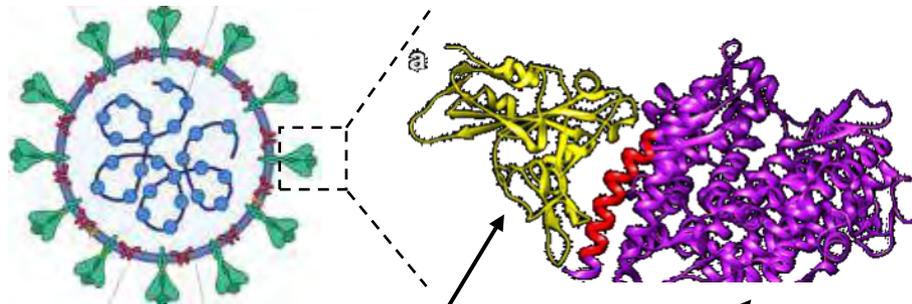


試験体の成形方法および試験方法の確立

117/363
X線CTによる巣の観察

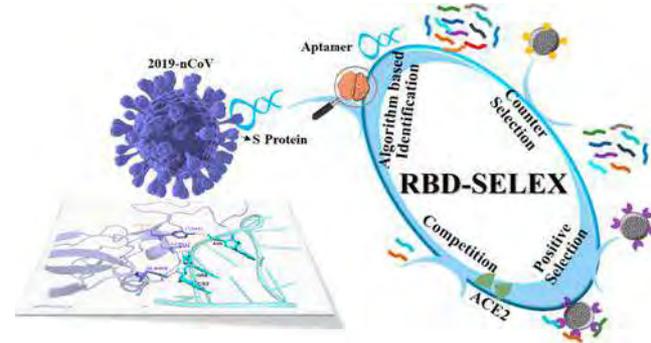
築350年前お堂の改修現場から土を採取

新型コロナウイルスの感染機構に倣ったバイオセンサ開発 (合田+豊橋技科大)



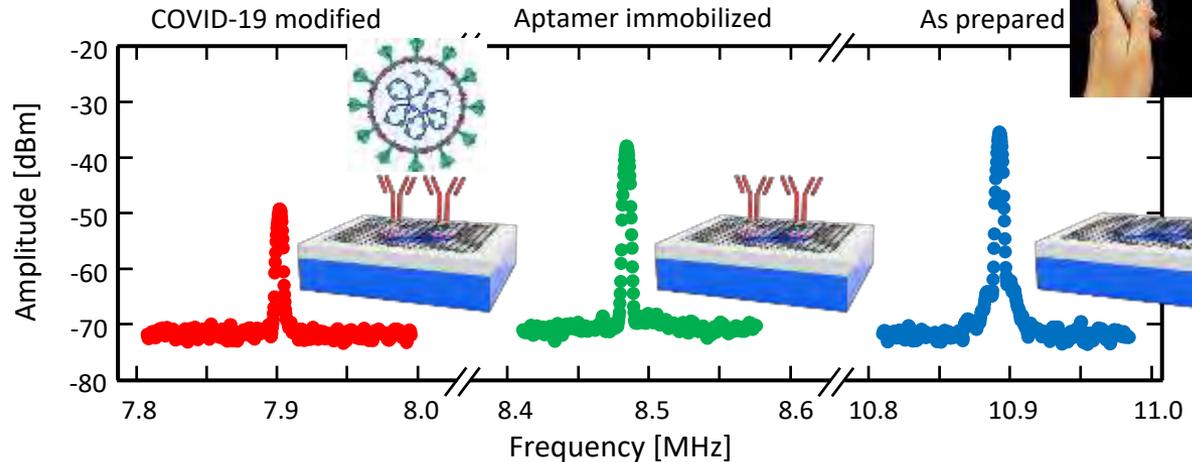
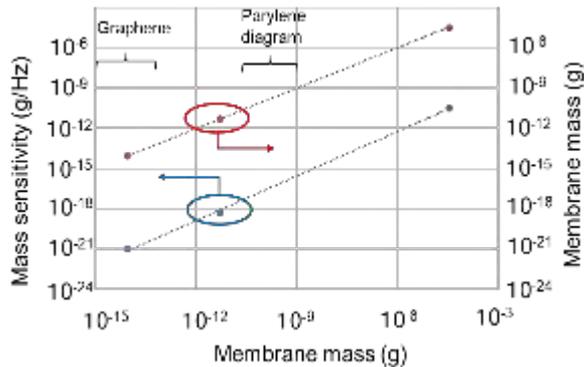
新型コロナウイルス

スパイクタンパク質 ACE2受容体



生体医工学科
合田

ACE2よりも高い親和性をもつDNAアプタマーの利用
 $5'-\text{CAGCACCCGACCTTGTGCTTTGGGAGTGC TGGTCCAAGGGCGTTAATGGACA}-3'$,
 51-nt, $K_d = 5.8 \text{ nM}$; Anal. Chem., **2020**, 92, 9895.



従来のSi-MEMS技術の**500倍**の質量感度を実現

生体模倣受容体を修飾したグラフェンセンサによる飛沫試料中の
 新型コロナウイルス検出 → 2022.11 大型予算獲得



環境中に存在するウイルスの超高感度検出

GLYCO-TUNINGで生物共生活動を模倣：植物糖鎖解析（宮西）

植物の進化と共に変化した糖鎖構造や動態を解析し、植物糖鎖を介した共生活動を人へ応用する。

コムギ（農林61 (N61), アフガニスタン種 (No. 654)の2系統）を用い、胚の発芽誘導後18日目の芽先端部、芽胴体部、中間部、根先端部、根胴体部の5部位を分離後、それぞれのN-結合型糖鎖を解析。糖鎖の「カテゴリー別」ではFucose、Xylose残基、またはその両方をもつ「複合型糖鎖」の発現が約8割であり2品種間で大きな差は無かった。**糖鎖の「構造別」では胚部および発芽3日目のみ**に存在する糖鎖が明らかとなった。さらにNo.654のGN2M3FX構造がN61の発現量よりも高い事から、GN2M3FXが根領域の共生活動や根の頑健性に関係している事が考えられた。



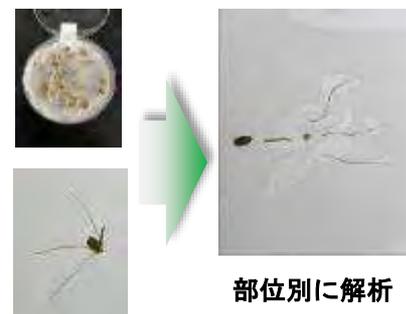
食環境科学科
宮西

N61(日本の伝統種)



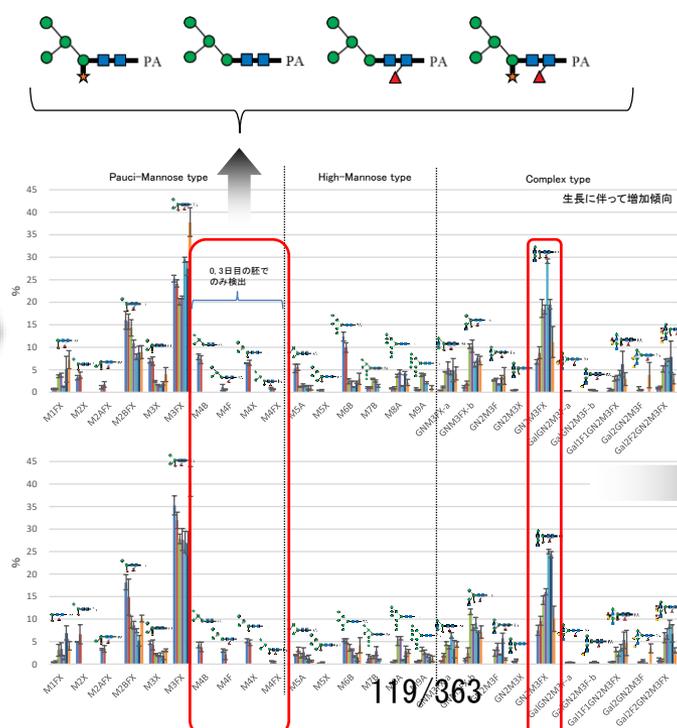
部位別に解析

No.654 (アフガニスタン種)

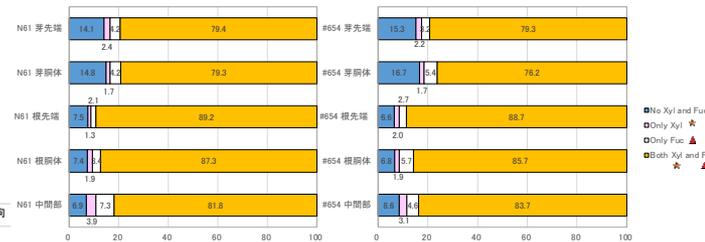


部位別に解析

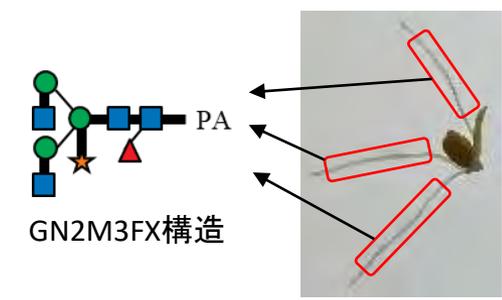
胚, 発芽3日目のみ存在→貯蔵・発芽制御の可能性



全体の約8割は複合型糖鎖で占めている。



GN2M3FX構造が根の共生活動や頑健性に関与している可能性（発現量：N61<No.654）



成果まとめ

【査読付き原著論文】

- *Advanced Materials Technologies* (合田、Impact Factor = 7.848)
- *Science and Technology of Advanced Materials* (合田、IF=7.821)
- *Journal of Flow Control, Measurement & Visualization* (窪田、no IF)
- *Journal of Asian Economics* (坪田、IF=2.681)
- *Venture Review* (山本、no IF)

【外部資金の採択実績】

- 旭硝子財団若手継続 (継続、合田、3年、総額：600万円)
- **公共機関研究推進制度 (新規、合田、5年、総額：1億4千万円)**
- 大同生命保険株式会社 創業120周年記念事業 (新規、山本、1年、総額：250万円)
- 荒川区 荒川区地域産業活性化研究補助金 (新規、山本、1年、総額：100万円)

【企業との受託共同研究】

- 日油受託共同研究 (合田、総額200万円)
- NB Medical受託共同研究 (合田、総額100万円)
- ニベア花王受託共同研究 (窪田、総額120万円)
- ミズノ受託共同研究 (窪田、135万円)
- 川越蔵の会受託共同研究 (高岩、総額88万円)

異分野融合・ オープンイノベーション

社会実装と中小企業経営

東洋大学の社会実装（山本の企画・実行）

- ① 「東洋大学の起業家とアントレプレナーシップ」（2022年11月22日）
- ② 「荒川区中小企業の感染症BCP対策」（2022年12月6日）
- ③ 「東洋大学・東京東信用金庫 第四回 共催シンポジウム」（2022年12月20日）
- ④ 「TOKYOイーストのHTTと中小企業経営 経営環境の激変を「電力をH減らす・T創る・T蓄める」で乗り越えるには？～SDGs経営の実践～」
- ⑤ 「日本・ドイツの比較研究によるドイツ中小企業からの示唆の獲得」大同生命保険株式会社 創業120周年記念事業



経営学科
山本



①で講演する小林 理事



②のワークショップの様子



③のシンポジウムの様子



⑤は大同生命、本学でプレスリリース



機械工学科
窪田

経営学科
山本



東洋大学 重点研究推進プログラム
バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくり

Symposium 2022

Answer文理融合 (理工学・経営学・教育心理学)

東洋大学の文系・理系研究者が「つながり」を考えてみた
～バイオミメティクスの成果を例に～

「バイオミメティクス」とは、生物が進化の過程で獲得してきた機能から着想を得て、それらを科学、医学、産業などの分野に生かそうとする概念です。本重点研究プロジェクトが始まり、1年と少しが過ぎました。この間、個々の研究以外に学部、キャンパスを超えた東洋大学の研究者の人的つながりが構築されました。その関係を踏まえて東洋大学における文理融合研究のあり方を楽しく考えていきたいと思います。

対面・オンライン
ハイブリッド開催
要申込み



申込用QR

日程 2022年10月8日(土)
12:30から受付開始

会場 東洋大学白山キャンパス
8号館7階125記念ホール

※学外者はオンライン参加のみとなります。

プログラム

13:00 - 13:10	開会挨拶	東洋大学 学長 矢口 悦子
13:10 - 14:30	経営学×バイオミメティクス 【生物模倣が生み出す新たな価値】	経営学部 経営学科 教授 山本 聡 理工学部 機械工学科 准教授 窪田 佳寛 美津濃株式会社 グローバルアパレルプロダクト本部 田中 啓之氏
14:30 - 14:40	休憩	
14:40 - 15:20	教育心理学×バイオミメティクス 【バイオミメティクス研究会の取り組み】	文学部 教育学科 教授 谷口 明子 理工学部 建築学科 講師 高岩 裕也
15:20 - 16:00	パネルディスカッション 【文系・理系研究者が「つながり」を考える】	登壇者：矢口、合田、窪田、谷口、高岩、山本
16:00 - 16:05	閉会挨拶	理工学部 生体医工学科 教授 合田 達郎

主催 生体医工学研究センター

共催 工業技術研究所

80名以上の参加

広報課と協力し、日刊工業新聞からも記者が聴講
文理融合の観点から、研究成果の社会実装をテーマとして成果を報告

産学連携：山本，窪田，田中氏（ミズノ社）

経営学の観点から捉える産学連携および企業が大学に期待する連携の意義について議論された。

教育：谷口，高岩

バイオミメティクス研究会の取り組みについて、教育学的な期待と効果について報告。

パネルディスカッション

文系の学問・研究の枠組みの中で、バイオミメティクスから何が見いだされるのか議論（矢口学長ご登壇）



研究拠点会議・研究会議の開催（別紙2）

バイオミメティクス研究拠点会議

- 2022年5月28日
- 参加者：合田、窪田、高岩、宮西、山本、坪田、谷口
- 内容：実施状況の確認、来年度の展望、外部資金獲得、共同研究について

バイオミメティクス研究会議（計56回、2023年1月31日現在）

• 主な参加者（学）

東洋大学内、東京大学、東京工業大学、東京医科歯科大学、横浜市立大学、鳥取大学、香川大学、帯広畜産大学、久留米工業大学、豊橋技術科学大学、順天堂大学、産業技術総合研究所、物質・材料研究機構、農業技術研究機構

• 主な参加者（産・官）

ミズノ、ニベア花王、ファンケル、テックラボ、日油、京セラ、旭化成、丸善製薬、グライコテクニカ、榎野産業、坪川製箱所、WAVE、小池産業、バイオメディカルソリューションズ（大塚製薬）、NBバイオメディカル、大同生命保険、葛飾区役所

成果

- 受託共同研究の実施（3件）
- 大型外部資金の獲得（1件）



教育・ 若手研究者の育成

学生主体のバイオミメティクス研究会を継続（別紙3）

- 今年度2月より，合田研（生体医工学）・窪田研（機械工学）・高岩研（建築学）の3学科合同での研究会を開始した。
- 研究会は学生が主体となって，「分野横断」や「サイエンスコミュニケーション」を目的とした活動をおこなっている。
- 7月18,25日に合田先生の「バイオミメティクス」講義にて，生体医工学科の2年生に向けて活動紹介と2グループの発表をおこなった。
- こもれび祭ではバイオミメティクスについて詳しくない，一般の大人や幼児，小中学生にも興味，関心を持っていただけるように参加型のイベント形式で発表をおこなった。



教育学科
谷口



建築学科
高岩



2月より開始した合同研究会



学部2年生への発表



こもれび祭での発表

若手研究者の育成（RA・学生アルバイト雇用）、大学院進学状況

若手研究者雇用：1名

- 鈴木 加代（宮西研）

RA：1名

- 林 恵梨子（宮西研）

大学院生アルバイト（25-30時間/月）：5名

- 酒田 萌々子（M1、合田研）
- 山口 友紀恵（M1、合田研）
- MENG Fanlu（M1、合田研）
- 難波 一樹（M1、窪田研）
- 横瀬 豊（M1、高岩研）

※ 若手研究者、RA、アルバイト雇用が研究室活動・研究会活動の活性化につながった。

新規大学院進学者（2022-2023）

- 博士前期課程：13名（昨年実績：7名）
- 内訳：合田研 5名、宮西研 2名、窪田研 3名、高岩研 3名
- 年々増加傾向にある



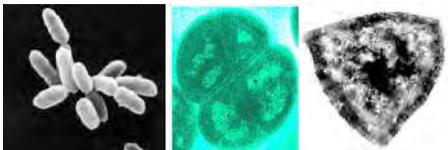
評価委員

- 東京大学 石原一彦 名誉教授（生体医工学）
- 横浜市立大学 坂智広 教授（農学）
- 九州大学 岡幸江 教授（教育学）
- 東洋大学 加藤和則 教授（生物学）

昨年度の評価委員コメント（一部抜粋）

- 研究論文や学会発表などで情報発信を活発化することが、学生教育や社会実装との関連で必要となる。また経年的な外部資金の獲得にもつながるために一層の努力が求められる。
- 教育学が専門の教員がいることで、教育分野へのフィードバックがより具体的になった。小学生向けのバイオミメティクス紹介は理科分野に興味を持たせることで良いアイデアである。
- アルバイトとして学部・大学院生を雇用し、プロジェクトに間接的に参画させることは、研究に対する興味を与え、大学院進学への動機付けに有効であったと認められる。
- 研究、外部資金獲得、異分野融合・オープンイノベーション、社会実装、知財取得などは、次年度以降の活発化を引き続き頑張ってもらいたい。
- 単に技術的な応用可能性にとどまらず、人が自然をみてものを開発するという行為自体に「技術とはなにか」「開発とは何か」といった考察対象としての魅力があり、文系分野からも探究しうるテーマを多く内包していると思われる。
- 人間が行う開発には、それを方向づける一定の哲学・倫理が必要と思われるが、それを謙虚に「生物世界のしくみに学ぶ」「そのありようを議論し続ける」ことから浮上させようとするのがバイオミメティクスではないかと考えさせられた。

極限環境微生物



東洋大学重点研究推進プログラム(2021-2023)



先端科学

PCR
装置

次世代DNA
シーケンサー

極限環境微生物の先端科学をSDGs達成のために社会実装する研究

サブタイトル

Extremophiles × SDGs × Toyo Grand Design 2020-2024

(極限環境微生物)



重点研究課題名: (3) 生命科学分野の先進国をリードする研究
(5) SDGsの達成に貢献する研究



バイオリジリエンス研究プロジェクト(BRRP)

研究代表者: 生命科学部 伊藤 政博

洗剤のコンパクト化



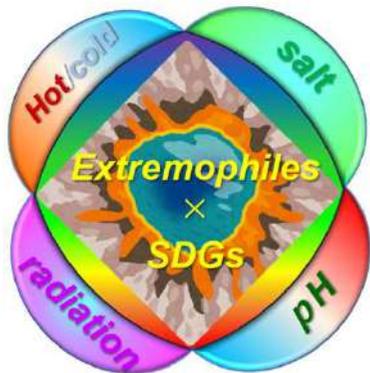
シクロデキストリンを使った様々な製品



社会実装

2023年2月1日

研究の目的・目標



バイオリジリエンス研究プロジェクト・ロゴ



イエローストーン国立公園

「グランド・プリズマティック・スプリング」虹色に光る温泉

(研究目的)

- ・科学技術はこれまで我々の生活を豊かにすることに貢献
- ・ **SDGsの達成のため飛躍的な技術革新が必要**
- ・ **我々のグループは、過酷な極限環境でも生育可能で新たな生物資源として注目される極限環境微生物研究に強みがある！**



- ・学内外の有機的な共同研究体制を推進
 - ・ **極限環境微生物研究の**先端技術と知見を社会に還元し **SDGsが掲げる目標に貢献するCenter of Excellence (COE)を目指す！**
- 世界的研究拠点**



研究者の概要 (報告書P1)

研究員の構成: 生命科学部7名、理工学部1名、研究助手2名

グループの主体: 東洋大学極限環境微生物ワーキンググループ (Since 2001~)



研究者名	研究プロジェクトにおける役割 (担当)
伊藤 政博 (博士(工学))	統括・極限環境微生物を利用した環境浄化・創薬研究とその社会実装 (SDGs 3 9 14 15)
鳴海 一成 (博士(農学))	副統括・放射線抵抗性細菌のDNA修復酵素機構の解明とその社会実装 (SDGs 3 9 14 15)
道久 則之 (博士(工学))	副統括・有機溶媒耐性菌による産業用生体触媒の開発とその社会実装 (SDGs 3 9)
一石 昭彦 (博士(学術))	紫外線損傷等による糸状菌染色体のDNA修復機構に関する研究とその社会実装 (SDGs 3 9 15)
高品 知典 (博士(工学))	新規有用好塩性・耐塩性微生物の探索とそれらの社会実装 (SDGs 3 7 9 12)
東端 啓貴 (博士(工学))	超好熱性菌の耐熱化・好熱化戦略を活用した技術革新の基盤研究とその社会実装 (SDGs 9 14)
三浦 健 (博士(工学))	極限環境微生物を利用した水質浄化研究とその社会実装 (SDGs 6 7 9)
峯岸 宏明 (博士(工学))	好塩性菌由来の極限酵素の特性を活かした産業用生体触媒の開発とその社会実装 (SDGs 9 14)
久保 彩 (博士(農学))	放射線抵抗性細菌のDNA修復酵素機構の解明とその社会実装 (SDGs 3 9)
杉本久賀子 (博士(理学))	有機溶媒耐性菌による産業用生体触媒の開発とその社会実装 (SDGs 3 9)



研究成果を一般にも広く知ってもらうためのアウトリーチ活動について(1)(報告書P2)

- 2022年4月1日からのHPへの合計ページビュー数**6,739件**(参考:昨年度9,645件)。
- **「NEW環境展」**(5月25日-27日)と**「アグリビジネス創出フェア2022」**(10月26日-28日)に**峯岸研究室**が出展した。研究室で分離した花酵母を使った日本酒醸造((有)佐藤酒造店との共同研究)とBRRPの取り組みを披露した。**アグリビジネス創出フェアには3日間で300名以上の来場者。**
- 7月7日:**都立江戸川高等学校**の2年生60名を対象に伊藤が「スマホ顕微鏡でクマムシを見よう」というテーマで地球最強生物クマムシについて解説。
- 7月11日:**食環境科学部で理科教育法を担当されている後藤顕一教授**の協力のもと、伊藤が中学・高等学校の理科教員を目指す4年生を対象に地球最強生物のクマムシの採取とスマホ顕微鏡を用いた観察会を実施。**→理科教員を目指す学生に先端科学実験を体験してもらうことで、極限環境微生物の魅力を生徒たちに伝えてもらうように工夫を凝らした。**
- 10月17日:東洋大学白山キャンパスにて**文学部 教育学科 鈴木一成教授**の協力のもと、伊藤と鳴海が**初等教科教育法(理科)**を履修する**東洋大生**を対象に**海洋プラスチックごみ**と**放射線抵抗性微生物**に関する講義と実験を行なった。
→教員を目指す学生がプラスチック問題と先端研究に触れ、改めて地球社会の問題について考えてもらうことを目的とした。



Tsushima



長崎県対馬市の海岸

研究成果を一般にも広く知ってもらうためのアウトリーチ活動について(2)(報告書P2)

➤ 8月1日: 私立武蔵中学校が主催する英語によるサマープログラムで【教科書の常識】を覆す極限環境微生物の世界を学ぼうというイベントを伊藤、鳴海、道久の3名で行った。極限環境微生物の先端研究をSDGsと結び付けた英語によるアウトリーチ活動を行った。



➤ 10月4日: 県立厚木商業高校の高校3年生30名に対して伊藤が

「極限環境微生物の先端科学をSDGs達成のために活かす」というテーマで講演を行った。

➤ 11月4日: 東端が日立造船株式会社開発本部戦略企画部 齋藤氏より「海洋プラスチック汚染問題の本質・課題、およびプラスチックの分解技術の動向について」の取材を受けた。

➤ 11月10日: 湘南学園高等学校1年生4名に対して東端が「海洋プラスチックを分解する微生物について」説明した(総合学習校外フィールドワーク)。

➤ 10月29日-30日に開催された板倉キャンパス・雷祭と2023年1月11日に第13回化粧品開発展アカデミックフォーラムで三浦が



「TOYO SDGs Students Project ~SUGOMORI BOISEN Project~」について紹介した。



研究実績の概要（報告書P3）

(2022年度研究計画書に記載した研究計画の達成状況)

- ① 4月23日に第2回BRRPシンポジウムをオンラインで開催した。(達成: 約140名が参加)
- ② SDGsの達成を目標とする社会実装研究に取り組む。(研究員の研究の詳細は後半で紹介)
- ③ 各研究テーマの進捗を把握し、重点研究プロジェクトとして人文社会系教員との連携の進め実践する。(達成)
- ④ 研究助手の採用を含め、研究体制の整備を完成させる。(研究助手採用が未達成: 2023年度に達成予定)
- ⑤ 各研究者と国内外の連携研究者による各省庁や財団の助成事業への申請を行い、外部資金獲得を強化する。
(随時、助成事業への申請を行い、外部資金獲得強化を図っている。詳細は、後半で紹介)
- ⑥ 2023年3月にBRRPの研究の成果を披露するとともに、外国から研究者を招聘して、共同研究の推進及び大学院生への国際化教育を念頭に置いた第1回国際シンポジウムを開催する。(達成: 2023年3月1日に開催予定)
- ⑦ 他の重点研究グループとシナジー効果を期待して異分野融合研究を推進する。
(達成: 国際共生社会研究センターとの共同でハンドセラム(薬用ハンド美容液)の作製
(TOYO SDGs Students Project ~SUGOMORI BOISEN Project~)への参加)



研究成果の副次的効果(報告書P5)

- BRRPがスタートして2年目となり、その活動が広く知られるようになったことで

BRRPの取り組みを紹介してほしいという講演依頼(学会関係3件、その他1件)が増えた。

- **日本酒醸造用酵母研究からワイン醸造への発展(峯岸)**

(有)佐藤酒造店との共同開発により東洋大学ブランドの日本酒の製品化に至った。また酒粕の甘酒原料としての活用を検討中である。アグリビジネス創出フェアへの出展を機に、**ワイン醸造メーカーとの共同研究の話がまとまり、2022年後期から研究を開始した。**

- BRRPでの取り組みに関心のある企業からの問い合わせと2023年度から共同研究について話し合いを2月に持つこととなっている。**(道久・伊藤)**

- **ハンドセラムの作製(学生起業プロジェクト)での活動2年目(三浦)**

「SUGOMORI BOISEN Project」に関連する記事など学外で取り上げられる機会の増加。

今後、クラウドファンディングなどを活用した商品化に向けた資金獲得を目指す予定。

- 現在、進行している研究の中から**特許出願を計画しているものが複数**ある。**研究推進部の知財担当と連絡を取りながら特許出願を進める取り組み**をしている。(8月4日にBRRP側 伊藤、鳴海、道久、東端、知財側:松下先生、稲本先生出席のもとで、社会実装をするための今後の特許出願や共同研究の進め方について打ち合わせを行った)



各グループの2022年度の計画および現在までの進捗状況及び達成度



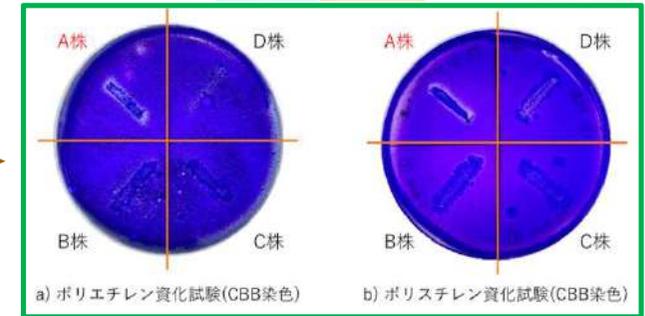
＜環境浄化班の計画＞

伊藤は、社会実装を目指した膜小胞を用いたCs⁺回収法の開発

鳴海は、放射性抵抗性細菌で効率的に発現させる新規プラスミドベクターの構築

東端は、PE分解菌候補株PED-1の解析、更なるプラスチック分解菌の単離。

三浦は、発展途上国での高濃度アンモニア態窒素汚染水を浄化する技術開発



＜特に優れた研究成果:環境浄化班＞

鳴海は、セシウム蓄積関連の遺伝子を*D. radiodurans*で発現させるための機能性の高い遺伝子操作系の開発に成功。

今後、開発したシャトルベクターについての特許出願と論文投稿を予定

東端は、PE分解菌候補株PED-1株について、PE・PS分解能を保持している可能性を示唆する実験データを得た(上図)。

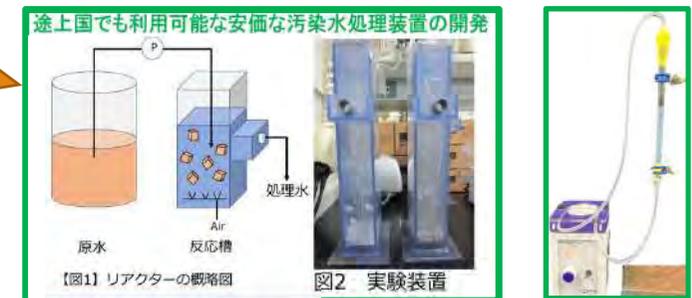
三浦は、2系列の「デンブン適応硝化リアクター」の構築に成功した。

＜問題点とその克服方法:環境浄化班＞

伊藤は、アルギン酸球状ゲル内により多くのCs⁺回収膜小胞を封入できる二重管ノズルを用いる方法を採用し、ペリスターポンプとキャピラリーチューブの組み合わせで再現性が高く生産性も向上した球状ゲルの調製が可能になった。

鳴海は、*D. radiodurans*で使用できるシャトルベクタープラスミドを3種類に増やすことができたが、さらなる改良を検討する。

東端は、PE分解菌候補株PED-1をPE固体培地上で培養した際、PE分解を示唆するクリアゾーンを観察したが、培養前後のPEの重量変化を検出できなかった。今後、PE分解能を保持していることを補強するデータを得たいと考えている。



各グループの2022年度の計画および現在までの進捗状況及び達成度



<健康福祉班の計画>

鳴海と久保は、放射線抵抗性細菌のDNA修復促進タンパク質PprAの安定性を向上させ、**分子生物学用試薬としての付加価値を高める**

伊藤は、細菌感染症を引き起こす黄色ブドウ球菌のMrp型アンチポーター欠損株

がマウスへの感染性と病原性の低下を示すことに着目し、**この経路特異的阻害剤を探索**

一石は、アカパンカビの損傷乗り越え合成に関与する*upr-1*遺伝子の発現制御因子の探索とプロモーター解析



<特に優れた研究成果:健康福祉班>

鳴海と久保は、*D. radiodurans*由来の10種の変異型PprAタンパク質の耐熱化に成功した。当初の目的通りの**耐熱性PprAが獲得できた**。PprAの汎用的なDNA修復作用は、**新規抗がん剤への応用といった将来的な医療分野への貢献も期待される**。

伊藤は、目的の阻害剤化合物を**ハイスループットで探索するための一次スクリーニング系**が有効であることが確認できた。この系は、**特許請求を行うこととなった**。

一石は、転写因子欠損株ライブラリーのスクリーニングにより、***upr-1*の発現に関与する因子としてUVS-2、NSDC、NCU09529を明らかにできた**。

<問題点とその克服方法:健康福祉班>

伊藤は、阻害剤の二次スクリーニング法の検討が不十分となっている。次年度に新規活性測定方法の検討を行う。

一石は、*upr-1*遺伝子の発現解析により、3つの因子が発現に関与していることが明らかになった。しかし、*upr-1*遺伝子のプロモーター領域解析を行っていく必要がある。



各グループの2022年度の計画および現在までの進捗状況及び達成度



<産業応用班の計画>

- 道久は、燃料や有用物質を再生可能なバイオマスから生産する技術の開発
- 伊藤は、好アルカリ性菌による醤油諸味粕を用いたバイオ燃料生産とその社会実装
- 高品は、好塩性細菌による醤油諸味粕の有効活用に向けた基盤研究とその社会実装
- 峯岸は、極限環境微生物の発酵食品への応用研究を実施と東洋大学ブランドの日本酒造りのために適した酵母菌の探索と選抜を行い、試験醸造を行う



<特に優れた研究成果:産業応用班>

道久は、バイオ燃料生産時の副産物であり、細胞毒性を示すバニリンに対する大腸菌の耐性機構を見出した。この結果から、バイオ燃料などの生産効率化が期待できる。

高品は、室温条件と比較して低温条件下でより高い醤油諸味粕分解活性を示す7-6-A株の分離に成功した。

峯岸は、好塩性のキチナーゼ、セルラーゼ、カタラーゼの精製法を構築し、それらの諸性質を解明した。また、川越キャンパス内から多数の *Saccharomyces cerevisiae* を分離し、その中でもホトケノザから分離した酵母菌を用いて醸造試験を行い、四合瓶500本の製品を得た。

<問題点とその克服方法:産業応用班>

道久の研究では、バイオ燃料として期待される中鎖脂肪酸アルコールの生産が可能な組換え大腸菌を作出したが、生産効率化が課題となっている。

高品の研究では、供試サンプル数が少ない点が課題として挙げられるため、さらに多くのサンプルから発酵能力及びエタノール耐性のより高い菌の分離を試みる。

峯岸の研究では、3種の好塩性酵素の精製は完了したが、収率が悪いため精製方法の改良または大量発現系の構築が課題であった。酵母のスクリーニング系において、この系の効率化を図る必要がある。



異分野融合・オープンイノベーション（報告書P6）

- 高品と伊藤は、**正田醤油株式会社**より廃棄処分される醤油諸味粕を分譲して頂き、**極限環境微生物によって諸味粕からバイオ燃料や化学品を生産する技術やそれを社会実装に生かす取り組み**をしている。
- 道久と伊藤は、極限環境微生物研究のこれまでの知見を活かして**新規企業との共同研究プロジェクトの立ち上げを準備**している。
- 三浦は、研究室の学生とともに、国際共生社会研究センターと資生堂、シーエスラボとの共同で**ハンドセラムの商品化に取り組んでいる**。
- 峯岸は、**川越キャンパスで分離された花酵母**を利用した発酵食品への応用研究とその社会実装に取り組んでいる。① **エタノール耐性酵母**を用いた清酒醸造を**(有)佐藤酒造店**との共同研究、**商品化**。
② 新種ワインブドウからの**ワイン酵母**の探索を**株式会社ショーナン**との共同研究を開始。③ **アカシアはちみつからの酵母菌**の探索を**丸栄工業株式会社**との共同研究を開始。



ハンドセラムの試作品



ホトケノザから分離した酵母



製品化「越生梅林エスティ」



若手研究者の育成（報告書P6）

- 研究助手久保さん：環境バイオテクノロジー学会 2022年度大会で**優秀ポスター賞**を受賞。
- また、久保は、日本私立学校振興・共済事業団**女性研究者奨励金**にも採択
- 生命科学研究科博士前期課程2年の**勝又康介**君（鳴海研究室）**極限環境生物学会**2022年度年会で**優秀ポスター賞**を受賞。
- バイオレジリエンス研究プロジェクト 大学院生研究成果報告会の実施：**大学院生全体**の成長にも繋がり、今回の受賞にも結び付いたと考えている。（TOYO SDGs Weeksイベント）



2022年度の研究業績

- 2022年度までの達成状況：SCOPUS論文13報（**進捗率43%**）（うちQ1以上5報掲載（**進捗率25%**））、国際学会での発表16件（**進捗率66.7%**）

＜招待講演3件＞

- **伊藤 政博**：**極限環境生物学会年会**、**第70回日本放線菌学会学術講演会**、**第20回微生物研究会**

この他に、国内学会での発表件数：42件（昨年度30件）、**国際学会等での発表件数：12件**（昨年度4件）

＜マスコミ等への発表＞（環境新聞：**峯岸**、NHKスペシャルシリーズ「超進化論」第3集・微生物：**鳴海**、第31回 NEW環境展2022等への出展）



外部資金の採択状況(2022年度以降・申請中を含む)

1) 外部資金採択の実績(報告書P8)

➤ (科研費1件、民間助成2件)

- 凝縮核様体依存的末端結合によるDNA修復機構の解明(鳴海)
- 2022年度野田産研/研究助成(持続可能分野)(伊藤)
- 日本私立学校振興共済事業団女性研究者奨励金(久保)

2) 今後の申請予定(申請中含む)(報告書P9)

科研費関連(7件)

➤ 2023年～2025年(基盤(C))

- 高濃度セシウムイオン耐性を獲得した大腸菌の新奇耐性機構の解明(伊藤)
- 有機溶媒耐性化した大腸菌による次世代バイオ燃料生産(道久)
- プラスチックを分解する微生物の単離(東端)
- 酵素反応の場としてのイオン液体の可能性 -好塩性酵素によるアプローチ(峯岸)
- その他、基盤(C)1件、挑戦的研究1件、若手研究1件、

外部資金申請関連(5件)

- 高橋産業経済研究財団 助成金 2件
- 野田産研/2023年度研究助成(持続可能分野)
- 天野工業技術研究所研究助成金 ➤ 笹川研究助成金



次年度以降も
外部資金の獲得を目指す



【7】研究費執行状況(2022年12月末時点)(報告書P10)

【7】研究費執行状況 (単位:円)

管理科目	当初予算額 ①	実行予算 ②	現計予算 ③(①+②)	執行額 ④	差異(予算残) ⑤(③-④)
PC用品	0	0	0	5,496	-5,496
RA	0	0	0	0	0
アルバイト	0	0	0	723,794	-723,794
システム利用料	0	0	0	0	0
その他の物品	0	0	0	5,000	-5,000
レンタル(サーバ)	0	0	0	42,306	-42,306
印刷物	0	300,000	300,000	135,620	164,380
各種会合	0	200,000	200,000	11,258	188,742
研究助手	0	13,212,000	13,212,000	0	13,212,000
作業代行	0	400,000	400,000	0	400,000
参加費等	0	80,000	80,000	92,633	-12,633
事務用品	0	0	0	0	0
実験機器(20万以上)	0	621,000	621,000	614,168	6,832
実験機器(5万以上20万未満)	0	0	0	0	0
実験機器(5万未満)	0	0	0	111,559	-111,559
実験用品	0	10,789,000	10,789,000	4,795,254	5,993,746
出張なび(教研)(海外)	0	0	0	0	0
出張なび(教研)(国内)	0	1,318,000	1,318,000	25,142	1,292,858
情報機器(20万以上)	0	0	0	0	0
図書等	0	0	0	0	0
宅配便	0	0	0	2,120	-2,120
調査・分析・報告	0	1,350,000	1,350,000	198,044	1,151,956
報酬(業者)	0	330,000	330,000	0	330,000
報酬(個人)学外者	0	0	0	116,000	-116,000
郵送	0	0	0	7,408	-7,408
論文掲載料	0	1,200,000	1,200,000	0	1,200,000
合計	0	29,800,000	29,800,000	6,885,802	22,914,198



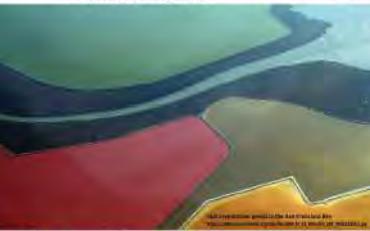
蛍光顕微鏡、Bio分光計を
購入し基盤研究に活用

使用実績:
 蛍光顕微鏡**244回**/630日間
 Bio分光計**3000回**/630日間
 研究に大いに活用された



ニュースレターNo. 3
2022年8月1発行

ニュースレターNo. 4
2023年1月31日発行



THE 1st INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON TOYO UNIVERSITY BIO-RESILIENCE RESEARCH PROJECT

【第一回 東洋大学バイオレジリエンス研究プロジェクト国際シンポジウム】
【東洋大学重点研究推進プログラム】

Research on social implementation of advanced science of extremophiles to achieve the SDGs
極限環境微生物の先端科学をSDGs達成のために社会実装する研究

DECADE OF ACTION

参加無料

2023年3月1日(水)
会場-オンライン(Zoom)同時開催
会期:東洋大学飯倉キャンパス 1102教室
参加:東洋大学国際共生社会研究センター
後援:極限環境生物学会

3年目

社会実装化への取り組みの一環として、
教職担当教員とのコラボや展示会への出展などのアウトリーチ活動を活発化させる



・研究成果と知見を社会に還元しSDGsが掲げる目標に貢献するCenter of Excellence (COE)を目指す!

東洋大学のブランドカアップに貢献する

1年目:基盤研究期 → 2年目:社会実装に向けた課題克服期 → 3年目:社会実装化への取り組み期

ご静聴ありがとうございました

東洋大学重点研究推進プログラム
バイオレジリエンス研究プロジェクト



福祉社会における新たな価値の 創発と支援システムの構築

東洋大学福祉社会開発研究センター

志村 健一

研究の背景と目的

- 安定的な帰属(家族、職場、地域社会)の場が得られず、社会的つながりが弱い人たちが増加している。
- 新型コロナウイルス感染症(Covid-19)の拡大と予防のための自粛生活は、人々のつながりを分断し、つながることをより困難にした。
- 社会的つながりを創出し、SDGsの基本理念である「誰一人取り残さない」社会を構築するために、新たな支援システムを開発しなければならない。
- 「相互承認(mutual recognition)」の価値を理論的に探究し、ICT、IoT、ロボット等の科学技術を活用する先駆的な社会福祉実践を検証し、福祉社会に求められる新たな支援システムを構築することを目的として研究を遂行する。

研究体制

- 理論研究ユニット(3グループ)
 - 「相互承認」の価値を理論的に探究する側面
- 実践研究ユニット(5グループ)
 - ICT、IoTやロボット等を積極的に社会福祉実践に適用し、支援システムを構築する側面
- 開発研究ユニット(1グループ)
 - AIによる調査分析、IoT、ロボット等の科学技術を改造・開発する側面

福祉社会開発研究センター(2号館8階)
(RA3名、PD1名、アルバイト2名)

研究実績の概要【センター全体の成果 1】

- 2022年4月 キックオフミーティング開催
 - 研究計画の共有
 - アジア諸国との研究交流を強化することの必要性が指摘された。
- 2022年7月 科研費 挑戦的研究(開拓)採択
 - 福祉社会における新たな価値の創発と支援システムの構築
 - 2027年3月末までの5年間
 - 25,610千円（直接経費19,700千円・間接経費5,910千円）
- 2022年9月 福祉実践における科学技術活用のこれから
 - 介護現場におけるICTの活用の現状や課題
 - 分身型ロボットOriHimeによる出席の試み
 - オンラインボッチャの事例報告

研究実績の概要【センター全体の成果 2】



- 2023年1月 年度末ミーティング
 - 各グループの代表より今年度の活動について報告
 - グループを超えた研究活動のきっかけ作り
- 2023年3月 『内なる国際化』と福祉実践におけるICTの利活用
 - 国内における国際化に伴う福祉的課題へのICTを介した取り組み
- 2023年3月 『福祉社会開発研究』第15号発行予定
 - 投稿論文13本(予定)
 - センター活動報告

研究実績の概要【各グループの研究と成果 1】



- 歴史・原論グループ
 - 各研究者が自身の研究テーマを「相互承認(mutual recognition)」の観点から考察
 - 学校がプラットフォームとなって地域を支える日本的福祉実践の見直しに関する研究
- 対象論グループ
 - 女性ホームレス、司法福祉、外国籍介護士に関する研究(新たなつながりの構築)
 - 代替ロボットと動物の癒しの相違

• 政策論グループ

- 福祉国家を取り巻く環境が変化していく中で、新たな価値をどのように生み出していくか、そうした問題を政策という大きな枠組みにおいて探究
- 相互承認の社会保障の一例として、船員保険を題材とした理論的な検討
- 相互承認を法的なレベルで考察するために、「一般的な関係」と「特別な関係」という枠組みを用いた議論
- フィンランドにおける広域政府の設置

研究実績の概要【各グループの研究と成果 3】



- 障がいグループ
 - 分身ロボットOriHimeを介した出席の試み(開発研究グループとの協働によるOriHimeの改良)
 - オンラインボッチャを介した共に楽しむスポーツの試み
- 地域福祉グループ
 - 地域共生社会政策の進展(重層的支援体制整備事業等)と実践の過渡期における研究的貢献に向けた先進地域視察等
 - 「ICTを活用した地域の見守り・交流の仕組み」公開研究会開催
- 子どもグループ
 - 世田谷区における包括協定に基づく協働の継続
 - 保育現場における日本語を母国語としない家族へのICTを介した支援

研究実績の概要【各グループの研究と成果 4】



- 地域包括ケアグループ
 - 地域包括ケアにおける地域ケア会議の運営課題に対する研究
 - 地域包括支援センターにおける多職種連携の実態と課題に関する研究
- 高齢グループ
 - 開発研究グループとの協働による社会調査の試み
 - スヌーズレン(嶺研究分担者国際資格取得)
 - モーションキャプチャーによる高齢者の方向動作解析
 - 韓国ソングヨル大学との交流開始

研究実績の概要【各グループの研究と成果 5】



- 開発研究ユニット・グループ
 - 高齢グループの社会調査におけるAIを用いた分析
 - 分身ロボットOriHimeのカメラの解像度改善
 - 触覚情報を遠隔地に伝達するオプションの開発

新たな研究活動開始に伴う混沌

Chaos is a necessary step to create the new order...



ICTの機能

- 空間的距離を一挙に解消してしまう(長崎からの参加)
- 操作性を飛躍的に向上させる(ワンクリック)
- ⇒ 移動や行動に伴う制限を取り除くことができる(メタバース)
- ⇒ 相互的なコミュニケーション(オリヒメ)、共同的な営為(「ともに遊ぶ」)を可能にする「場」の設定と拡張が実現している

※原理的課題は? ⇒ 「相互性」が無理なら「承認」に



東洋大学福祉社会開発研究センター地域福祉グループ

2022年度公開研究会

**ICTを活用した
地域の見守り・交流の取組み**

2023.1.21 土 10:00~12:00

●会場: ZoomMeetingを基にしたオンライン開催
●参加方法: ライブの申し込みフォームよりお申し込みください

招待講演
福祉社会開発研究センター 共同開発
した見守り・地域交流に関するアプリに
ついてご講演いただきます。

栗田 将行 氏

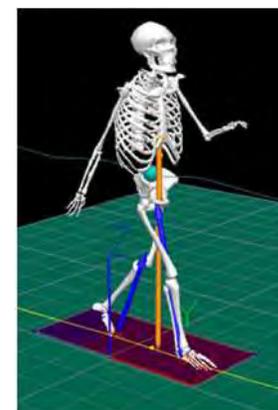
2022年度 福祉社会開発研究センター (対象グループ)

「動物への暴力(動物虐待)と人間への暴力の関連性
～子どもの権利の視点から～」



東
社会学部
佐藤亜樹 (sato@...o.jp)

12/19/2022



総括・今後の課題

- 各研究グループがそれぞれの視座、分野からセンター全体の研究課題へ取り組んでいる。
- グループの研究を横断的につなぐ方法の確立を目指すことが求められている。
- 共同研究会、シンポジウムの開催等を促進し、成果を取りまとめていく。
- 研究分担者39名、客員研究員30名、合計で70名近い研究センターとなり、情報の共有や発信等の仕組み作りに取り組む。
- 重点課題研究と科研費での研究を切り分けつつ協働する。
- 赤羽台移転後のセンターの体制作りなど。



安心な水を未来へ

～有用細菌による排水処理技術の開発と普及に向けて～

Safe Water for Future

Development and practical application of energy-saving wastewater treatment system using effective microorganisms

工業技術研究所

川越

白山

赤羽台

- 理工・応用化学
- 理工・応用化学
- 理工・応用化学
- 理工・応用化学
- 理工・都市環境
- 理工・都市環境
- 総情・総合情報
- 国際・国際地域
- 経済・総合政策
- 情連・情報連携

- 井坂 和一*
- 田代 基慶
- 峯岸 宏明
- 相沢 宏明
- 山崎 宏史
- 青木 宗之
- 大塚 佳臣
- 北脇 秀敏
- 清田 佳美
- 後藤 尚弘

* 研究代表者



重点課題

(5) SDGsの達成に貢献する研究または同課題達成に向けたテーマ性を有する研究

①-1 アナモックス菌培養
(応化 峯岸宏明)

④-1 発酵排水へ展開
(情報連携 後藤尚弘)

②-1 流体シミュレーション
(応化 田代基慶)

②-2 センシング技術
(応化 相沢宏明)

③-1 温室効果ガス評価
(都市 山崎宏史)

N₂O/CO₂排出量の評価

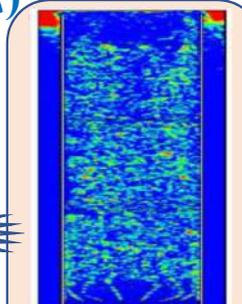


菌の培養条件
大量培養技術

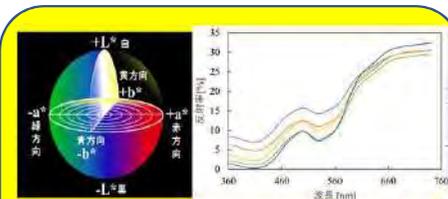


食品残渣

発酵排水



気液固3相
流解析

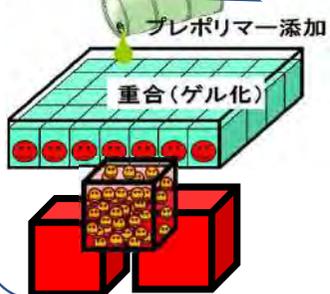


光学センサー

④-2 海外技術展開
(国際地域 北脇秀敏)



海外技術支援



①-2 細菌固定化技術
(応化 井坂和一)



①-3 排水処理性能の評価
(応化 井坂和一)

工場排水

排水処理装置



大型デモプラント

②-3 システム検討
(応化 井坂和一)

処理水

③-3 流域魚類への影響
(都市 青木宗之)



④-3 合意形成

③-2 総合経済性評価 LCA (総合政策 清田 佳美)

項目	件数（詳細）
学会発表	28件（日本水環境学会、水処理生物学会）
特許	2件（センサー、実装置化）
論文	7報（査読有5報）
講演	4件（第23回 極限環境生物学会年会ほか）
講演会主催	1件 第3回水のシンポジウム開催
展示会	3件（JST新技術説明会、ビジネスアリーナ2023ほか）
見学会主催	1件（民間企業への施設研学会）
広報（HP）	3件（プロジェクト紹介、WIPO GREEN、東洋経済）
広報（新聞）	3件（日本経済新聞に3週連続掲載）
外部資金（採択）	5件（民間企業共研、科研費）
外部資金（申請）	5件（科研費、環境研究推進費）
若手研究者の育成	3件（博士後期生の雇用、前期生の発表、学位取得）
評価委員会	1件（3月22日 実施予定）

①-1 アナモックス菌の培養

理工学部 准教授 峯岸宏明

①-2 アナモックス菌の固定化

理工学部 准教授 井坂和一



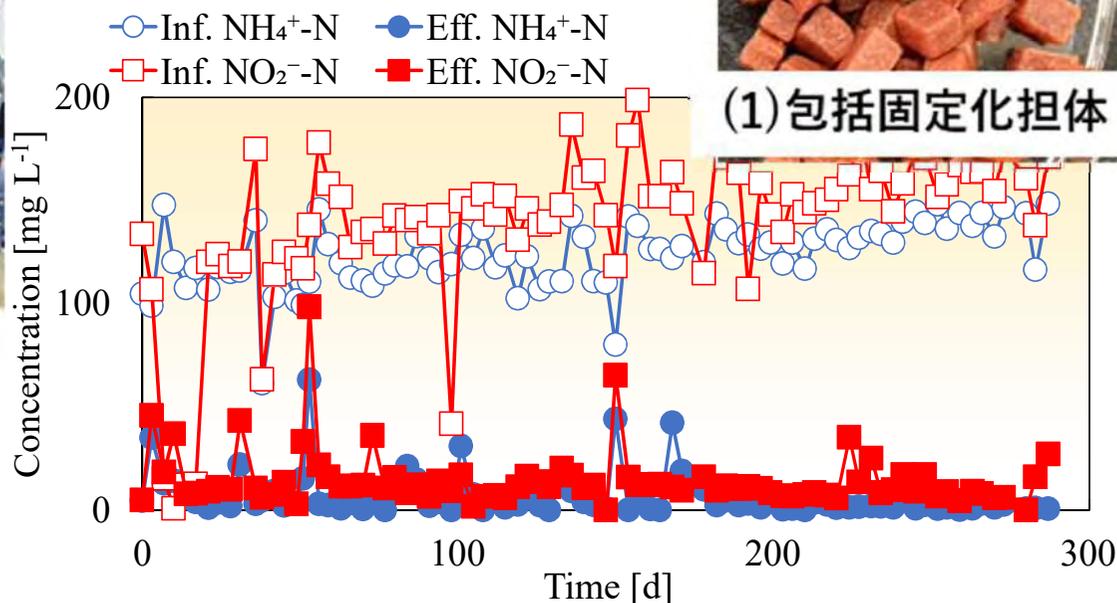
固定化



(1) 包括固定化担体



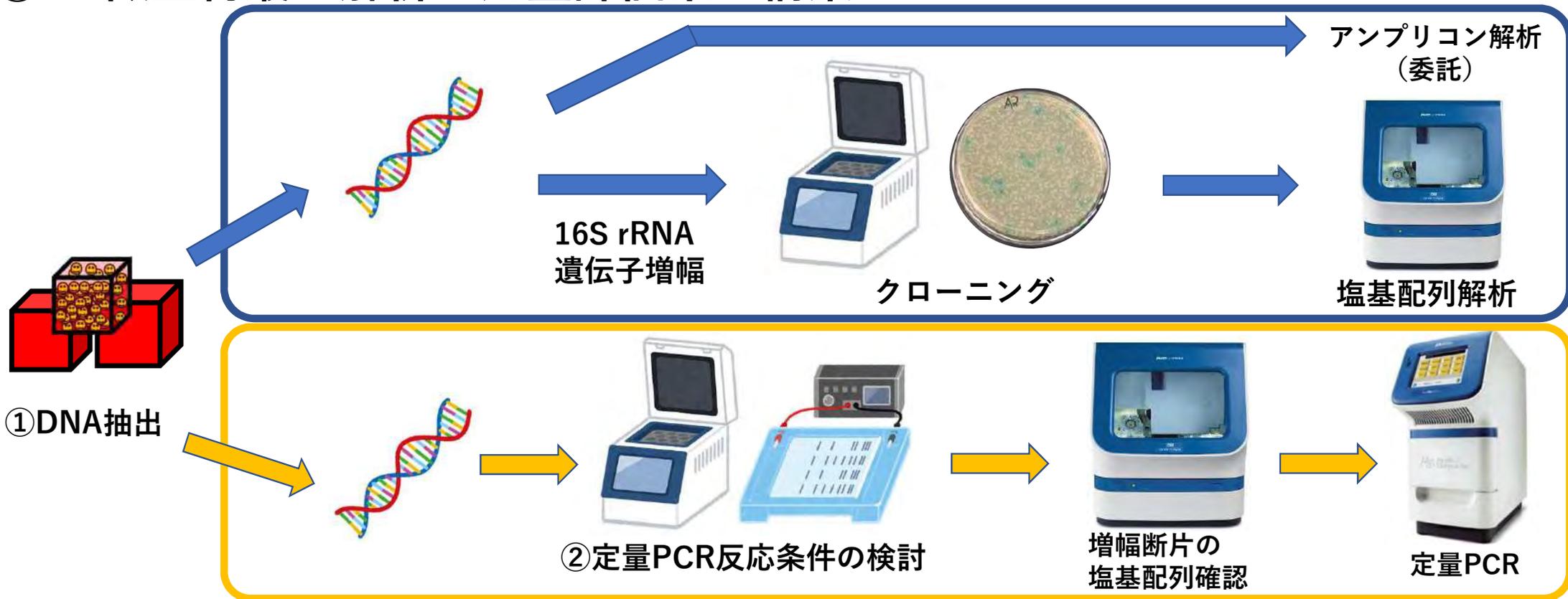
(2) 付着固定化担体



培養試験の水質

次年度：大型培養槽の検討

①-1 微生物叢の解析・定量評価系の構築

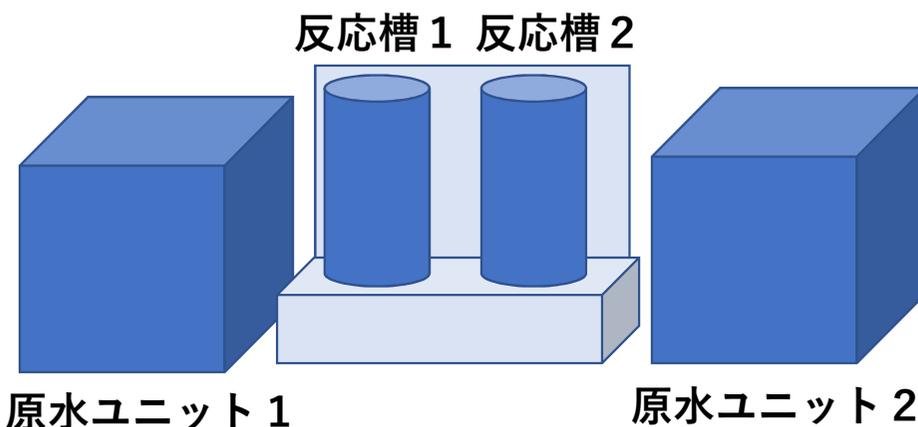
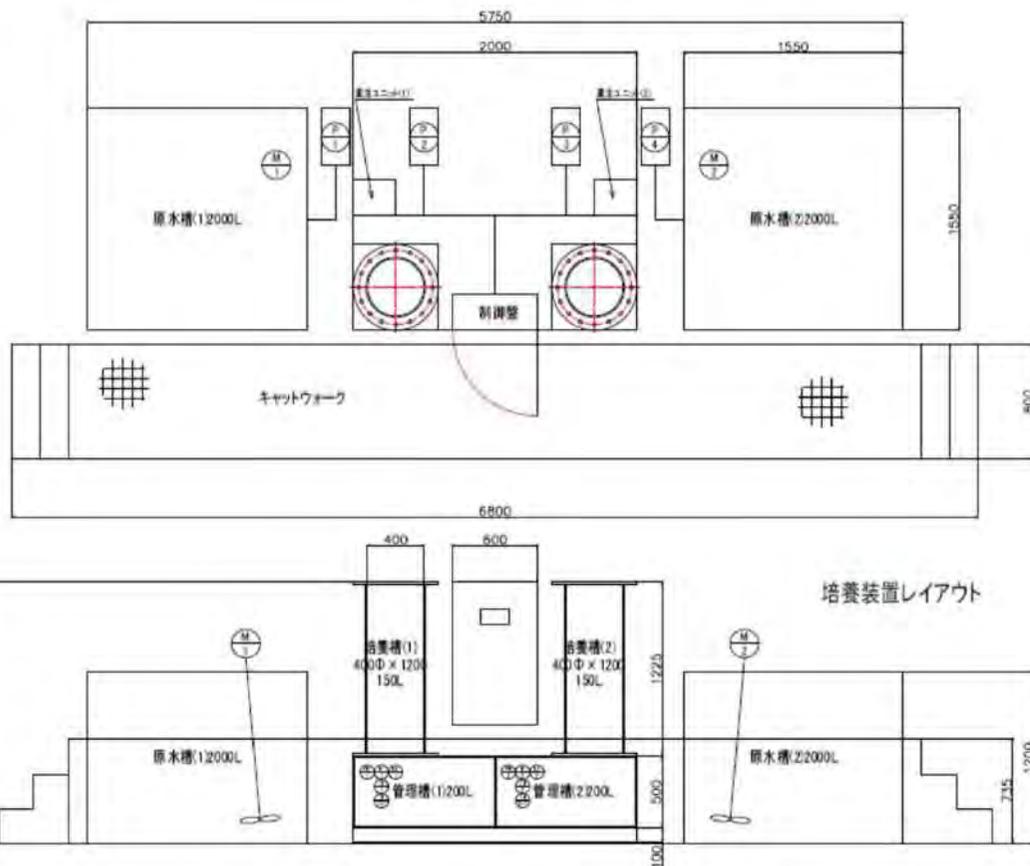


①DNA抽出：担体からの高収率DNA抽出方法の構築。

②定量PCR反応条件：アナモックス細菌に特異的な遺伝子の増幅条件の検討。

次年度：排水処理系内の微生物叢の評価

①-1 アナモックス細菌の大量培養
*300L規模の大型培養槽を計画・設計



- 反応槽容積
- ・ 150L × 2 槽
 - ・ $\phi 400 \times H1300$ (水位1200)
 - ・ pH制御

- 原水槽
- ・ 2000L × 2 槽 (攪拌機付)
 - ・ LSによる自動給水

次年度：制作・試運転調整 → 培養開始

*計画600L → 300Lへスケールダウン



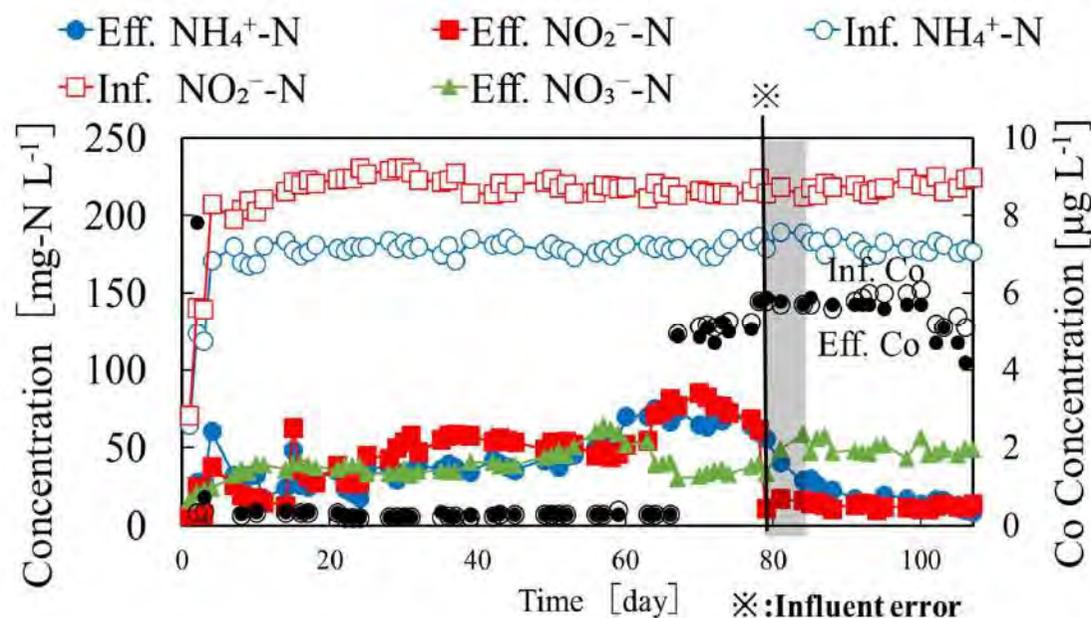
次年度：①基本要素試験は継続

②-3 システム検討 ベンチプラントの設計

理工学部 准教授 井坂和一

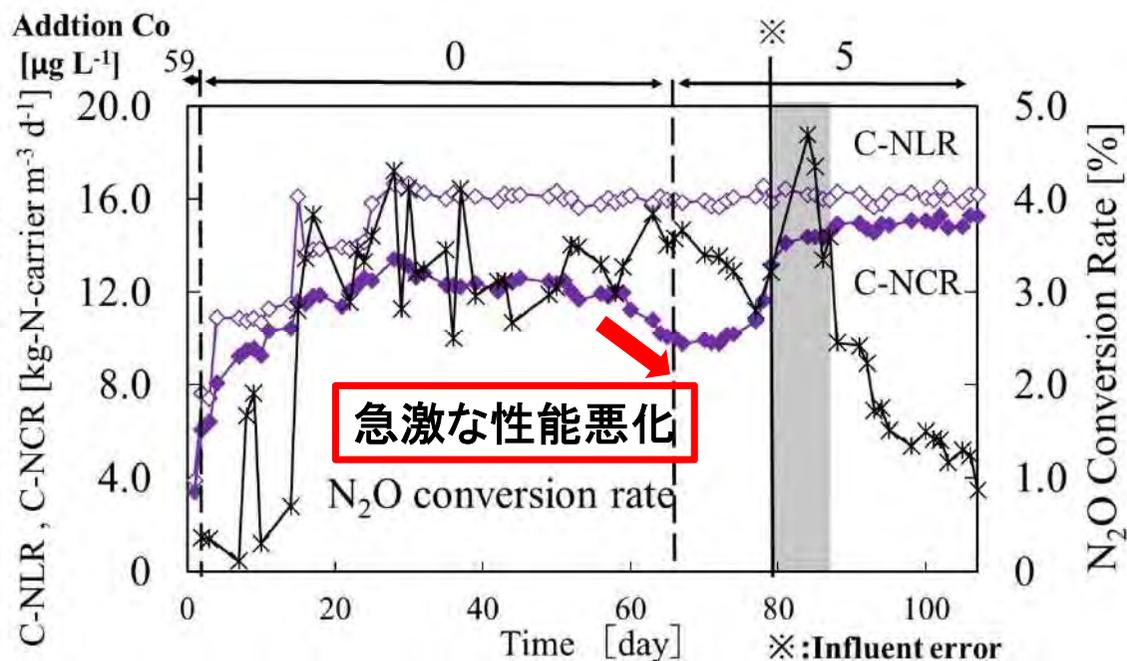
理工学部 教授 山崎宏史

①-3 処理性能評価



Coが減少すると活性が低下
わずか5ug L⁻¹添加で活性化

③-1 温室効果ガス評価

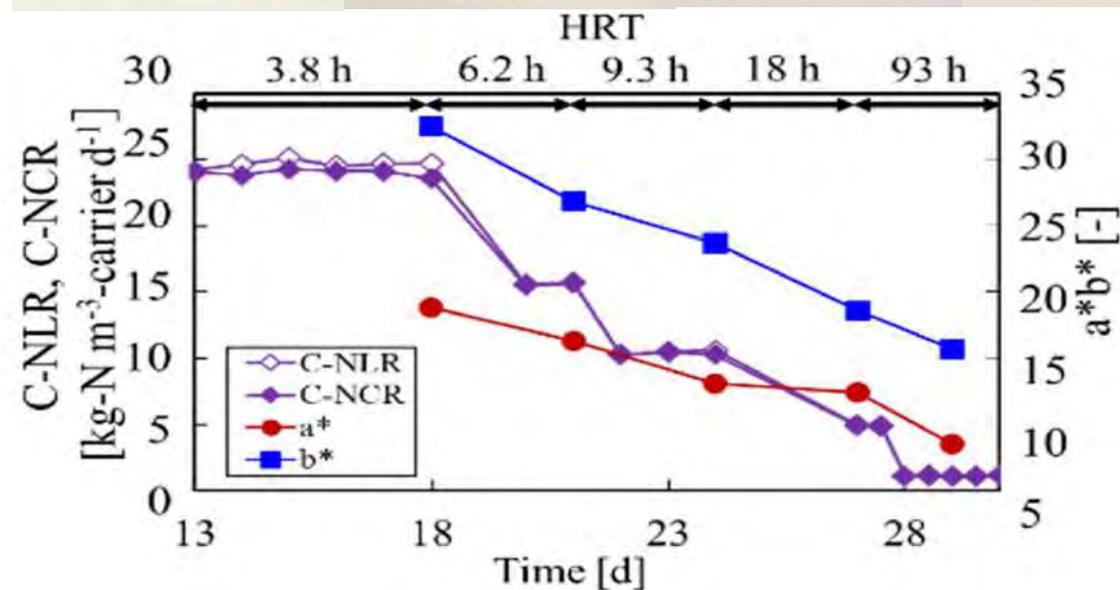
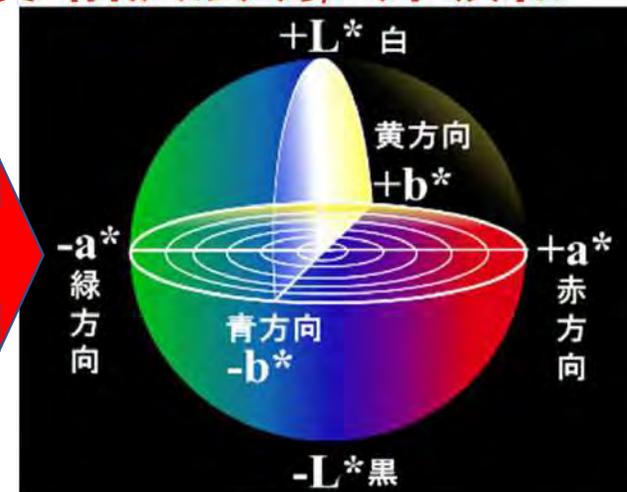


Coが減少するとN₂Oガスが増加
わずか5ug L⁻¹添加で発生抑制

②-2 センシング技術

特許出願

理工学部 准教授 相沢宏明 / 井坂和一



L*a*b*色空間 (CIE1976) : 最も一般的に色差測定に利用されている表色系

赤色を評価することで、
菌の活性を定量化

③-2 総合的経済性評価

(1) 下水処理の環境影響評価(LCA)の考え方調査

- ・ 原単位法、標準的プロセスにおける評価
- ・ 下水道における地球温暖化防止推進計画作成の手引き(国交省対策委)
- ・ 下水処理施設におけるライフサイクルアセスメントの考え方(土木技術) など

(2) 下水処理、アナモックスプロセスに関わるLCA研究動向調査

- ・ 原単位法を中心に文献収集・処理性能評価把握
- ・ ecoBallance2022出席・動向調査

(3) 市販評価ツールの適用性調査

- ・ デモ版の検証

次年度：基本評価指標の調査

排水処理試験パラメーターの反映

③-3 流域魚類への影響

(1) ウグイの生存確認に関する基礎的実験

経緯：微量元素の添加により排水処理システムが活性化

→排水処理システムの放流水中に微量元素が含まれる可能性

→排水処理試験の結果に基づき、特定の微量金属を添加

金属元素：Fe, Cu, Zn, Mo, Mn, Co, Ni, B, Se

試験濃度：3条件 + 無添加（コントロール）系



次年度：①感受性の異なる魚類での影響評価

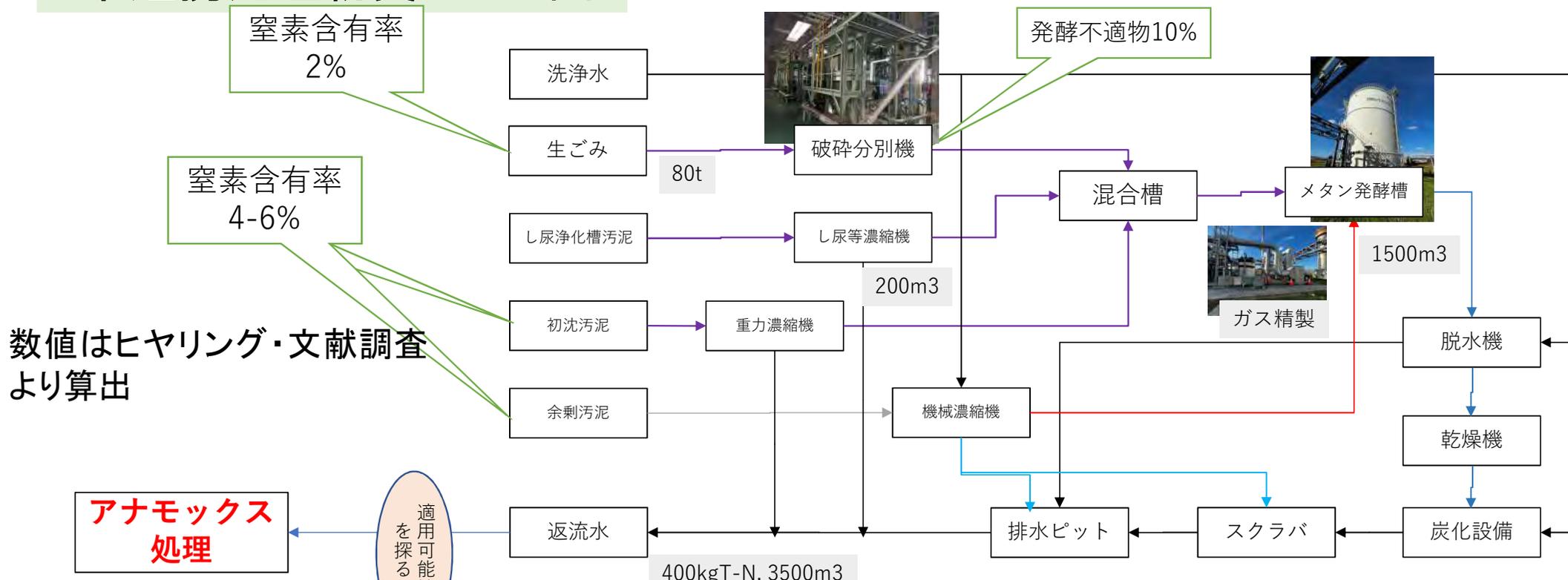
②濃度影響の評価

④-1 メタン発酵廃液

食品廃棄物の発酵排水への展開

A市連携処理物質フロー図

各プロセスのInputとOutputを調査し、数式化することにより、様々なレベルの施設に対応可能



次年度：アナモックス適用性を評価

④-2 海外技術展開

(1) アジア地域への技術移転の課題に関する調査研究

- ・ 衛生分野における世界の潮流の調査
- ・ 日本の衛生設備の歴史調査
- ・ 衛生分野の適正技術調査
- ・ 途上国における廃水処理の発展方策の提案

(2) アジア地域における水環境改善事業への参与型研究

- ・ ベトナムの繊維染色産業における廃水リサイクル事業
- ・ ベトナム染色産業における廃水リサイクルによる節水

(3) ADBIとの共同研修コースによる途上国技術者との協働

- ・ バングラデシュ、フィリピン、カンボジア、インドネシアの状況調査

(4) WIPOとの共同による知財の活用法の模索

次年度：海外適用における課題抽出

④-3 合意形成 → 国内ケースで検証

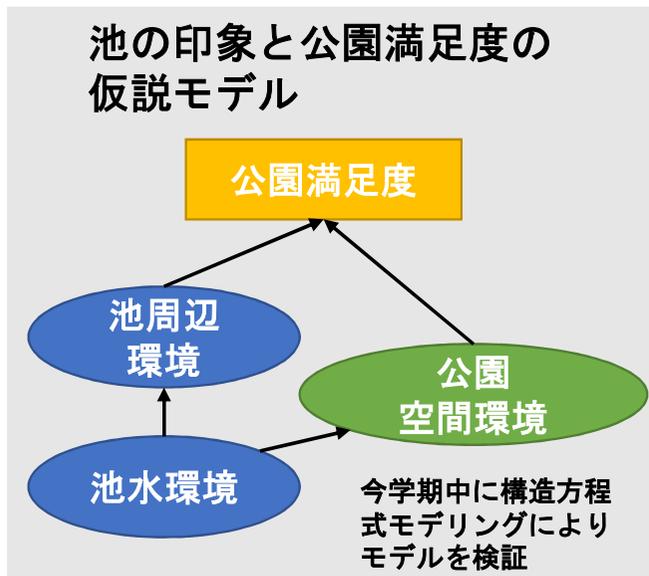
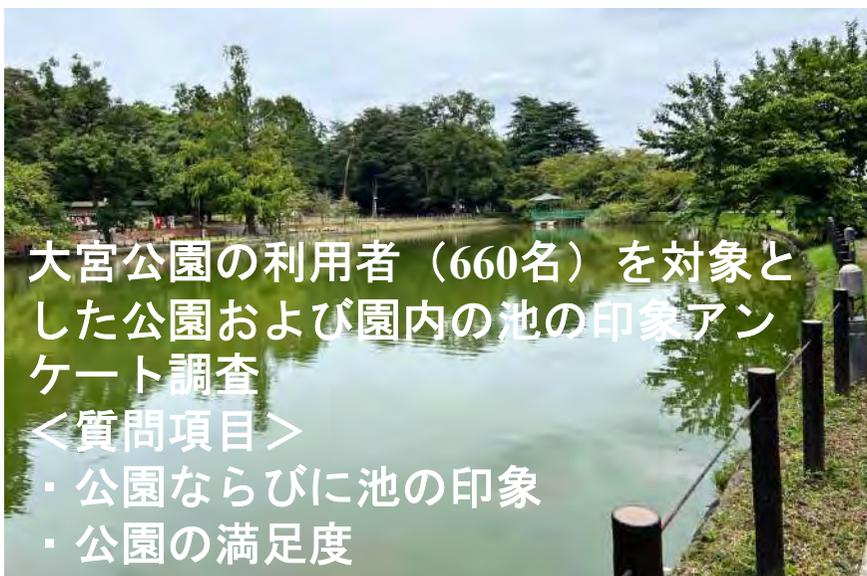
総合情報学部 教授 大塚佳臣

研究の狙い

排水処理システム導入に関し、市民との合意形成を図る上で、栄養塩制御による水質改善をもたらす効果や便益を定量的に把握する必要がある。

研究の方法

公園内に整備されている池（修景池）の印象が公園の満足度に与える影響を評価
 →修景池の水環境改善が公園のアメニティ価値にもたらす効果を検証



評価項目間の相関分析結果

池の水環境は池周辺環境・公園空間環境を介して公園満足度に影響を与えている？ ↑

	公園空間環境	公園施設・管理	公園生態系	池周辺環境	池水環境	池生態系	公園満足度
公園空間環境	1	.670**	.602**	.650**	.423**	.440**	.687**
公園施設・管理	.670**	1	.415**	.620**	.536**	.533**	.538**
公園生態系	.602**	.415**	1	.464**	.350**	.547**	.351**
池周辺環境	.650**	.620**	.464**	1	.747**	.670**	.576**
池水環境	.423**	.536**	.350**	.747**	1	.672**	.410**
池生態系	.440**	.533**	.547**	.670**	.672**	1	.349**
公園満足度	.687**	.538**	.351**	.576**	.410**	.349**	1

次年度：調査継続（水環境改善後の調査）

** p<.01

第3回 水のシンポジウム

～東洋大学重点研究推進プログラム 『安心な水を未来へ』～

講演会

2022年12月3日(土) 10:30～12:20
 東洋大学川越キャンパス 721教室*1 (Web同時配信*2)
 主催：東洋大学 水再生循環プロジェクト
 後援：東洋大学 工業技術研究所
 *1 新型コロナウイルス対応のため、学外の方は講演参加となります。
 *2 文末のURLからお申込みください。

<開会 ご挨拶> 10:30～10:35
 「東洋大学におけるSDGsの取り組み」
 矢口 悦子 (東洋大学 学長)

<基調講演> 10:35～10:55
 「これからの地域環境研究を考える」
 大原 利真 氏 (埼玉県環境科学国際センター 研究所長)

<研究発表> 11:00～12:00
 ～環境負荷を考慮した水循環～
 「水システムに対する住民意識」
 大塚 佳臣 (東洋大学 総合情報学部 教授)
 「微量金属による新しい微生物機能の制御手法」
 井坂 和一 (東洋大学 理工学部 准教授)
 「開発途上国の排水処理と適正技術」
 北脇 秀敏 (東洋大学 国際学部 教授)
 「微生物の系統分類学から水処理を考える」
 峯岸 宏明 (東洋大学 理工学部 准教授)
 「廃棄物と下水汚泥の連携処理の評価」
 後藤 尚弘 (東洋大学 情報連携学部 教授)

<パネルディスカッション (全体質疑)> 12:00～12:15

<閉会 ご挨拶> 12:15～12:20
 川口 英夫 (東洋大学 副学長)

沓瀧の王イワナ (さいたま水放流)
日光・千手が浜 蓮生教授 撮影
日光・草薙の滝 蓮生教授 撮影

第3回 水のシンポジウム

～東洋大学重点研究推進プログラム 『安心な水を未来へ』～

見学会

2022年12月3日(土) 13:30～15:30
 東洋大学川越キャンパス
 主催：東洋大学 水再生循環プロジェクト
 後援：東洋大学 工業技術研究所
 *日本水環境学会 産業排水の処理・回収委員会 見学会

<バイオ・ナノエレクトロニクス研究センター>
 ～センターのご紹介および研究設備の見学～
 13:30～14:00 (BMC 3棟)
 研究施設の説明・案内
 ・前川 透 (東洋大学 理工学部 教授)
 (バイオ・ナノエレクトロニクス研究センターセンター長)
 ・花尻 達郎 (東洋大学 理工学部 教授)
 (バイオ・ナノエレクトロニクス研究センター副センター長)

<研究紹介>
 ～生物学的排水処理方法の研究内容のご紹介～
 14:00～15:00 (2号館 2106教室)
 ・アナモックスプロセスにおけるP要求量の解明 (富崎大介)
 ・1,4-ジオキサン分解菌の単離・培養における課題 (島田彩未)
 ・アナモックスプロセスにおける微量元素とN₂O発生量の関係 (北原央士)
 ・アナモックス細菌の付着固定化における操作因子の検討 (染谷果穂)
 ・脱窒プロセスにおけるN₂Oガスの排出特性 (藤瀬公哉)

<研究設備の見学>
 ～環境工学研究室の見学～
 15:00～15:30
 ・連続排水処理試験室
 ・水質分析室
 ・分析機器室 (GC/MS)

沓瀧の王イワナ (さいたま水放流) 藤亦教授 撮影
日光・千手が浜 蓮生教授 撮影
日光・草薙の滝 蓮生教授 撮影

①プロジェクトのHP掲載 (8月2日 掲載)

<https://www.toyo.ac.jp/contents/research/tprp/>

本プロジェクトの概要を説明。微生物の培養から装置化までの構想を解説。



②WIPO GREEN ホームページ掲載 (9月14日 掲載)

https://www.wipo.int/about-wipo/en/offices/japan/news/2022/news_0044.html

国際機関であるWIPO（世界知的所有権機関）のデータベースWIPO GREENに登録された廃水発生等の環境負荷が少ない乳化物製造法に関し、特許権者の資生堂、製造委託先のシーエスラボ等と連携して学生起業プロジェクトを実施



○新聞掲載

研究活動が『日本経済新聞に3週連続で掲載』（～コラムSDGs世代～）

○展示会 3件

○JST新技術説明会

タイトル 「省エネ・省スペース型窒素廃水処理方法」
2022年9月13日

○イノベーション・ジャパン2022～大学見本市Online

タイトル 『省エネ・省スペース型窒素廃水処理方法』
2022年10月4日（火）～10月31日（月）

○ビジネスアリーナ2023

さいたまスーパーアリーナ + Online
タイトル （仮：安心な水を未来へ）
2023年2月8日（水）～2月9日（木）

（予定）

○New環境展

ビッグサイト

2023年5月24日（水）～5月26日（金）



○講演 4件

①第25回 日本水環境学会シンポジウム@東京大学

2022年9月7日 **井坂和一、山崎宏史**ほか

『アナモックスプロセスにおけるパラメータ解析による最適条件高度化』

②第23回 極限環境生物学会年会@東洋大学

2022年11月13日 **井坂和一**

『安心な水を未来へ ～有用細菌による排水処理技術の開発と普及に向けて～』



③2022年度東洋大学バイオレジリエンス研究プロジェクトシンポジウム

2022年4月23日 **北脇秀敏**

～ 極限環境微生物の先端科学をSDGs達成のために社会実装する研究～

『開発途上国の生活環境改善に向けて -SDGs3,6,11を中心に』

④第25回東洋大学ホームカミングデー2022

2022年10月30日 **北脇秀敏** (山本也寸子, 廣田健介, 安原宏明, 松原有美, 相澤真帆,)

『SDGs講演TOYO SDGs Students Project ～SUGOMORI BOISEN Project～』

○学会発表 28件

①第57回日本水環境学会年会@愛媛大学 計11件 2023年3月15～17日

- ・『都市公園内の池が公園の印象に与える影響の評価』

大塚佳臣

- ・『色彩計を用いた赤色評価指標によるアナモックス活性評価』

染谷果穂、相沢宏明、井坂和一

- ・『1,4-ジオキサン分解菌の菌種が及ぼす排水処理性能と動力学的特性』

島田彩未、染谷果穂、峯岸宏明、井坂和一ほか

- ・『異なる担体法における微量元素制限下での亜硝酸型硝化活性とN₂O発生量の評価』

濱邊亮、井坂和一、山崎宏史ほか

②第3回水のシンポジウム 見学会@東洋大学 計5件 2022年12月3日

- ・アナモックスプロセスにおけるP要求量の解明(富崎大介)

- ・1,4-ジオキサン分解菌の単離・培養における課題(島田彩未)

- ・アナモックスプロセスにおける微量元素とN₂O発生量の関係(北原央士)

- ・アナモックス細菌の付着固定化における操作因子の検討(染谷果穂)

- ・脱窒プロセスにおけるN₂Oガスの排出特性(廣瀬公哉)

○学会発表 28件

- ①第23回極限環境生物学会年会@東洋大学 計6件 2022年11月12～13日
- ・『アナモックスプロセスにおけるFe(II)とCu(II)の複合制限影響の解明』
濱邊亮、山崎宏史、井坂和一ほか
 - ・『1,4-ジオキサンを分解する混合細菌系における分解活性の評価と構成微生物の解明』
染谷 果穂、島田 彩未、峯岸 宏明、井坂和一
 - ・『化学工場の土壌から探索した1,4-ジオキサン分解菌の評価』
島田 彩未、染谷 果穂、峯岸 宏明、井坂和一
- ②日本水処理生物学会第58回熊本大会@熊本大学 計6件 2022年11月19～20日
- ・『微量元素制限が及ぼす亜硝酸型硝化活性とN₂O発生量への影響』
濱邊亮、山崎宏史、井坂和一ほか
 - ・『Fe(II)とCu(II)の複合制限が及ぼすアナモックス活性およびN₂O発生量への影響』
北原央士、井坂和一、山崎宏史ほか
 - ・『多様な1,4-ジオキサン分解系の獲得と生物叢および分解特性の評価』
島田彩未、井坂和一、峯岸宏明ほか

○論文7件（うち査読有5件）

- ① アジア地域等の環境再生保全のための衛生分野における適正技術の整備と課題、**北脇秀敏**、用水と廃水、64 pp.27-32（2022）
- ② パナマ共和国におけるヤブカ発生対策を目指したプラスチック製容器包装廃棄物のぬれ性に関する研究、**菌嶋ひとみ**、**眞子岳**、**田邊匡生**、**北脇秀敏**、マクロレビュー（査読有）34(2)-79-86（2022）
- ③ 付着担体を用いた硝化プロセスにおける高温条件の影響、**井坂和一**、**松岡秀美**、**大坂利文**、**常田聡**、日本水処理生物学会誌、（査読有）、58 pp.61-70（2022）
- ④ Hydrogel Adsorbents for the Removal of Hazardous Pollutants - Requirements and Available Functions as Adsorbent, **Yoshimi Seida**, Hideaki Tokuyama, Gels,（査読有）8, 220, pp.1-23（2022）.
- ⑤ Determination of Pore and Surface Diffusivities from Single Decay Curve in CSBR Based on Parallel Diffusion Model, **Yoshimi Seida**, Noriyoshi Sonetaka, Kenneth E. Noll and Eiji Furuya, Water（査読有）, 14, 3629, pp1-14(2022).
- ⑥ 温度応答型アミンゲルスラリーを用いるDACプロセスのモデル検討、NTS, 二酸化炭素有効利用技術～DACから物質合成、産業利用まで～, 杉本裕監修、第1編 ダイレクトエアキャプチャー（DAC）、第1章、12-18、(株)エヌ・ティー・エス、**清田佳美**、**永澤優馬**、**天野優斗**、**古谷英二**（2022）
- ⑦ マテリアルフローコスト会計（MFCA）の継続的実践に向けた適用拡大－排水プロセスシミュレータとの融合と故障リスク評価－, 西村総介・大月孝之・**後藤尚弘**・花木啓祐, 環境科学会誌（査読有）、35巻4号. 2022.

内容 3 件

- ①博士後期課程：博士後期課程1年生（応用化学専攻：小泉氏）を雇用し、アナモックス細菌および硝化細菌の定量手法を検討。定量PCR法による検討を実施中。
- ②博士前期課程：博士前期課程1年生（応用化学専攻：富崎・島田・北原・染谷・廣瀬氏）の5名学生が、民間企業の研究者を集めた見学会にて、各自の研究内容を発表。実用的な観点から厳しい質問を受けるが、質疑への対応力を学ぶと共に、各自の研究計画へ反映。
- ③博士後期課程学生（学位取得）：大手水処理メーカーである栗田工業の西村総介氏（博士後期課程3年）が学位を取得（指導教官：後藤尚弘教授）、食品廃棄物発酵排水を処理するシステムに関するシミュレーションモデルを構築。



本学内には 水をテーマに連携できる 先生方が多数 横に繋げる シンボル(プラント) が必要

理工学部

- 峯岸先生
- 田代先生
- 相沢先生
- 山崎先生
- 青木先生

総合情報学部

- 大塚先生

生命科学部

- 高品先生
- 三浦先生
- 伊藤先生
- 鳴海先生
- 道久先生
- 東端先生

情報連携学部

- 花木先生
- 後藤先生
- 中村先生
- 平松先生
- 青木先生

国際学部

- 北脇先生
- 荒巻先生
- 志摩先生

経済学部

- 清田先生
- 鈴木先生
- 経済学研究科
- 根本先生



環境に責任を持つには、ものづくりが必須

水処理プラントという1つの課題を通じて全学研究が有機的に融合 国内外への技術支援プラットフォーム

“水”をキーワードとした東洋大学の新たなブランドイメージ



6 安全な水とトイレ
を世界中に



7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



13 気候変動に
具体的な対策を



14 海の豊かさを
守ろう



安心な水を未来へ

～有用細菌による排水処理技術の開発と普及に向けて～

Safe Water for Future

Development and practical application of energy-saving wastewater treatment system using effective microorganisms

ご清聴ありがとうございました。



2022年度重点研究推進プログラム研究成果報告会

レジリエントな社会に向けた SDGsの包摂的実現に関する研究 (2022年度～2024年度)

2023年2月7日

東洋大学国際共生社会研究センター

センター長 松丸 亮



研究主体： 東洋大学国際共生社会研究センター (Center for Sustainable Development Studies)

・スキームと設置期間

期	事業名	設置期間
1期・2期	オープン・リサーチ・センター整備事業(文部科学省)	2001～2008年度
3期	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(文部科学省)	2010～2014年度
4期	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(文部科学省) アジア・アフリカにおける地域に根ざしたグローバル化時代の国際貢献手法の開発	2015～2019年度
5期	東洋大学重点研究推進プログラム 開発途上国における生活環境改善による人間の安全保障の実現に関する研究	2019～2021年度
6期	東洋大学重点研究推進プログラム レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究 (2022年度予算:2,000万円)	2022～2024年度

研究主体となる組織の特徴

- 文系・理系がほぼ同数で学際的な研究員構成
 - 2022年度後半から国際学研究科所属以外の教員も研究員として参画。
 - 全学横断を目指す。
- SDGsの各ゴールに複合的に対応
- 国内外の客員研究員が所属
- 外部資金の獲得と産官学連携



研究の目的・目標

これまでの研究キーワードである「**サステナブル(持続可能)**」に、「**レジリエント**」という**新たな視点を加え**、センターが担う実践型研究のプラットフォーム機能を文理融合・産官学連携の促進などの形でより強化することで、

- **包摂的なSDGsの実現に向けた実践的研究を深化させること。**
- **実践成果の地域・分野展開にかかる研究を加速させること。**
- 多分野の専門家(研究員+関係者)で構成される複数のチームが日本、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、中南米、大洋州といった諸地域で、本学への留学経験者(主として現地大学の研究者や政府機関の官僚)や民間企業や団体、JICA協力隊員(本学現役院生)とも連携しながら、レジリエントでサステナブルな社会の構築という共通の目標に向けた研究に取り組む。

研究の背景

- 日本におけるSDGs関連研究の発表論文数は増加傾向。
- 論文数が多い研究テーマ。
 - ゴール3「すべての人に健康と福祉を」
 - ゴール7
「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」
 - ゴール13「気候変動に具体的な対策を」
- ゴール1「**貧困**」に関連する論文が最も少ない。
- ゴール5「**ジェンダー**」を扱う論文も少ない傾向。
- 今後のSDGs研究には、**ジェンダーの視点の導入と分野間の連携不足を解消する必要性**を指摘。

『The Power of Data to Advance the SDGs』（過去5年間のSDGs関連研究の動向調査、エルゼビア、2020）

- 
- これまでセンターでは、**貧困削減、ジェンダー**といったSDGs研究の中でも不足が指摘されている分野の研究を実施
 - 文理融合・学際的なセンターという特徴を活かした**分野間連携による研究**を実施
 - 本重点研究においてもそれを深化させる予定。



SDGs研究の動向からみても
意義がある研究

研究者(学内専任教員:17名)

所属・職	研究者名	研究プロジェクトにおける役割(担当)
国際学部・教授	松丸 亮	総括、国内外の途上国における防災・減災・復興に関する研究 (SDGs 9 11 13)
国際学部・教授	荒巻 俊也	途上国における環境インフラの計画論・改善手法に関する研究 (SDGs 6 7 11 12 13 14)
国際学部・教授	岡村 敏之	都市公共交通の改善と利用促進に関する研究(SDGs 9 11 13)
国際学部・教授	岡本 郁子	村落開発を通じた住民の生計向上に関する研究 (SDGs 1 2)
国際学部・教授	北脇 秀敏	途上国における保健・衛生・生活環境に関する研究 (SDGs 3 6 11 17)
国際学部・教授	坪田 建明	社会の包摂化と持続可能化に関する研究 (SDGs 7 8 9 12)
国際学部・教授	中村 香子	アフリカでのジェンダー役割変容に関する研究 (SDGs 5 10)
国際学部・教授	沼尾 波子	多文化共生社会の形成に向けた地域政策に関する研究 (SDGs 8 16)
国際学部・教授	藤本 典嗣	地理情報を用いた途上国の持続可能な都市システム発展に関する研究 (SDGs 8 11)
国際学部・教授	藪長 千乃	福祉政策の地域比較と地域展開に関する研究 (SDGs 3 5 10)
国際学部・准教授	志摩 憲寿	途上国での都市空間の計画手法に関する研究 (SDGs 9 11)
国際学部・准教授	花田 真吾	先進国と途上国による国際教育研究連携に関する研究 (SDGs 4 8)
国際学部・准教授	金子 聖子	途上国での難民受け入れと教育に関する研究 (SDGs 4 10 16)
国際観光学部・教授	佐野 浩祥	持続可能な観光まちづくりに関する研究 (SDGs 9 11)
社会学部・准教授	小野 道子	南アジアの子どもたちの安全保障に関する研究 (SDGs 4 10 16)
理工学部・准教授	神山 藍	山間地の都市計画と景観工学に関する研究 (SDGs 11 14)
ライフデザイン学部・准教授	富安 亮輔	災害時の居住空間に関する研究 (SDGs 3 11)

全体工程

		2022年度				2023年度				2024年度			
		1期	2期	3期	4期	1期	2期	3期	4期	1期	2期	3期	4期
研究プロジェクト (研究員・研究グループ により実施)		地域づくり SDGs 8, 9, 10, 11, 13, 15, 16 研究分野: 都市計画、都市地理学、住宅、防災											
		上下水道・環境 SDGs 3, 6, 7, 11, 12, 14, 15 研究分野: 生活環境改善、廃棄物処理、都市間比較											
		交通・物流 SDGs 1, 7, 9, 11, 13 研究分野: 都市公共交通、海運											
		教育・職業 SDGs 1, 3, 4, 8, 10, 16, 17 研究分野: 難民受け入れ、国際教育、日本国内の技能実習生											
		ジェンダー・福祉 SDGs 5, 10, 16 研究分野: 子育て、家庭、途上国の女性											
実践プロジェクト		アジア(ミャンマー・カンボジア)											
		アフリカ(ケニア・ルワンダ)											
		中南米(パナマ)											
アウトリーチ 活動	学術論文の執筆	→											
	国際シンポジウム												◎
	シリーズセミナー	○		○	○	○		○	○	○	○		
	研究集会 (ワークショップ)		○		○		○		○	○			
	書籍刊行												○
人材育成	研究助手・RAの雇用	→											

【1】2022年度実績 -前重点研究から継続研究プロジェクト

《上下水道・環境》

- ミャンマー・インレー湖における環境悪化要因の分析と住民主体の環境型環境改善手法の構築(2023年度はミャンマー情勢により一時休止を予定)
- サブサハラにおける村落給水事業

《ジェンダー・福祉》

- CopaGloba親になる過程におけるコペアレンティングの認識の形成に焦点を当てた縦断的国際比較研究

《その他》

- 産学連携・学生起業プロジェクトによる環境に優しい製品開発プロジェクト

【1】2022年度実績 -新規研究プロジェクト

《地域づくり》

- 小規模人道支援がもたらす循環型インパクトに関する研究 –“Buy One Give One”事業からみる新しい支援のかたち-
- 中山間地域の地域資源を活用した地域活性化にかかる研究(日本、ベトナム、イタリア)
- 自然災害被災者の生活環境改善にかかる研究

《交通・物流》

- 開発途上国における私的交通依存下での公共交通と徒歩への転換に向けた基礎的研究

《ジェンダー・福祉》

- 東洋大学における「MeW (Menstrual Wellbeing by/in Social Design) Project」の展開

【1】2022年度実績 ー実践プロジェクトの提案

- 中山間地域の地域資源を活用した地域活性化にかかる研究（日本、ベトナム、イタリア）のうち、ベトナムでの研究活動を実践活動とすべく、**NPO 法人AVENUEと連携し、JICA草の根技術協力事業に**

『ベトナム中山間地域における「なりわい」おこしの観光プログラム事業』

として提案書を提出（現在審査中）。

【1】2022年度実績 –アウトリーチ活動①

• CeSDeS Open Seminar on SDGsの開催

回	日にち	セミナータイトル	参加者数
1	2022年5月13日	How the coup in Myanmar has disrupted its progress of meeting the SDGs (担当：岡本)	約60名
2	2022年10月31日	「MeW Project」一月経をとりまく諸問題に光をあてる試み (担当：中村)	約100名
3	2023年2月4日	親への移行期におけるコペアレンティングの構築：産前カップルへの調査結果から (担当：藪長)	約100名 (教室20、オンライン80)

• ニュースレターの発行(和文：年3回・英文：年2回)

- 和文：57号(2022年7月)、58号(2022年10月)、59号(2023年1月)
- 英文：38号(2022年9月)、39号(2022年11月)

• CeSDeS Mail Newsの配信開始

- 登録アドレス約450件
(関連分野の研究者、大学等研究機関のSDGs担当部門、企業・自治体等)



東洋大学国際共生社会研究センター主催
第1回 CeSDeS Open Seminar on SDGs

How the coup in Myanmar has disrupted its progress of meeting the SDGs

日時：5月13日（金）13:00～15:00

場所：オンライン配信

講演：岡本郁子（東洋大学国際共生社会研究センター 研究員、国際学部 教授）
Marie Lall（University College London教授）

司会：松丸亮（東洋大学国際共生社会研究センター センター長、国際学部 教授）

プログラム

1. 開会のあいさつ+趣旨説明
2. 講演1 岡本郁子 研究員
3. 講演2 Marie Lall 教授
4. 質疑応答+講演者ディスカッション
5. 総括
6. 閉会のあいさつ

※全て英語によるプログラムです。



オンライン配信の視聴URLはHPにてご確認ください。
<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/0513/>



ディスカッションの様子

東洋大学国際共生社会研究センター主催
第2回 **CeSDeS Open Seminar on SDGs**

「MeW Project」

—月経をとりまく諸問題に光をあてる試み

日時：10月31日（月）14:45～16:15

場所：ハイブリッド（対面式・オンライン）
対面式会場：東洋大学白山キャンパス8号館8601号室

講演1. 「月経をめぐる今日的なグローバルなムーブメント」

センター客員研究員、大阪大学大学院人間科学研究科 杉田映理

講演2. 「進化したサニタリーボックスと生理用品の廃棄への問題提起」

日本カルミック 西島一男

—質疑応答—

講演3. 「大阪大学におけるMeWプロジェクト」

大阪大学大学院人間科学研究科大学院生 小塩若菜

講演4. 「東洋大学におけるMeWプロジェクトの始動」

センター研究員、東洋大学国際学部 中村香子
東洋大学国際学部4年生 坂本楓

—質疑応答—

司会・コメント：内田力（センター研究助手）

オンライン配信の視聴URLはHPにてご確認ください。
<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/1031/>



杉田 映理客員研究員



質疑応答

東洋大学国際共生社会研究センター主催

第3回CeSDeS Open Seminar on SDGs 親への移行期におけるコペアレンティング の構築：産前カップルへの調査結果から

2023年2月4日（土）

15:00～17:00

使用言語：日本語

形式：ハイブリッド

対面会場 東洋大学白山キャンパス8号館8601号室

オンライン配信 視聴URLはHPをご確認ください

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/0204/>

■ プログラム

挨拶 岡本郁子（副センター長、国際学部教授）

趣旨説明「コペアレンティング国際共同研究とその意義」

藪長千乃（センター研究員、国際学部教授）

基調講演 アンナ・ロンカ（フィンランド・ユヴァスキュラ大学教授）

「フィンランド、日本、ポルトガルの産前カップルにおけるコペアレンティングへの期待：
普遍的パターンと国別パターン」（Coparenting expectations among Finnish, Japanese and
Portuguese expectant parents: universal and country-specific patterns）」
※録画・日本語字幕付き

講演1 伊藤大将（センター客員研究員）

「アクセンビリティを確保するために：第一子を妊娠中のカップルに対するインタビュー調査」

講演2 矢田明恵（センター客員研究員）

「出産前コペアレンティング関係尺度の信頼性・妥当性の検証：
フィンランド・ポルトガルとの国際比較研究」

講演3 高松宏弥（センター客員研究員）

「コペアレンティングをめぐる日本・フィンランド・ポルトガルにおける
社会文化的文脈の比較検討：公的統計データと世界価値観調査データに着目して」

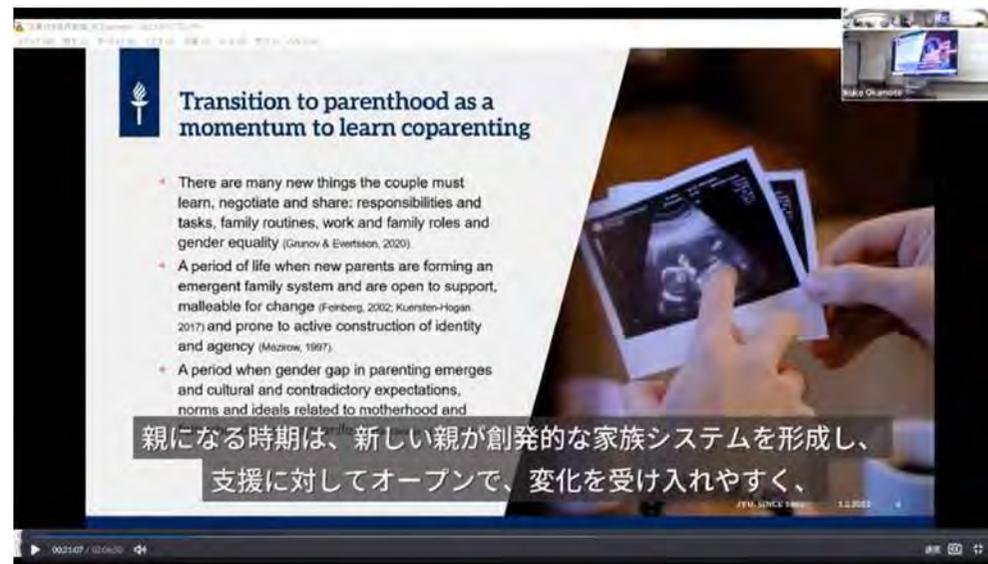
ディスカッション

森田明美（東洋大学名誉教授）・中村康香（東北大学准教授）

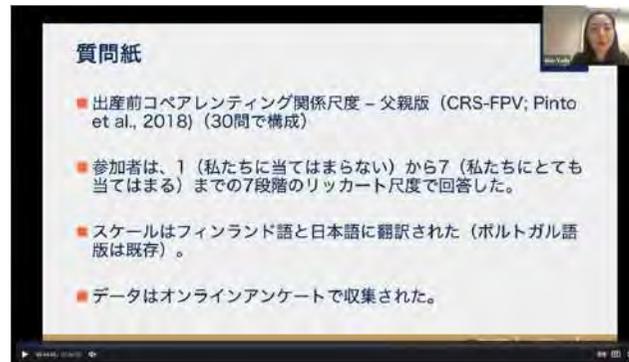
総括 藪長千乃（センター研究員、国際学部教授）

セミナーHP

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/0204/>



基調講演



報告



ディスカッション

ニュースレター

東洋大学
国際共生社会研究センター



NEWSLETTER

No.57 July 2022

新研究プロジェクト「レジリエントな社会に向けたSDGsの
包摂的実現に関する研究」の開始にあたって

センター長 坂丸 勇



東洋大学国際共生社会研究センター（以下、センター）は、2007年の創設以来、持続可能な発展目標（SDGs）の達成に向けた研究に力を入れています。長年、SDGsの達成に向けた研究に力を入れています。2022年7月の新研究プロジェクト「レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究」の開始にあたって、センター長 坂丸 勇のコメントをご紹介します。

2022年7月18日、東洋大学国際共生社会研究センターで、新研究プロジェクト「レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究」の開始にあたって、センター長 坂丸 勇のコメントをご紹介します。

新研究プロジェクトは、SDGsの達成に向けた研究に力を入れています。2022年7月の新研究プロジェクト「レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究」の開始にあたって、センター長 坂丸 勇のコメントをご紹介します。

Newsletter No.57 July 2022

東洋大学
国際共生社会研究センター



NEWSLETTER

No.58 October

第1回オープンセミナー（CeSDeS Open Seminar on SDGs）の開催

副センター長 岡本 耕平



今年度より東洋大学国際共生社会研究センターは、新研究プロジェクト「レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究」を開始しました。このプロジェクトの推進に際しては、関係者の多くが協力して取り組むことが重要です。本ニュースレターでは、第1回オープンセミナー（CeSDeS Open Seminar on SDGs）の様子をご紹介します。

第1回オープンセミナーは、7月18日に開催されました。このセミナーでは、SDGsの達成に向けた研究の現状と今後の展望について、関係者の多くが意見を交わしました。

セミナーでは、SDGsの達成に向けた研究の現状と今後の展望について、関係者の多くが意見を交わしました。このセミナーでは、SDGsの達成に向けた研究の現状と今後の展望について、関係者の多くが意見を交わしました。

Newsletter No.58 October 2022

東洋大学
国際共生社会研究センター



NEWSLETTER

No.59 January

子育てにおける親同士の協力を国際比較する
「コバ・グローバル（親になる過程におけるコバ
形成に焦点を当てた縦断的国際比較研究）」

客員研究員 伊藤

本ニュースレターでは、子育てにおける親同士の協力を国際比較する「コバ・グローバル（親になる過程におけるコバ形成に焦点を当てた縦断的国際比較研究）」についてご紹介します。この研究は、子育てにおける親同士の協力を国際比較することを目的としています。

Center for Sustainable
Development Studies
Toyo University



NEWSLETTER

No.38 September 2022

New Three Year Project "Research on Development of Resilient
and Sustainable Society through Inclusive Implementation of SDGs"
Started!

Ryo MITSUHASHI, Director



Since its founding in 2007, the Toyo University Center for Sustainable Development Studies has been conducting research on the development of resilient and sustainable society through inclusive implementation of SDGs.

In 2022, we started the general research of the "Research on Development of Resilient and Sustainable Society through Inclusive Implementation of SDGs" project.

Newsletter No.38 September 2022

英文38・39号

Center for Sustainable
Development Studies
Toyo University



NEWSLETTER

No.39 November 2022

1st CeSDeS Open Seminar on SDGs

Kazu OKAMOTO, Deputy Director



The Toyo University Center for Sustainable Development Studies began a three-year research project titled "Research on Development of Resilient and Sustainable Society through Inclusive Implementation of SDGs" in July 2022.

In 2022, we started the general research of the "Research on Development of Resilient and Sustainable Society through Inclusive Implementation of SDGs" project.

Newsletter No.39 November 2022

和文57号～59号

CeSDeS Mail Newsの配信

東洋大学国際共生社会研究センターから、プロジェクトやイベントの情報をお届けしております。今回はセンターのニュースレター和文59号発行のお知らせです。

※本メールニュースでは、東洋大学国際共生社会研究センターの関係者のみなさまに、センターの情報をお届けしております。配信は月1回程度です。配信解除を希望する方は最下部の「配信停止」ボタンよりお知らせください。

東洋大学
国際共生社会研究センター

Center for Sustainable Development Studies



NEWSLETTER

No.59 January

子育てにおける親同士の協力を国際比較する
-コパ・グローバ（親になる過程におけるコペアレンティング認識の
形成に焦点を当てた縦断的国際比較研究）プロジェクト報告-

研究員 敷長千乃

東洋大学国際共生社会研究センターから、プロジェクトやイベントの情報をお届けしております。今回は第3回CeSDeS Open Seminar on SDGsのお知らせです。

※本メールニュースでは、東洋大学国際共生社会研究センターの関係者のみなさまに、センターの情報をお届けしております。配信は月1回程度です。配信解除を希望する方は最下部の「配信停止」ボタンよりお知らせください。

第3回CeSDeS Open Seminar on SDGsを開催いたします。

親への移行期におけるコペアレンティングの構築：産前カップルへの調査結果から

開催日：2023年2月4日 土曜日 15:00~17:00

言語：日本語

場所：ハイブリッド（対面式・オンライン）

対面式会場：東洋大学白山キャンパス8号館8601号室

※ 対面式での参加希望者は下記宛に

「氏名・所属（調査参加者の場合はその旨）」を明記してお申し込みください。

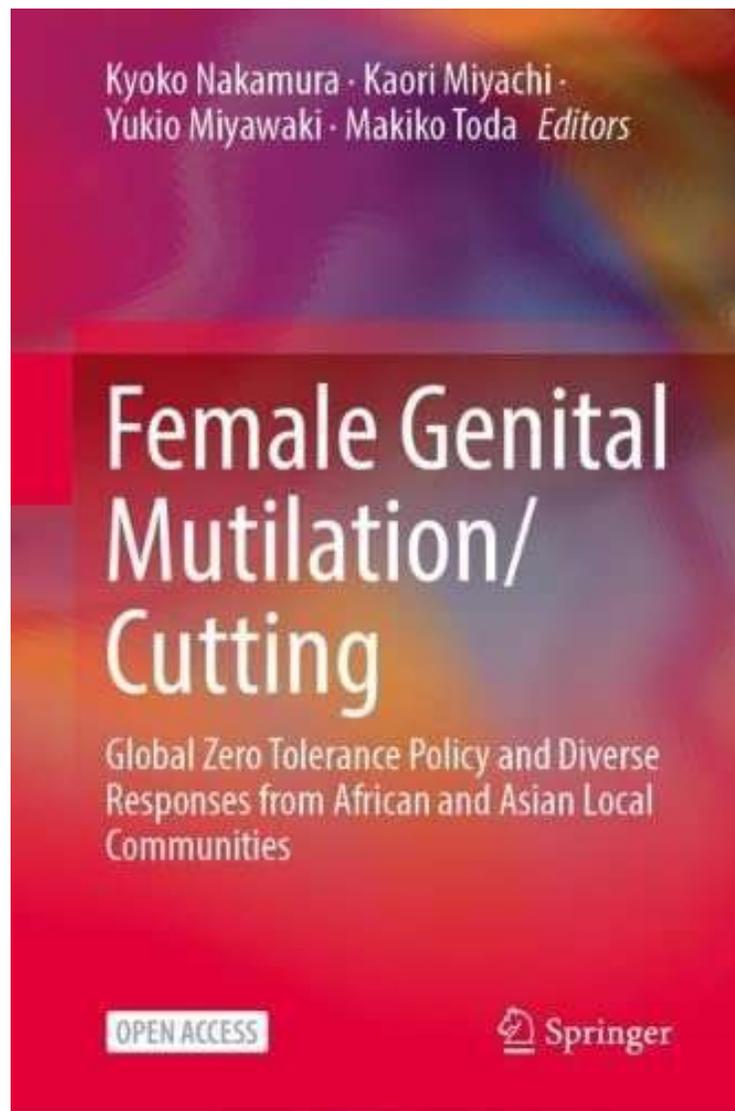
メール宛先：cesdes_sec@toyo.jp 【2月4日 11:00〆切】

当日は1階窓口でご記帳のうえ、会場へお越しください。

オンライン：Zoom配信（相隣URLはHPをご確認ください）

【1】2022年度実績

ーアウトリーチ活動②書籍の出版



《目次》

1. Global Discourse and the Patriarchal Norms of FGM: Beyond the Zero Tolerance Policy
2. Virtuous Cuts: Female Genital Circumcision in an African Ontology
3. How Did the Discourses of Globalized Eradication Campaign Reach Grassroots Communities? Female Genital Cutting and Its Eradication Activities among the Yellow Bull in Ethiopia
4. Cursed or blessed? Female Genital Cutting in the Gamo Cultural Landscape, South Western Ethiopia
5. Female Circumcision in Transformation: Medicalization and Ritual Changes among Gusii People in Western Kenya
6. A Grassroots Movement to Eradicate Female Genital Mutilation/Cutting and the Local's Reaction: A Case Study of the Maasai, Kenya
7. An Ethnography of Diversity and Flexibility around Female Circumcision and Female Genital Mutilation/Cutting: A Case of a Local Community Response to the Abolition Movement of Kenya
(Nakamura, Kyoko)
8. Genealogy of the Movement to Abolish FGC in Sudan: Focusing on the Role of Religion **(Abdin, Mohamed)**
9. Female Genital Cutting in Asia: A case of Malaysia
10. Female Genital Cutting in Southeast Asia from the Viewpoint of the Female Body and Sexuality
11. The Role of Men in the Abandonment of FGM/C
12. Autonomy and Bodily Integrity and Male Circumcision

オープンアクセスでの刊行

【1】2022年度実績 –産官学連携プロジェクトの実施

- サブサハラにおける村落給水事業
 - 国際NGOワールド・ビジョン・ジャパンが、日本政府のNGO連携無償資金協力でタンザニアで実施している給水事業との連携
- 産学連携・学生起業プロジェクトによる環境に優しい製品開発プロジェクト
 - 資生堂(WIPO-Green搭載特許)、シーエスラボ(製品製造)、学生起業グループ、学内他部署等(全学SDGs推進委員会、産官学連携推進センター、生命科学研究所)と製品開発・販売で連携
- 小規模人道支援がもたらす循環型インパクトに関する研究
 - ベトナム等の無電化村落における生活改善インパクトに関する研究をランドポート株式会社(ソーラーランタン開発・提供)と連携
- 中山間地域の地域資源を活用した地域活性化にかかわる研究
 - 研究対象国の1つであるベトナムでの実践・研究プロジェクトの実施のためNPO法人AVENUEと連携しJICA草の根技術協力事業に提案書を提出(審査中)

【2】異分野融合・オープンイノベーション

① 産官学連携プロジェクト (SDGs 3, 9)

- 資生堂技術知財部、全学SDGs推進連絡会、産官学連携推進センターおよび生命科学研究科、シーエスラボとのWIPO-Green登録技術を活用した学生起業によるSDGsへの貢献プロジェクト
- 2022年度は、ハンドセラム商品「BOISEN」の試作品の使用感アンケートをもとに製品改良を進めた
- 2023年3月、製造量と省エネルギー・節水効果の関係に関する実証実験をシーエスラボに委託。「BOISEN」の本格製品化にむけて大きく前進。
- Withコロナ時代のコスメ新製品の開発、途上国への裨益、SDGsへの貢献、本学の学生起業支援



Beauty
Original
| Immediately
SDGs
Environment
Natural



BOISEN
beauty hand serum



モニター用サンプル

・お肌に合わないときは、ご使用をおやめください。
・お肌に異常が生じていないかよく注意してご使用ください。
本品に関するお問い合わせ先
株式会社シーエスラボ
お客様センター フリーダイヤル
0120-484-728 (平日 9:00~17:00)

TOYO SDGs Students Project



アンケートにお
協力ください

【2】異分野融合・オープンイノベーション

② コペアレンティングに関する縦断的国際比較研究 (SDGs 3, 4, 5, 8)

- 親になる過程（出産前後）で、コペアレンティングに関する認識をどのように形成するかを明らかにすることを目的とした、日本、フィンランド、ポルトガルの3か国が参加する国際比較調査。
- フィンランド(ユヴァスキュラ大学、ユヴァスキュラ応用科学大学)、ポルトガル(ポルト大学)と共同研究
- 世界初の本格的なコペアレンティングの国際比較研究
- 今年度は第一子出産を控えたカップルを対象に、インタビュー調査とアンケート調査を継続するとともに、調査で得られた知見の分析や成果発表を進めた



コペアレンティング国際共同研究
ニュースレター 第1号
CopaGlobaJAPAN Newsletter

コペアレンティング国際共同研究インタビュー
調査参加者の皆様・ご協力者の皆様へ

2月上旬に出産前インタビューが終了しました。
皆様のご協力で44組の方からお話を伺うことが
できました。心から感謝申し上げます。
インタビューの結果や皆様・スタッフの様子などを
ニュースレターにてお伝えしていきます。
これからもどうぞよろしくお願いいたします。

2021年2月
コペアレンティング国際共同研究チーム一同

ニュースレター第1号の内容

- ・生後4-6か月アンケートを開始しました。
ご回答いただいた方のお声の中から、さつき
く一部をお届けします。
- ・今後のスケジュールについてご案内します。

【3】若手研究者の育成

- ポスドクを**研究助手・研究支援者**として採用
 - 刊行書籍・ニュースレター等の準備、センター主催のセミナー、
 - RA・客員研究員・アルバイトの人的管理
- 博士後期課程の学生をリサーチアシスタントとして雇用
(2022年度は計8名を雇用)

次年度の活動方針

① 研究プロジェクト

- レジリエントな社会に向けた実践モデルの詳細検討
- 地域・分野展開に向けた検討
- 2024年度刊行予定書籍の出版準備
(2023年度前半までに全体コンセプト確定、2023年度末までに執筆完了)
- 事務局のプラットフォーム機能をさらに強化
(研究の連携や地域・分野展開に必要な人的交流、新規研究プロジェクトの準備)

② 研究アウトリーチ活動の継続

- CeSDeS Open Seminar on SDGsの開催(年3回)
- ニュースレターの発行・CeSDeS Mail Newsの配信

③ 産官学連携の強化

ご静聴ありがとうございました

日常生活を豊かにするための デジタルトランスフォーメーション（DX）の研究

A Research on Digital Transformation (DX)
to Enrich Our Daily Lives

2022年度 研究成果報告

研究代表者：中村周吾

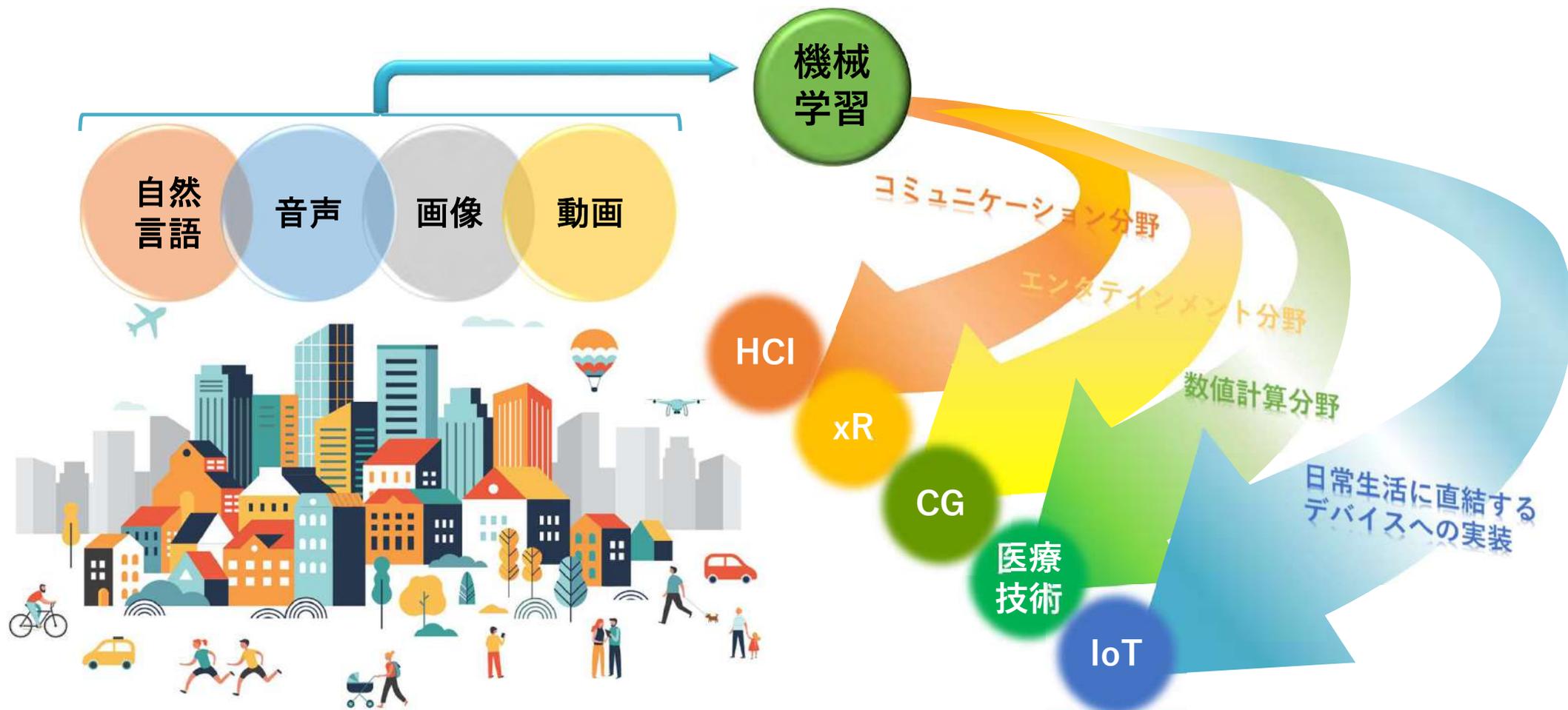
Project Leader: Shugo Nakamura

プロジェクトの目的

- 社会のデジタルトランスフォーメーション(DX)が注目されているが、現在のDXの方向は提唱者が述べた「人々の生活をあらゆる面で良い方向に変化させる」とはズレている
 - 産業社会としての効率化や構造変革に焦点があたっている
 - ロボットが人間の仕事を奪うという危機意識を持つ人もいる
 - アルゴリズムによるニュース記事選択により社会の分断が進んでいる可能性がある
- 機械学習の手法は日進月歩で登場しているが、応用先は限定的で、実社会にどう適用するのか、人々の生活がより良くなるのかまで議論されているものは少ない
 - 国際的な研究力を高める上で、大規模データを用いた学習を行うためには計算リソースが不可欠
 - 生活と密接に関わるIoTデバイスからデータを収集し、サーバーで再学習するフレームワークが必要

研究目的

- DX本来の視点にもとづいて機械学習の応用事例を推進し、技術的にも新たな基盤をつくること



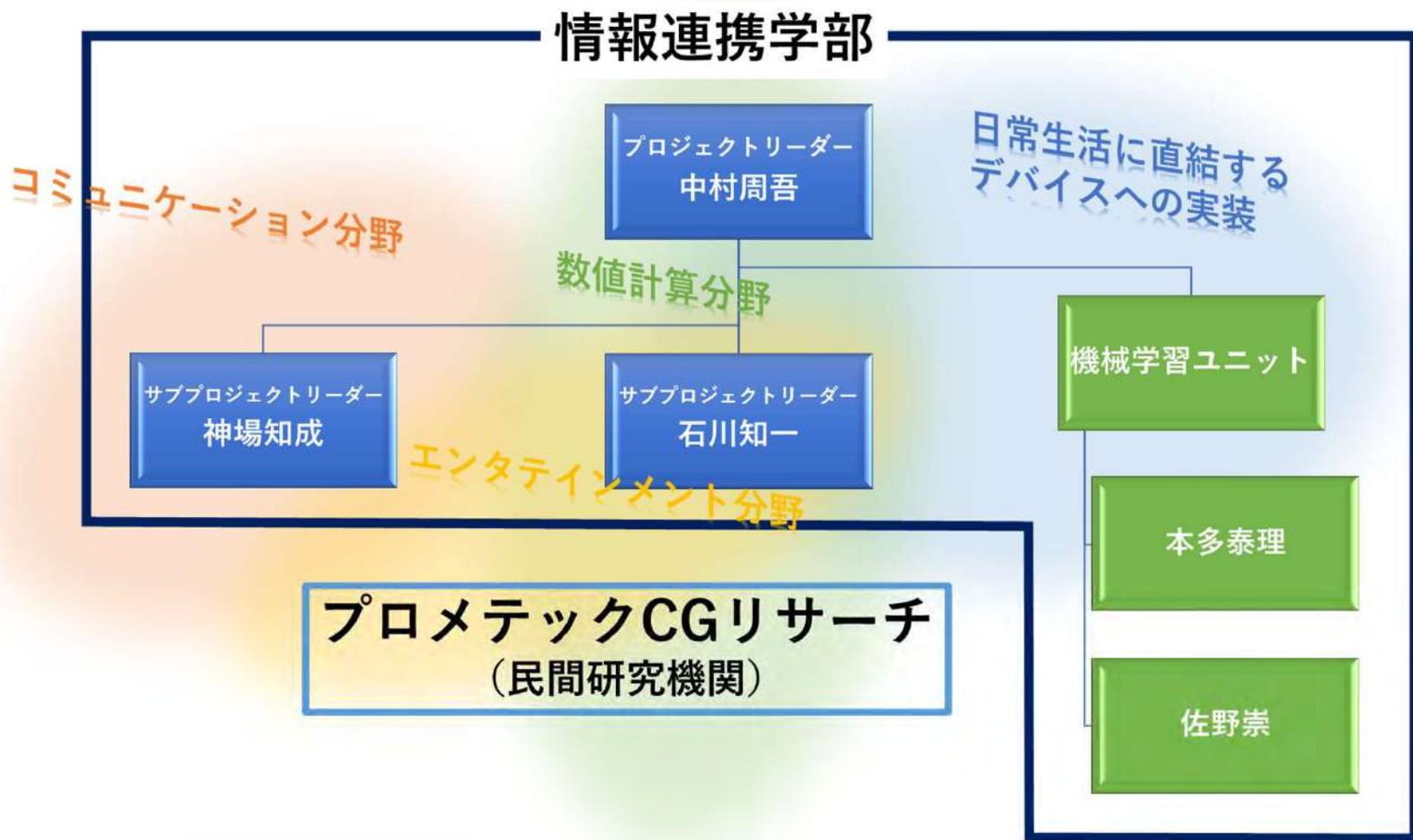
研究成果の目標

1. 生活者目線で有益な応用分野において先行的または利用可能な事例を公表すること
2. 応用分野で有効な実験やデータを行い、それを公開すること
3. 応用分野のデータ処理に有効な機械学習技術を開発すること

● SDGs

- 3. すべての人に健康と福祉を
- 9. 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 17. パートナーシップで目標を達成しよう



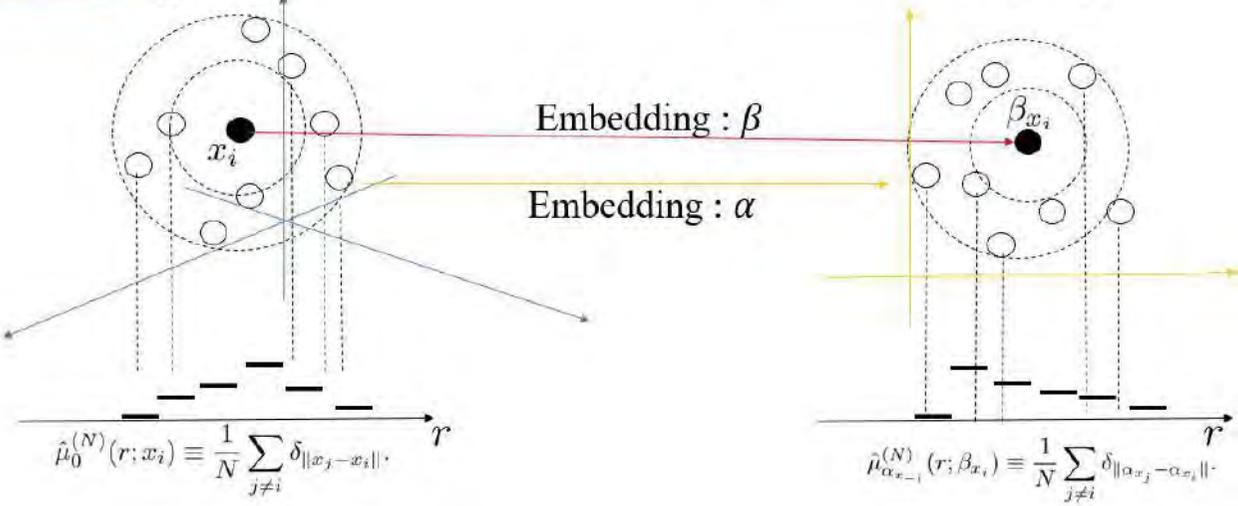


本年度の研究成果

機械学習のための次元削減方法の提案

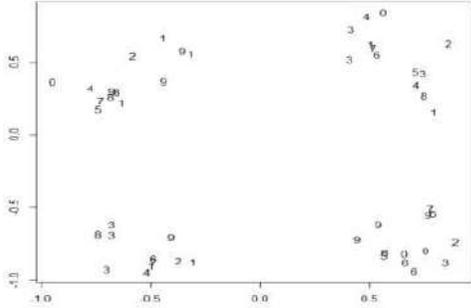
- 非線形の次元削減手法の提案
データに含まれる個々の要素をプレイヤーと見なし, "周囲のプレイヤーの分布の次元削減前後での近さ"を各プレイヤーの利得とする, 非協力N人ゲームとして定式化
- 凸解析によるNash均衡の存在証明とシミュレーション評価
- 自然言語処理など各種機械学習手法への応用を検討

次元削減前(高次元) 次元削減後(低次元)

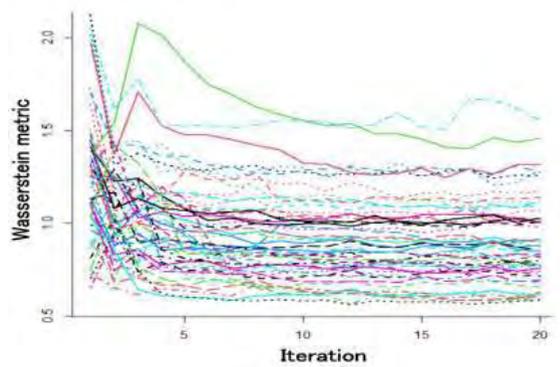


イメージ図

※ICAIIIC2023発表予定(2023年2月)



MNISTへの適用例



最適化計算過程の例
(横軸:反復数, 縦軸:2-Wasserstein距離)

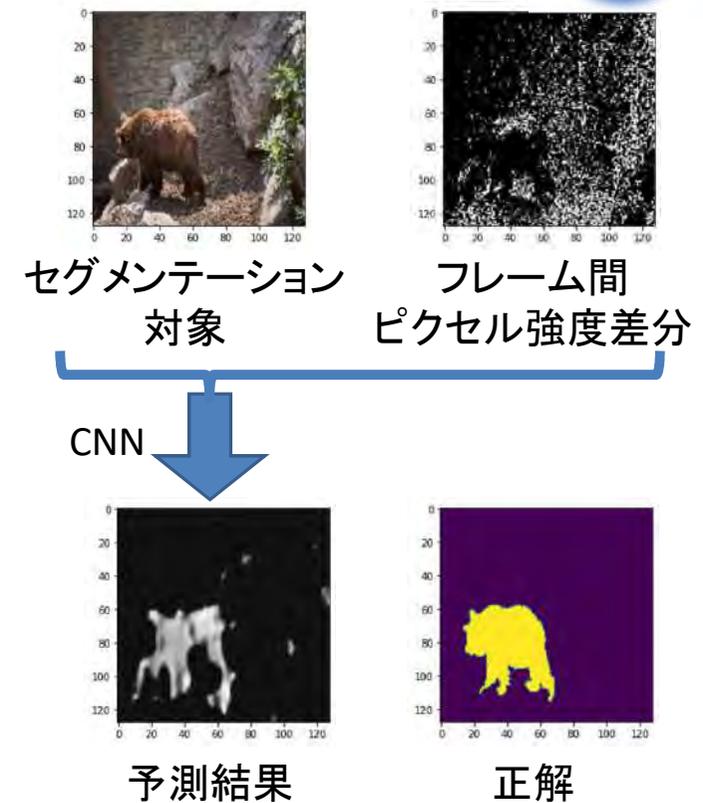
動画からの物体セグメンテーション

- 畳み込みニューラルネットワーク(CNN)を用いると画像から物体セグメンテーション(物体領域の決定)が可能である
- 動画の場合、前後フレーム画像を利用すると効率的なセグメンテーションができると予想できる
- 特に、異なるフレームのピクセル強度の差分は簡単に計算でき、かつセグメンテーションに有用ではないか？
- 複数の画像を入力とするCNNモデルを作成して検証

【結果】

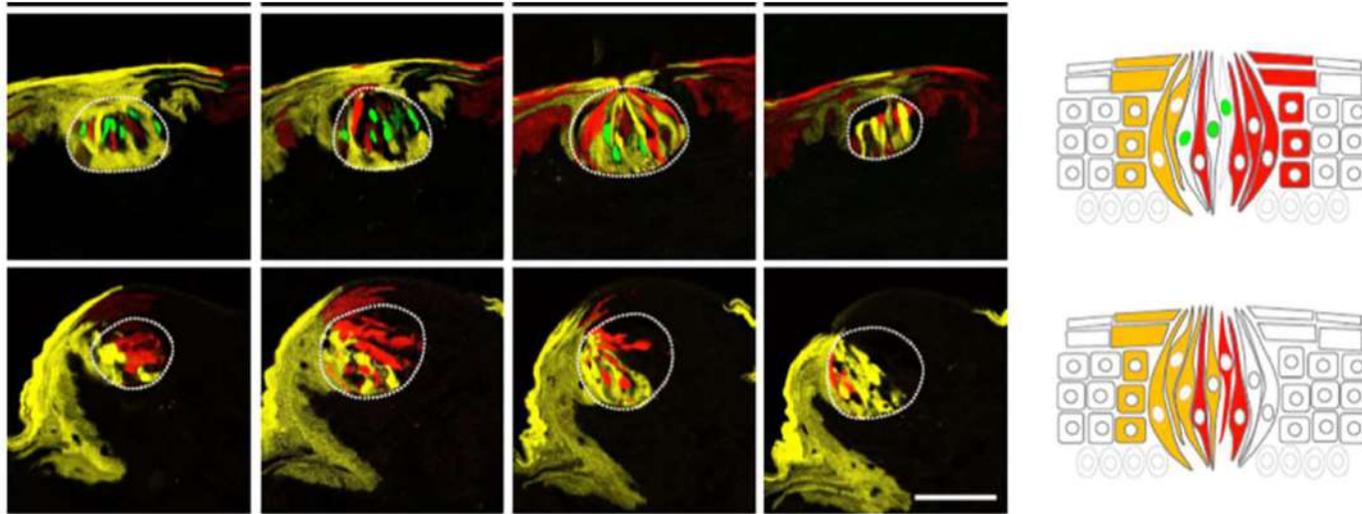
- フレーム間差分を与えるとセグメンテーション性能向上
- 単に異なる時間フレームの画像を与えるだけでなく、フレーム間差分を与えると高性能
- 監視カメラなどの定点映像の解析
- 強化学習との組み合わせ、環境の認識への応用

※情報処理学会全国大会(2023年3月)発表予定



味蕾におけるSox2+成体幹細胞の動態解析

- 蛍光タンパク質を組み込んだSox2+幹細胞の増加と減少のダイナミクス解析にシミュレーションを適用し、結果を理論的にサポート

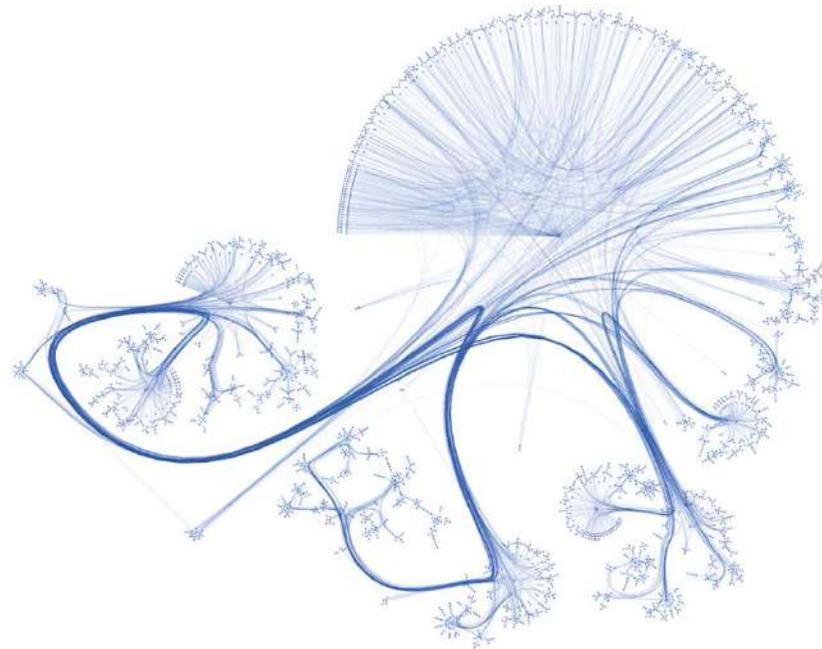


※Makoto Ohmoto, Shugo Nakamura, Hong Wang, Peihua Jiang, Junji Hirota, Ichiro Matsumoto, "Maintenance and turnover of Sox2+ adult stem cells in the gustatory epithelium", PLOS ONE 17(9) e0267683-e0267683 2022年9月2日, 査読有

東洋大学重点研究推進プログラム 2022年度報告会

グラフ構造に対する新規深層学習アーキテクチャの提案

- データ間の関係性をグラフ構造として表現したデータに対して、従来法よりも予測精度を向上させた新規深層学習アーキテクチャを提案
- 生体分子のダイナミクス解析, 分子構造の生成, その他のグラフ構造データ解析などへの適用が期待される

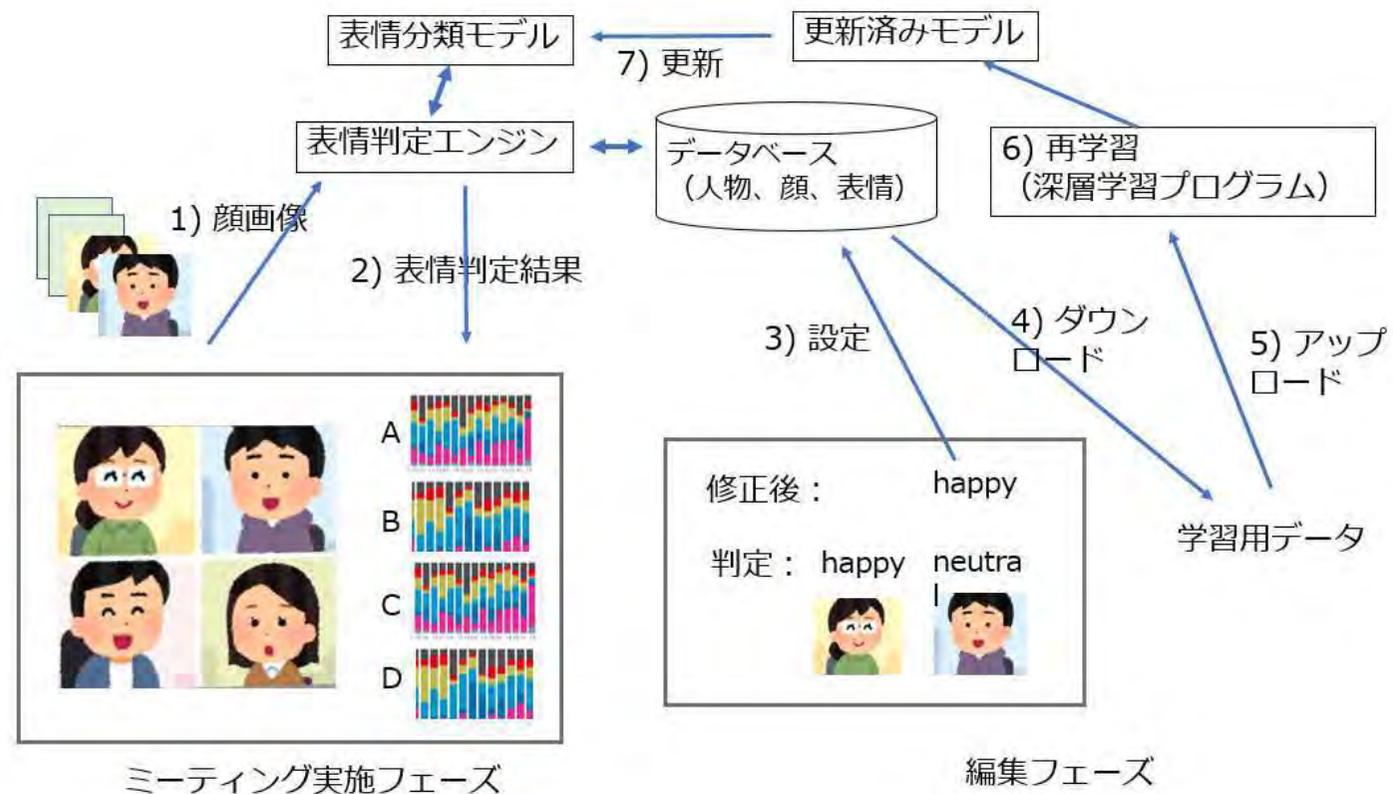


from Cora database

※論文投稿中

ビデオ会議における参加者の表情分類システム

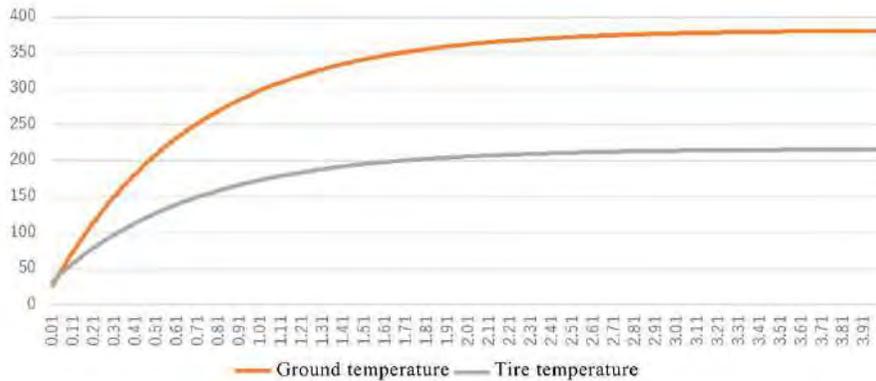
- 機械学習により参加者の表情変化を10秒ごとに自動分類
- 分類誤りも容易に修正し、新たなデータセットとして利用するツールを開発
- 任意のビデオ会議ツールと連携可能なソフトウェアを開発
- 結果はGitHubにて公開予定



※情報処理学会シンポジウム(2023年3月)発表予定

タイヤスモークのビジュアルシミュレーション

- タイヤの回転で発生する摩擦熱から、タイヤと地面の温度変化を計算する数理モデルを提案
- シミュレーションから温度変化の妥当性を確認
- 温度によって発煙量を決定し、流体計算によってアニメーションを作成



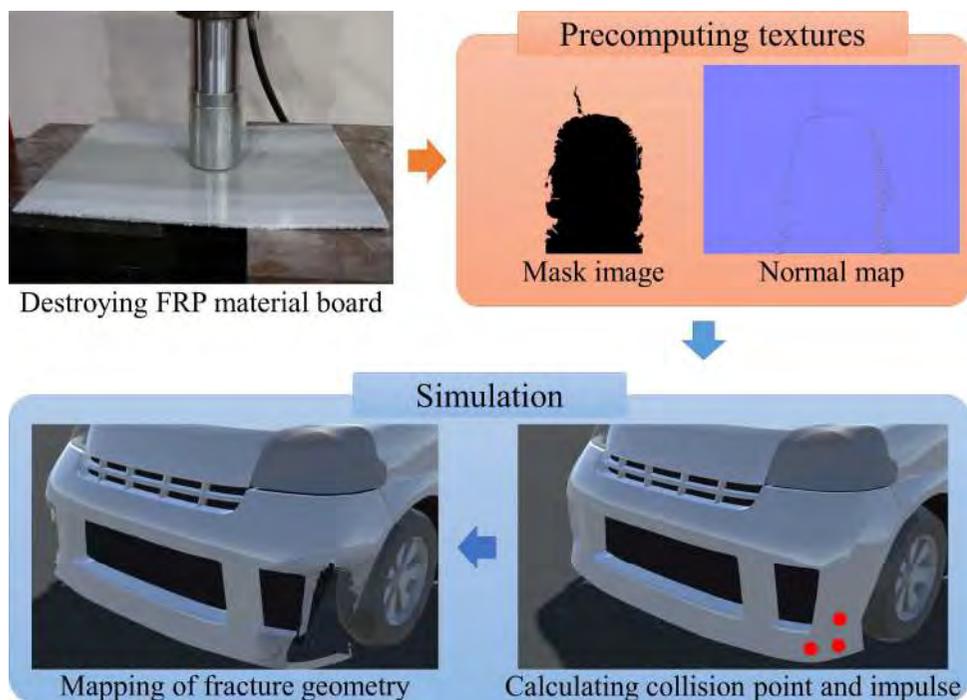
タイヤと地面の温度変化のシミュレーション結果

Visual Simulation of Tire Smoke

※Tomoya Tamagawa, Tomokazu Ishikawa, "Visual Simulation of Tire Smoke", SIGGRAPH Asia 2022 Posters, 2022-12, 査読有

FRP素材の3DCG破損表現

- 車の部品によく使用されるFRP(繊維強化プラスチック)の破損表現を事例ベースで再現
- ゲームに搭載可能な程度の計算負荷であることを確認

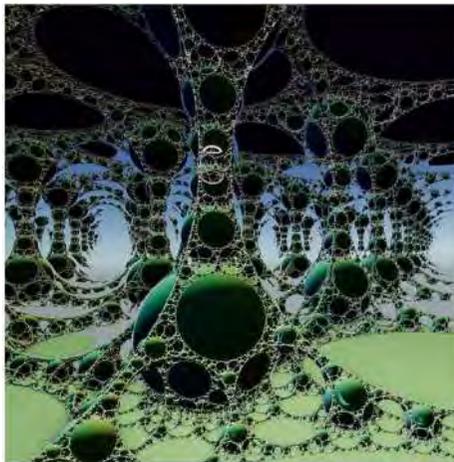


提案法の概要図

※Shoon Komori, Tomokazu Ishikawa, "Representation of FRP material damage in 3DCG", SIGGRAPH Asia 2022 Posters, 2022-12, 査読有

3Dフラクタル図形の検索システムの提案

- 3Dフラクタル図形は計算式が複雑で、結果画像からフラクタルの計算式を求めることは困難
- 画像特徴量から3Dフラクタル図形の類似度を計算し、
所望のフラクタル図形を検索するシステムを提案
- 検索システムとしての評価と、アーティストがフラクタル図形を作成するまでの時間を計測
- 提案システムを使用すると目的の図形を作成する時間を短縮することを確認



3Dフラクタル図形の例



検索システムの使用画面

※武田和己, 石川知一, 3Dフラクタル図形の検索システムの提案, VC+VCC2022, 2022-10, 査読なし

MR/VRデバイスにおけるエクサゲーミングの比較実験

xR

- MRデバイス(HoloLens 2)とVRデバイス(Oculus Quest 2)でエクサゲーミングをプレイしたときの使用感を調査
- VR酔いの評価指標を用いた結果, MRデバイスの方が酔いの症状が強いことを発見した

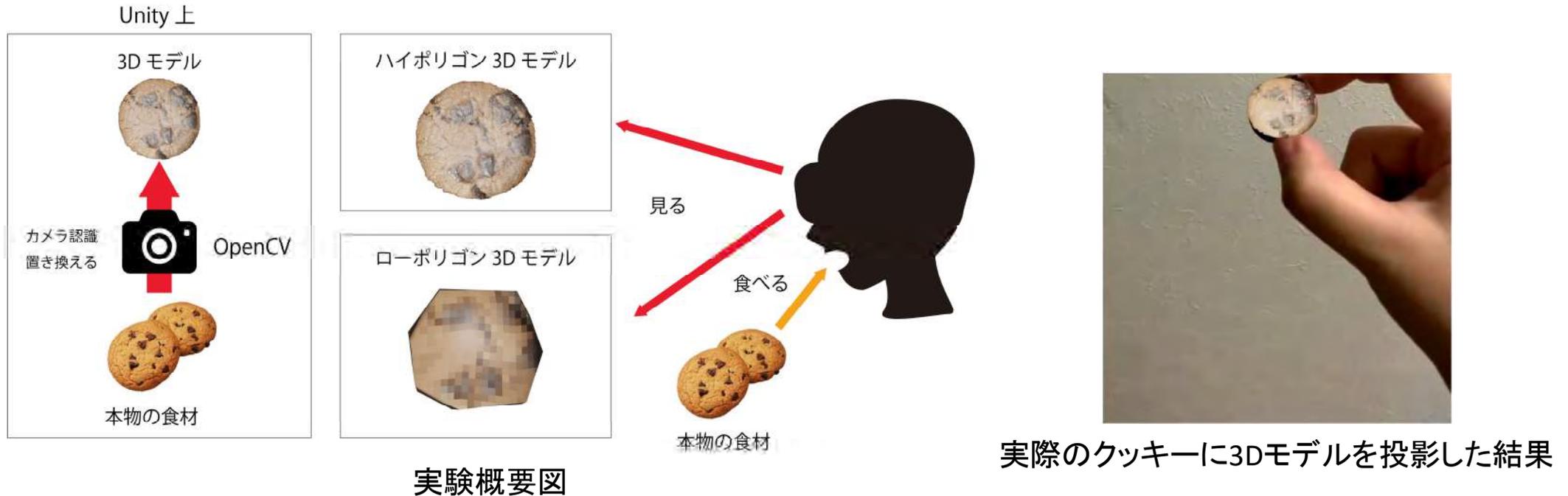


MRデバイスによるエクサゲーミングの実装例

※Taiyo Taguchi, Tomokazu Ishikawa, "A research on the compatibility between MR/VR devices and Exergaming", Proc. of NICOGRAPH international 2022, 2022-6, 査読有

ARによる食品の詳細度変更と食感の違いの検証

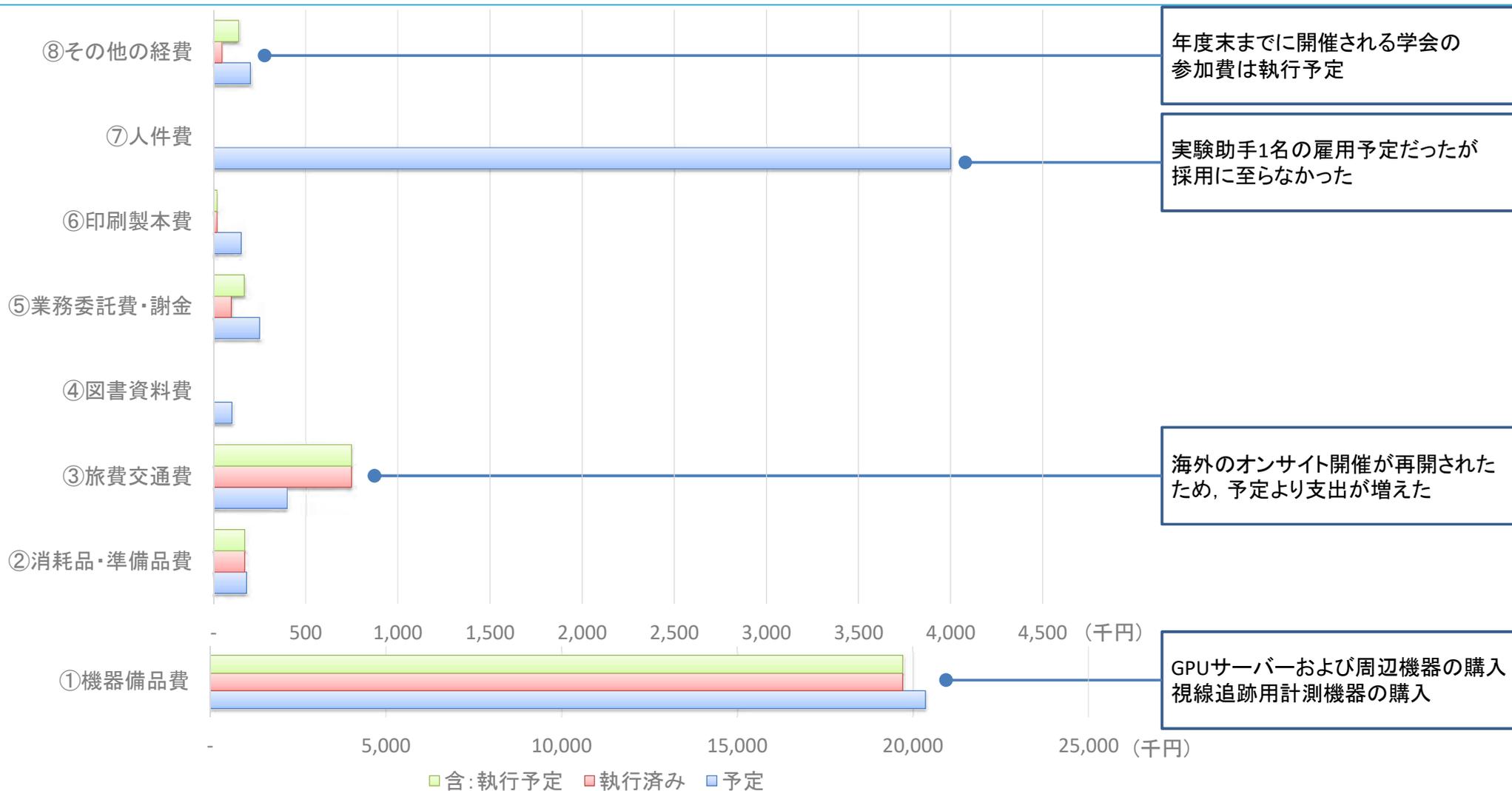
- メタバーズ空間で食事を行うときに、3DCGモデルを見ながら実物を食べることが想定される
- ポリゴン数によって味覚や食感に影響が出るかを実験で確認
- 実験に使用した食べ物全てにおいて、実物より3Dモデルを使う方が食欲はそそられない
- おかきや団子はポリゴン数の違いによる味覚・食感の有意な差はないことを確認



※田口太陽, 渡辺友里恵, 石川知一, ARによる食品の詳細度変更と食感の違いの検証, VC+VCC2022, 2022-10, 査読なし

本年度の研究費執行状況

研究費予定と執行状況



プロジェクトの問題点と解決策

● 問題点

■ 計画からやや遅れている

- GPUサーバーの納品が想定より遅れたこと
- GPUサーバーを運用・管理できる若手研究者の雇用ができていないこと

■ 若手研究者の育成ができていない

- GPUサーバーを利用した機械学習の研究ができるポスドクを雇用する予定であったが、採用に至らなかった
- ポスドクの公募を行ったが、応募数自体が少ない

● 解決策

- ポスドクの雇用条件，採用時期を見直して次年度も採用活動を継続する

本年度の業績（発表予定を含む）

発表論文

- [1] Tomoya Tamagawa, Tomokazu Ishikawa, "Visual Simulation of Tire Smoke", SIGGRAPH Asia 2022 Posters, 2022-12, 査読有
- [2] Shoon Komori, Tomokazu Ishikawa, "Representation of FRP material damage in 3DCG", SIGGRAPH Asia 2022 Posters, 2022-12, 査読有
- [3] 田口太陽, 渡辺友里恵, 石川知一, ARによる食品の詳細度変更と食感の違いの検証, VC+VCC2022, 2022-10, 査読なし
- [4] 武田和己, 石川知一, 3Dフラクタル図形の検索システムの提案, VC+VCC2022, 2022-10, 査読なし
- [5] Makoto Ohmoto, Shugo Nakamura, Hong Wang, Peihua Jiang, Junji Hirota, Ichiro Matsumoto, "Maintenance and turnover of Sox2+ adult stem cells in the gustatory epithelium", PLOS ONE 17(9) e0267683-e0267683 2022年9月2日, 査読有
- [6] Taiyo Taguchi, Tomokazu Ishikawa, "A research on the compatibility between MR/VR devices and Exergaming", Proc. of NICOGRAPH international 2022, 2022-6, 査読有

今年度発表予定

- [1] Hirotsada Honda, Phuong Dinh, Pham Thu Thao, Yuho Tabata, Bui Duc Anh, "Dimensionality reduction as a non-cooperative game", Proc. of ICAIIC2023, 2023-2, 査読有
- [2] 河村聡太, 本多泰理, 中村周吾, 佐野崇, フレーム間差分を用いた画像セグメンテーション改善法の検討, 情報処理学会第85回全国大会, 2023-3, 査読なし
- [3] 武田和己, 石川知一, アーティストフレンドリーな3Dフラクタル図形検索システムの研究, 情報処理学会第85回全国大会, 2023-3, 査読なし
- [4] 渡辺友里恵, 田口太陽, 石川知一, VR内の摂食行動時に3Dモデル解像度が味覚に与える変化の調査, 情報処理学会第85回全国大会, 2023-3, 査読なし
- [5] 渋谷敬大, 石川知一, 凝視マップを学習用データとした難易度調整可能な間違い探し生成システム, 情報処理学会第85回全国大会, 2023-3, 査読なし
- [6] 猪股遥香, 石川知一, 色字共感覚を利用した英語長文読解の学習補助, 情報処理学会第85回全国大会, 2023-3, 査読なし
- [7] 吉田健留, 石川知一, おはじきゲームを題材としたMRゲームの面白さの調査研究, 映像表現・芸術科学フォーラム2023, 2023-3, 査読なし
- [8] 小野達矢, 石川知一, 画像認識を用いたペナルティーキックのトレーニングXRシステムの研究, 映像表現・芸術科学フォーラム2023, 2023-3, 査読なし
- [9] 中山慧人, 石川知一, 類似楽曲検索におけるパート別類似度比較の分析, 映像表現・芸術科学フォーラム2023, 2023-3, 査読なし
- [10] 張晋瑜, 神場知成, 動画への自動テロップ付けシステムと応用, 情報処理学会シンポジウムINTERACTION2023, 2023-3, 査読なし
- [11] 東覚瑠菜, 神場知成, ドライアイ軽減のための自動まばたきリマインド機能, 情報処理学会シンポジウムINTERACTION2023, 2023-3, 査読なし
- [12] 本多泰理, "An ODE-based neural network with Bayesian optimization", 応用数学会第19回研究部会連合発表会, 2023-3, 査読なし

招待講演

- [1] CGモデリングとアニメーション制作におけるGPU活用, 石川知一, GPU UNITE 2022 Day3:CG研究セッション 2022/09/14 (オンライン配信)
- [2] 機械学習法・深層学習の手法概要と生命科学分野への応用, Overview of machine learning/deep learning methods and their application to the life sciences, 中村周吾, BPCNP4学会合同年会 2022/11/04-06 東京 (オンデマンド配信)

トランスファラブルスキル醸成のためのキャリア講演会

■ポストドクターの皆さんに、研究者としてのキャリアを積み重ねていただくため

□トランスファラブルスキルとは (Vitae RDF【Researcher Development Framework】参考)

□Vitae RDF (Researcher Development Framework)

世界トップクラスの研究者の育成を目指し、研究者の総合的な能力開発を目的にVitaeが開発したフレームワーク4つのドメインに分けられておりそれぞれのドメインの内容はさらに細分化されます

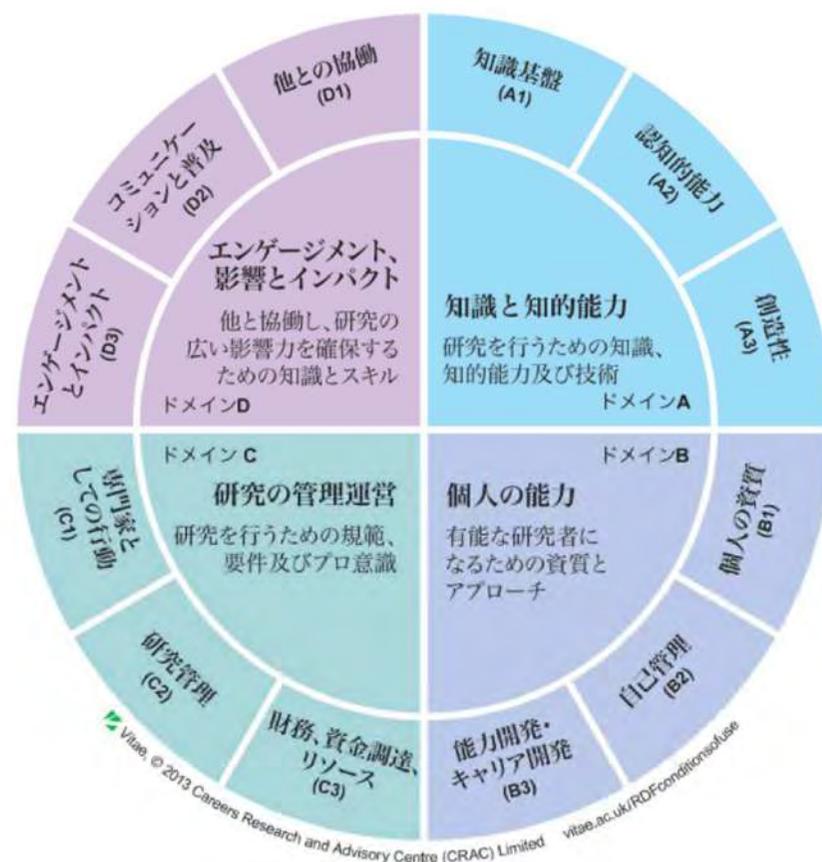
- ・ドメインA：知識と知的能力
- ・ドメインB：個人の能力
- ・ドメインC：研究の管理運営
- ・ドメインD：エンゲージメント、影響とインパクト

□研究者としてご活躍いただくために

研究者としてのキャリア開発において、学術的な専門知識に加え、コミュニケーションなどの「人間関係スキル」や、チームメンバー及び自身に対する「マネジメントスキル」、研究におけるPDCAを一貫して実施できる「問題解決スキル」等、汎用的で幅広いスキルや能力を身に付けることが重要視されている。

文部科学省資料抜粋

- ・すでに持っているスキルもあると思います
- ・学会準備、非常勤講師、指導教官サポートなどの経験で獲得
- ・専門性はもちろん、この能力を持っていることの棚卸しもしてください



トランスファラブルスキル醸成のためのキャリア講演会

■トランスファラブルスキル、3つの切り口で共有（棚卸し）させてください

□人間関係スキル

- ・皆さんの取り組んでいる研究、その領域を全く理解していない人にわかりやすく伝える
→大学教授になった際、それを学生に伝えなければならない可能性があります
→別領域の研究者同士でディスカッション、得たアイデアで研究促進させる企業
- ・息抜き程度に会話してみてください（この講演会以外でも）
- ・他者と関わるときに大切にしていることを教えてください

研究領域について（解明、貢献、そのために何をどう）	他者に関わるときに大切にしていること

□マネジメントスキル・課題解決スキル

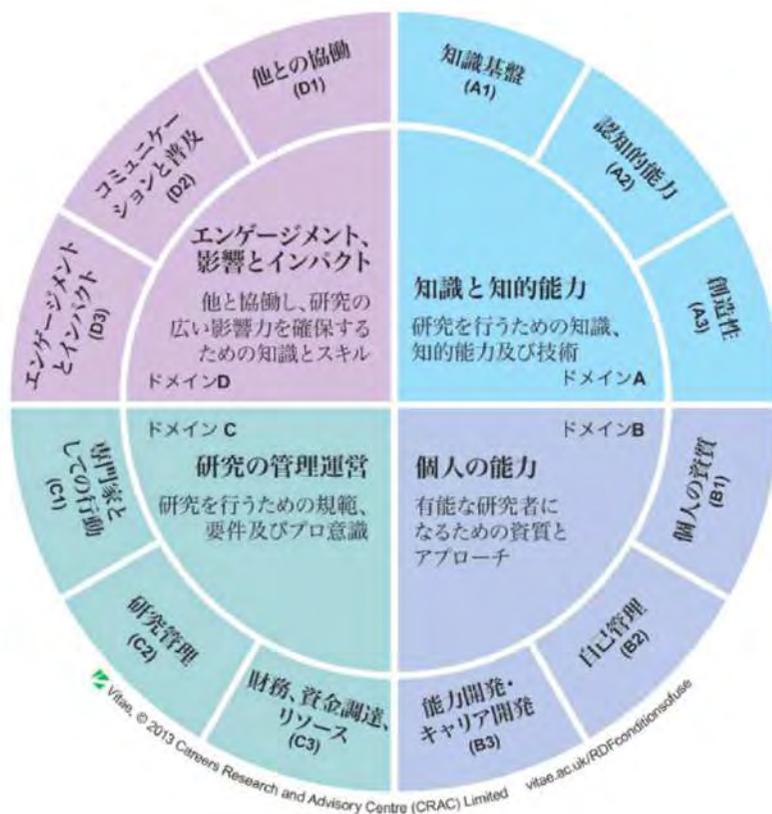
- ・なんらかの課題を解決するために研究しています、その研究は計画性を持って取り組んでいます（既に獲得されている能力です）
- ・有期であれば、確実に時間はマネジメントしながら取り組んでいらっしゃると思います

マネジメントのコツ（人・モノ・時間・資金・情報）	課題解決のコツ

トランスファラブルスキル醸成のためのキャリア講演会

■基礎研究でも、応用研究でも。ここまで追求されたのであれば研究者として社会貢献していただきたいです

- そのために、本日はドメインB3を考える時間をいただきました
- そして人間関係スキルの棚卸しを少しだけ取り組んでいただきました
- そしてマネジメント・課題解決スキルの棚卸しも少しだけ取り組んでいただきました
- 各ドメインはそれぞれが独立しているよりは、重複しているところもあります
- 今後も研究者として安定した仕事にお就きいただくために、ご自身の持つトランスファラブルスキルの言語化を続けておいてください



東洋大学重点研究推進プログラム 2020～2023年度選定プロジェクト 一覧表

採択年度	資料番号	研究プロジェクト・テーマ	研究代表者所属学部・学科(非表示)	職名(非表示)	研究代表者氏名	研究期間	備考
2020	1	多階層的研究によるアスリートサポートから高齢者ヘルスサポート技術への展開 ～社会実装に向けての研究組織連携の構築～	理工学部・生体医工学科	教授	加藤 和則	2020年4月～2023年3月	2022年度で終了
2021	2	バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくり	理工学部・生体医工学科	教授	合田 達郎	2021年4月～2024年3月	
2021	3	極限環境微生物の先端科学をSDGs達成のために社会実装する研究 – Extremophiles × SDGs × Toyo Grand Design 2020-2024 –	生命科学部・生命科学科	教授	伊藤 政博	2021年4月～2024年3月	
2022	4	福祉社会における新たな価値の創発と支援システムの構築	社会学部・社会福祉学科	教授	志村 健一	2022年4月～2025年3月	
2022	5	安心な水を未来へ ～有用細菌による排水処理技術の開発と普及に向けて～	理工学部・応用化学科	准教授	井坂 和一	2022年4月～2025年3月	
2022	6	レジリエントな社会に向けたSDGsの包括的実現に関する研究	国際学部・国際地域学科	教授	松丸 亮	2022年4月～2025年3月	
2022	7	日常生活を豊かにするためのデジタルトランスフォーメーション(DX)の研究	情報連携学部情報連携学科	教授	中村周吾	2022年4月～2025年3月	
2023		東洋大学のブランド力向上のための分野横断型アスリートサポート研究	理工学部・生体医工学科	教授	加藤 和則	2023年4月～2026年3月	新規採択
2023		生育のdiversityを生むメカニズムの解明とwell-beingな社会の実現に向けた支援体制の構築	生命科学部・生命科学科	教授	児島 伸彦	2023年4月～2026年3月	新規採択

活動計画タイトル (キーワード)

東洋大生の SDGs マインド育成および、学生発の学内 SDGs アクションの推進 2022

① 活動計画の概要

以下の3つの活動を行う。

- (1) 学生の SDGs に関する認知度を上げ、身近なこととしての問題意識を育むためのイベントやワークショップ等を開催する。
- (2) 学生生活の中で実践できる SDGs アクションを学生とともに創発し、推進する。
- (3) 上記を進めるため、学生・教職員の SDGs 認知度や取組に関する調査を行い、現状を把握する。

② 数値的な目標の達成状況と得られた成果

目標

・【数値的な目標】

・SDGs ワークショップ・イベント等への参加学生年間 1,000 人

ボランティア支援室企画(参加者数延べ 1,360 名)、学生への周知・案内を行い、目標数に達した。

・Web アンケートの回答率60%以上)

学長事務課と連携をし、Web アンケートを実施した。

総回答数は 781 件、昨年度比 43 パーセント減少する結果となり、目標の 60%に達成することはできなかった。

今年度は新たに開発された「東洋大学アプリ」等を活用してみたが、学生の自主的な回答ではこの数字が限界であることが分かった。

回収率を上げるのであれば、学部長会議等を通じて教員と協力して授業時間での実施をお願いする等工夫が必要である。

【得られた成果】

・SDGs に関する認知度が向上し、複数の企画にかかわりを持つ学生が増加した。

・SDGs Weeks での公開授業や SDGs コンテスト等のイベントを通じ、SDGs に関心が薄かった一般の学生へ対して、紹介をすることができた。

・支援室の企画には「SDGs アンバサダー」及び「SDGs実践講座」の学生が積極的に参加し、他の学生への発信も含めて協力をしてくれた。

③ 2022 年度活動内容

添付資料(※)

③ 2022 年度活動内容		添付資料(※)
4 6 月	◇実施内容名	
	・(4月):東洋大学 SDGs アンバサダー座談会①	
	【アンケート調査】	
	・(4月):SDGs に関する認知度アンケートの実施(学生対象、Googleform にて回答)	
	【SDGs の認知度アップ】	
・(4月):東洋大学ボランティアカフェ「見つけよう、子どもとの関わり方！聞いてみよう、先輩方の話！ー子どもボランティアへのはじめの一步ー」	1-2	
・(5月):「カンボジアフェスティバル 2022」(Toyo 1day ボランティアプログラム)	3	
・(5月):ゴミの日のクリーンアップ活動「ゴミ拾い王は俺だ！文京区ゴミ拾い選手権」(Toyo		

	<p>1day ボランティアプログラム)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(5月):「Hands to Hands プロジェクト 2021」 ・(5月):Hands to Hands2022 「コスメ『晴れの日』応援プロジェクト(プレ企画)」 ・(5月):【特別講演会】「ウクライナの人々や子どもたちは今～現地で起きていることを知り、私たちができることを考えよう～」① ・(5月):「東洋大生がワークショップで考える SDGs(入門基礎編)～SDGs と自分のつながりを考えよう～」① ・(5月):Hands to Hands2022 「コスメ『晴れの日』応援プロジェクト(プレ企画)」 座談会① ・(6月):東洋大学 SDGs アンバサダー 就任 ・(6月):Hands to Hands2022 「コスメ『晴れの日』応援プロジェクト(プレ企画)」 座談会② ・(6月):SDGsカフェ「2022 東洋大学 SDGs アンバサダー座談会」② ・(6月):【特別講演会】「ウクライナの人々や子どもたちは今～現地で起きていることを知り、私たちができることを考えよう～」② ・(6月):「東洋大生がワークショップで考える SDGs(入門基礎編)～SDGs と自分のつながりを考えよう～」② 	<p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p> <p>10</p>
7 9 月	<ul style="list-style-type: none"> ・(7月):SDGsアンバサダー防災チーム フィールドワーク「そなエリア東京ツアー+防災ゲーム Day2022」 ・(7月):SDGs ワークショップ「SDGsと気候変動と大学と…」 ・(7月):東洋大生がワークショップで考える SDGs「イスラムの祝祭イード・アル＝アドバー」 ・(7月):【特別講演会】「ウクライナの人々や子どもたちは今～現地で起きていることを知り、私たちができることを考えよう～」③ ・(7月): ボランティアカフェ「見つけよう私にとっての地域との関わり方」 ・(7月): SDGsカフェ「スペシャル・オリンピックス(SO)」 ・(7月):フェアトレードの普及促進を目的としたラオス産オリジナルコーヒーの販売 (Smile F LAOS) ・(7月):東洋大生がワークショップで考える SDGs「これからの働き方と働きがいについて考える」 ・(7月):【NPO 法人 キッズドア】東洋大学キャンパスツアー① ・(8月):【NPO 法人 キッズドア】東洋大学キャンパスツアー②③ ・(8月):READYFOR(株)CSR スタディツアー ・(8月):(株)メルカリ CSR スタディツアー ・(8月):ゆがわらっことつくる多世代の居場所 with 東洋大生(課外活動育成会) ・(8月):フィリピンの若者とつくる SDGs アクション! ・(9月):パナソニックホールディングス(株)CSR スタディツアー ・(9月):樹海清掃ボランティア(課外活動育成会) ・(9月):被害地の現状を知り、復興応援 福島県いわき市の農業の現状を発信する(課外活動育成会) ・(9月):SDGsカフェ「We Body」 ・(9月):NEC ネットエスアイ(株)CSR スタディツアー 	<p>11</p> <p>12</p> <p>13</p> <p>14</p> <p>15</p> <p>16-17</p> <p>18</p> <p>19</p> <p>20</p> <p>21</p> <p>22-23</p> <p>24</p> <p>25</p> <p>26</p> <p>27</p> <p>28</p> <p>29</p>
10 12 月	<ul style="list-style-type: none"> ・(10月):フェアトレードの普及促進を目的としたラオス産オリジナルコーヒーの販売「キックオフ」(Smile F LAOS) ・(10月):東洋大学 SDGsWEEKs 2022 ・(10月):東洋 SDGs コンテスト(課外活動育成会) 	<p>30-31</p> <p>32-39</p> <p>40</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・(10月):東洋大学生がワークショップで考えるSDGs「発展途上国の水問題を学ぼう」 ・(10月):白山祭「SDGsアンバサダー展示会」 ・(11月):おにぎりアクション 2022in 東洋 ・(11月):デイキャンプで遊ぼう会(課外活動育成会) ・(11月):「幸せの経済学」上映会 ・(11月):ボランティアやっただけ・・・で終わらせないための『対話のシカタ』(課外活動育成会) ①② ・(11月):Hands to Hands プロジェクト 2022「コスメ『晴れの日』応援プロジェクト 第2弾」 ・(11月):Hands to Hands 2022 秋 ・(12月):SDGs Weeks EXPO2022 見学会 in 東京ビックサイト ・(12月):SDGsアンバサダー食品ロスチーム「cueco との座談会」 ・(12月):コスメバンクプロジェクト「封入ボランティア」 ・(12月):文京区シンポジウムへの登壇「SDGsアンバサダー食品ロスチーム」 ・(12月):福島県の子どもに寄り添うプログラム(課外活動育成会) 	<p>41</p> <p>42</p> <p>43-44</p> <p>45</p> <p>46</p> <p>47</p> <p>48</p> <p>49</p> <p>50</p> <p>51</p>
1 3 月	<ul style="list-style-type: none"> ・(1月):1Day ボランティアプログラム「海岸お掃除」アイサーチジャパン主催 ・(2月):東洋大学生が宮城県 南三陸町に行って見て、聞いて、考える 宿泊スタディーツアー～復興を遂げたこれからの東北に必要なものとは?～”(課外活動育成会) ・(2月):災害救援ボランティア講座 ・(2月):感染症蔓延期に大地震!あなたはどうか、生き延びる?首都直下地震に備える 東洋大学宿泊サバイバル体験 2023”(課外活動育成会) ・(2月):被災地の現状を知り、復興応援!!「いわき市の農漁業の現状を発信するスタディーツアー」(課外活動育成会) ・(3月):SDGs アンバサダー座談会・振り返り ・(3月):学生 社会貢献活動表彰式・奨励プロジェクト助成報告会 ・(3月):「大学生による地域活動」報告会・交流会 (文京学院大学) 	<p>52</p> <p>53-54</p> <p>55</p> <p>56</p> <p>57</p>

※活動実績となる成果物や資料(チラシ・ポスター・報告書等)がございましたら、併せてご提出ください。その際、表中の添付資料欄に番号等の記載をお願いします。



Presented by 東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ

東洋大学ボランティアカフェ
見つけよう、子どもとの関わり方！

聞いてみよう、先輩方の話！

～子どもボランティアへのはじめの一歩～

2022年4月24日（日）19:00-21:00

オンライン開催（ZOOM）

ボランティアカフェ（ボラカフェ）は、お茶やお菓子を片手に、気楽な気持ちでボランティアのことや、地域・まちづくりの話などが聞ける交流型トークセッションです。普段の授業では出会えないような、人や世界との出会いがあるかも？？



申し込みは
コチラ！

お問い合わせ：東洋大学ボランティア支援室
（東洋大学白山キャンパス 雨水会館1階）

TEL: 03-3945-7927 e-mail: mlvolsup@toyo.jp

URL: <https://www.toyo.ac.jp>

232/363

001

ゲストスピーカーの紹介



山崎紗矢香

東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科3年
東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ

生活困窮世帯の中高生を対象にした学習支援教室にボランティアとして参加。

勉強、ゲーム、お話など、生徒に合った関わり方で、勉強を教えてもらえる場というだけでなく、居場所となれるように心がけています。



朝原優真

東洋大学社会学部社会福祉学科2年
東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ

里親家庭の子どもたちと遊ぶボランティアに参加。また、4月からチャリティーサンタの活動も開始。

子どもたちとの遊びの中で感じた「あたたかさ」をこれからも大切にしていきたいと思っています！



北村廉

東洋大学社会学部社会学科卒業
一般社団法人ユガラボスタッフ

東京生まれ東京育ち。在学中は、日本全国での住み込みでバイトや、海外研修やインターンを楽しんだ。もともと、国際協力に関心があったが、就職活動の際に、自分の深めていきたい領域は子ども&教育だ！と悟った。

2021年に就職を機に湯河原町へ移住。一般社団法人ユガラボにて、子どもからお年寄りまで安心して過ごすことのできる居場所事業や学習サポート事業など、どんな人もハッピーに生きていける環境づくりへ想いを持って働いている。



大石紗矢香

東京大学大学院農学生命科学研究科2年
NPO法人Cafe de 寺子屋 副理事長 兼 学生代表

静岡県出身。学部時代はボランティアに参加したことがなかった。2020年に大学院進学が決まっていたものの、新型コロナウイルスの影響で静岡に残っていた時に、高校の先輩と話す機会があり、その話の中で学び支援の団体を立ち上げることを決意。現在は、110名の学生が所属するNPO法人となり、その学生代表を務める。

子どもを子ども扱いせず、横の関係で接することを大切にしています。

サポートスタッフ（通称サポスタ）ってなに？

正式名称は「ボランティア支援室サポートスタッフ」。ボランティアの魅力を多くの東洋大生に伝えるために、本イベントを企画している他、ボランティア支援室のプロのコーディネーターと一緒に、社会課題を学びながらいろいろな場で実践を重ねています！

Contact : mlvs@sup@toyo.jp

002

● Toyo 1dayボランティアプログラム2022

CAMBODIA FESTIVAL

カンボジアフェスティバル 2022

មហោស្រពវប្បធម៌ខ្មែរ

雨天
決行

イベント運営
ボランティア
活動

 **5/3**
Tue **5/4**
Wed 

ថ្ងៃទី៣ ~ ៤ ខែឧសភា ឆ្នាំ២០២២

8:00~20:00 (適宜休憩あり)

代々木公園イベント広場 (東京都渋谷区)

នៅស្ថានយុយុហ្គី ប្រទេសជប៉ុន

日本にいながら、カンボジアを身近に感じられるフェスティバル！
イベント運営をしながら、カンボジアの食や文化に触れたり、いろいろな人と知り合って
世界が広がる感覚を楽しめます！

○ オリエンテーション：4月25日（月）※時間帯は追って掲示します。

○ 事後学習会（ふりかえり+講演会）：5月7日（土）10:00-12:00

※会場：東洋大学白山キャンパス 雨水会館1階、またはオンライン

※当日ボランティア募集要項その他詳細は、Toyonet-ACE
「ガクチカサプリ」をご覧ください。



**申込締切
4/27 (水)**

※但し、定員に達した場合
締切ることがあります。

👉 申込フォームはこちら！

Hands to Hands 2021

-みんなで乗り越える、コロナ禍-



新型コロナウイルス感染症はいまだ収束の気配が見えていません。収入の減少が続き、生活に不安をお持ちの方が多くいらっしゃるかと思います。昨年に引き続き、ボランティア支援室では、「Hands to Hands 2021-みんなで乗り越えるコロナ禍-」として、食料品等を通じて校友・学生・教職員がみんなで助け合い、コロナ禍を乗り越える『場』を提供いたします。ここでは学生さんが必要な物資などを入手できることで、学業が継続できる環境を支えあうことを目指しています。現在、物資の提供も積極的に受け付けております。少しでも不安を取り除けるのであれば幸いです。ご応募お待ちしております。

1. 受付期間：2021年5月25日（火）～寄贈品がなくなり次第終了
2. 申込方法：Google Formにて受付
(申請フォーム) <https://forms.gle/gY6eFztkJ4WeQEpN6>
3. 受取期間：2021年6月1日（火）～寄贈品がなくなり次第終了
平日10：00～18：00まで【※平日13時～14時、土日祝日は除く】
※受け取り日程についてはお申込後改めて事務局から連絡します。
4. 受取場所：白山キャンパス：雨水会館 1F ボランティア支援室
川越キャンパス：川越教学課
板倉キャンパス：事務課
赤羽台キャンパス：事務課(所属学部担当窓口)

お申し込みはこちら↓↓↓



※エコバッグを必ず持参してください。

※多くの学生さんへ支援を行うため、一人当たりの受取回数を調整させていただきます。

※受取日時は「予約制」とさせていただきますが、「密回避」のため、会場外でお待ちいただく場合もあります。ご協力いただきますようお願いします。

※問合せ先（ボランティア支援室）：mlvolsup@toyo.jp / 03-3945-7297





Hands to Handsプロジェクト2022

(コスメ「晴れの日」応援プロジェクト プレ企画)



コロナ禍で収入が減っている学生に対して、就職活動をはじめとする化粧する機会がある学生に「コスメセット」を配布します。

対象者

- ①新型コロナウイルス感染拡大に伴い、バイト等が減って化粧品を手に入れることが難しい人
- ②特に上記の理由で就職活動を行うにあたり、必要な化粧品を手に入れることが難しい人
- ③後日「座談会」を予定しているのので、参加できる人 (web・対面)

申込方法：google form (<https://onl.bz/hWBwDSm>)

申込締切：4月27日 (木)

配布期間：5月9日 (月)～5月13日 (金) 10:00～18:00

配布個数：30セット (予定)

※応募者多数の場合は、就職活動を行っている3・4年生を優先します。

※受け取ったコスメをメルカリ等を用いて転売することは禁止します。

コスメバンクプロジェクト：<https://cosmebank.jp/>



ここを読み取ってね！



(参考画像)



お問い合わせ (ボランティア支援室)

mlvolsup@toyo.jp / 03-3945-7927

特別講演



ウクライナの人々や子どもたちは今

～現地で起きていることを知り、

私たちができることを考えよう～(全3回予定)

<第1回>

2022年5月19日 (木) 13:00～14:30

講師：元在ウクライナ日本国大使館 広報・文化担当 二等書記官
勝村 良子 氏 (2005年～2008年 キーウ在住)
(コーディネーター 社会学部社会福祉学科 小野 道子 准教授)

会場：Webex 配信
視聴URLは講演前日までに登録メールへお知らせします

申込：事前申し込み制
以下のアドレスまたは右のQRコードより申込をしてください
<https://forms.gle/4HpVkmTKY7EyzMSJ9>
※社会福祉学科「障害者福祉論A / 障害者福祉」履修者は申込不要です
担当教員の指示に従ってください



対象：全学部生・大学院生・教職員
※第2回、第3回は6月中旬以降の開催を予定しています
詳細が決まり次第お知らせします

※この講演を視聴し、感想・アンケートに回答しますと、TGポイントが付与されます。
また、当日ご参加できない皆様に向けて、後日動画を期間限定で公開する予定です。
詳細が決まりましたら、お知らせいたします。



主催：東洋大学社会貢献センター (mlect@toyo.jp)

Peace And Love



For Ukraine

東洋大生がワークショップで考える

SDGs (入門基礎編)

～SDGsと自分のつながりを考えよう～

5月28日 (土) 10:00～12:00
オンライン (zoom) 開催

東洋大学SDGs
アンバサダー
による活動

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs (持続可能な開発目標)は、持続可能な世界を実現するための17のゴールと169のターゲットで構成されている2030年までの国際目標です。「leave no one behind」(地球上の誰一人として取り残さない)ことを誓っていますが、私たちの生活にどのように関係するのでしょうか。今回はグループワークなどを通して、SDGsを基礎から学ぶとともに、日常生活との接点を見つけ、SDGsを「自分ゴト」として考えます。身近なことから世界とのつながりを考えてみましょう。

ファシリテーター

星野智子さん ((一社)SDGs市民社会ネットワーク 理事)

環境とパートナーシップをテーマに、SDGs策定前から関連の市民活動に携わる。ユースの環境ボランティア活動や有機農業、地域活動にも関わるなど、あらゆる“つなぐ”を目指して活動中。

(一社)環境パートナーシップ会議副代表理事。



【申込方法】Googleフォーム

(右記のQRコードよりお申込みください)

【申込期限】5月27日15時まで

【定員】20～25名

(お申し込み多数の場合は抽選させていただきます)

【お問い合わせ】東洋大学ボランティア支援室

TEL : 03-39457927

MAIL: mlvolsup@toyo.jp



007

2022年度 東洋大学SDGSアンバサダー 座談会

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



新規アンバサダー
歓迎！

一緒に活動していこう！

SDGS CAFE 企画

【日程】 6月10日（金）・14日（火）

【時間】 12：15～12：55

【場所】 白山キャンパス雨水会館（対面） & オンライン

【対象者】 2022年度東洋大学SDGsアンバサダー

【お問い合わせ】 東洋大学ボランティア支援室

TEL: 03-3945-7927 MAIL: mlvolsup@toyo.ac.jp

特別講演



ウクライナ避難民の子ども支援

～ルーマニアの現場からの報告～(全3回予定)

<第2回>

2022年6月16日 (木) 16:30～18:00

講師：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
プログラム部 シニアプログラムオフィサー



山形 文 氏

大学卒業後、一般企業勤務を経てプラン・インターナショナル・ジャパンに入局。
日本国内、アジア、アフリカ、中南米の活動国で地域開発、緊急人道支援事業に従事。
2022年5月よりウクライナ避難民の子どもの保護事業支援のためにルーマニアに派遣。
(コーディネーター 社会学部社会福祉学科 小野 道子 准教授)

会場：Webex 配信

視聴URLは講演前日までに登録メールへお知らせします

申込：事前申し込み制

以下のアドレスまたは右のQRコードより申込をしてください

<https://forms.gle/AKmFJYXxqwCfxUaEA>

※社会福祉学科「児童福祉論A」履修者は申込不要です
担当教員の指示に従ってください

対象：全学部生・大学院生・教職員

※第3回は6月下旬以降の開催を予定しています

詳細が決まり次第お知らせします

※この講演を視聴し、感想・アンケートに回答しますと、TGポイントが付与されます。
また、当日ご参加できない皆様に向けて、後日動画を期間限定で公開する予定です。
詳細が決まりましたら、お知らせいたします。



Peace And Love



For Ukraine

主催：東洋大学社会貢献センター (mlect@toyo.jp)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals

東洋大生がワークショップで考えるSDGs

SDGsを自分ゴトとして考えてみよう

～身近なモノから世界とのつながりを考える～

6月23日（木）18：00～20：00

オンライン開催

東洋大学
SDGsアンバサ
ダーが活動して
います！

●主催：東洋大学ボランティア支援室・東洋大学SDGsアンバサダー

●ファシリテーター：岩岡由季子さん

認定NPO法人開発教育協会（DEAR）事業担当。大学時代の留学をきっかけに国際協力に関心を持ち、コンサルタント企業での勤務を経て、現職。教材開発やワークショップの講師などを務めている。



●申込方法：Googleフォーム（QRコードよりお申込ください）

●申込期限：6月20日（月）まで

●定員：20名ほど（お申し込み多数の場合は抽選させていただきます）

●お問い合わせ：東洋大学ボランティア支援室

☎TEL：03-3945-7927

✉MAIL：mlvolsup@toyo.jp



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs（持続可能な開発目標）は、持続可能な世界を実現するための17のゴールと169のターゲットで構成されている2030年までの国際目標です。「leave no one behind」（地球上の誰一人として取り残さない）ことを誓っていますが、私たちの生活にどのように関係するのでしょうか。今回はグループワークなどを通して、SDGsを基礎から学ぶとともに、日常生活との接点を見つけ、SDGsを「自分ゴト」として考えます。身近なモノから世界とのつながりを考えてみましょう。

SDGs と気候変動と大学と…



「気候変動」をキーワードにSDGsを学んでみませんか

現在、世界中の全ての地域で、熱波・大雨・干ばつ・熱帯低気圧のような極端な気候変動が観測されています。

講師の先生に文京区の取り組みを紹介いただきながら、「SDGsについて」、気候変動を止めるためには、「私たちが取り組めることは何か」を一緒に考えてみませんか？

大学生のうちにできること、一緒に参加している皆さんと実行していきましょう。

SDGsとは…

2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟193か国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた持続可能な開発目標



日程：7月9日(土)10:00～12:30

会場：白山キャンパス 甫水会館301室

※①SDGsアンバサダーの学生が優先となります。

※②応募者多数の場合は、抽選となります。

※③他キャンパス(川越・板倉・赤羽台)の学生はWebでの配信可能

申込URL：<https://forms.gle/BRkDw58QYZLuFqfNA>

締切：2022年7月7日(木)17:00 ★申し込み状況では事前に締め切る可能性があります。



講師 渡辺 了 氏

文京区 資源環境部 環境政策課長

身体・知的・精神障害者の就労支援業務に従事し、他区の実践を参考に、文京区にあった仕組みの構築を目指した。令和4年4月に現部署に着任し、文京区の取り組みを積極的に発信中。

主催：東洋大学社会貢献センター (mlect@toyo.jp)

東洋大生がワークショップで考えるSDGs（国際編）

「イスラム教の祝祭イード・アル＝アドハー」

We are inviting you to our

Eid Al-Adha Celebration

Tuesday, July 12 2022
18.15 - 20.00

@ Toyo University Skyhall
(Building 2, 16th Floor)

Presentations about Islam • Islamic
prayer demonstration • Discussion •
Foods • and many more!

Please RSVP by
responding to the Google
Calendar invitation
attached to this email.



東洋大学で、イスラム教を信仰する留学生が増加していることにともない、学生がイスラム教への理解を深め、多様なバックグラウンドを持つ学生がともに勉強できる大学にしたいと思い企画しました。イスラム教の文化を体験し、ムスリムの学生と交流してみませんか？**ハラル料理の試食**も予定しています。

【日時】7月12日（火）18:15～20:00（受付 17:45～）

【場所】白山キャンパス2号館16階スカイホール

*当日web配信を行う予定です。

【申込】Googleフォームにてお申込ください。（7/7〆切）

<https://forms.gle/5S7CRK8mZigznVLU8>

【定員】50名（先着順）

【お問い合わせ】s1d101900732@toyo.jp

（担当：東洋大学国際学部 グローバル・イノベーション学科4年 宮下）

主催：東洋大学ボランティア支援室

企画運営：東洋大学Eid実行委員会、東洋大学SDGsアンバサダー

協力：宗教法人日本イスラム文化センター



特別講演



日本でウクライナの人々を支援する

<第3回>

2022年7月15日（金） 10:40～12:10

<講師>



横山 由利亜 氏

公益財団法人日本YMCA同盟ウクライナ支援プロジェクト責任者
これまで災害、紛争など国内外の人道支援に幅広く携わり、現在は約200名のウクライナ避難者の国外避難から自立支援まで行っている。



Iryna Perevozniuk 氏

東洋大学研究員（経営学部所属） キーウ国際大学（国際関係論）卒業
6月にウクライナから来日
（コーディネーター 社会学部社会福祉学科 小野 道子 准教授）

会場：Webex 配信

視聴URLは講演前日までに登録メールへお知らせします

申込：事前申し込み制 7月13日（水）締切

以下のアドレスまたは右のQRコードより申込をしてください

<https://forms.gle/w2syESpctUaiu54B9>

※国際学部「文化人類学入門」履修者は申込不要です
担当教員の指示に従ってください

対象：全学部生・大学院生・教職員

※この講演を視聴し、感想・アンケートに回答しますと、TGポイントが付与されます。
また、当日ご参加できない皆様に向けて、後日動画を期間限定で公開する予定です。
詳細が決まりましたら、お知らせいたします。



Peace And Love



For Ukraine

主催：東洋大学社会貢献センター（mlex@toyo.jp）





Presented by 東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ

東洋大学ボランティアカフェ

「地域ボランティア」ってなに？
～見つけよう！私にとっての地域との関わり方～

2022年7月17日（日）19:00-21:00
オンライン開催（ZOOM）

ボランティアカフェ（ボラカフェ）は、お茶やお菓子を片手に、気楽な気持ちでボランティアのことや、地域・まちづくりの話などが聞ける交流型トークセッションです。普段の授業では出会えないような、人や世界との出会いがあるかも？



申し込みは
コチラ！

お問い合わせ：東洋大学ボランティア支援室
（東洋大学白山キャンパス 雨水会館1階）

TEL: 03-3945-7927 e-mail: mlvolsup@toyo.jp

URL: <https://www.toyo.ac.jp>

245/363

014

【SDGsカフェ】

スペシャルオリンピックス (SO)ってなーに？

スペシャル・オリンピックス（SO）は知的障害のある人たちに様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を提供している国際的な組織です。

私たちと一緒に、SDGsの視点からSOの歴史や活動を学びませんか？



講師〈幡谷真澄(はたやますみ)〉氏

公益財団法人スペシャルオリンピックス日本
業務推進部タスクフォーム係長
2016年入社。主に健康推進事業や学校連携事業
に従事し、知的障害者のQOLの向上に努める。
SON・東京の競泳コーチとしても活動。

日時：2022年7月22日(金) 18:15~19:15

会場：白山キャンパス 雨水会館 3階

※他キャンパスの方にはハイフレックス配信を予定

申込方法：事前申込制 (google form)

URL: <https://forms.gle/UMWK5Zo1ztQaj8VQ8>

申込締切：7月20日(水)まで

対象者：本学学生





ラオス フェアトレード

コーヒー販売会

場所: 白山キャンパス 6号館1階

ティピカ種

ラオスコーヒー

豆	100g・200g
粉	100g・200g

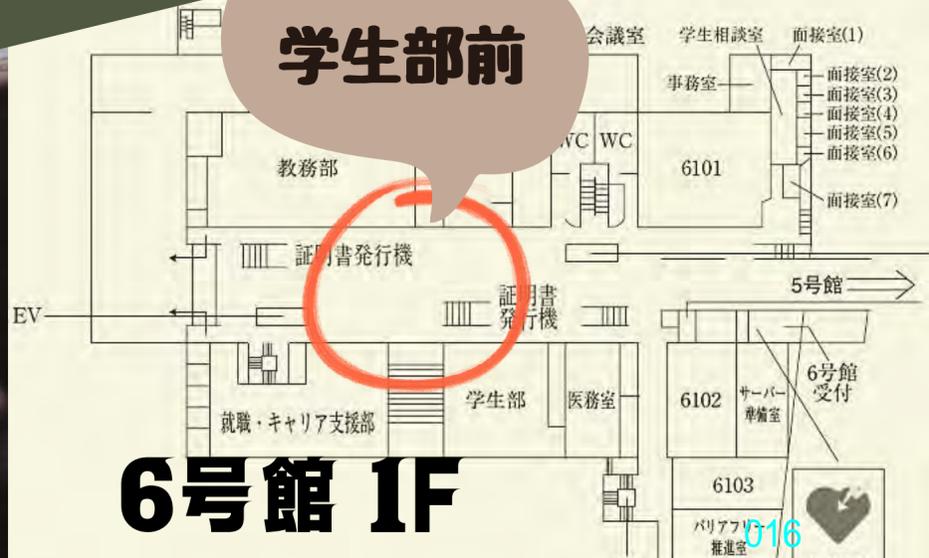


7月22日(金)
10時～18時
 (完売次第終了)

ラオス産 コーヒー
学内で販売します!



エフラオオリジナルコーヒー
champa coffee



おいしいを 支援に。



SMILE F LAOSとは？

私たちはラオスの農家さんが作ったコーヒーを、フェアトレードで取引し、製品化・販売しています。そして、収益の一部を使用して、ラオスの子供たちへ教育支援品を毎年のスタディツアーで届けます。

フェアトレードって？

フェアトレード＝公平な貿易

開発途上国原料や製品を **適正な価格**で継続的に購入することにより、立場の弱い生産者や労働者の **生活改善と自立を目指す** 貿易のことです。

ラオスのコーヒーを皆様へ

ラオス人民共和国
首都:ビエンチャン

人口:約710万人(2019年)

雨季と乾季があり、朝晩の寒暖差がある。
国際連合により、後発開発途上国に。

→途上国の中で特に開発が遅れている国

一製品になるまで

バナナやエビ、コーヒーなどの食べ物の取引を行う日本企業のATJが

ラオスの農民自身が運営する農協からコーヒー豆を輸入します。

そして、株式会社 流通サービス様でコーヒー豆の焙煎を行った後に、

私たち **エフラオ** が袋詰め等を行って製品にして販売することで、

皆様の元へお届けします。



公式
Instagram



ラオス・スタディツアーの様子

「これからの働き方と働きがいについて考える」

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



大学卒業後、社会に出ていくわたしたち。就職活動においてあなたは何を重視しますか？「働く」とはということなののでしょうか？今回のワークショップでは、SDGsにある8番目の目標である「働きがいも経済成長も」に着目して考えてみましょう。

SDGs WS
初対面開催！
アンバサダー
企画！

【主催】東洋大学ボランティア支援室・東洋大学SDGsアンバサダー

【日時】7月23日（土）10：00～12：00

【場所】白山キャンパス 雨水会館301室

【申込】Googleフォームにてお申込ください（7/18〆切）

<https://forms.gle/TotUBybyQmVHM9L8A>



【定員】25名ほど（申込者多数の場合、抽選とさせていただきます）

【お問い合わせ】ボランティア支援室（mlvolsup@toyo.jp）

講師：久米 功一 先生

東洋大学経済学部総合政策学科教授。専門は労働経済学、行動経済学。著書に『働くことを思考する』（中央経済社）がある。

司会・進行：千賀 啓世（経済学部経済学科4年、SDGsアンバサダー）
249/363

東洋大学

東洋大学エクステンション課
NPO法人「キッズドア」主催

キャンパスツアー ボランティア募集



ボランティアがしたい！

誰かの役に立ちたい！

色々な人と関わりたい！

初めての方も大歓迎！

大学って どんなところ？

当日の流れ

- ① ツアーの説明
- ② 本学の紹介
- ③ 学生との懇談
- ④ キャンパスツアー
教室、図書館、博物館...etc

主催：東洋大学エクステンション課
NPO法人「キッズドア」

大学の主要施設を巡るツアーを通して ボランティアを始めてみませんか

大学進学か就職か...。でもコロナ禍で大学の様子がわからない。そんな高校生のために、大学の施設を巡りながら様々なことに答えていただきます。
自分が普段通っている大学の紹介や実際の経験を話すことから、ボランティアを始めてみましょう！
お気軽にご応募ください！

日程：7/30,8/2,8/5

学生9:30集合/13:00解散

定員：各日最大15名程度

※①SDGsアンバサダーの学生が優先となります。
※②応募者多数の場合は、抽選となります。

お申込み：<https://forms.gle/Q6vYiATZeKqRLDvu9>

締切：2022年7月8日(金)

★応募状況によっては追加募集を行います



8/8

(月)

READYFOR(株) CSRスタディツアー

国内最大規模のクラウドファンディングサイト<READYFOR>
～ネットを通じた寄付集めの裏側を知る～

READYFORってどんな会社？

インターネットを通して自分の活動や夢を発信することで、想いに共感した人や活動を応援したいと思ってくれる人から資金を募るしくみである「クラウドファンディング」を利用し、途上国支援や商品開発、自伝本の制作など幅広いプロジェクトを行い、人々の夢を応援する会社です。

事例) ネパールの女性が営む石鹸工房を立て直すプロジェクト
北海道で廃止となった寝台列車「北斗星」を保存設置するプロジェクトなど

募集対象 ボランティアや社会貢献に興味・関心のある学生

募集人数 7名（応募者多数の場合は抽選します。）

活動日時 8月8日（月）14：00～16：00
活動場所 READYFOR（株）本社

※ 集合場所などの詳細は後日メールにて連絡します。

申込方法 QRコードまたは、
URLから申込。7/31(日)まで ➡ 8/3(水)まで延長！



<https://forms.gle/yFnfPP4fjGk1yqHH9>

お問い合わせ：東洋大学ボランティア支援室
TEL : 03-3945-7927
MAIL : mlvolsup@toyo.jp

8/9

(火)

(株)メルカリ CSRスタディツアー

国内最大規模のフリマサイト<メルカリ>が取り組む社会貢献事業
～ESG、自治体との連携協働を中心に～

メルカリってどんな会社？

簡単に商品を売り買いできるフリマアプリ「メルカリ」。8,000万ダウンロードを達成し、今や私たちの身近なモノとなりつつあります。メルカリはフリマアプリとしてだけでなく、社会貢献にも多方面で関わっています。普段見ることができないメルカリの裏側を、体験してみませんか？

事例) 着なくなった洋服をもとに新しいスタイルを提案するグリーンフライデー
大掃除で出た「不用品」集荷事業
小学生～高校生向けの教育プログラムを開発し、教材を無償公開事業
梱包材をすぐに捨てない習慣をつくる「メルカリエコパック」企画 など

募集対象 ボランティアや社会貢献に興味・関心のある学生

募集人数 20名（応募者多数の場合は抽選します。）

活動日時 8月9日（火）10：00～12：00
活動場所 (株)メルカリ本社

※ 集合場所などの詳細は後日メールにて連絡します。

申込方法 QRコードまたは、URLから申込。7/31(日)まで
8/3(水)まで延長！



<https://forms.gle/5jkc2gwwJRzEoAFj6>

お問い合わせ：東洋大学ボランティア支援室

TEL : 03-3945-7937

MAIL : mlvolsup@toyob.jp

ゆがわらっことつくる 多世代の居場所 with 東洋大生

東洋大学課外活動育成会企画



～居場所づくりボランティア～

子ども支援やまちづくりに興味のある方におすすめのボランティア活動です！子どもたちと安心して過ごすことができる場の創出に私たち東洋大生が関わり、各個人にとって「場をつくる」ということを考える機会になるように、私たちと一緒に創り上げてみませんか？

日程：2022年8月31日(水)～9月2日(金)

場所：神奈川県湯河原町（宿泊場所は静岡県熱海市）

集合場所：JR東海道線湯河原駅 11:00集合

定員：15名（申込多数の場合は志望動機等から選考）

申込対象：学部生のみ（大学院生等は申込できません）

申込先：右記のQRコードから

締切：2021年8月12日（金）【厳守】

【事前学習会を実施します】

・8月23日（火）18:00～20:00（オンライン形式）

申込は
こちらから！



022



ゆがわら

「ゆがわらっこをつくる多世代の居場所」とは？

一般社団法人ユガラボの事業「ゆがわらっこをつくる多世代の居場所」は、子どもたちの「本音で語り合いたい」「安心してありのままにいられる場所がほしい」という願いから生まれた、赤ちゃんからお年寄りまでが安心して過ごすことのできる場所です。構想から日々の活動まで、ゆがわらっこが中心となり多世代で実施しています。

スケジュール ※変更になることがあります

<1日目>

- 11:00 集合、オリエンテーション
- 12:00~13:00 昼食
- 13:30~17:30 「居場所」での交流
- 17:30~18:30 1日のふりかえり

<2日目>

- 10:00~12:00 「場づくり」を考えるワークショップ
- 12:00~13:00 昼食
- 13:30~17:30 「居場所」での交流
- 17:30~18:30 1日のふりかえり

<3日目>

- 10:00~12:00 全体のふりかえり
- 12:30 現地解散





THE GLOBAL GOALS

7 AFFORDABLE AND
CLEAN ENERGY



12 RESPONSIBLE
CONSUMPTION
AND PRODUCTION



17 PARTNERSHIPS
FOR THE GOALS



家にいながら
フィリピンで
ボランティア？

TOYO オンラインボランティアプログラム2022

フィリピンの若者とつくる SDGsアクション！



DAY1 : 8月18日(木) 10:00-12:00

DAY2 : 8月22日(月) 10:00-12:00

DAY3 : 8月23日(火) 10:00-12:00

DAY4 : 8月30日(火) 10:00-12:00



**参加費無料、英語力不問
先着30名様限定!!**



主催・お問い合わせ先：東洋大学ボランティア支援室
(TEL) 03-3945-7927 (e-mail) mlvolsup@toyo.jp
協力：特定非営利活動法人LOOB JAPAN

▲申し込みフォーム
(締切：8/11 (木))

**企画段階から関わってくれる
スタッフも募集中！**

255/363 (詳細は申し込みフォーム1024)

9/13
(火)

パナソニック ホールディングス(株) CSRスタディツアー

～企業市民活動（社会貢献活動）の取り組み～

パナソニックってどんな会社？

日本を代表する大手電機メーカーとして、電化製品のみならず様々な分野から皆さんの生活を支えている会社です。ものづくりなどの本業とはちがう方法で社会課題に向き合う「企業市民活動」にも取り組み、「貧困の解消」「環境活動」「人材の育成（学び支援）」という、3つの重点テーマを軸に社会貢献をしています。

事例) 無電化地域の未来を照らすプロジェクト「LIGHT UP THE FUTURE」
未来を担う子どもたちに向けた学びのプログラムを提供するプロジェクト
福島『復興』応援アクション～食べることで福島を応援しよう！～ など

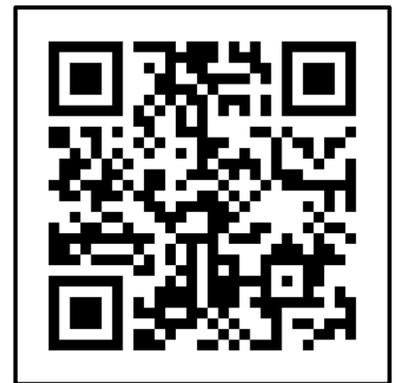
募集対象 ボランティアや社会貢献に興味・関心のある学生

募集人数 20名（応募者多数の場合は抽選します。）

活動日時 9月13日（火）14：00～16：30頃まで
活動場所 パナソニックセンター

※ 集合場所などの詳細は後日メールにて連絡します。

申込方法 QRコードまたは、
URLから申込。8/31(水)まで



<https://forms.gle/t3WES9RVYyVACc3P8>

お問い合わせ：東洋大学ボランティア支援室
TEL : 03-3945-7927
MAIL : mlvolsup@toyo.jp



河口湖畔

清掃ボランティア



河口湖一。それは富士五湖の一つに数えられる美しい湖。しかし近年、富士山の一部とも言えるその湖は、人の手によって美しさを失いつつあります。2022年夏、あなたもこの湖を守る活動へと参加してみませんか??

開催日：9/5(月) 13:00～ (集合：8時45分 白山キャンパス西門)

事前説明会：8/1(月) 18:00～ オンライン開催

※オンライン会場URLは申込時のメールに後日送信します。

申込期間：7/1(金)～7/25(月)

参加対象：学部生 募集定員 40名

参加費：無料

申込フォーム：URL <https://forms.gle/juMtJ36Kz5ybQUpV8>

申込フォーム

※申込は上記URLか、QRコードよりグーグルフォームに回答してください。



<スケジュール>

- 9:00 白山キャンパス出発
- 13:00 ~15:30 河口湖畔到着 / 清掃活動
- 19:00 白山キャンパス到着
(交通状況により前後する可能性あり)

- ◆企画◆ 東洋大学学生サポートスタッフ
SDGs アンバサダー
- ◆協力◆ 東洋大学学生課外活動育成会
環境 NPO 富士山クラブ



被災地の現状を知り、復興応援！！ いわき市の農漁業の現状を 発信するスタディツアー



被災地では、コロナ禍の中、少しずつでも展望が開けるように活動している方が多くいます。

今回、被災地である福島県いわき市の農業・漁業の生産・流通の現場を訪れて、そこで活動している方から話を伺い、現状を発信し、福島を応援する企画をたてました。学内では入学以来、コロナ禍の中で、“現場”での活動ができないでいる学生の皆さんも多いと思います。この機会にぜひ参加してください。

※本企画は実際に現地で活動を行い、関係者とも交流を行う企画です。したがって、新型コロナウイルス感染症の拡大状況によっては中止となる場合があります。

※事前学習および事後学習も行ないますので、併せて出席してください。

DAY 1 9月14日(水)

- 9:00 白山キャンパス出発
- 12:30 久之浜漁港の見学、昼食
- 14:00 四倉地区の畑(天空の里山)で農作業体験
- 18:00 宿舎(いわき市湯本:古滝屋)到着、夕食
- 19:30 講演: 漁業関係 ((合)はまから 阿部峻久さん)

DAY 2 9月15日(木)

- 7:45 宿舎出発
- 8:30 久之浜漁港市場(セリ見学)
- 10:45 富岡町 東京電力廃炉資料館見学
- 12:15 さくらモール富岡 昼食
- 14:00 四倉地区の綿花畑にて農作業体験
- 18:00 宿舎(いわき市湯本:古滝屋)到着、夕食
- 19:30 講演: 農業関係 ((株)起点 酒井悠太さん)

DAY 3 9月16日(金)

- 8:00 宿舎出発
- 9:00 平地区のオリーブ畑にて農作業体験
- 14:30 東京へ向け出発
- 18:00 白山キャンパス帰着・解散

※スケジュールは変更になる場合があります。

申込方法

申込方法: 右のQRコードより申込フォームに入力してください。

<https://forms.gle/1R7jbV2JHmewmGa7>

申込期間: 2022年7月20日(水)~2022年7月31日(日)

※申込み多数の場合、参加理由による選考があります。参加可否については、8月5日(金)までに申込時に登録したメールアドレスにお送りします。

申込フォーム↓



参加費

¥7,000程度

バス移動交通費、宿泊代は育成会費より支出されますので無料です。その他の費用(食事等)は自己負担となります。当日現金で徴収します。

定員

20名(学部生のみ)

事前学習

参加決定者には別途お知らせします。

必ず出席してください。欠席者には課題を提出いただきます。

【SDGsカフェジェンダー編】



「We Body」

—Women's body is 「We Body」—

女性の体に巡る問題は私達と関わっている。
「WeBody」はジェンダー問題を提起、解決する企画である。



1. What are the problems?
2. Where did it happen?
3. Why does this happen?
4. What can we do to solve these problems?



四つの点で、私達と一緒にジェンダー問題を学びながら、
解決策を探しましょう！



講師：ズルエタ ジョハンナ 先生

東洋大学社会学部国際社会学科准教授
専門分野は移民の社会学、エスニシティ論、ジェンダー論
著書：Okinawan Women's Stories of Migration:
From War Brides to Issei. London: Routledge (2022)

司会・進行：Sun Yan

社会学部国際社会学科2年、SDGsアンバサダー

日時：9月17日(土)10:00~11:30(受付は9:45分)
会場：白山キャンパス
申込方法：事前申込制 (google form)
URL: <https://forms.gle/xaDd1b3Az91BCzub9>
申込締切：9月13日17時まで
対象者：本学学生
定員：20名
開催方法：対面(非対面も可能です。)



対面での参加は大歓迎

お問い合わせ：ボランティア支援室 (mlvolsup@toyo.jp)

9/20
(火)

NEC ネットズエスアイ(株) CSRスタディツアー

～ドラマ「半沢直樹」ロケ地の働き方改革最前線とSDGs～

NECってどんな会社？

多くの方は、パソコンメーカーの会社だと思われかもしれませんが、セキュリティ関連事業や、ネットワーク関連、AIロボット技術の関係と、幅広く事業展開されています。また社会貢献の分野では、「地球にやさしい事業活動」に取り組んでおり、顧客に対し、環境を配慮した製品・サービスを提供することで持続可能な社会の実現を目指しています。

事例) 2030年までに2019年比で55%のCO2削減。2050年までには排出量ゼロに。
IT・NWを活用した、生物多様性に関する事象の「見える化」や、「予防」、「再生・回復」に繋がるソリューションを提供する。など

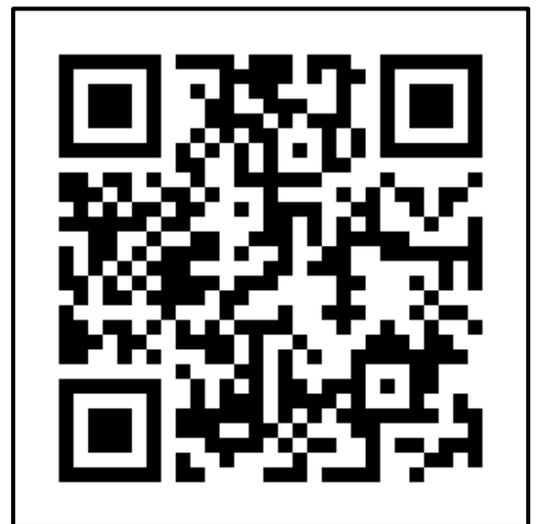
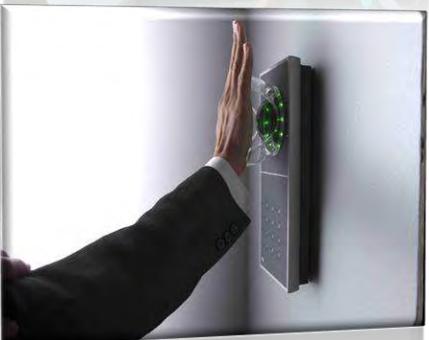
募集対象 ボランティアや社会貢献に興味・関心のある学生

募集人数 20名（応募者多数の場合は抽選します。）

活動日時 9月20日(火) 13:00～15:00
活動場所 日本橋三井室町タワー

※ 集合場所などの詳細は後日メールにて連絡します。

申込方法 QRコードまたは、
URLから申込。8/31(水)まで



<https://forms.gle/zBmxGBuCorS1Sum7A>

お問い合わせ：東洋大学ボランティア支援室

TEL : 03-3945-7927

MAIL : mlvolsup@toyo.jp



ラオス フェアトレード

第2回 コーヒー販売会

場所: 白山キャンパス 6号館1階

ティピカ種
ラオスコーヒー
 豆 100g・200g
 粉 100g・200g



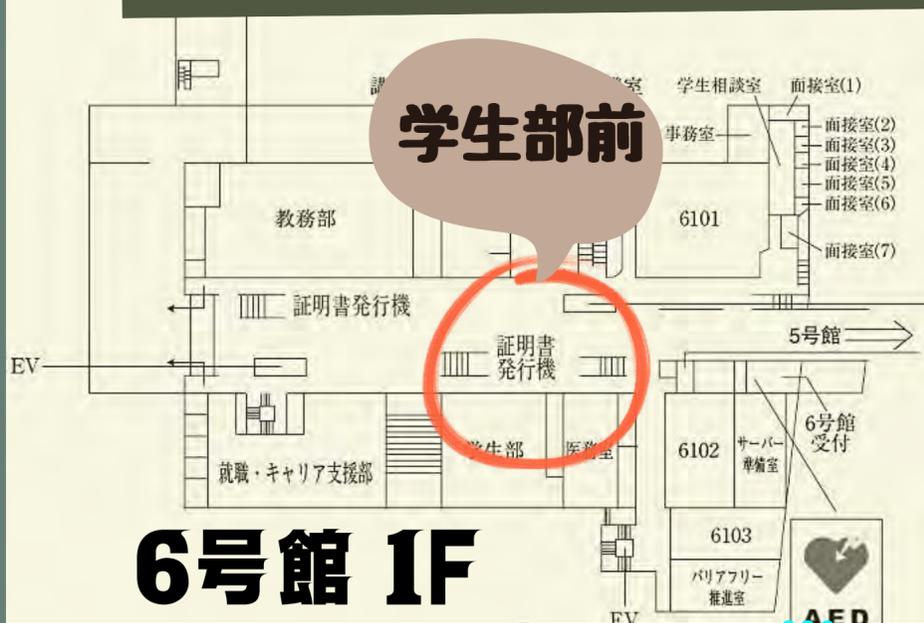
10月10日(月)
10時~18時
 (完売次第終了)

ラオス産 コーヒー

学内で販売します!



エフラオオリジナルコーヒー
champa coffee



おいしいを 支援に。



SMILE F LAOSとは？

私たちはラオスの農家さんが作ったコーヒーを、フェアトレードで取引し、製品化・販売しています。そして、収益の一部を使用して、ラオスの子供たちへ教育支援品を毎年のスタディツアーで届けます。

フェアトレードって？

フェアトレード = 平な 易

開発途上国原料や製品を **適正な価格**で継続的に購入することにより、立場の弱い生 者や労働者の生活改善と自立を目指す貿易のことです。

ラオスのコーヒーを皆様へ

ラオス人民共和国
首都:ビエンチャン

人口:約710万人(2019年)

雨季と乾季があり、朝晩の寒暖差がある。
国際連合により、後発開発途上国に。

→途上国の中で特に開発が遅れている国

一製品になるまで一

バナナやエビ、コーヒーなどの食べ物の取引を行う日本企業のATJが

ラオスの農民自身が運営する農協からコーヒー豆を輸入します。

そして、株式会社 流通サービス様でコーヒー豆の焙煎を行った後に、

私たち エフラオ が袋詰め等を行って製品にして販売することで、

皆様の元へお けします。



公式
Instagram



SMILE.F.LAOS

ひとり親家庭と子ども支援

日本のひとり親世帯の相対的貧困率は先進国の中でも最低レベルです。非正規就労が多いことでの経済的困窮、子どもの大学等への進学においても著しく不利な状況にあります。ここ数年のコロナ禍においては、仕事を失ったり、子どもの学校休校などで仕事を休まざるを得ないなど、ひとり親家庭はますます厳しい状況におかれています。

講師の小森雅子さんは、シングルマザーと子どもたちが生き生き暮らせる社会をつくるために活動をおこなっている、しんぐるまざあず・ふぉーらむの理事であり、社会福祉士専門職としても日々、ひとり親家庭の相談業務などに携わっておられます。日本のひとり親家庭の子どもたちのおかれている状況を理解することで、子どもの貧困やジェンダー格差、教育格差についても学びきっかけになりますので、ぜひ参加ください。

日時：10月25日(火) 6限 18:15~19:45



講師：小森雅子さん

(NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ 理事)

社会福祉士。NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ事務局スタッフ・理事。シングルマザーとしての経験を生かし、ひとり親のための相談、就労支援、親子イベントなどを担当。

参加方法：対面（白山キャンパス 6219教室）とWebexにて実施

事前申込制：以下のGoogleFormsから参加申し込みして頂いた方へ、イベント前日までに当日の参加URLをお送り致します

<https://forms.gle/8WkNnHDPwEQhpjhdA>

申込締切：10月21日



お問い合わせ先
東洋大学
ボランティア支援室
☎03-3945-7927
✉mlvolsup@toyo.jp



現代生物学 公開講座

持続可能な食料生産を切り開く最新の農業技術 —スマート農業・減農薬でSDGsに貢献—

食糧生産技術は多くのSDGs目標とかかわっている。

まず、食料の安定的な生産技術の開発は、飢餓をゼロにするために極めて重要である。

次に、大きな面積で同じ作物を栽培する農耕において、肥料や農薬の過剰な使用は、河川を含めた環境への悪影響につながり生物多様性の保持に影響する。また、地球の温暖化は農業分野にも深刻であり、これまで日本には存在しなかった害虫や植物ウイルス病が発生しており、その対策が急がれている。本講義では、ドローンを使って農作物を生育（健康）状態を診断すると同時に、肥料や農薬を必要場所に必要な量を処理する技術の開発など、新しいデジタル技術を農業現場に適用してゆくスマート農業に取り組まれている池田氏にご登壇いただき、食料生産現場における現状と未来における持続可能な食料生産について講演をいただく。

日時：10月21日(金)2限 11:10~12:40

講師：池田 健太郎 様（群馬県農業技術センター）

担当：生命科学部・生命科学科 藤村 真

参加方法：対面またはWeb配信のどちらかを選択ください

場所：板倉キャンパス1102教室またはWebex

事前申込制：以下のGoogleFormsから参加申し込みして頂いた方へ、イベント前日までに当日の参加URLをお送り致します

<https://forms.gle/tR7i3hfeCZZY9f4F6>

申込締切：10月14日



お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
☎03-3945-7927
✉mlvolsup@toyo.jp



東洋大学 SDGs Weeks 2022 「里親月間」[×]特別企画



里親と暮らす子どもたちについて知ろう

10月は里親月間です。保護者がいなかったり、保護者から虐待などの暴力を受けたりなど様々な理由で児童養護施設や里親のもとで暮らす社会的養護が必要な子どもたちが4万2000人もいます。しかしながら、日本での里親委託率は23%程度と国際的にはかなり低い水準にとどまっています。

虐待を受けた子どもたちがどのような支援を受けているのか。里親制度や里親のもとで暮らす子どもたちの状況について理解を深め、大学生にもできることを考えてみませんか？

日時：10月13日(木)2限 10：40～12：10

講師：吉成 麻子 様 (NPO法人乳幼児家庭養育の会)
養育里親。NPO法人乳幼児家庭養育の会、理事。
2004年里親登録、以来実子4人を含む15人の子どもを養育。
すべての赤ちゃんが家庭で暮らせることを願っている。



講師：齋藤 直巨 様 (一般社団法人グローハッピー)



養育里親。一般社団法人グローハッピー代表理事。
公益財団法人 全国里親会 広報委員。NPO法人東京養育家庭の会理事。実子と里子の思春期3姉妹を子育て中。虐待を受けた子、障害児、乳児など、様々な子どもの養育に携わる。

参加方法：対面(白山キャンパス)とWebexにて実施

事前申込制：以下のGoogleFormsから参加申し込みして頂いた方へ、イベント前日までに当日の参加URLをお送り致します

<https://forms.gle/jBvN4wjPuAyXcpeV9>

申込締切：10月11日



お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
☎03-3945-7927
✉mlvolsup@toyo.jp



教育学演習ⅡB・ⅢB／教育学卒論演習B 公開講座

韓国における特殊教育の動向と課題

韓国では、障害のある子どもの教育制度を特殊教育といい、特殊学級を中心にインクルーシブ教育が展開されています。日本においても共生社会を実現するため、多様な学びの場を整備するなど、インクルーシブ教育のシステムが構築されています。このような状況下で、韓国の特殊教育の動向と課題を知ることは、日本のインクルーシブ教育や特別支援教育の現状を再考する上で有用であり、さらにはSDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」について考える際の重要な視点となります。

今回、韓国の特殊教育の動向と課題について、大邱大学校の洪 浄淑教授にWebexを使用しオンラインで講演いただきます。本学学生であれば特別にどなたでもご参加いただけますので、是非ご応募ください。

日時：11月1日(火)5限 16：30～18：00

講師：洪 浄淑 (Jeongsuk Hong, Ph D.)様

(大邱大学校 特殊教育科 教授)

本学の協定校である大邱大学校に勤務。大邱大学校は本学の協定大学であり、同大学校の特殊教育学科は1961年に韓国で設立されこれまでに多くの特殊学校の教員を輩出している。

担当教員：高野聡子(代表) 緒方登士雄 長谷川勝久 大江啓賢

参加方法：Webexにて実施

事前申込制：以下のGoogleFormsから参加申し込みして頂いた方へ、イベント前日までに当日の参加URLをお送り致します

<https://forms.gle/zir1W5Uv5CSzQxoZ7>

申込締切：10月28日

* 使用言語日本語



お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
☎03-3945-7927
✉mlvolsup@toyo.jp



低所得者福祉論／貧困に対する支援公開講座 コロナ禍のホームレス支援活動から見える 日本社会の課題

池袋を中心に活動しているホームレス支援団体TENOHASI。炊き出しや夜回り活動、生活相談、時には生活保護の申請の付き添いをしたり、シェルターの入居支援を行ったりしておられます。新型コロナ感染症の拡大に伴い、失業したり、事業縮小によるアルバイト・パートのシフトを減らされたりして、食費や家賃を心配しながら節約を重ねる人、住まいを失いネットカフェで生活をする人等、生活に困窮する人が増えています。政府や東京都はコロナ対策として、様々な支援策を打ち出しているものの、支援が十分に届かない方々も多くおられます。そのような方々のために日々奔走しておられる、TENOHASI事務局長の清野賢司さんを講師にお迎えし、コロナ禍で急増する生活困窮者およびその支援の実態について、また支援を通じて見えてくる日本の社会保障システム、特に貧困対策である生活保護や低所得者支援の課題についてお話を伺います。

この授業は、SDGs目標のうち「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」「すべての人に健康と福祉を」に関わる内容を扱います。

日時：11月2日（水）5限 16：30～18：00

講師：清野 賢司様（特定非営利活動法人TENOHASI
事務局長・精神保健福祉士）

会場：赤羽台キャンパス(WELLB HUB-2)20208教室

参加方法：対面またはwebex/zoomにて実施

事前申込制：GoogleFormsから参加申し込みして頂いた方へ、イベント3日前までに当日の参加URLをお送り致します

アドレス：<https://forms.gle/scKVSio8HoAUBM5x5>



お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
☎03-3945-7927
✉mlvolsup@toyo.jp

ソーシャルワークの理論と方法A 公開講義 SDGs・カーボンニュートラルを ソーシャルワークから読み解く

SDGsの17のゴールは、様々な環境に働きかけ、社会の変革を目指すものです。ソーシャルワークも同様に、社会変革を目指し、誰もがその人らしい生活を実現していく指向性をもった営みです。その意味からして、ソーシャルワークのグローバル定義（2014）およびソーシャルワークの価値は、SDGsの考え方と極めて親和性が高く、共通点も多いです。

そこで、文京区のカーボンニュートラル推進の部署の課長である渡邊了氏から、文京区のSDGsの取り組みと方向性、大学との連携等の話をさせていただきます。

文京区のカーボンニュートラル推進の部署の課長渡邊氏は、障害福祉課長や生活保護課長を歴任しており、社会福祉士も取得されています。これらの経験を踏まえ、本講義ではソーシャルワークの価値や原理とSDGsを統合して考えていく視点を、具体的事例を通して解説いただきます。

日時：11月9日(水) 3限 13:00～14:30



講師：渡邊 了 氏（文京区環境政策課）

担当：社会学部 社会福祉学科 教授 高山 直樹

参加方法：対面（白山キャンパス 6211教室）と
Webexにて実施

事前申込制：以下のGoogleFormsから参加申し込みして頂いた方へ、イベント前日までに当日の参加URLをお送り致します
<https://forms.gle/2E4QYGhgobFcPgTq9>



申込締切：11月7日

お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
☎03-3945-7927
✉mlvolsup@toyo.jp



CSR論 公開講義 企業と人権

企業活動の発展は社会全体の発展が前提である、という考えから、社会全体への責任として、CSR（企業の社会的責任）の適切な実施が求められています。

森林伐採や化学物質流出などによる汚染、児童労働や劣悪な労働環境、ダイバーシティ（多様性）推進の阻害となる無意識の偏見による人権侵害の発生、外国人技能実習生制度の構造的な人権侵害、広告による人権侵害など、企業活動がさまざまな人権に影響を与えているなか、企業はどのようにその責任を担うべきなのでしょう。

近年では2015年9月の国連サミットで採択された国際目標としてのSDGs（持続可能な開発目標）を取り込む動きもあるなか、本講義では多くの企業のCSR実務に取り組まれている秋山講師に講演をお願いします。ぜひご参加ください。

日時：11月15日(火) 1限 9：00～10：30

講師：秋山映美氏（株式会社クレアン）

担当：総合情報学部 総合情報学科 小瀬 博之 教授

参加方法：川越キャンパス教室にお集まりいただき、オンラインで講師に講義いただきます。Webexにて参加も可能です。

事前申込制：以下のGoogleFormsから参加申し込みして頂いた方へ、イベント前日までに当日の参加URLをお送り致します

<https://forms.gle/iZ5e5LaNvMsSBwKK9>

申込締切：11月8日



お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
☎ 03-3945-7927
✉ mlvolsup@toyo.jp

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



社会福祉学総合演習 視覚障がい者支援 盲導犬歩行体験を通じて考える

SDGs目標『3.全ての人に健康と福祉を』『11.住み続けられるまちづくりを』

社会福祉学科「社会福祉学総合演習」の授業では、SDGs啓発活動の一環として、株式会社シード様と公益財団法人アイメイト協会様の協力のもと、盲導犬の歩行体験をメインにイベントを行います。

活動を通して、視覚障がいのある方の状況を実際に体験し、気持ちを理解して、支援に対して関心を持っていただきたいと思います。社会福祉学科以外の学生さんも大歓迎です。ご来場お待ちしております。

－体験内容－

- ・盲導犬歩行体験
- ・目隠した状態での パズル体験

－タイムスケジュール－

- 【開場】11:00～
- 【第一部】11:10～11:40
- 【第二部】11:45～12:15
- 【第三部】12:20～12:50
- 【第四部】12:55～13:25
- 【第五部】13:30～14:00

日時: 11月16日(水)11:00～14:00

場所: 白山キャンパス スカイホール(2号館16階)

共催: 株式会社シード

公益財団法人アイメイト協会



予約不要: 直接会場へお越しください。なお来場者多数の場合は人数制限をさせていただく場合がございます。

お問い合わせ先
東洋大学 ボランティア支援室
☎03-3945-7927
✉mlvolsup@toyo.jp



SDGsコンテスト

作品募集

応募期間

2022年10月10日～

▶ 11月6日

11/30まで延長!

問い合わせ先
東洋大学ボランティア支援室
電話：03-3945-7927
メール：mlvolsup@toyo.jp

応募要項の
詳細は
裏面へ



皆さんが普段「何気なく」行っている行為が実は“SDGs活動に繋がっている”ことを他の学生さんへ紹介していただき、それぞれの「小さな行動」がSDGs推進に繋がっていくような作品を募集します。

目的

- ① 本学学生のSDGsへの認知度を高めること。
- ② 本学学生にSDGsを身近に感じてもらい、“自分ごと”にしてもらうこと。

募集内容

- (1) ポスター部門
 - (2) 川柳部門
 - (3) アクション部門
- 3種類を募集します。
応募作品の中から優秀な作品を選び、選ばれた方には、後日景品を贈呈します。

応募はこちらから!!



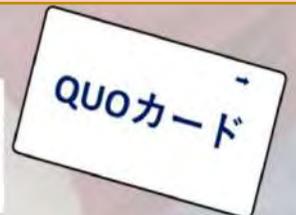
応募URL
(<https://forms.gle/J77ofeBUL8ERtLf8A>)

入賞者

入賞者にはQUOカードを贈呈

- 最優秀賞 1万円分
- 優秀賞 5千円分

参加賞:500円分図書カード
※申込数の条件があります



主催：Team Value Creation
東洋大学ボランティア支援室
協賛：東洋大学課外活動育成会



WaterAid/ Ernest Randriarimalala

開発途上国の水問題を学ぼう

開発途上国の"水"について知っていますか？

開発途上国の水・衛生問題について、実際起こっている問題や原因、影響を、アクティブ・ラーニングを通して学ぶ・理解する・関心を高める機会にしましょう。

[主催] 東洋大学ボランティア支援室・東洋大学SDGsアンバサダー

[日時] 10月15日(土) 10:00-12:00

[場所] 白山キャンパス 6号館2階 6212番教室

[開催方法] 対面開催 (*オンライン対応あり)

[申込] googleフォームにてお申し込みください (10月11日(火)17:00 〆切)

<https://forms.gle/AbuoHJuvoK9JF83WA>

[定員] 20名ほど

[お問い合わせ] ボランティア支援室 (mlvolsup@toyo.jp)



[講師] 杉山 真里菜様 (ウォーターエイドジャパン)

高校時代、カンボジア、タイへのスタディツアー等への参加をきっかけに国際協力や環境問題に関心を持つ。大学卒業後、非営利法人勤務を経て、ノルウェー生命科学大学大学院にて国際環境学修士号を取得。2018年にウォーターエイドジャパンに入職。コミュニケーション担当。



*ワークショップの都合上、オンライン参加の場合、対面での様子を見ていただくのみになることをご了承ください。

2022年度東洋大学

SDGs アンバサダー企画

展示会



場所 6号館3階

防災カードゲーム ①11:00~11:30 ②15:00~15:30
これまでの活動実績(展示) 10:00~19:00



おにぎりアクション 2022 in 東洋

おにぎりを持って6号館学食に集合！



2022.11.1(火), 2(水), 4(金)

📍 白山キャンパス6号館学食階段下 11:30~13:30

おにぎりで貧困問題を解決!?

#OnigiriActionで、おにぎりの写真をSNSに投稿すると給食5食分が世界の子どもたちに届けられます。白山キャンパスでは上記の日程でSNS投稿用のフォトスポットが設置されます。同時に貧困問題について考えるワークを開催予定です。ぜひ皆さんで楽しみながら世界の貧困問題を考えるきっかけにしましょう！

企画：SDGsアンバサダー
東洋大学ボランティア支援室

お問い合わせ：ボランティア支援室
(mlvolsup@toyo.jp)

274/363

043

おにぎりアクションとは？

おにぎりアクションは、日本の代表的な食である「おにぎり」をシンボルに、「おにぎり」の写真をSNS (Instagram, Twitter, Facebook)、または特設サイトに投稿すると、1枚の写真投稿につき給食5食分に相当する寄付(100円)を協賛企業が提供し、認定NPO法人TABLE FOR TWO Internationalを通じてアフリカ・アジアの子どもたちに給食をプレゼントできる取り組みです。
(特設サイトより)

東洋大学の取り組み

東洋大学では、多くの学生におにぎりアクションを知ってもらい参加を促すとともに、世界の貧困問題を知ってもらうきっかけを作りたいと考え、白山キャンパス6号館の食堂におにぎりアクション用のフォトスポットや紹介パネルを設置します。東洋大学生はぜひ期間中に学食にお越しいただき、「#OnigiriAction」、「#おにぎりアクション2022in東洋」のハッシュタグをつけて投稿をお願いします！

おにぎりアクション参加方法

- 1.おにぎりをつくるor買う
- 2.おにぎりの写真を撮る
- 3.おにぎりの写真#OnigiriAction、#おにぎりアクション2022in東洋をつけてSNSか特設サイトに投稿する。

Q&A

Q:6号館学食では何をするの？

A:おにぎりアクションの投稿の時に使えるフォトスポットを設置します！スタッフも常駐していておにぎりアクションの説明などもしています。

Q: SNSを持っていないor鍵アカの場合はどうしたら良い？

A: 鍵アカの場合投稿を確認することができないので、どちらも特設サイトに投稿することで参加することができます。

Q:撮る場所は大学でないとだめ？

A:おにぎりが写っていれば自宅や外出先などどこでも撮ってもOKです。何度でも無料で参加することができます。

Q:どんなおにぎりを撮ればいいの？

手作りや購入したものだけでなく、イラストやおにぎりモチーフでもOKです。ご自身が写ってなくてもOKです。

1 貧困をなくそう



2 飢餓をゼロに



特設サイトはこちら！

onigiri-action.com

SNSを持っていないor鍵アカの方はこちらから写真を投稿することができます



デイキャンプで遊ぼう会

初めてのボランティア体験
里親子家庭とのデイキャンプ（教員引率有）



様々な事情があって里親家庭で暮らしている子どもたちがいます。里親家庭で暮らす子どもたちと一緒に、公園でレクリエーションや外遊びをしませんか？

里親の方々には休息（レスパイト）をとっていただき、他の里親子家庭と交流する機会になります。子どもたちにも他の里親子家庭と知り合う機会であり、一緒にレクなどの活動をしたり遊んでくれる大学生との出会いはとても貴重です。

この活動は子ども福祉を学んでいる学生達を中心に10年余り続けられてきたものです。2018年度より育成会の支援を得て、一般学生も参加が可能となりました。ただし、参加を希望する一般学生には、里親子のおかれている状況を理解するための事前学習を必ず受講いただきます。

日時：2022年11月5日(土) 10時～16時 小雨決行

場所：〒273-0016 千葉県船橋市潮見町40番

集合場所：東洋大学 白山キャンパス 西門前 バスで現地まで行きます。

集合時間：7時45分

参加費：無料

参加者：千葉県里親会の会員と関係者、東洋大学社会学部社会福祉学科小野道子ゼミの学生3・4年生、その他本学学生

引率：社会学部社会福祉学科 小野道子准教授

申し込み：ゼミ生以外の参加希望学生は以下のQRコードからお申し込みください。

締め切り：10/2(日)

定員：約20人（定員を超過した場合、選考あり）

事前学習：10/20（木）12:15～12:50 **（参加必須） 教室又はオンライン**

事前交流会：10/27（木）12:15～12:50 **（希望者） 教室**

注意事項：参加する方には「行事保険」に加入してもらいます。※費用は大学負担
参加するには別紙「承諾書」が必要です。

【承諾事項／以下に同意のうえ、申してください】

- ・保証人（大学に届出された保護者等）に、企画参加の承諾を得ること。
- ・当日37.5度以上の方や、マスク不着用の方は、参加をお断りいたします。
- ・バスに乗り遅れた場合、集合場所までの交通費を本学は補償しません。



問い合わせ：東洋大学 ボランティア支援室

〒113-0021 東京都文京区本駒込1-10-2 雨水会館1F

電話：03-3945-7460 メールアドレス mlect@toyo.jp

主催：東洋大学社会学部社会福祉学科3-4年次小野ゼミ、

学生課外活動育成会、東洋大学ボランティア支援室



045



映画上映会 開催決定！！

「幸せの経済学」

2022年11月7日（月）5限（16:15～受付開始）
東洋大学6号館 6318教室 入場無料

今、幸せですか？

世界を席卷したグローバル化は、果たして「豊かさ」をもたらしたのか？
加速する貧困や格差、うつ病の増加、気候変動…
経済学から、現代の「幸せ」や「当たり前」を問い直す。

主催:学生団体SAチョーワ！ 共催:東洋大学ボランティア支援室



申し込み期限:2022年11月6日（日）
先着30名（当日参加OK!）

左のQRよりお申込みください。
※読み込みが出来ない場合には、お問合せください。



SAチョーワ！

✉ ecoworkshop893@gmail.com

🐦 @ECOwork893

📺 SAチョーワ！

お問合せ

映画情報

幸せの経済学（原題:The Economics of Happiness）

監督:ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ、スティーブン・ゴリック、ジョン・ページ

配給:ユナイテッドピープル

制作年:2010年

時間:68分363

言語:英語（日本語字幕あり）

046

あなたはなぜそのボランティアをはじめましたか？
なぜそのボランティアを続けていますか？

ボランティアやっただけ で終わらせないための 「対話のシカタ」



full bloom

「自分」×「他者」×「社会」の関わりを、
ボランティア活動のふりかえりを通じて考える時間をつくります。

○日時・会場

対面開催：2022年11月14日（月） 9:30～12:30

東洋大学白山キャンパス 2号館16階スカイホール

オンライン開催：2022年11月20日（日） 19:00～22:00

ZOOMによる開催



大学生活でボランティアしたけど、
その後じっくり振り返りって
そもそもしたことがないなあ・・・

○参加費：無料

○参加の方法：右のQRコードより、申し込みフォームにアクセスし、
必要事項を記入してください。（先着順、定員に達し次第締切）

○主催：東洋大学ボランティア支援室

○運営：東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ

○協力：full bloom（辻、大内田）





Hands to Handsプロジェクト2022

(コスメ「晴れの日」応援プロジェクト 第2弾)



コロナ禍で収入が減っている学生に対して、就職活動をはじめとする化粧する機会がある学生の皆さんに「コスメセット」を配布します。今回はマウスウォッシュなど日用品も入っています。



対象者

- ①新型コロナウイルス感染拡大に伴い、アルバイト等が減って化粧品等を手に入れることが難しい人
- ②特に上記の理由で就職活動を行うにあたり、必要な化粧品を手に入れることが難しい人
- ③このプロジェクトに興味があり、封入ボランティアに協力してくれる人

配布期間：11月15日（火）・11月17日（木）

配布場所：白山キャンパス1号館エレベーターホール前

配布時間：12:00～13:15(配布物がなくなり次第終了)

配布個数：50セット（全日程）★アンケート回答必須



セット内容

RJスキンケアアソープ・リップベビークレヨン・リップカラー・美白乳液・化粧水・アイブロウ・ミノンアミノモイスト・ドモホルンリンクル・カラートリートメント・入浴剤・トランシーノ(トライアルセット)・マウスウォッシュ・消臭剤

※受け取ったコスメをメルカリ等を用いて転売することは禁止します。

コスメバンクプロジェクト：<https://cosmebank.jp/>



(参考画像)

大きめのエコバック必須です



お問い合わせ（ボランティア支援室）

mjvolsup@toyo.jp / 03-3945-7927

279/363

048



Hands to Hands 2022 Autumn

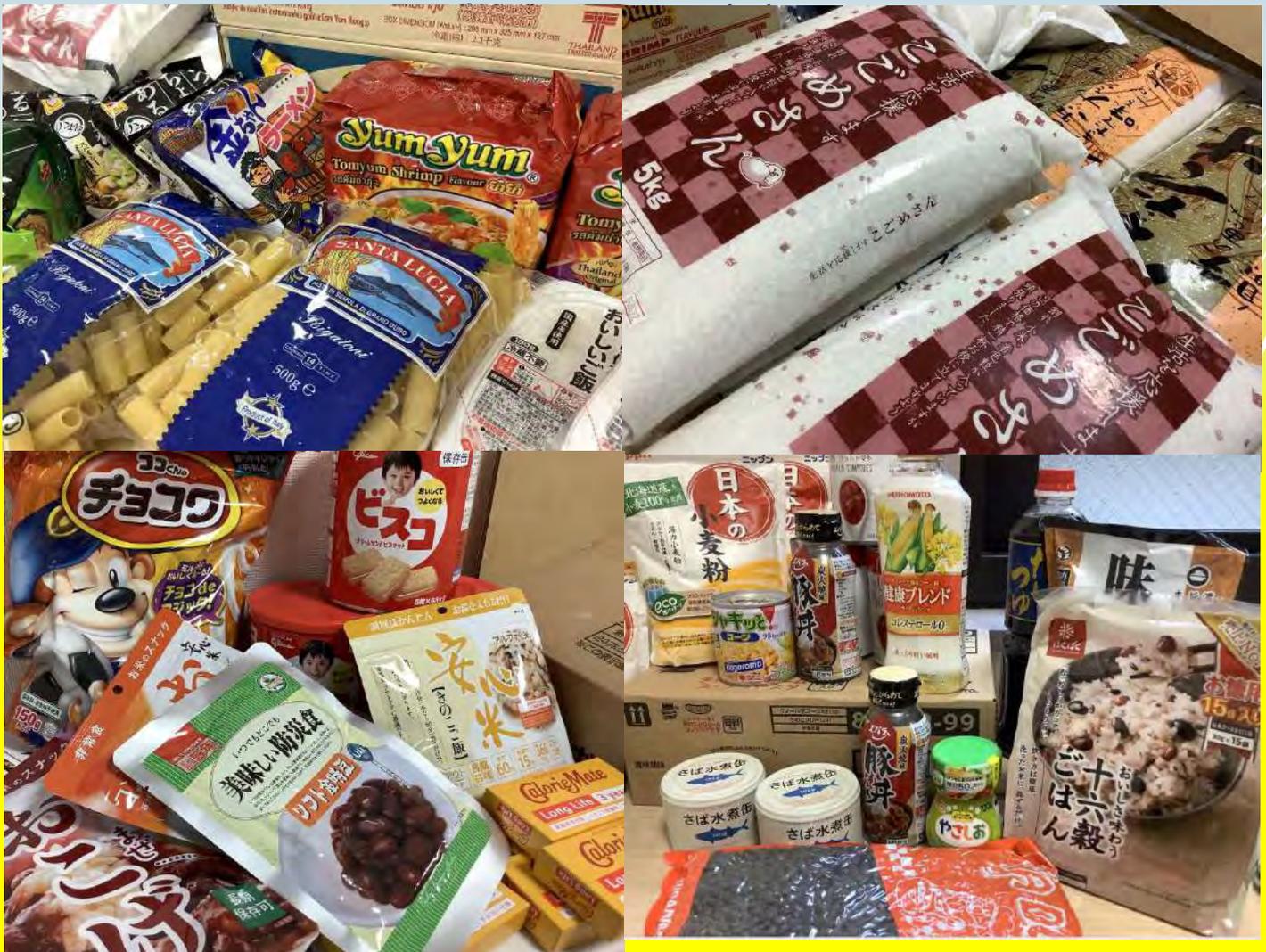
~ Let's overcome the corona disaster ~

Since 2020, the Volunteer Support Office has been providing a “place” where alumni, students, faculty and staff help each other and overcome the corona disaster as “Hands to Hands – Let’s overcome the corona disaster –”.

The world has been plagued by this epidemic for three years, but we are finally seeing a bright spot. For the past three years, Hands to Hands has been supported by alumni, faculty and staff members, Hosuikai and many others, but with this distribution, we will be taking a break for the time being.

Please use it if you wish.

1. No application is required this time. Please come directly to the venue.
2. Date and time:
November 15th (Tuesday)12:00~13:15 and 17th (Thursday)12:00~13:15,
※Finished when sold out
3. Pick-up location: Hakusan Campus: Building 1, 1F Elevator Hall
4. Examples of goods
Rice, pasta, instant noodles, biscuit . . .
※ Please make sure you bring your bag .
※ You may be asked to wait outside to avoid crowds.





Hands to Handsプロジェクト2022 ボランティア募集

(コスメ「晴れの日」応援プロジェクト)



コロナ禍で収入が減っている学生に対して、就職活動をはじめとする化粧する機会がある学生の皆さんに「コスメセット」を配布しました。今回は、分類・セッティング・梱包等のボランティアを募集します。

対象者

- ①11/15・11/17のコスメプロジェクトに参加した学生
- ②このプロジェクトに興味があり、封入ボランティアに協力してくれる人

期 間：12月12日（月）～12月16日（金）

場 所：浦水会館1階 学習室

時 間：9:30～18:00（空き時間に事由に出入りできます）

申 込：<https://forms.gle/972Rj7kt5aZCqi2a7>

締 切：実施日の2日前まで

定 員：各日最大10名程度



申込



東京
MXTV



コスメBK

配布イベントは東京MXTVで紹介されました：

<https://s.mxtv.jp/tokiomxplus/mx/article/202211251000/detail/>

コスメバンクプロジェクトとは... <https://cosmebank.jp/>

経済的な理由等、さまざまな事情により化粧品を手にはできない方に対して、企業から提供を受けた商品を必要としている方へお配りするプロジェクト



(参考画像)



お問い合わせ（ボランティア支援室）

mjvolsup@toyo.jp / 03-3945-7927

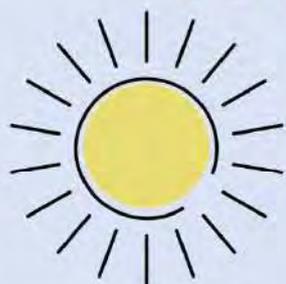
281/363

050



福島県の子どもに寄り添うプログラム

子どもと一緒に遊ぼう！



主催：東洋大学小野道子ゼミ(社会福祉学科)
東洋大学ボランティア支援室(TEL:03-3945-7927)

■活動目的、内容【1泊2日】

ひとり親家庭の子どもたちが親や友達とはまた異なる、「斜めの関係」である学生と接することで新たな人間関係を形成することを目的とする。また、本学学生として、ひとり親家庭の子どもたちとの交流の中で自分たちにできることは何か考え、深める機会になればと考える。

2022年 12月	27日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ◆集合／8:00白山キャンパス6号館1階教務部前(西門より入構。他門不可) ◇8:30バス出発 ◆自然環境活用センターにて、レクリエーション等(子供達との遊びや学習) ◇終了後、ホテルへ移動→宿泊
	28日 (水)	<ul style="list-style-type: none"> ◇スキー場にて子供達と雪遊び(荒天時は自然環境活用センターにて、レクリエーション等) ◆解散／19:00頃、白山キャンパス西門

■募集内容

対象	<p>本学学部生(私費留学生含む) ※学生課外活動育成会費の納入対象者のみため、院生等は申込できません。</p>
定員	25名 ※定員を超えた場合、「応募理由」を確認のうえ、抽選。
費用	バス代、宿泊費、旅行保険代、スキー場代は育成会費より支出されますが、食事代は自己負担となりますので、当日現金をご用意ください。
持ち物	「マスク」、「食事代(朝昼夕)」、「雪遊びに支障ない服装等」(防寒着、防水加工靴、手袋等)
申込み	<p>11月6日(日)17:00【厳守】迄に、 Google formにて受付(右のQRコードから読み取り)</p>



■申込後の主な流れ(予定)

11月	11日(金)	この期日迄に、ToyoNetメールで当選又は落選を通知。
12月	1日(木)	12:15~12:50、事前学習会 を対面と録画配信にて開催。
	22日(木)	12:15~12:50、参加者事前交流会(顔合わせ会) を対面にて開催。

東洋大生が

宮城県 南三陸町

に行って、
見て、
聞いて、
考える

宿泊ツアー ※1

2月4日(土) - 2月6日(月)

参加費 8,400円 ※2

定員 17 ※3

〆切 12月15日

主催 東洋大学 ボランティア支援室
Project.M



復興を遂げたこれからの東北に必要なものとは？

東日本大震災から2023年で12年が経過します。

倒壊した家屋は建て替えられ、瓦礫に囲まれていた町並みは日常を取り戻し、東北は復興を遂げました。

新しく生まれ変わろうとしている現在の東北にとって必要な支援とは何でしょうか。

このツアーでは3.11の被災地『南三陸』に赴き、当時の状況を整理しながら現在の東北について学びます。

その後グループワークを通して、これからの東北や地方に必要な支援の在り方について考えます。

※1. 新型コロナウイルス感染拡大の状況にともないオンライン開催となる場合がございますので予めご了承ください。※2. 三日間の昼食費、プログラム体験費が別途かかります。※3. 応募件数が定員を上回った場合は応募時のアンケートをもとに選考を行わせていただきます。予めご了承ください。

お問い合わせ 東洋大学ボランティア支援室 TEL: 03-3945-7927 Mail: mlvolsup@toyo.jp



もしも の備えに

災害救援

ボランティア講座

2/11 ± 12 日

2日連続開催

両日参加必須となります

セーフティリーダー(SL)認定証が
災害救援ボランティア推進委員会より交付されます

災害発生時に

ボランティア
リーダーとして

大学や地域との救援活動に協力しよう！

首都直下型地震は、今後30年以内に70%の以上の確率で発生するといわれています。また、近年は豪雨や台風などの風水被害もたびたび発生しており、災害への備えが急務となっています。

そこで、学生や地域の方が災害発生時に「ボランティアリーダー」として活躍できるよう、災害救援ボランティア講座を開講します。

本講座では、2日間にわたり、災害時に救援ボランティアとして地域に貢献したい方を対象に、様々な実践的取り組みを通して地域防災について学びます。

災害時に何が起こる？

自分にはなにができる？

行政が間に合わない...どうする？

大切な人と生き残りたい！

是非お申し込みください！

参加費

一般15,000円 学生10,000円
※東洋大学学生に限り助成金あり

場所

東洋大学白山キャンパス(雨水会館3F)および池袋防災館(2/11)

定員

30名 ※学生(本学学生含)・一般の参加者とともにいきます

日時

2/11 9:20~17:00

2/12 9:00~16:30 予定

申し込み

以下URL(Google form)よりお申し込みください

<https://forms.gle/RKC1icXuWxkuwh5s7>

※本講座はパンフレットに記載はございません

※お申し込み多数の場合は選考を行います

締切 1/23(月)





- 09:20～11:00 災害模擬体験と実技（池袋防災館）
11:00～13:00 移動・昼食・休憩
13:00～14:30 「災害ボランティアの安全衛生と、被災された方との接し方」（宮崎 賢哉/
災害救援ボランティア推進委員会 防災教育部長、(公社)東京社会福祉士会 災害支
援活動協力員）
災害ボランティア活動ケースワーク（グループワーク）
14:30～14:40 休憩
14:40～16:50 都市型水害支援総合演習（グループワーク）
16:50～17:00 事務連絡



- 09:00～09:20 オリエンテーション（東洋大学エクステンション課）、東洋大学IVUSA 紹介
（IVUSA白山クラブ）
09:20～10:50 災害救援ボランティアの基本（未定/災害救援ボランティア推進委員会（予定）
10:50～11:00 休憩
11:00～11:30 防災対策の基本(文京区の取組) 文京区防災課
11:30～12:00 災害ボランティアセンターについて（文京区社会福祉協議会）
12:00～13:00 昼食・休憩
13:00～13:30 東洋大学の防災体制について（仮）（東洋大学社会貢献センター）
13:30～15:30 災害時のチーム・ビルディング（宮崎 賢哉氏/災害救援ボランティア推進委員会
防災教育部長、(公社)東京社会福祉士会 災害支援活動協力員）
（途中休憩含）帰宅・滞留行動シミュレーション（グループワーク）
15:30～15:40 休憩
15:40～16:00 出火防止と初期消火（小石川消防署）
16:00～16:20 警察による災害支援・防災活動（警視庁 富坂警察署）
16:20～16:30 まとめ・認定証授与

ゲスト（予定）

宮崎 賢哉 氏（災害救援ボランティア推進委員会 防災教育部長、(公社)東京社会福祉士会 災害支援活動協力員）
文京区社会福祉協議会（災害ボランティア関連のご担当者）
小石川消防署
釘尾 正 氏（富坂警察署 警備課長）
渡邊 勇太 氏（文京区役所 危機管理室防災課）
NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）白山クラブ

ご応募お待ちしております



しております

感染症まん延期に大地震！ あなたはどうか、生き延びる？

～首都直下型地震に備える！東洋大学宿泊サバイバル体験2023～

およそ100年周期でマグニチュード7クラスの地震が首都圏で発生すると言われている、いわゆる「首都直下型地震」は、今後30年以内に70%以上の確率で発生すると懸念されています。一方、コロナ禍は今も続いており、避難行動を行う際、感染拡大防止に留意した対策も求められるようになっていきます。

今回の体験型プログラムは、実際に大規模地震が発生し、交通機関が突然ストップしたという状況を想定して、実際の場面でどのように行動するか、その時に向けてどのような備えをするべきかということについて体験しながら学ぶプログラムです。

2/17
(金)

18:00～

1 日 目

18:00-19:00 オリエンテーション

19:00-20:30 避難スペース運営

※感染対策ルール設定ほか

20:30-22:00 体験プログラム

※夕食づくり（防災食の準備）簡易トイレづくり他



2/18
(土)

～12:30

2 日 目

7:30-9:00 体験プログラム

※朝食づくり、撤収

9:00-11:00 ワークショップ ※避難所運営ゲームHUG等

11:15-12:30 ワークショップ ※ふりかえり



参加費

無料

定員

20名

申込多数の場合
抽選

対象：学部生のみ
大学院生、通信生の方は
お申込みいただけません。

申 込 方 法

申込方法：右のQRコードより申込フォームに入力してください。

申込期間：2023年1月19日（木）～2月13日（月）

※申込み者多数の場合、抽選になります。参加の可否については、2月14日（火）に申込時に登録したメールアドレスにお送りします。



お問い合わせはこちら

東洋大学ボランティア支援室
TEL：03-3945-7927
MAIL：mlvolsup@toyo.jp

286/363



TOYO UNIVERSITY
055

被災地のまちづくりを考え、 発信するスタディツアー

『福島県いわき市の農漁業の現状を発信する』では過去数年にわたり、被災地支援を目的に農業・漁業の再生に目を向けて活動してきました。

今回は、被災地の『まち』づくりをメインにした企画です。

被災地では、震災から10年が経過し、避難指示が解除される地域も徐々にふえ、住民の帰還も始まっていますが、街並みに以前の賑わいを取り戻すまでには至っていません。多くの地方都市が抱えている過疎、高齢化といった問題も、被災地域では今後の『まち』を考えるうえで特に大きな問題になってくると考えられます。

そこで今回は今までの農漁業の再生を目指した活動に加えて、活動範囲をいわき市から浪江町まで広げ、持続可能な『まち』づくりを目指して、帰還が始まった地域の現状を見て、『まち』の将来像を考えてみます。

DAY 1 2月19日(日)

- 9:00 上野駅出発 (特急ひたち5号)
- 11:24 いわき駅到着、市内で昼食
- 13:00 (株)起点の綿花園場で農作業
- 16:30 宿舎(いわき市湯本:古滝屋)到着、夕食

DAY 2 2月20日(月)

- 9:00 宿舎出発
- ↓
浪江町、双葉町の被災地見学
- 17:00 宿舎(いわき市湯本:古滝屋)帰着、夕食

DAY 3 2月21日(火)

- 9:00 宿舎出発
- 9:00 いわきオリーブプロジェクト・オリーブ畑にて農作業体験
- 14:18 いわき駅出発 (特急ひたち18号)
- 16:38 上野駅帰着・解散

- ※上野駅集合になります(途中駅からの参加はできません)
- ※現地での移動は貸切バスを利用します。
- ※スケジュールは変更になる場合があります。
- ※スマホ等動画を記録できる機材が必要になります。
- ※ツアー中に撮影された映像、提出された動画は広報等で利用する場合があります。

申込方法

申込方法：右のQRコードより申込フォームに入力してください。

<https://forms.gle/L5fXiB8jwK7fCzar7>

申込期間：2023年1月12日(木)～2023年1月22日(日)

- ※申込み多数の場合、参加理由による選考があります。参加可否については、1月28日(土)までに申込時に登録したメールアドレスにお送りします。
- ※申込には保証人署名の同意書が必要です。ガクチカサプリ/学内イベント内の募集ページからDLしてください。

申込フォーム↓



自己負担 ¥7,000程度

集合から解散までの交通費、宿泊代は育成会費より支出されますので無料です。その他の費用(食事等)は自己負担となります。当日現金で徴収します。

定員 18名(学部生のみ)

事前学習 参加決定者に別途お知らせします。

必ず出席してください。欠席者には課題を提出いただきます。

ふりかえり 感じたことを3分程度の動画にまとめてもらいます。

過去に参加した皆さんの動画はこちら
https://www.youtube.com/channel/UC5-EuDSBFVvYFykYOCUDv_Q/videos
または『Food Project Fukushima』で検索してください



※写真は2022年度の活動です

社会貢献活動表彰式・奨励プロジェクト助成報告会 課外活動団体報告会 地域活性化活動支援事業報告会

期日：2023年3月15日（水）

会場：白山6101番教室またはWeb開催（webex）

【第1部】ミーティング番号：2519 691 1365 パスワード：2thJH8bM4Wj

【第2部】ミーティング番号：2515 416 2481 パスワード：2Pf4vaYakZ2

申込不要！どなたでもご参加いただけます！！

【第1部】

■10:30～12:30

《社会貢献活動表彰式・奨励プロジェクト助成
報告会 課外活動団体報告会》

式次第【予定】

1. 開式の挨拶 社会貢献センター長 高山 直樹
2. 式辞(ビデオメッセージ) 東洋大学学長 矢口 悦子
3. 受賞者発表・報告【選考中】
 - ・個人表彰(表彰状と賞金(3万円)目録)
 - ・団体表彰(表彰状と賞金(3万円)目録)
 - ・助成金採択団体(表彰状と楯)
4. 『SDGsコンテスト』表彰式【選考中】
5. 課外活動団体報告会【調整中】
 - ・学生課外活動育成会団体
 - ・SDGsアンバサダー

6. 閉式

Webex:URL



お問い合わせ：☎03 3945 7460 ✉mlext@toyo.jp
東洋大学社会貢献センター（エクステンション課）南水会館 1F

【第2部】

■13:00～15:00終了予定

《地域活性化活動支援事業報告会》

当事業は、過疎化や高齢化などの地域課題に関して、教員、学生、住民がともに活動する企画に対し、経済的に支援することで、今後自立した活動へと発展させていくためのサポートしています。

各活動の報告を知ることで、今後の教育研究活動の一助になれば幸いです。

【2022年度 活動一覧】

1. 香川県さぬき市の姉妹都市交流再生プロジェクト
2. GISによるフードツーリズム空間のマイニングと提言
3. 地方都市における地域資源の活用による観光まちづくり
4. 沖縄の地域活性化の現状と将来像に関する調査活動
5. 高津川流域におけるフードデザートの調査
6. 東洋スローシティ
7. 南会津町観光まちづくりデザイン研究Ⅳ
8. 富士宮市における食文化振興プロジェクト
9. 広島県呉市・江田島市における地域活性化支援事業
10. 沖縄の地域観光活性化のための観光人材育成と商品開発

Webex:URL



※現在、活動団体に参加を確認中のため、当日参加 できない団体が発生する場合があります。

なお、各活動の報告書は、別途ホームページ等に掲載する予定です。

活動計画タイトル（キーワード）

レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究

① 活動計画の概要

2022年度の活動計画を策定する時点では、国際共生社会研究センター（以下「センター」）は、SDGs推進委員会の国際貢献部門の実施部隊と位置づけられていた。センターは、中期計画「TOYO GRAND DESIGN 2020-2024」における「I. 研究に関する中期計画」のなかで「1.共存共栄の世界を創るための価値創造」の実現のための活動を行っているが、2022年度からは東洋大学重点研究推進プログラムに応募し、「レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究」という研究テーマのもと多分野の専門家で構成されるチームが、国内・海外（アジア、アフリカ、中南米、太平洋の途上国等）で活動することを計画していた。本プロジェクトでは、「サステナブル（持続可能）」に、レジリエント（感染症拡大や気候変動・自然災害といった外的影響からの被害を最小限にし、被害から即座に立ち直れる状態）をキーワードに、センターの実践型研究のプラットフォーム機能を文理融合や産官学連携をとおして強化をしながら、包摂的なSDGsの実現や実践成果の地域・分野展開に関する研究を実施することを目的としていた。提案していたプロジェクトは、東洋大学重点研究推進プログラムとして採択（2022年度～2024年度）され、今年度より多分野の専門家（研究員＋関係者）で構成される複数のチームが日本、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、中南米、大洋州といった諸地域で、本学への留学経験者（主として現地大学の研究者や政府機関の官僚）や民間企業や団体、JICA協力隊員（本学現役院生）とも連携しながら、レジリエントでサステナブルな社会の構築という共通の目標に向けた研究に取り組んでいる。

② 数値的な目標の達成状況と得られた成果

目標①「SDGsに関する産官学・産学連携プロジェクト3件の実施」

- ・プロジェクト3件の内容は下記のとおり。
- ・A) タンザニアでの村落給水に関する国際NGOとの連携事業
(2022年8月に現地活動を実施)
- ・B) 資生堂と国際特許WIPO GREENを活用した、日本国内での産学連携学生起業プロジェクト
- ・C) ベトナムにおける中山間地活性化に関する国内NPOと連携したJICA草の根事業の実施（応募中）

目標②「SDGsに関する文理融合研究と国際共同研究各1件・計2件の実施」

- ・プロジェクト2件の内容は下記のとおり。
- ・A) ミャンマー・インレー湖の環境改善に関する文理融合研究
- ・B) コペアレンティング（夫婦でともに取り組む育児）に関する国際比較研究

目標③「SDGsに関する研究成果の公表」

- ・SDGsに関する英語書籍を1冊発行（目標1冊）
- ・SCOPUS論文13本を出版（目標5本）

目標④「研究アウトリーチ活動の実施」

- ・ニュースレター発行（和文3報、英文2報）（目標和文3報、英文2報）

- ・SDGsに関する公開セミナーとしてCeSDeS Open Seminar on SDGsを3回開催（目標3回）
- ・SDGsに関する研究集会を2回程度開催する予定であったが未開催であった。

目標⑤「若手研究者の育成」

- ・博士後期課程の学生をRAとして8名雇用（目標4名）
- ・博士号取得者を4名輩出（目標2～3名）
- ・PD2名（研究助手1名・研究支援者1名）を雇用（目標1名）

③ 2022 年度活動内容		添付資料(※)
4 6 月	◇重点研究推進プログラムによる研究プロジェクトの開始 ・重点研究推進プログラム予算を用いた研究計画への着手 ・CeSDeS Open Seminar on SDGs の実施（5月13日） ・国内・海外での現地調査	①
7 9 月	◇海外調査とアウトリーチ活動の本格化 ・和文ニュースレター57号発行（7月） ・英文ニュースレター38号発行（9月） ・国内・海外での現地調査	② ③
10 12 月	◇調査成果を踏まえた国際連携や現地支援の本格化 ・和文ニュースレター58号発行（10月） ・CeSDeS Open Seminar on SDGs の実施（10月31日） ・英文ニュースレター39号発行（11月） ・アフリカにおける村落給水事業にて現地支援活動の実施 ・ミャンマー・インレー湖の環境改善に関して現地支援活動の実施 ・国内・海外での現地調査	④ ⑤ ⑥
1 3 月	◇年間活動の成果とりまとめ ・和文ニュースレター59号発行（1月） ・SDGs 関連の英文書籍刊行（1月）（『Female Genital Mutilation/Cutting: Global Zero Tolerance Policy and Diverse Responses from African and Asian Local Communities』、Springer社） ・CeSDeS Open Seminar on SDGs の実施（2月4日） ・外部評価委員会の実施（3月9日） ・国内・海外での現地調査	⑦ ⑧ ⑨ ⑩

※活動実績となる成果物や資料（チラシ・ポスター・報告書等）がございましたら、併せてご提出ください。その際、表中の添付資料欄に番号等の記載をお願いします。

東洋大学国際共生社会研究センター主催
第1回 CeSDeS Open Seminar on SDGs

How the coup in Myanmar has disrupted its progress of meeting the SDGs

日時：5月13日（金）13:00～15:00

場所：オンライン配信

講演：岡本郁子（東洋大学国際共生社会研究センター 研究員、国際学部 教授）
Marie Lall（University College London教授）

司会：松丸亮（東洋大学国際共生社会研究センター センター長、国際学部 教授）

プログラム

1. 開会のあいさつ＋趣旨説明
2. 講演1 岡本郁子 研究員
3. 講演2 Marie Lall 教授
4. 質疑応答＋講演者ディスカッション
5. 総括
6. 閉会のあいさつ

※全て英語によるプログラムです。



オンライン配信の視聴URLはHPにてご確認ください。

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/0513/>



NEWSLETTER

No.57 July 2022

新研究プロジェクト「レジリエントな社会に向けたSDGsの 包摂的実現に関する研究」の開始にあたって

センター長 松丸 亮



東洋大学国際共生社会研究センター（以下、センター）は、2001年の設立以来、持続的開発や地域の社会問題の解決に実践的に寄与する研究をフィールドに根差した形で行ってきました。2022年度からは、東洋大学重点研究推進プログラムの研究プロジェクトとして「レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究」（2024年度迄）を開始しました。新研究プロジェクトは、これまでセンターの研究の中心に据えていた「サステナブル」という視点に「レジリエント」という新たな視点を加えた研究を推進すること、さらにセンターが担う実践型研究のプラットフォーム機能を文理融合・産官学連携の促進などの形でより強化することを目的としています。新プロジェクトの開始に合わせ、センター長に松丸亮、副センター長に岡本郁子が就任しました。

2022年度は新型コロナウイルスの感染拡大をうけた行動制限も緩和されつつあり、フィールドでの活動の再開も見えてきました。事前の打合せや基礎情報の収集などをオンラインで行い、主要な調査等を現地で行うなど、この2年間で得たスキルを最大限に活かしながら効果的・効率的な研究活動を行い、今後3年間で目標とする研究成果の達成を目指していきます。

新研究プロジェクトでは、より分野横断的な研究を実施するために、今後、東洋大学の多くの学部から研究員を受け入れていく予定です。また、研究活動以外にもいくつかの新たな試みをしていきます。特に、情報発信と研究成果のアウトリーチ活動では、誰もがオンラインでも参加できるオープンセミナー CeSDeS Open Seminar on SDGsの定期開催(年3～4回を予定)や、ニュースレターのメール等を利用したオンライン配信をしていきます。若手人材の育成にもこれまで通り力を入れていく予定です。センターの研究活動に引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。

多文化をつなぐ新戦略を展開する北海道東川町

研究員 沼尾 波子

2022年2月28日～3月2日にかけて、北海道東川町を訪問し、多文化共生をはじめとする地域振興策について調査を行った。

東川町は、北海道のほぼ中央に位置する人口約8,000人の町である。町の東部は山岳地帯で大規模な森林地域を形成し、日本最大の自然公園「大雪山国立公園」の区域の一部となっている。旭川市と隣接するこの町はいま、人口減少を食い止め、多くの若い世代を呼び込む。外国人比率は4.5%である。基幹産業は農業で、米づくりを中心に丘陵地での高原野菜の生産も行われている。

東川町の地域振興の核にあるのが「写真文化」である。町では、1985年に「写真の町」宣言を行った。町の案内によれば、「自然」や「文化」そして「人」が写真を通じて出会い、この恵まれた大地に、世界の人々に開かれた町、心のこもった「写真映りのよい町」の創造を目指すとする。夏には東川町国際写真フェスティバルが開催され、様々なイベントが実施される。町の写真文化首都宣言には、「写真文化」を通じて写真と世界の人々をつなぎ、笑顔溢れる町づくりに取り組むことがうたわれる。

東川町役場では、町の多文化共生政策のうち、町立日本語学校の運営、町の国際交流員(CIR)の受入れ状況とその活動に関連するヒアリングを実施した。また、東川小学校を訪問し、学校施設の見学とともに、CIRやALT(外国語指導助手)の取組みについて話を伺った。さらに、旭川福祉専門学校

を訪問し、北海道における介護福祉士の充足状況、福祉専門学校への入学者の減少する状況とともに、外国人留学生の受入れを通じた道内福祉人材確保策について、ヒアリングを行った。

東川町では、2009年より短期日本語・日本文化研修事業を開始している。外国人が短期滞在のビザを取得し、日本語や日本文化について学習するプログラムである。その後2013年には専門学校が日本語学科を開設し、多くの留学生を受け入れると、町でも留学生に対する奨学金制度拡充や、学生会館の増改築、国際交流員(CIR)を留学生の相談相手とするなど、留学生の支援を拡充した。2015年には公立日本語学校「東川町立東川日本語学校」を開校、台湾などから多くの外国人留学生を生活者として受け入れている。さらに福祉専門学校において留学生を受け入れ、福祉人材の確保にも取り組む。

日本語学校では、教室での日本語学習に留まらず、地域住民が講師となる茶道や日本舞踊などの伝統文化体験、町の特色や地域資源を活かした写真撮影や木工クラフトの制作、旭岳散策やスキー体験なども行う。盆踊りや冬祭りなどへの参加や高齢者との交流の機会も設けられている。

美しい風景への共感言葉は要しない。写真を介した景観への共感を生む環境創出とともに、独自の多文化共生推進策を通じた交流拠点として、東川町では様々な事業を展開していることが確認できた。



モノ、ヒト、コトが集うみんなの居場所「せんとびゅあ」内の図書スペース



東川町内の風景

コペアレンティング国際共同研究における調査報告

客員研究員 矢田 明恵 / 客員研究員 矢田 匠

コペアレンティングとは、両親が共に子育てに関わるプロセスや関係性のことを指す(Feinberg, 2002)。当共生センターの藪長千乃研究員が率いる日本チームは、フィンランド(ユヴァスキュラ大学、ユヴァスキュラ応用科学大学)が率いるCopaGloba研究プロジェクトに参加し、フィンランドとポルトガル(ポルト大学)と共同で、初めて親になるカップルが、出産前後でコペアレンティングに関する認識をどのように形成していくかを比較研究している。効果的なコペアレンティングは、子育てにおける親のストレスを軽減し、家族と子どものウェルビーイングを向上させることが知られている(Morrill et al., 2010; Teubert & Pinquart, 2010)。しかし、日本におけるコペアレンティングに関する研究は限られており、本研究の結果は日本におけるコペアレンティングの現状を明らかにし、他国との類似点や相違点から今後の子育てに関わる施策や取り組みを発展させる有益な知見を提供すると考えられる。

調査方法としては、インタビューおよび質問紙調査を実施している。調査は、出産前と出産後(およそ子どもの月齢が18ヶ月頃)の2回行う縦断的研究となっており、2020年から開始している。今回、筆者らは2021年12月17日～2022年1月8日の間

日本に滞在し、出産前および出産後のカップルに対するインタビューおよび質問紙調査を行った。また、日本チームの伊藤大将研究員と面会し、縦断調査の第二波および今後の分析方法に関する打ち合わせを行った。

現在の進行状況として、筆者は、出産前に実施されたコペアレンティング尺度(Prenatal version of coparenting quality; Pinto et al., 2019)の日本とフィンランド、ポルトガルにおける信頼性・妥当性を、統計的手法を用いて分析し、論文を三カ国共同で執筆している。また、インタビューデータについて、三カ国で共通の分析テーマを設定し、同じ枠組みから分析を進められるよう、準備している段階である。今後は、引き続き縦断調査の第二波を進めるとともに、質問紙およびインタビューで得られたデータをどのように分析するか検討し、比較研究を進めていく予定である。



日本における新婚旅行と旅フォトに関するアンケート調査分析

客員研究員 劉 蘭芳

21世紀に入って人・モノ・カネ・技術・情報等がグローバルに移動するようになり、経済的にも時間的にもゆとりある社会が実現した。その結果、国境を越えて観光を楽しむ人々が増えた。しかし、コロナ禍によって旅行業とブライダル市場は大きく変化してしまった。特に旅行業のインバウンドとアウトバウンドや、新たな旅行形態である新婚旅行や旅フォト(旅フォトとは旅行先の前撮り写真と挙式写真を指す)等には大きな打撃があったと考えられる。また、新婚旅行や旅フォトに対する考え方やこれらに求めるサービスもコロナ禍の前後で変化しているはずである。

コロナ収束後には、インバウンド市場とアウトバウンド市場の復活が期待されており、人生一度の感動・幸せの瞬間を残すために、新婚旅行と旅フォトという新たな旅行業の発展とそれに伴う地域経済の振興には大きな期待が寄せられている。ブライダル市場や旅行産業にとってこれらの新たなブームの形成は大きな役割を担っているのである。

本研究では、近い将来に新婚旅行や旅フォトの実施を検討している日本人に対して、彼らのニーズと要望を把握するために、旅行動機の分析及び障害となる要因を明らかにしようとした。2021年の調査では、日本在住者および近い将来に新婚旅行と旅フォトを計画している人を対象としたネット調査を実施した。これにくわえて、質問用紙を用いる大学生対象のアンケートも実施した。

今後3年間の目標としては、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着きつつある状況を生かして、中国、シンガポール、カンボジア、韓国、タイ、ベトナム、フィリピン等の国・地域を訪れて現地調査等の研究活動を行い、各国の調査データを集計・分析しながら、比較的な研究成果を目指していく。

新婚旅行と旅フォトは宿泊業・飲食業など広範囲に経済的な効果が予想されるので、本研究の成果は地域経済の復興や地域観光の発展を促進するものになるであろう。

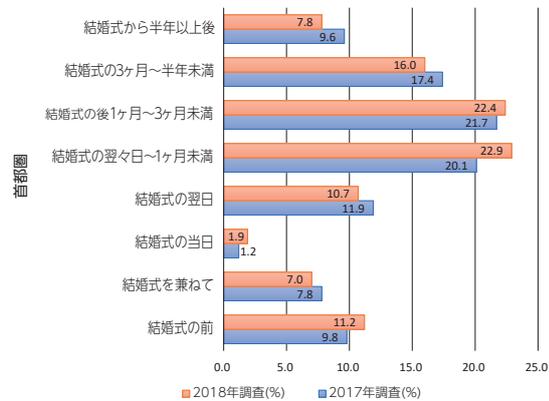


図 2017年・2018年首都圏新婚旅行の出発タイミングに関する調査結果(参考:ゼクシィ結婚トレンド調査による筆者作成)

東洋大学

国際共生社会研究センター
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
Phone. 03-3945-7747
E-mail. cesdes@toyo.jp
URL. <https://www.toyo.ac.jp/ja-JP/research/labo-center/orc/>

東洋大学重点研究推進プログラム レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究

センターではイベント等をご案内するメールニュースを発行しています。本ニュースレターもメールで読むことができます。ご登録は右のQRコードよりお願いします。ニュースレターの郵送停止・宛先変更をご希望のかたも右のQRコードよりお知らせください。



NEWSLETTER

No.38 September 2022

New Three Year Project “*Research on Development of Resilient and Sustainable Society through Inclusive Implementation of SDGs*” Started!

Ryo MATSUMARU, Director



Since its founding in 2001, the Toyo University Center for Sustainable Development Studies (hereafter, the CeSDeS), has conducted a field-based research that contributes practically to sustainable development and the resolution of local issues. In AY2022, we started the research project “Research on Development of Resilient and Sustainable Society through Inclusive Implementation of SDGs” as a Toyo University Top Priority Research Program (until AY2024). While the research at the CeSDeS so far has been done from the perspective of sustainability, this new research project aims to promote research that adds the perspective of resilience as well. It also aims to further reinforce the functionality of the real-world research platform that the CeSDeS is in charge of by bridging the humanities and sciences and through industry–government–academia cooperation. With the start of the new project, Ryo Matsumaru and Ikuko Okamoto were appointed as director and vice-director, respectively.

AY2022 has seen the gradual relaxation of the restrictions on movement that were put in place due to the coronavirus pandemic and the restarting of activity in the field. We aim to achieve our research objectives in the next three years by making full use of the skills acquired over the past two years to effectively and efficiently carry out our research activities, such as making prior arrangements and collecting basic data online and conducting major surveys in the field.

We plan to receive researchers from other departments of Toyo University for the new research project to enhance cross-cutting research. We will also be experimenting with several new initiatives in addition to our research activities. Furthermore, we are planning to strengthen our information dissemination and outreach activities with regard to research results. A “CeSDeS Open Seminar on SDGs,” is also planned, which anyone will be able to join online. It will be held regularly (3–4 times per year), and our newsletter will be distributed via e-mail. We also plan to continue dedicating effort to cultivating young talent, as we have always done. We appreciate your continued support and cooperation in the CeSDeS’s research activities.

Higashikawa, the Hokkaido Town that is Developing New Strategies to Connect Cultures

Namiko NUMAO, Researcher



From February 28 to March 2, 2022, I visited the town of Higashikawa in Hokkaido to take a look at its multicultural coexistence initiatives and other regional revitalization policies.

Higashikawa is a town of about 8,000 people, located roughly in the center of Hokkaido. The eastern part of the town is mountainous, forming a large forested area, and is part of the Daisetsuzan National Park, the largest natural park in Japan. The town, which borders Asahikawa City, has halted its population decline and now attracts many young people. Foreigners make up 4.5% of its residents. Agriculture is its key industry, with the focus being on rice farming, though highland vegetables are also grown in the mountainous areas.

At the core of Higashikawa's regional revitalization is its culture of photography. The town declared itself a "Town of Photography" in 1985, and it was mentioned on the town's website that the aim was to create a warm-hearted and "photogenic town" on this blessed land that was open to the whole world, where nature, culture, and people could intersect through photography. The Higashikawa International Photo Festival is held in the summer and various other events coincide with it. Higashikawa's Declaration as the Culture Capital of Photography is lauded as an initiative to create a place, beaming with smiles, where photographs and people from all over the world connect through the culture of photography.

At Higashikawa City Hall, as far as the town's multicultural coexistence policies are concerned, I held a hearing about the operation of municipal Japanese-language schools, as well as the town's recruitment of Coordinators for International Relations (CIRs) and their activities. I also visited Higashikawa Elementary School for observation and to ask about the work of the CIRs and Assistant Language Teachers (ALTs). In addition, I visited Asahikawa Welfare Professional Training College and held a hearing about whether Hokkaido had

enough certified care workers, the declining number of admissions to the college, and the admission of foreign exchange students in order to ensure sufficient welfare talent in Hokkaido.

Higashikawa has been offering short-term training programs in Japanese language and culture since 2009, for which foreigners can acquire a short-term visa to study Japanese language and culture. After that, in 2013, when Asahikawa Welfare Professional Training College opened a Japanese language department and admitted many foreign students, the town provided support for them by expanding scholarship programs for foreign students, making additions to the student center, and having CIRs serve as counselors for the students, among other things. In 2015, the Higashikawa Japanese Language School opened its doors and welcomed many foreign students from Taiwan and other countries and regions. The Asahikawa Welfare Professional Training College also admits foreign students and is working on securing welfare talent.

In addition to teaching Japanese in the classroom, the Japanese Language School also facilitates demonstrations of traditional arts by local residents, such as the tea ceremony and traditional dance; taking photographs and making wood crafts that use the town's special characteristics and local resources; and hiking and skiing at Mount Asahi (Asahidake). The school also has students participate in the Obon and Fuyu Matsuri festivals and sets up opportunities for interaction with senior citizens.

Enjoying beautiful landscapes does not require words. I was able to confirm that Higashikawa has developed a variety of projects to make itself a hub for interaction through the promotion of its unique multicultural coexistence policies and the creation of environments that evoke emotional responses to scenery through photographs.



The library space inside CENTPURE, a place for everyone, where things, people, and ideas meet



Scenery in Higashikawa

Report on International Joint Research on Coparenting

Akie YADA and Takumi YADA, Visiting Researchers



Coparenting refers to the process and relationship whereby both parents are involved in parenting (Feinberg 2002). The Japan team at CeSDeS, led by Prof. Chino Yabunaga (CeSDeS Researcher), participated in the CopaGloba research project led by Finland (University of Jyväskylä, Jyväskylä University of Applied Sciences) and jointly conducted comparative research, along with Portugal (University of Porto), on the way in which couples who are first-time parents-to-be form their perceptions of coparenting before and after their child is born. Effective coparenting is known to reduce parents' stress and improve the family's and child's well-being (Morrill et al. 2010; Teubert & Pinquart 2010). However, as studies on coparenting in Japan are limited, we believe that the results of this study illustrate the current state of coparenting in Japan and provide beneficial findings for the development of future policies and initiatives related to parenting based on similarities and differences with other countries.

The survey was conducted via interviews and written questionnaires. It was a longitudinal study, starting in 2020, in which respondents were surveyed twice, before childbirth and after (when the baby was roughly 18 months old). This time, we stayed in Japan from December 17, 2021, to January 8, 2022, to interview the "before" couples and the "after" couples and to administer the written questionnaires. We also met with Assoc. Prof. Daisuke Ito (CeSDeS Researcher at the time; currently Visiting Researcher) from the Japan team to work out the details regarding the second wave of the longitudinal survey and how we would analyze the data going forward.

To give an update on our progress, we have used quantitative methods to analyze the reliability and validity of the coparenting scale used in the "before" questionnaires ("Prenatal version of coparenting quality," Pinto et al. 2019) with regard to Japan, Finland, and Portugal, and the paper has been written jointly by researchers from all three countries. We have defined themes common to all three countries by which to analyze the interview data, and we are currently in the process of preparing the data so that it can be analyzed according to that framework. Going forward, we plan to continue conducting the second wave of the longitudinal survey and move forward with the comparative research after examining how best to analyze the data obtained from the written questionnaires and interviews.



Analysis of Questionnaire Surveys about Honeymoons and Travel Photos in Japan

Lan-Fang Liu, Visiting Researcher



The 21st century has given rise to the global movement of people, things, money, technology, and information, making society more flexible both economically and in terms of time. While this has resulted in an increase in the number of people enjoying holidays abroad, the coronavirus pandemic has changed the tourism and bridal industries significantly. Inbound/outbound tourism, honeymoons, and honeymoon travel photography (referring to pre-wedding and wedding photos taken at the destination) are thought to have been particularly hard hit. The approach to honeymoon and honeymoon travel photography and the services customers demand are also expected to have changed as a result of the pandemic.

With the lifting of coronavirus restrictions expected to revitalize the inbound and outbound tourism markets, great expectations have been placed on the development of the new tourism industries of honeymoons and honeymoon travel photography, which give newlyweds once-in-a-lifetime impressions and joyous moments and can also revitalize local economies. The emergence of this new trend is significant for the bridal and tourism industries.

For this study, I analyzed the motivations for and obstacles to traveling felt by Japanese people who are considering going on a honeymoon and availing travel photography services in the near future, in order to understand their needs and desires. For the 2021 survey, I conducted an online survey of Japanese residents who were planning to go on a honeymoon and avail travel photography services in the near future. I also conducted a paper questionnaire of university students.

Over the next three years, I will take advantage of the fact that the coronavirus pandemic is winding down and visit China, Singapore, Cambodia, South Korea, Thailand, Vietnam, and the Philippines to conduct local surveys and research activities. My goal is to aggregate and analyze the data to produce comparative research.

As honeymoons and honeymoon travel photography are predicted to result in broad economic effects, such as across the accommodation and food & beverage industries, the findings from this study should promote the revitalization of local economies and the development of regional tourism.



Figure: Results from the 2017 and 2018 surveys in the Tokyo Metropolitan Area regarding honeymoon trip departure timing (Source: Created by the author based on the Zexy Wedding Trends Survey)

Center for Sustainable Development Studies Toyo University

5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8606
Phone. 03-3945-7747
E-mail. cesdes@toyo.jp
URL. <https://www.toyo.ac.jp/ja-JP/research/labo-center/orc/>

Toyo University Top Priority Research Program Research on Development of Resilient and Sustainable Society through Inclusive Implementation of SDGs

CeSDeS has published CeSDeS Mail News. This newsletter is also available to read via email. To sign up, please scan this QR code. Also, please scan this QR code if you would like to stop receiving this newsletter or change your address.



NEWSLETTER

No.58 October

第1回オープンセミナー (CeSDeS Open Seminar on SDGs) の開催

副センター長 岡本 郁子



今年度より東洋大学国際共生社会研究センターは重点研究推進プログラム「レジリエントな社会に向けたSDGsの包括的実現に関する研究」を開始しました。コロナ禍の下での行動制限が緩和されたことで、研究員の多くが国内外のフィールドでの調査・研究活動を再開しています。今後、様々な形でその成果をお届けできると思います。

そうした研究成果の発信の新たな取り組みのひとつが、オープンセミナー (CeSDeS Open Seminar on SDGs) です。1年間に数回の実施を予定し、オンライン参加も可能とすることで、より多くの方々

に当センターの研究活動と成果を共有する機会として位置づけています。

第1回のオープンセミナーは、5月13日に“How the coup in Myanmar has disrupted its progress of meeting the SDGs”と題して実施しました。2021年2月に起きたクーデターがミャンマーの社会・経済に対していかなる影響を与えたか、とりわけSDGsの達成をいかに困難なものとしてしまったのかを、University College London のMarie Lall教授が教育と医療、岡本は貧困と食料安全保障に焦点を当てて報告しました。当日は、約45名の方に参加いただきました。

ミャンマーでは、2011年から民政移管、そして経済改革や教育改革が進み、経済・社会発展の道筋がようやく見え始めたところでした。ところが、クーデターとその後の展開は、それまでの同国の改革努力を水泡に帰すものであり、人々の社会・経済発展への希望を無残にも打ち砕くものとなったと考えられます。たとえば、経済面では貧困率が2005年の水準に逆戻りしたこと、相次ぐ外資系企業の撤退、失業者の増加、高インフレ、アジア諸国で唯一大幅なマイナス成長を記録しました。人口の7割が住む農村部でもそうした経済の混迷は深刻で、農業生産面でも日々の生計の面でも人々の暮らしは厳しさを増すばかりです。教育・医療の面でも、就学率の向上や栄養失調率の減少など一定の改善が見られていたにもかかわらず、コロナ禍に加えクーデターが起きたことで、学校の閉鎖、教員や医師の辞職・解雇などによる教育・医療の麻痺が続いています。同セミナーでは、こうした状況の打開にはなんらかの国民和解(national reconciliation)がどうしても必要となるだろうが、そうした展望は現状では見込めないと結論づけました。

今後のオープンセミナーも、世界の喫緊の課題に関して、皆様と議論する場としていきたいと考えます。

東洋大学における「MeW Project」－月経をとりまく諸問題に光をあてる試み

研究員 中村 香子 / 客員研究員 杉田 映理



近年、国際開発(開発支援)の場では、月経の対処、つまり生理用品の入手や生理用品を取り替えやすいトイレの整備、月経教育などが「解決すべき課題」として認識され、国際機関やNGOによる支援が広がっている。また、月経をめぐる問題は、開発途上国だけでなく先進国とよばれる欧米などでも、貧困に起因して生理用品が入手困難な状況があることに対して女性たちが声を上げ、“period poverty (生理の貧困)”という言葉とともにこの状況を打開しようというムーブメントが広がっている。日本においても、月経や生理用品を隠すという行為に疑問符をつけ、自分だけのプライベートなことであった月経について語る、考えること、月経に対する理解を深めることを目指す動きが活発化している(杉田 2022: 5-8)。

本プロジェクトは、すでに大阪大学で杉田が中心となって実施中のプロジェクトを東洋大学で展開するものである。プロジェクトのコンセプトである「MeW (ミュー)」とは、Menstrual Wellbeing by/in Social Designの略で、社会のデザインを見直すことで月経をとりまく諸問題を明らかにし、その解決をとおしてよりよい未来を目指していくというものである。具体的には、《生理用品の無償提供用のディスペンサーがトイレ内にあること》によってもたらされる変化を記録し、また、この変化をきっかけに、当事者たちがこれまで誰にも開示することがなかった苦痛や不満などの声を発する機会を創出する。そして、そうした声をすくいあげて分析することをおして、月経をとりまく諸問題をさまざまな角度から明らかにすることを目的としている。

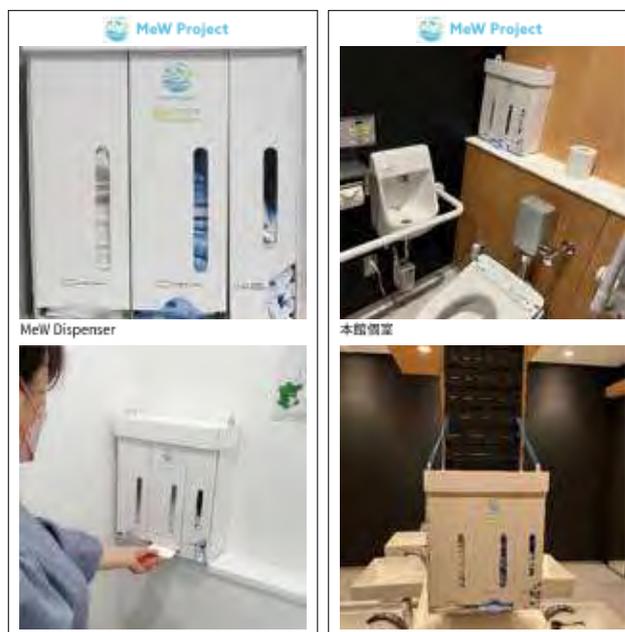
本プロジェクトでは、独自に開発した生理用品の無償提供用のディスペンサーを東洋大学内のトイレに設置し、3種類の生理用品を無料で提供する。ディスペンサーにはアンケートにリンクするQRコードを表示し、月経あるいは生理用品に関する利用者の声を収集する。留学生が多く利用するトイレや多目的トイレなど、多様な利用者にアクセスできる

ように設置トイレを選ぶことで幅広い層からの声の収集をはかる。また、生理用品は適宜、補充するが、補充の際に、消費の実績を記録する。こうした実証実験と意見の収集を通じて、日本における月経の諸課題を明らかにし、月経のある人の生活改善を目指すものである。

本プロジェクトは、「生理の貧困」の問題の解消、月経に関連する健康状況の解明、月経で阻害される教育機会の改善、月経に関連する差別・男女格差の解明、生理用品の設置によるトイレ内環境の向上、「生理の貧困」の解消による不平等の是正、生理用品をめぐるゴミの問題の諸相の解明といった観点から、SDGsのAgenda1(貧困をなくそう)、Agenda3(すべての人に健康と福祉を)、Agenda4(質の高い教育をみんなに)、Agenda5(ジェンダー平等を実現しよう)、Agenda6(安全な水とトイレを世界中に)、Agenda10(人や国の不平等をなくそう)、Agenda12(つくる責任、つかう責任)に関連する。

参考文献

杉田映理 2022 「序論」杉田映理・新本万里子編『月経の人類学－女子生徒の「生理」と開発支援』世界思想社。



(大阪大学MeWプロジェクト提供)

ベトナム北部少数民族集落におけるソーラーランタンの インパクト調査報告

客員研究員 柏崎 梢



ランドポート株式会社(<https://www.landport.co.jp>)との共同研究の一環で、7月29日から8月3日にかけて、ベトナム北部のハザン省ホアンスーフィー県にて現地調査を実施した。当該地域は、2022年1月に200個のソーラーランタン(CARRY THE SUN®)が小学校経由で子供たちに寄贈されており、今回は対象地域の住環境および電力利用の実態を把握するとともに、生活面での実質的なインパクトを検証することを目的とした。

現地ではVietnam General Confederation of Labour (VGCL) 県支部および各小学校の先生方の協力のもと、Nam Ty村、Dan Van村、Tan Tien村の生徒の自宅を訪れ聞き取り調査を実施することができた。これらの地域は、モン族、タイ族、ヌン族、ザオ族など、さまざまな少数民族が暮らしており、一面に連なる棚田の風景が観光地としても有名な場所である。しかしその生活は、近年の気候変動による収穫量の減少や、化学肥料による地下水汚染、物価の上昇などの影響を受け、厳しさが深刻化している。対象地域では、自家用小水力発電の使用も一部みられたが、雨量の少ない冬季は使えず、また、電線から発火し火事が増加しているという問題も確認された。2010年代後半から国営の配電も徐々に始まり、近隣組織で維持管理をしているが、電気料金の現金支払いが家計をさらに圧迫していることも

確認された。

提供されたソーラーランタンは、電力としては小さいものの、「勉強のときに使うもの」と独自のきまりを作っていたり、夕暮れ以降に水牛を引く際の足元や、家事の手元を照らすといった役割が子供に生まれるなど、家庭内で連携して使用されているケースが確認された。また、充電をより効率的に行えるよう、大人を含め複数人で管理することが習慣化している様子もみられた。

聞き取りの中で、代々伝わる土地、そしてその文化を守ることを大切にしている一方で、子供には教育を受け良い仕事についてほしい、そのためにはこの土地を出るのは構わないという親の強い希望が共通してきかれた。その傍ら、「大きくなったら先生になりたい。そしてお世話になった学校に戻って来たい」「知識や技術を身につけ、父の農作業を手伝いたい」と小さく語った子供たちの言葉に、地域の持続的な循環の可能性をみたと感じる。

ハノイからハザン省へと続く国道2号は現在整備が進められ、至る所で切土により山肌や水脈が露わになっていた。開発が進むなか、ソーラーランタンがエネルギーのあり方のひとつとして存在することで、今後の人々の選択肢を広げる可能性になることを期待し、調査を継続していく予定である。



生徒宅での聞き取りの様子



毎日が登山の登下校

オープンセミナーのお知らせ

第2回 CeSDeS Open Seminar on SDGs

「MeW Project」 一月经をとりまく諸問題に光をあてる試み

開催日：2022年10月31日(月) 14:45 ~ 16:15

言語：日本語

場所：ハイブリッド(対面式・オンライン)

対面式会場：東洋大学白山キャンパス 8号館8601号室

オンライン配信の視聴URLはHPをご確認ください。

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/1031/>

主催：東洋大学国際共生社会研究センター

対象：学生・教員・一般

プログラム

1. 「月経をめぐる今日的なグローバルなムーブメント」

杉田映理(センター客員研究員、大阪大学大学院人間科学研究科)

2. 「進化したサニタリーボックスと生理用品の廃棄への問題提起」

西島一男(日本カルミック)

質疑応答

3. 「大阪大学におけるMeWプロジェクト」

小塩若菜(大阪大学大学院人間科学研究科大学院生)

4. 「東洋大学におけるMewプロジェクトの始動」

中村香子(センター研究員、東洋大学国際学部)

坂本楓(東洋大学国際学部4年生)

質疑応答

司会・コメント 内田力(センター研究助手)

オンライン配信の視聴URLはHPにてご確認ください。

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/1031/>



東洋大学

国際共生社会研究センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

Phone. 03-3945-7747

E-mail. cesdes@toyo.jp

URL. <https://www.toyo.ac.jp/ja-JP/research/labo-center/orc/>

東洋大学重点研究推進プログラム

レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究

センターではイベント等をご案内するメールニュースを発行しています。

本ニュースレターもメールで読むことができます。ご登録は右のQRコードよりお願いします。

ニュースレターの郵送停止・宛先変更をご希望のかたも右のQRコードよりお知らせください。



東洋大学国際共生社会研究センター主催 第2回 CeSDeS Open Seminar on SDGs

「MeW Project」

—月経をとりまく諸問題に光をあてる試み

日時：10月31日（月）14:45～16:15

場所：ハイブリッド（対面式・オンライン）

対面式会場：東洋大学白山キャンパス8号館8601号室

講演1. 「月経をめぐる今日的なグローバルなムーブメント」

センター客員研究員、大阪大学大学院人間科学研究科 杉田映理

講演2. 「進化したサニタリーボックスと生理用品の廃棄への問題提起」

日本カルミック 西島一男

—質疑応答—

講演3. 「大阪大学におけるMeWプロジェクト」

大阪大学大学院人間科学研究科大学院生 小塩若菜

講演4. 「東洋大学におけるMeWプロジェクトの始動」

センター研究員、東洋大学国際学部 中村香子

東洋大学国際学部4年生 坂本楓

—質疑応答—

司会・コメント：内田力（センター研究助手）

オンライン配信の視聴URLはHPにてご確認ください。

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/1031/>



NEWSLETTER

No.39

November 2022

1st CeSDeS Open Seminar on SDGs

Ikuko OKAMOTO, Deputy Director



The Toyo University Center for Sustainable Development Studies began a priority research program titled “Research on Development of Resilient and Sustainable Society through Inclusive Implementation of SDGs” in the present academic year. With the easing of restrictions on human activity that were implemented during the COVID-19 pandemic, our researchers have resumed their research activities in Japan and overseas. We believe we will be able to share various research output in the near future.

One of our newest efforts to disseminate such research output is CeSDeS Open Seminar on SDGs. We plan to hold these seminars several times a year. As we also encourage online participation, we hope to

share our research activities and results with a broader audience.

The first Open Seminar, titled “How the coup in Myanmar has disrupted progress toward meeting SDGs,” was held on May 13, 2022. Professor Marie Lall of University College London joined me in discussing how the coup d’état of February 2021 affected Myanmar’s society and economy. Emphasizing how the coup made it difficult to achieve the SDGs, Professor Lall focused on education and health care, and I focused on poverty and food security. The seminar attracted approximately 45 participants.

In 2011, Myanmar transitioned to a civilian government with the launch of economic and educational reforms. However, the coup d’état and subsequent developments brought these efforts to naught, with the population’s hopes for social and economic development seemingly tragically crushed. For example, on the economic front, the poverty rate has reverted to 2005 levels; foreign companies have steadily left the country; unemployment is up; and inflation has been persistently high. What is more, Myanmar is the only Asian country to record significantly negative growth. Even in the rural areas where 70% of the population lives, such economic turmoil is serious, with people’s lives becoming increasingly difficult as reflected by agricultural production and daily livelihoods. In terms of education and medical care, while certain improvements are evident, such as an increase in school attendance and a decrease in the malnutrition rate, the coup d’état and COVID-19 crisis resulted in school closures and the resignation or dismissal of teachers and doctors. Thus, both education and health sector has fallen into a state of paralysis. The seminar concluded that even though some form of national reconciliation would be necessary to improve the situation, such a prospect was unlikely at present.

We look forward to making future open seminars a forum to discuss pressing global issues.

“MeW Project” at Toyo University: An Attempt to Shed Light on Various Issues surrounding Menstruation

Kyoko NAKAMURA, Researcher / Elli SUGITA, Visiting Researcher



In recent years, menstrual hygiene management — in other words, the access to sanitary products, the improvement of toilets that make it easy to change sanitary products, and menstruation education—has been recognized as a development agenda in the field of international development assistance. Various organizations, including NGOs, are providing more support in this area. Menstruation is not only a problem in developing countries but also in developed countries, and there has been a growing movement to overcome what has become known as “period poverty.” There also is a growing trend in Japan toward questioning the act of concealing menstruation and sanitary products. This movement seeks to discuss menstruation and sanitary products more openly and broaden understanding in this area (Sugita 2022: 5–8).

The “MeW project” was launched at Osaka University by Dr. Sugita and has now been adopted by Dr. Nakamura and her team at Toyo University. “MeW” stands for “Menstrual Wellbeing by/in Social Design,” which, as a project concept, aims to rethink the status quo of society and seeks to improve the social design to resolve issues surrounding menstruation.

Specifically, the project involves installing MeW dispensers for free sanitary products in restrooms. The presence of the dispenser and a questionnaire that is accessible from the restrooms creates opportunities for concerned individuals to express their feelings about menstruation, such as the pain and dissatisfaction they are usually bottling up. The purpose is to clarify the various issues surrounding menstruation from different angles by giving individuals a voice when analyzing these issues.

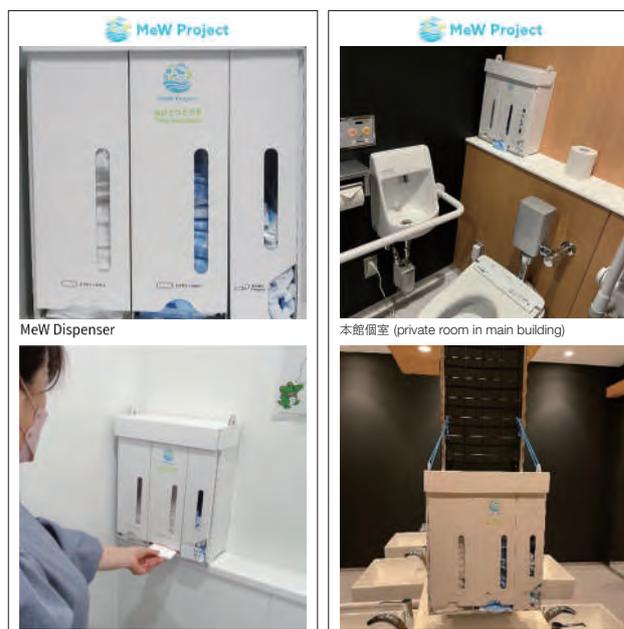
This unique dispenser provides three types of sanitary products free of charge in the restrooms at Toyo University. A QR code linked to a questionnaire is displayed on the dispenser to collect user feedback regarding menstruation and the sanitary products. The project has collected opinions from a wide range of users by selecting restrooms that are used by, among others, international students and multi-purpose restroom users. Moreover, sanitary products will be restocked as needed, and consumption is recorded at the time of restocking. Through this experimental

research and opinion gathering, we seek to clarify the various menstrual issues prevalent in Japan and improve the lives of menstruators.

This project aims to contribute to alleviating the problem of “period poverty,” identifying health issues related to menstruation, improving educational opportunities adversely affected by menstruation, highlighting discrimination and gender disparities related to menstruation, improving the toilet environment by installing dispensers for sanitary products and unravelling various aspects of sanitary products’ disposal problems. Therefore, this project addresses SDG 1 (No poverty), 3 (Good health and wellbeing for all), 4 (Quality education for all), 5 (Achieve gender equality and empower all women and girls), 6 (Clean water and sanitation for all), 10 (Reduce inequality amongst people and countries), and 12 (Responsible consumption and production).

References

Sugita, Elli. 2022 “Introduction” Elli Sugita and Mariko Shinmoto Eds. *Anthropology of Menstruation: “Period” of Schoolgirls and Development Assistance*. Sekaishissha (in Japanese).



MeW Dispenser

本館個室 (private room in main building)

Survey Report on the Impact of Solar Lanterns on Ethnic Minority Villages in Northern Vietnam

Kozue KASHIWAZAKI, Visiting Researcher



A field survey was conducted in the Hoàng Su Phi District of Vietnam from July 29th, 2022 to August 3rd as part of a joint research project with Landport Co., Ltd. (<http://www.landport.co.jp>). In January 2022, 200 solar lanterns (CARRY THE SUN®) were donated to children in the area through their elementary schools. The purpose of this survey was to understand the living environment and electricity usage in the target area, and to verify the actual impact of the lanterns on people's lives.

With the cooperation of a Vietnam General Confederation of Labour (VGCL) provincial chapter and elementary school teachers, we were able to visit the homes of students in Nam Ty, Dan Van, and Tan Tien villages to conduct interviews. These areas are home to various minority ethnic groups, including the H'mong, Tày, Nùng, and Dao, and are famous tourist destinations thanks to their terraced rice fields. However, in recent years, locals' lives have become increasingly difficult due to the effects of reduced yields resulting from climate change, groundwater pollution from chemical fertilizers, and higher prices. In the target area, some small private hydroelectric power plants are in use, but these cannot be used in the winter when there is little rainfall, and cases have been confirmed of fires being caused by electric wires igniting. State-owned power distribution got a gradual start in the late 2010s, with maintenance managed by neighboring organizations,

but cash payments for electricity are putting additional pressure on household budgets.

Although the solar lanterns that were provided are not particularly powerful, they have proven quite popular, with children using them for studying, fetching water buffalo at dusk, and doing housework in the dark. What is more, to make the act of charging the lanterns more efficient, it has become customary for multiple individuals, including adults, to be in charge of them.

During the interview process, while some locals confided that they felt it was important to protect the land and culture that had been passed down for generations, some parents also wanted their children to get an education and a good job, and did not mind leaving their place of birth to achieve this. On the other hand, children said quietly, "When I grow up, I want to be a teacher and come back to my old school" and "I want to acquire knowledge and skills to help my father with farm work." Such words afford us a glimpse of the possibilities for local sustainability.

National Highway No. 2, which runs from Hanoi to Ha Giang Province, is currently under construction, with bare mountain surfaces and underwater streams exposed to the naked eye. As development progresses, we plan to continue our research in the hope that, in the future, the experience of using solar lanterns will provide further options to improve their lives sustainability.



Interviews at a student's home



Children climb the hills everyday

Online EcoSchool Certificate Training for Youths and Households in Various Philippine Communities/Ecosystems

Maria Rosario Piquero BALLESCAS, Visiting Researcher
(with Jon Gil Azcarraga Ramas, Zenaida Tabucanon, and Gerran Simacon)



Last October 8, 2022, the first Online EcoSchool Certificate Training for Youths and Households in Various Communities and Ecosystems was launched by the Regional Center of Expertise on Education for Sustainable Development (RCE-Cebu) together with BioNutrient PDO (Philanthropic Development Office) and other partners.

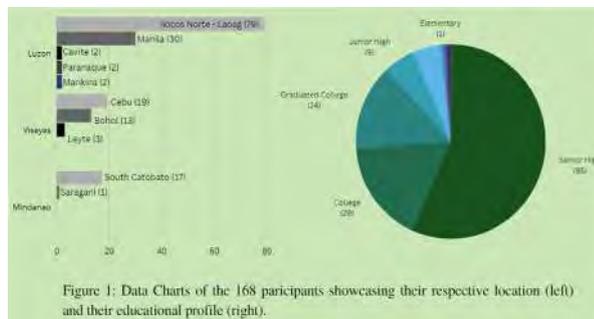


Figure 1: Data Charts of the 168 participants showcasing their respective location (left) and their educational profile (right).

This online Education for Sustainable Development (ESD) initiative proceeded from the recognition of the following multiple, simultaneous crises/challenges confronting people and planet globally and locally, including the Philippines: global warming, covid pandemic, hunger, poverty, resource mismanagement, among others.

The online training project was intended to educate youth participants and their households to manage their existing community resources, particularly, three types of household wastes—kitchen/biowastes, paper, and plastics—for their immediate and sustainable food supply, livelihood, and sustenance.

The 4-week October online session conducted every Saturday, from 10–11:30am Philippine time, was intended to showcase, by December this year, instead of waste-littered communities, green vegetable/herbal plant gardens grown on kitchen waste/biowaste compost which could result in sustainable food supply, livelihood from waste products, and cleaner/healthier households and communities of participants. (Refer to Figure 1 for Participants' Profile).

RCE-Cebu coordinated the themes, topics, learning materials (videos, PowerPoint presentations), resource persons, technical support for the October module which centered on two strategies, AGAPE (a garden per ecosystem diverting kitchen/biowastes to compost) and DEO (daily eco-offering promoting segregation of wastes primarily to benefit participants and their households, then later their communities or commercial ventures. (See Figure 2).



Left: Our Infographic
Middle: Participants from Laoag, Ilocos Norte in Luzon amidst a Typhoon
Right: Our first Photo Taking during the Online Eco-School Session

Center for Sustainable Development Studies Toyo University

5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8606
Phone. 03-3945-7747
E-mail. cesdes@toyo.jp
URL. <https://www.toyo.ac.jp/ja-JP/research/labo-center/orc/>

Toyo University Top Priority Research Program Research on Development of Resilient and Sustainable Society through Inclusive Implementation of SDGs

CeSDeS has published CeSDeS Mail News. This newsletter is also available to read via email. To sign up, please scan this QR code. Also, please scan this QR code if you would like to stop receiving this newsletter or change your address.



NEWSLETTER

No.59

January 2023



子育てにおける親同士の協力を国際比較する

ーコパ・グローバ(親になる過程におけるコペアレンティング認識の形成に焦点を当てた縦断的国際比較研究)プロジェクト報告ー

研究員 藪長千乃

客員研究員 伊藤大将・高松宏弥・矢田明恵

本センターは、多国間コンソーシアム研究プロジェクト「コペアレントの学習過程：親になる過程でのコペアレンティングの認識の形成に焦点を当てた縦断的国際比較研究(Learning to coparent: A longitudinal, cross-national study on construction of coparenting in transition to parenthood 略称CopaGloba)」(フィンランド・アカデミー助成番号No.323492)に研究員が参加するための日本チームのプラットフォームとして研究活動を支えています。現在、日本チームは上記の4名で構成しています。

少子化の進行は多くの先進国で共通する社会課題であり、SDGsを担う次世代の育成という意味でも、子どもや子育てをめぐる状況は重要です。これまでの研究では、子どもの健やかな発達には子育てにかかわる人たちの協力関係が影響を及ぼすことや、協力関係が良好であるほど子育てにおける親の負担感が低いことがわかっています(Durtschi, 2017; Feinberg & Kan, 2008ほか)。そこで本研究は、先進国の中でも深刻な少子化の進行が進む日本、フィンランド、ポルトガルの3か国における子育てをめぐる親などの協力関係を比較することで、この協力関係を促進・阻害する環境要因を特定し、より良好な協力関係を築くための支援策への手がかりを得て、子育て支援政策へのエビデンスを得ることをめざしています。

研究では、第一子を迎えるカップルに協力を依頼し、出産前・出産後の二度にわたるインタビュー、アンケートを通してデータを収集しています。現在は、すべてのデータの収集を終え、産前データの分析を行いながら、並行して産後のデータを整理しているところです。子育ての協力関係に影響を与える要因は、カップル・家族の関係性、カップルらを取り巻く地域の支援資源、さらにこれを取り巻く社会といった三層からとらえようとしており、家族のあり方や支援制度、政策レジームや社会・文化規範などを参照しながら分析を試みています。産後データの整理が終わった後は、産前・産後の経時データの分析にも取り組む予定です。

研究の成果はこれまで国際学会などで発表をしてきましたが、プロジェクトから発信をするためのウェビナーも開催してきました。2021年11月にフィンランド・ユヴァスキュラ大学において産前データの各国での分析について発表を行いました。そして2022年9月にポルトガル・ポルト大学において産前データの国際比較分析を発表しました(次頁にて報告)。2023年2月には、本センター主催のオープン・セミナー(4頁)にて、これらの成果の一部を中間報告として日本語で発表する予定です。

データ収集のために、フィンランド・アカデミーから本研究プロジェクトへ4年間の助成金が支出されています。助成期間は2023年8月までですが、その後も収集したデータを用いて分析を続けていく予定です。

ポルトガルセミナーConstructing coparenting in the transition to parenthood across countries: Findings from the CopaGloba project (親への移行期における各国でのコペアレンティングの形成: コパグローバルプロジェクトからの知見) 報告

「妊婦のコペアレンティングに対する期待の国際比較: 出産前 コペアレンティング関係尺度の検証」を報告して 客員研究員 矢田明恵

本研究は、出産前コペアレンティング関係尺度の因子妥当性を、日本、フィンランドおよびポルトガルの各国で検証し、それらを比較することを目的とした。出産前コペアレンティング関係尺度は、Feinberg et al. (2012)が作成したコペアレンティング関係尺度を出産前のカップルに適用するために、Pinto et al. (2018)によって開発されたものである。CopaGlobaプロジェクトでは、インタビュー調査に加え、上述の尺度を含む質問紙調査を、出産前のカップル、または母親、父親のどちらかに実施した。今回の研究では、出産前の母親に焦点を当て、出産前コペアレンティング関係尺度が各国でどのような構成概念を形成しているかを検証した。参加者は、出産前の母親計738名(うち日本360名、フィンランド159名、ポルトガル219名)である。統計ソフトウェアM plusを用い、各国で探索的因子分析を行った。その結果、日本とフィンランドでは2因子、ポルトガルでは4因子が妥当であることが明らかにされた。因子の構成には、共通して解釈が可能な部分もあれば、各国で大きく異なる部分もあり、文化的・社会的背景の違いを考慮して解釈をする必要性が示された。

質疑応答では、以下の点が話し合われた。国際比較研究では、各国の違いに着目しがちであるが、

共通点に着目するというのも非常に重要な観点である。文化や社会構造の異なる国においても共通する概念や考え方というのは、コペアレンティングの核となる部分かもしれないからである。今後、出産後コペアレンティング関係尺度ではどのような因子が現れてくるのか、出産前と出産後の比較や、父親と母親との比較なども有益な情報を与えてくれるだろう。

ポルトガルを訪れる前から、文化や社会的な違いは話し合われていたが、実際に足を運び、そこで生活している人の姿を観察し、研究に関わることもそうでないことも議論することができた。研究の結果もそれらと結びつけることができ、より理解が深まったと感じ、現地へ赴く大切さを実感した。



写真1 ポルトガルセミナーでの報告の様子
(左から伊藤、マティアス(ポルト大学)、矢田)

「赤ちゃんを迎える準備: 日本におけるカップルの親への移行」 を報告して

客員研究員 伊藤大将

ポルトガルのセミナーでは、「Preparing to Welcome a Baby: Japanese Couples' Transition to Parenthood」というタイトルで発表しました。妊娠後期のカップル30組に対して実施したインタビュー調査をグラウンデッドセオリーを用いて分析しました。第一子を

出産するカップルが置かれている状況は、災害が起こることを予測して準備をするコミュニティが置かれている状況と似ているのではないかとこの視点から、social resilienceのフレームワークを用いて分析を進めました。夫妻の両者が初めて子どもを持つ

ことになるのにも関わらず、妻が夫を育児に招待したり、育児に対する準備の仕方を教えたりするという、妻がまるで先生の役割を担っていることに着目し、子育てが初めてであるはずのカップルの力関係がどのように構築されていくのか(先生は生徒よりも知識やスキルが上であるはず)、第一子を迎えるために妻は夫をどのように準備するのかを報告しました。

コメントでは、夫妻間のコミュニケーションを理解するために、認知社会学的なアプローチをとってはどうかという提案をいただきました。今回の分析ではそういったアプローチはとっていませんでしたが、分析の枠組みとして使えそうだと思います。また、調査者の人生経験(子どもがいるかないか等)や価値観といった主観がインタビューデータの収集やデータの分析にどう影響したと思われるのかを考察することも大切だと指摘を受けました。質的調査では、調査者の社会での立ち位置を詳しく説明しているものも多く、私自身の立ち位置が分析

にどう影響したかを考えるきっかけにもなりました。

これまで約2年の間、フィンランド、ポルトガル、日本の研究者が本研究に取り組んできましたが、3か国の調査参加者の多くが集まったのは初めてのことでした(それでも全員ではありませんでした)。実際に会ってお互いの研究にコメントしあったり、今後の研究について考えたりしたことで、研究の質が高くなったと感じました。加えて、お互いをパーソナルなレベルで知ることができ、遠慮なく意見を交換する環境や、分析・論文執筆に向け、力を合わせてやっという一体感が生まれたと感じました。



写真2 ポルトガルセミナーでのアドバイザーたちとのビデオミーティングの様子

「コパ・グローバ研究の背景——なぜこの3カ国を比較するのか？」を報告して

客員研究員 高松宏弥

藪長千乃研究員と共同で、「Backgrounds of Copa Study: why we compare these three countries?」というタイトルでポスター発表を行いました。本報告の目的は、本研究プロジェクトであるコパ・グローバ(コペアレンティングの国際比較研究)を実施するにあたり、フィンランド、ポルトガル、日本の3カ国を研究対象とする意義について説明することでした。3カ国それぞれの特徴を明らかにするために、①文化・宗教、政治体制、男女共同参画を含む社会・経済の変化に関する文脈の分析、②公的統計データの比較分析による女性の現状と労働・育児政策の整理と比較、③世界価値観調査(Wave7)を対象とした3国の家族、宗教、男女平等に関する指標の比較検討、の3つの分析を行いました。

本報告では、フィンランドは男女平等が進んでいること、ポルトガルは制度と価値観が乖離した過渡



写真3 ポルトガルでのセミナーにて本プロジェクト参加者集合写真

期にあること、日本は制度も人々の価値観も伝統的であると結論付けました。事前に収録した報告動画をアドバイザーや参加者が視聴するという発表形式であったため、質疑やコメントは非常に限られた時間で行われたものの、報告内容は好意的に受け止められ、建設的なコメントをいただきました。今後の研究では、通時的な分析や、国別の公的統計データをより詳細に分析することが求められるという気づきを得ました。

今回のセミナーを通して、オンライン上では制限されがちな他愛ない会話が、さらなるコミュニケーションを生み、研究に対する大きな刺激を互いに受け合うことができることを実感しました。ポルトガルでの経験を活かし、今後より一層、研究活動に励んでいきたいと思っています。



写真4 セミナー会場のポルト大学(心理教育学部)

オープンセミナーのお知らせ

第3回 CeSDeS Open Seminar on SDGs

親への移行期におけるコペアレンティングの構築：産前カップルへの調査結果から

開催日：2023年2月4日(土) 15:00～17:00

言語：日本語

場所：ハイブリッド(対面式・オンライン)

対面式会場：東洋大学白山キャンパス 8号館8601号室

オンライン配信の視聴URLはHPをご確認ください。

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/0204/>

主催：東洋大学国際共生社会研究センター

対象：学生・教員・一般

プログラム

15:00 挨拶(5分)

岡本郁子(副センター長、国際学部教授)

15:05 趣旨説明(10分)「コペアレンティング国際共同研究とその意義」

藪長千乃(センター研究員、国際学部教授)

15:15 基調講演(20分)「フィンランド、日本、ポルトガルの産前カップルにおけるコペアレンティングへの期待：普遍的パターンと国別パターン(Coparenting expectations among Finnish, Japanese and Portuguese expectant parents: universal and country-specific patterns)」

アンナ・ロンカ(フィンランド・ユヴァスキュラ大学教授)

※録画・日本語字幕付き

(5分休憩)

15:40 講演1(15分)「アクセシビリティを確保するために：第一子を妊娠中のカップルに対するインタビュー調査」

伊藤大将(センター客員研究員)

15:55 講演2(15分)「出産前コペアレンティング関係尺度の信頼性・妥当性の検証：フィンランド・ポルトガルとの国際比較研究」

矢田明恵(センター客員研究員)

16:10 講演3(15分)「コペアレンティングをめぐる日本・フィンランド・ポルトガルにおける社会文化的文脈の比較検討：公的統計データと世界価値観調査データに着目して」

高松宏弥(センター客員研究員)

(5分休憩)

16:30 ディスカッション・質疑応答(20分)

森田明美(東洋大学名誉教授)

中村康香(東北大学准教授)

16:50 総括(10分)

藪長千乃(センター研究員、国際学部教授)

オンライン配信の視聴URLはHPにてご確認ください。

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/0204/>



東洋大学

国際共生社会研究センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

Phone. 03-3945-7747

E-mail. cesdes@toyo.jp

URL. <https://www.toyo.ac.jp/ja-JP/research/labo-center/orc/>

東洋大学重点研究推進プログラム

レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究

センターではイベント等をご案内するメールニュースを発行しています。本ニュースレターもメールで読むことができます。ご登録は右のQRコードよりお願いします。

ニュースレターの郵送停止・宛先変更をご希望のかたも右のQRコードよりお知らせください。



再生紙を使用しています。



Kyoko Nakamura · Kaori Miyachi ·
Yukio Miyawaki · Makiko Toda *Editors*

Female Genital Mutilation/ Cutting

Global Zero Tolerance Policy and Diverse
Responses from African and Asian Local
Communities

OPEN ACCESS

 Springer

東洋大学国際共生社会研究センター主催

第3回CeSDeS Open Seminar on SDGs 親への移行期におけるコペアレンティング の構築：産前カップルへの調査結果から

2023年2月4日（土）

15:00～17:00

使用言語：日本語

形式：ハイブリッド

対面式会場 東洋大学白山キャンパス8号館8601号室

オンライン配信 視聴URLはHPをご確認ください

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/0204/>

■ プログラム

挨拶 岡本郁子（副センター長、国際学部教授）

趣旨説明「コペアレンティング国際共同研究とその意義」

藪長千乃（センター研究員、国際学部教授）

基調講演 アンナ・ロンカ（フィンランド・ユヴァスキュラ大学教授）

「フィンランド、日本、ポルトガルの産前カップルにおけるコペアレンティングへの期待：
普遍的パターンと国別パターン（Coparenting expectations among Finnish, Japanese and
Portuguese expectant parents: universal and country-specific patterns）」

※録画・日本語字幕付き

講演1 伊藤大将（センター客員研究員）

「アクセシビリティを確保するために：第一子を妊娠中のカップルに対するインタビュー調査」

講演2 矢田明恵（センター客員研究員）

「出産前コペアレンティング関係尺度の信頼性・妥当性の検証：
フィンランド・ポルトガルとの国際比較研究」

講演3 高松宏弥（センター客員研究員）

「コペアレンティングをめぐる日本・フィンランド・ポルトガルにおける
社会文化的文脈の比較検討：公的統計データと世界価値観調査データに着目して」

ディスカッション

森田明美（東洋大学名誉教授）・中村康香（東北大学准教授）

総括 藪長千乃（センター研究員、国際学部教授）

セミナーHP

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/0204/>



東洋大学国際共生社会研究センター
2022 年度評価委員会
議事次第

開催日 2022 年 3 月 9 日 (木)

会場 Webex 会議 (<https://toyouniv.webex.com/meet/cesdes>)

17:45 開場

18:00 開会

18:00 センター長開会挨拶

松丸 亮

18:05 出席者紹介

18:15 座長選出・挨拶

18:20 センターの 2022 年度の活動の総括

松丸 亮

18:40 質疑応答

19:00 評価委員講評

19:15 センター長閉会挨拶

松丸 亮

19:20 閉会

配布資料一覧

資料 1 評価委員名簿

資料 2 2021 年度東洋大学国際共生社会研究センター評価書

資料 3 2022 年度東洋大学重点研究推進プログラム研究成果報告書

資料 4 東洋大学国際共生社会研究センター2022 年度研究報告書

活動計画タイトル（キーワード）

温室効果ガス排出削減のための取り組み**① 活動計画の概要**

2050 年 CO₂ 排出実質ゼロ（カーボンニュートラル）を実現するため、東京都は「ゼロエミッション東京戦略」を策定・公表し、都内温室効果ガス排出量を 2030 年までに 50% 削減（2000 年比）すること、また再生可能エネルギーによる電力利用割合を 50% 程度まで高めることを表明した。これら国や自治体での取り組みを踏まえ、本学においても東京都及び埼玉県等の条例を遵守するとともに、さらなる環境負荷低減のために温室効果ガス排出量の削減を推進していく。

【具体的な計画】**1. 温室効果ガス排出量の削減**

空調機や照明器具等、設備機器の更新時に省エネ型機器を導入するとともに、主要設備機器の効率的な運用等により、温室効果ガス排出量を 2020 年度から 2024 年度までの間、白山キャンパスにおいては基準排出量に対し 27 % 以上の削減、川越キャンパスにおいては基準排出量に対し 22 % 以上の削減を達成する。その他のキャンパスにおいても、前年度比 1% 以上の削減を達成する。

2. 再生可能エネルギーの活用

東京都の再生可能エネルギー利用推進を踏まえ、本学においても活用方針を立案し、エコキャンパス推進委員会で承認を受ける。

② 数値的な目標の達成状況と得られた成果**1. 温室効果ガス排出量の削減****【数値的な目標】**

（条例による排出量上限）

・ 白山キャンパス：基準排出量×73%＝4,915t > 排出量＝4,686t （排出量上限の約 96%）

・ 川越キャンパス：基準排出量×78%＝4,249t > 排出量＝3,379t （排出量上限の約 80%）

両キャンパスにおいて、目標を達成することができた。なお、排出量は概数とし、今後、検証機関により確定する。

（エネルギーの使用の合理化等に関する法律による排出量上限）

全キャンパスにおいて、前年度排出量比 1% 以上の削減を達成することができた。

【得られた成果】

東京都及び埼玉県の条例並びにエネルギーの使用の合理化等に関する法律を遵守でき、エネルギー使用料金が高騰する中、経費の削減ができた。

2. 再生可能エネルギーの活用**【数値的な目標】**

再生可能エネルギーが占める電力利用割合の数値目標を 2025～2030 年度まで定めた。

2025～2029 年度 電力利用割合 50%
 2030 年度 電力利用割合 100%

【得られた成果】

カーボンニュートラル・キャンパスに向けて、2025 年度から再生可能エネルギーを導入し、2030 年度には再生可能エネルギーが占める電力利用割合を 100%にすることがエコキャンパス推進委員会で承認された。これにより、本学がカーボンニュートラル・キャンパスを目指す時期が明確になった。

③ 2022 年度活動内容		添付資料(※)
4 6 月	◇実施内容名 ・2022 年度エネルギー使用量の目標を設定し、エコキャンパス推進委員会で報告した。 ・再生可能エネルギーの活用方針を作成し、エコキャンパス推進委員会で承認を受けた。	
7 9 月	・白山キャンパス 6 号館及び川越キャンパス 1 号館において、空調設備改修工事を実施した。 ・川越キャンパス実験棟及び運動施設において、照明設備の LED 化工事を実施した。 ・2023 年度以降の施設設備改修計画（5 ヶ年計画）の見直しを行った。	
10 12 月	・施設設備改修計画（5 ヶ年計画）に基づき、2023 年度の前算要求を行った。 （白山・川越キャンパス空調設備改修工事及び川越キャンパス実験棟照明設備 LED 化工事） ・2023 年度電気及びガス供給会社の選定を行った。	
1 3 月	・2022 年度の温室効果ガス排出量の集計し、各法令を遵守できたことを確認した。	

※活動実績となる成果物や資料（チラシ・ポスター・報告書 等）がございましたら、併せてご提出ください。その際、表中の添付資料欄に番号等の記載をお願いします。

活動計画タイトル（キーワード）

2022 年度における SDGs 関連広報**① 活動計画の概要**

SDGs 関連の広報活動は、本法人・本学が社会的責任を果たしていることを示すとともに、教員による研究や学生団体による活動など個別の具体的な取り組みの発信を積み重ねることによってブランド力を向上させるものと位置づけ、2022 年度も重点的に取り扱う項目として予算計上している。

広報部門においては、各部門（学部・研究科・研究センター含める）が 2022 年度に実施する SDGs に寄与する先進的な取り組みを学外へ発信する役割を担うため、具体的な活動計画は他部門の計画を踏まえて策定することとなる。策定にあたっては、各部門による活動計画を学長事務課が集約し、SDGs 推進委員会で共有することを前提に、全体の中で重点的に発信する施策に対して、時期や社会情勢等も踏まえた効果的な情報発信を行うためのリソースを分配する。

2022 年度の情報発信の手段として、以下のメディアを計上している。

1. 報道発表**1-1. 報道関係者向け「SDGs NewsLetter」の発行（全 10 回）**

SDGs に寄与する本学の取り組みや教員の研究、学生団体の活動を報道関係者へ情報提供することで、メディア露出を狙う。2022 年度予算においては、報道調査および取材・撮影を含む原稿作成の経費を計上している。

報道調査は、メディア露出につながる適切なテーマ設定を行うために、「(大学の活動 or 研究成果) × SDGs」の報道状況、海外および国内における SDGs を巡る動向をリサーチし、教員の研究テーマなど本学のリソースとのマッチングを行う。リサーチの報告については広報担当部門のみならず、推進センター長にも同席いただき、議論を行った。リサーチ結果を踏まえ、SDGs に関係する注目キーワードに関連する研究を実施している教員に広報課からアプローチし、取材・撮影を行ったうえで NewsLetter を制作した。

NewsLetter は共同通信 PRWire に配信するとともに、本学公式 Web サイト内「SDGs 特設サイト」にも掲載することで、オーガニック検索からの流入、他コンテンツへのアクセスなど波及効果を狙う。

1-2. リリース・記者会見等（通年）

学内において SDGs に寄与するイベントの実施や研究成果などがあった場合には、従来通り積極的に報道発表を行っていく。案件の性質により、プレスリリース（取材招致・ニュースリリース）や記者会見といった手段を適切に用いていく。

2. 公式 Web サイト（通年）

2020 年 7 月に、本学の SDGs に関連する情報発信のプラットフォームとして公式 Web サイト内に特設サイト（<https://www.toyo.ac.jp/sdgs/>）を構築している。公式 Web サイト内に点在する SDGs 関連コンテンツを結ぶポータルサイトとしての機能を持たせており、2022 年度においても引き続き情報集約の拠点として活用する。また、段階的に独自コンテンツを拡充してキュレーションサイトとして展開する準備を進めている。独自コンテンツは「研究成果による SDGs への貢献」をテーマに、2021 年度同様、10 本の記事追加を実施した。

また、学外へ情報発信を行った際の誘導先としており、閲覧者は詳細を得る場、発信者は効果検証の場として活用している。PUSH 型の発信を行った際にはトップページのメインビジュアルに関連画像を用いて特設サイトへ誘導することで、PUSH・PULL の効果的な組み合わせる小型キャンペーンを積み重ねていく設計としている。

3. 広告出稿

本学のSDGsに関する取り組みの紹介を行い、SDGs特設サイトへ誘導する内容とする。作成したキービジュアルやコピー等は、情報発信後の受け皿となるSDGs特設サイトなどの素材としても活用していく。

また、主要メディアではSDGsをビジネスチャンスと捉えられており、多数の広告企画が立ち上がっている。企画ごとに時期やテーマ、露出量、コストを精査し、条件の良い企画は措置された予算の中で積極的に枠の確保に動き、結果として10月：日本経済新聞高校生向けSDGs企画に広告出稿を行った。

4. 報道関係者向け「教員ガイド」

全専任教員の研究内容等のプロフィールを掲載し、報道関係者に配布している「教員ガイド」は、学問的見地による専門的な見解を要する取材時等に活用いただき、本学教員のメディア露出の機会を高めるために制作している。2020年度から教員プロフィール欄に研究に関連するSDGの数値を付記した。これにより、SDGsを切り口とした取材への対応が可能となり、2022年度も継続的に実施した。

5. その他

他大学をはじめとする教育機関の SDGs 関連記事をクリッピングし、その動向を把握するとともに、SDGs 推進委員会にて情報共有した。

② 数値的な目標の達成状況と得られた成果

※広報部門においては、各部門が 2022 年度に実施する SDGs に寄与する先進的な取り組みを学外へ発信する役割を担うため、具体的な活動計画は他部門の計画を踏まえて策定することとなる。そのため、個別の発信に対する目標は現時点では設定できないが、年間での目標を下記の通り定め、取り組んだ。

目標①「掲載数（記事数）100 件」 → 実績：330 件

- ・SDGs に関する取り組み等のリリース 18 本の配信(2023 年 3 月 20 日時点)を行った結果、編集記事や転載記事で計 330 件掲載され目標を達成した。
- ・多くの媒体に掲載されることにより、本法人または本学が SDGs に注力して多様な取り組みを行っていることや、SDGs への貢献により社会的責任を果たしているという評価の獲得、そして SDGs に関連した露出の繰り返しによって教育・研究面でのブランド力の向上に寄与できたことが成果となる。
- ・各取り組みの発信や広告展開により、本学 SDGs 特設サイト (<https://www.toyo.ac.jp/sdgs/>) への注目も高まり、数ある大学関連の SDGs サイトのなかで検索エンジンの表示順位で Google 2 位/Yahoo!JAPAN 2 位に位置している(キーワード「大学 SDGs」/2023 年 3 月 16 日時点)。大学公式 Web サイトのコンテンツとしては明治大学に次いで 2 番目、3 番目は立命館大学となる。

以下、2022 年度に配信した SDGs に関する取り組み等のリリース（配信日順）

- (1) 10/03 バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくりシンポジウム
- (2) 10/07 TOYOSDGsWeeks を開催
- (3) 10/14 SDGs 推進センター設立記念シンポジウムの開催

- (4) 10/26 国際共生社会研究センター MeW Project オープンセミナー
- (5) 11/25 水のシンポジウム開催
- (6) 12/13 「TOKYO イーストの HTT と中小企業経営～SDGs 経営の実践」シンポジウム開催
- (7) 02/24 「多階層的研究によるアスリートサポートから高齢者ヘルスサポート技術への展開～社会実装に向けての研究連携組織の構築～」重点研究推進プログラム 最終成果報告シンポジウム
- (8) 03/30 重点研究推進プログラム成果報告会

【SDGs NewsLetter】

- (9) 09/29 Vol.11 社会学部社会福祉学科 小野道子 准教授 テーマ：子どもの権利
- (10) 10/26 Vol.12 理工学部都市環境デザイン学科 及川康 教授 テーマ：防災
- (11) 11/16 Vol.13 経済学部総合政策学科 松本健一 准教授 テーマ：ESG 投資・カーボンニュートラル
- (12) 12/01 Vol.14 総合情報学部 総合情報学科 大塚佳臣 教授 テーマ：海洋ごみ
- (13) 12/23 Vol.15 食環境科学部 食環境科学科 児玉剛史 准教授 テーマ：フードロス
- (14) 01/18 Vol.16 ライフデザイン学部 人間環境デザイン学科 内田祥士 教授 テーマ：アップサイクル
- (15) 01/31 Vol.17 情報連携学部 情報連携学科 平松あい 准教授 テーマ：SDGs 教育
- (16) 02/15 Vol.18 国際学部国際地域学科 沼尾波子 教授 テーマ：地域活性
- (17) 03/01 Vol.19 社会学部社会学科 村尾祐美子 准教授 テーマ：ジェンダー
- (18) 03/20 Vol.20 経営学部マーケティング学科 須山憲之 准教授 テーマ：エシカル消費

目標②「SDGs 特設サイトの年度ページビュー数 108,000PV（月平均 9,000PV）」

→実績：101,710PV（月平均 8,475PV）

- ・2022 年度の 12 か月間での本学 SDGs 特設サイトのページビュー数。目標達成にはいたらなかったが、2020 年 10 月末に開設してから 2021 年 11 月末日までのページビュー数は 108,106 PV（月平均 9,008 PV）となり、安定してサイト閲覧がなされている。
- ・本学の SDGs に関する情報を集約する特設サイトのページビュー数増加は、より多くの方に本学の SDGs に貢献する研究や取り組みを広報することに直結するとともに、サイトへの誘導を行っている広告やリリースによる広報との相乗効果が期待できる。

③ 2022 年度活動内容		添付資料(※)
4 6 月	◇実施内容名 ・公式 Web サイトによる情報発信 (特に「SDGs への取り組み」ページ更新)	① ②
7 9 月	・公式 Web サイトによる情報発信 (特に 10・11 月の SDGs Weeks の情報発信) ・報道関係者向け「SDGs News Letter」	③ ④
10 12 月	・公式 Web サイトによる情報発信 (特に 10・11 月の SDGs Weeks の情報発信) ・報道関係者向け「SDGs News Letter」 ・報道発表 (プレスリリース) ・広告出稿 日本経済新聞高校生向け SDGs 企画 (10 月 28 日掲載)	③ ④ ⑤ ⑥

1 3 月	<ul style="list-style-type: none"> ・公式 Web サイトによる情報発信 ・報道関係者向け「SDGs News Letter」 	<ul style="list-style-type: none"> ① ④
------------------	--	--

※活動実績となる成果物や資料（チラシ・ポスター・報告書 等）がございましたら、併せてご提出ください。
 その際、表中の添付資料欄に番号等の記載をお願いします。



東洋大学

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



学校法人東洋大学SDGs行動憲章



学長メッセージ



東洋大学SDGs推進センター



キャンパスごとの省エネ目標とエネルギー使用状況を可視化しています

News ニュース



SDGs Carbon Neutral

【アカイブ配信】SDGs推進センター設立記念シンポジウム「SDGs×カーボンニュートラルいま、わたしにできること。」



【SDGs NewsLetter】リテール業界が推進する多彩なSDGs活動と今、求められる産官学の連携

2023/03/20



【SDGs NewsLetter】無償労働の慣りや賃金格差など、女性が活躍できる社会に向けて解決すべきジェンダー問題

2023/03/01



【国際共生社会研究センター】2022年度研究報告書を刊行～レジリエントな社会に向けたSDGsの包摂的実現に関する研究～

2023/03/01



【2月28日まで募集中！】第3回「ものづくり」アイデアコンクールのご案内

2023/02/28



【SDGs NewsLetter】人口減少と東京一極集中、地方が抱える課題を解決し多様な国づくりの実現へ

2023/02/15



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/02/10



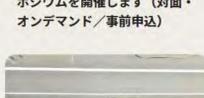
【SDGs NewsLetter Vol.17】実践による課題解決力の養成や知識更新のための生涯教育がSDGs達成の一助となる

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.16】今ある建物や素材に価値を見いだすアップサイクルを通じて、日本の建築の未来を考える

2023/01/18



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/02/10



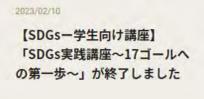
【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



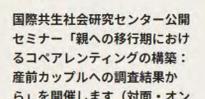
【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



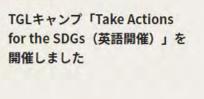
【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.17】実践による課題解決力の養成や知識更新のための生涯教育がSDGs達成の一助となる

2023/01/31



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



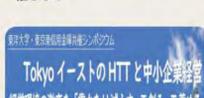
【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



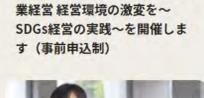
【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



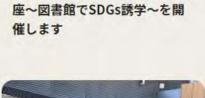
【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



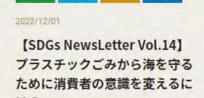
【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



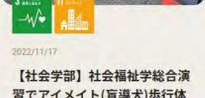
【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



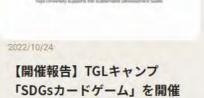
【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



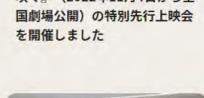
【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



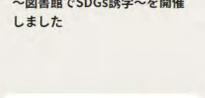
【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



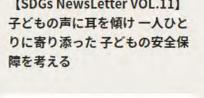
【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



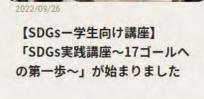
【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



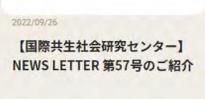
【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



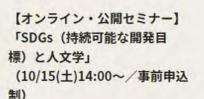
【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



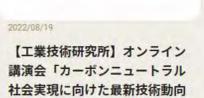
【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



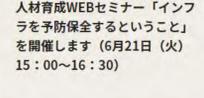
【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



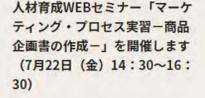
【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



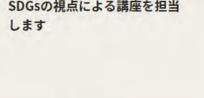
【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



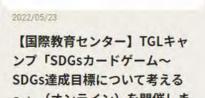
【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



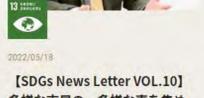
【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



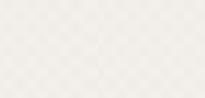
【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23



【SDGs実践講座～17ゴールへの第一歩～】が終了しました

2023/01/31



【SDGs NewsLetter Vol.15】食品ロス問題の本質とは？食料経済学から考える解決への道筋

2023/02/04



【開催報告】文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会

2023/02/23

- 東洋大学TOP
- 東洋大学SDGs特設サイト
- 学校法人東洋大学SDGs行動憲章
- 学長メッセージ
- 東洋大学SDGs推進センター
- SDGs News Letter
- SDGsへの取り組み
- 負担をなくそう
- 課題をゼロに
- すべての人に健康と福祉を
- 質の高い教育をみんなに
- ジェンダー平等を実現しよう
- 安全な水とトイレを世界中に
- エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- 働きがいも経済成長も
- 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 人や国の不平等をなくそう
- 住み続けられるまちづくりを
- つくる責任 つかう責任
- 気候変動に具体的な対策を
- 海の豊かさを守ろう
- 陸の豊かさを守ろう
- 平和と公正をすべての人に
- パートナーシップで目標を達成しよう

東洋大学のSDGsに関連する取り組み

東洋大学のSDGsへの取り組み

東洋大学のSDGsへの取り組みを、17のゴールごとにご紹介します。
各アイコンから関連する取り組みをご覧ください。



ロゴマークを制定



本学では、国連のガイドラインに基づき、SDGsに対する支援を表明する場面において、「SDGs公式ロゴ」「本学ブランドマーク」のコンボジットロゴを使用します。

「TOYO SDGs Weeks」の開催

学内のSDGsムーブメントをよりいっそう醸成し、地球社会の未来のために「主体的に行動する人」の育成を目指し、毎年10月頃～11月頃のおよそ1か月間を「TOYO SDGs Weeks」と定め、本学の学生・教職員等を主な対象に、シンポジウムやコンテスト、講演会、ワークショップなど、SDGsに関連するプログラムを開催しています。

一部のプログラムは一般の方にも参加いただける企画とし、地域社会のSDGsへの理解促進を推進します。

▶ 2022年度「TOYO SDGs Weeks」の開催状況はこちらをご覧ください

エコキャンパス

学校法人東洋大学では環境問題について全学的に取り組むため、エコキャンパス推進委員会を設置し、「環境教育部会」と「環境施設部会」の2つの専門部会を設けて活動を行っています。

環境教育部会

環境問題について、学生の皆さんに広く認識を持ってもらえるよう、講演会の開催や環境改善活動に参加できるイベントを開催しています。



- イベント開催例**
- 富士山清掃活動ボランティア
 - 学食におけるフードロス（食べ残し削減）のための広報活動
 - 白山キャンパスや鶴ヶ島駅周辺清掃活動
 - 川越キャンパス「こもれびの森・里山支援隊」によるキャンパス内整備活動
 - 赤羽台キャンパス周辺クリーンアップ活動

環境施設部会

高効率設備への更新や各種設備の運用面から省エネ化を推進します。



- 推進活動例**
- 各キャンパスの毎日のエネルギー使用状況の発信
 - 太陽光発電システムの導入
 - 屋上緑化の推進
 - 教室内照明LED化や空調装置の更新
 - 東京都・埼玉県条例に基づくCO2排出量削減に対する各種取組み

大学等コアリションへの参画

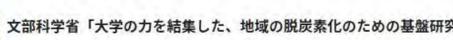
文部科学省、経済産業省および環境省による先導のもと、カーボン・ニュートラルに向けた積極的な取組を行っている、または取組の強化を検討する大学等による情報共有や発信等の場として、「カーボン・ニュートラル達成に貢献する大学等コアリション」が2021年7月29日に立ち上がりました。

具体的には、①大学等の取組に係る知見の横展開 ②自治体や企業等との連携強化による研究成果の社会実装やニーズに応じたテーマ別の「国内外への発信力の強化」等を目的とし、大学代表者が集まる「総会」と、大学職員や研究者等のレベルで参加するテーマ別の「ワーキンググループ(WG)」の二層構造のもとで、参加大学等自身が大学等コアリションの在り方や方針を決定していきます。

2021年7月29日の設立総会決議で、本学は「ゼロカーボン・キャンパスWG」、[地域ゼロカーボンWG]、[イノベーションWG]への参加が承認されました。

今後はカーボン・ニュートラルの実現に向けてロードマップに従い、全国の大学等と連携しながら活動を行ってまいります。

関連情報



文部科学省「大学の力を結集した、地域の脱炭素化のための基盤研究開発」に採択

2021年2月、文部科学省から「地域の脱炭素化に向けた取組を支援するために必要な研究開発を推進するとともに、各大学等の研究開発やその成果の展開等を通じた地域支援を推進するための体制を構築することにより、地域と大学等との連携を通じた地域の脱炭素化の取組を加速し、2050年のカーボンニュートラルの実現に貢献することを目指す」ために「大学の力を結集した、地域の脱炭素化のための基盤研究開発」に関する事業の公募がありました。

その結果、東洋大学（代表：藤田社教授）が代表機関となり、東洋大学、北九州市立大学、早稲田大学、宇都宮大学、名古屋大学、岐阜大学、国立環境研究所、総合地球環境学研究所の「地域の脱炭素化の将来目標とソリューション計画システム」の開発と自治体との連携を通じた環境イノベーションの社会実装ネットワークの構築が採択されました。2025年度まで実施の予定です。

本学は、東洋大学と国立環境研究所とともに、地域のシナリオや計画策定に向けて、気候変動影響と社会経済特性、国の計画等を入力変数として、地域自律エネルギー、次世代交通システム、建設ストックマネジメントに係る将来目標を設定し、社会経済効果や環境効果を統合的に算定するモデルに基づく「脱炭素地域計画支援システム」を構築する役割となっています。

本学の担当者は、荒巻俊也教授（国際学部）をグループ代表として、後藤尚弘教授（情報連携学部）、大塚臣臣教授（総合情報学部）、平松あい准教授（情報連携学部）、花岡千草研究員（産官学連携推進センター）です。

関連情報



国連大学SDG大学連携プラットフォーム (SDG-UP) への参画

2020年、国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) の呼びかけにより、SDGsの達成に向けて積極的に取り組む意欲のある日本の大学が連携できる場として、「国連大学SDG大学連携プラットフォーム (SDG-UP)」が設立されました。

国連大学と日本の大学（本学を含む32大学：2022年4月現在）同士が連携し、高等教育におけるSDGsの取組みや人財育成、ステークホルダーとのパートナーシップを強化し、日本と世界の持続可能な発展に貢献することを目的としており、本学は2020年に参画しました。

関連情報

国連大学SDG大学連携プラットフォーム (SDG-UP) Webサイト

東京都文京区との連携

「文京区の脱炭素社会実現への取組」への協力

2022年2月、東京都文京区は、2050年までに二酸化炭素排出量を実質ゼロにするゼロカーボンシティを目指すことを表明しました。文京区内にキャンパスを開設している本学では、社会貢献センターを窓口とし、「東洋大学SDGsアンバサダー」を中心に、学生への啓発活動や講演会の開催計画などについて文京区と連携しながらゼロカーボンシティ実現に向けた取り組みを進めてまいります。

「ふんきょう食べきり協力店」への登録

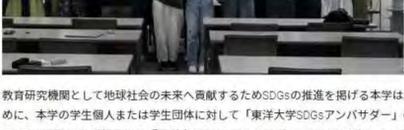
文京区は、食べ残し対策に取り組む店舗を「ふんきょう食べきり協力店」として公表しています。本学は白山キャンパス学生食堂を登録し、文京区とともに「食事を楽しみながら食品ロス削減」に取り組んでおります。

文京区：「ふんきょう食べきり協力店」の紹介 Webサイト

東京都文京区内大学連携事業

東京都文京区内に所在する本学、東洋大学、日本薬科大学、お茶の水女子大学、日本女子大学が連携して大学内学生食堂等におけるフードロス対策に取り組むことを検討しています。本学では「東洋大学SDGsアンバサダー」のフードロスチームが主体となりフードロスに取り組んでいます。

【学生団体】「東洋大学SDGsアンバサダー」を創設しました



教育研究機関として地球社会の未来へ貢献するためのSDGsの推進を掲げる本学は、SDGs活動の一層の活性化、充実および発展を図るために、本学の学生個人または学生団体に対して「東洋大学SDGsアンバサダー」の称号を付与する制度を設けました。そして、2021年11月2日に学生46名が制度初の「東洋大学SDGsアンバサダー」として誕生しました。

SDGsアンバサダーの学生は、制度の目的や自身が担う役割、活動に必要な基礎知識や学内外の活動事例を学ぶスタートアップセミナーを経て、学内の関係委員会等で推薦・承認され、学長から称号を付与されます。「本学のSDGs活動への参画」「本学のSDGs活動の普及推進のための情報発信」を活動の軸とし、学生たちが自ら考え、企画等を検討し、SDGsへ貢献するために行動していきます。2022年度は個人だけでなく、学生ボランティア、サークルなどの団体についても認定し、活動を支援しています。

関連情報

2022年度「東洋大学SDGsアンバサダー」としてSDGsを推進する学生78名を認定しました

【研究】東洋大学重点研究推進プログラム

地球レベルの課題解決に貢献するとともに、本学のブランドとなり得る研究活動を支えるため、学内公募型の研究助成制度「重点研究推進プログラム」を創設しました。IoT、AI、ビッグデータなど情報通信技術分野における革新的研究、医療・健康福祉分野での先進国をリードする研究、SDGsの達成に貢献する研究、ポストコロナにおける各種教育の高度化に資する研究など、以下の9つの重点研究課題を設定し、学内研究者による研究拠点、研究グループを公募し、助成を行い研究を進めています。

- グローバルな協調を取り戻すための、データエコノミー、Fintechなど情報通信技術革新を含むデジタルトランスフォーメーション (DX) に関わる研究
- 福祉改革の促進、健康寿命延伸の観点からの医療・健康福祉、食環境、生命科学分野等の先進国をリードする研究
- 産業のイノベーションの創発の発展と、それを強化する社会システムの革新研究
- SDGsの達成に貢献する各種研究、または同課題達成に向けたテーマ性を有する研究
- ポストコロナにおける各種教育の高度化に資する研究
- 東洋大学の150周年を視野に入れて、大学としての個性化とブランド力を高めるための研究
- 上記1～7の課題に対処するための哲学・倫理・文化等の人文学研究

注目の重点研究推進プログラム

- 東洋大学バイオレジリエンス研究プロジェクト**
東洋大学の特徴の一つとして過酷な極限環境でも生育可能な新たな生物資源として注目される極限環境微生物 (Extremophiles) 研究に強みがあることが挙げられます。当センターでは、我々の強みである極限環境微生物研究の先端科学と知見を社会に還元しSDGsが掲げる目標に貢献することを目指します。
- 東洋大学生体医工学研究センター**
生物の持つ優れた構造や機能などを解明し、新たな技術を生み出す「バイオミメティクス」に注目。専門領域の異なる若い世代の研究者たちが情報発信、バイオミメティクスを活用した高機能かつ持続可能なものづくりを目指します。
- 東洋大学国際共生社会研究センター**
開発途上国の生活環境の改善や貧困の削減などに関するプロジェクトに取り組み、東洋大学創設150周年を迎える2037年をゴールに設定し、長期的な視野で研究開発を進めています。

関連サイト

東洋大学重点研究推進プログラム特設サイト

【社会連携】講師派遣プログラム

本学では、社会貢献活動の一環として、平成11年4月創立者升上野了没後80周年を機に講師派遣事業を実施しております。「SDGs達成学習支援プログラム」を開講し、全国の小・中・高等学校、特別支援学校におけるSDGs目標達成のための教育を推進するため、本学専任教員を派遣し、関連事業を実施しています。

関連サイト

2022年度講師派遣事業—SDGs（持続可能な開発目標）達成学習支援プログラム—【PDFファイル】

SDGs活動報告書

2021年度SDGs活動報告書（東洋大学SDGs推進委員会）【PDFファイル】

学校法人東洋大学環境憲章 (2011.07.29~2021.06.06)

学校法人東洋大学環境憲章／Toyo University Eco Charter【PDFファイル】

※「学校法人東洋大学環境憲章」は、2021年6月6日に「学校法人東洋大学SDGs行動憲章」へと発展させ、目標を引継ぎました。



TOYO UNIV. | **SDGs Weeks** 10.10日～11.6日



東洋大学は学内のSDGsムーブメントをよりいっそう醸成し、地球社会の未来のために「主体的に行動する人」の育成を目指して「TOYO SDGs Weeks」と題した各種プログラムを2022年10月10日から11月6日まで開催します。

学校法人東洋大学では、東洋大学創立者・井上円了の命日にあたる2021年6月6日に「学校法人東洋大学SDGs行動憲章」を制定。SDGsの理念に賛同し、地球社会の明るい未来づくりへの貢献を誓いました。この度、本学の学生・教職員等を主な対象に1カ月にわたって行う「TOYO SDGs Weeks」では、シンポジウムやコンテスト、講演会、ワークショップなど、SDGsに関連するプログラムを開催します。一部のプログラムは一般の方にも参加いただける内容であり、地域社会のSDGsへの理解促進を推進します。



2022年度 TOYO SDGs Weeks 開催報告（最終報告）〈2022.10.10～11.06〉

News

ニュース



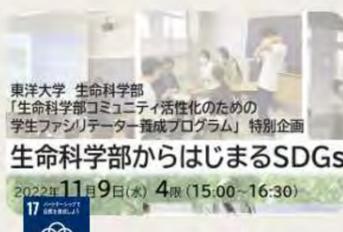
【アーカイブ配信中】10/22 (土) SDGs推進センター設立記念シンポジウム「SDGs × カーボンニュートラルーいま、わたしにできること。」



【SDGs NewsLetter】プラスチックごみから海を守るために消費者の意識を変えるには？



【SDGs NewsLetter VOL.13】2100年を見据えて最適な選択をカーボンニュートラル実現に向けた環境経済学的アプローチ



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.13】2100年を見据えて最適な選択をカーボンニュートラル実現に向けた環境経済学的アプローチ



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



【SDGs NewsLetter VOL.12】想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に求められるものとは？



SDGs NewsLetter

Vol.01

東洋大学は“知の拠点”として
地球社会の未来へ貢献します

2022.09.29発行



子どもの声に耳を傾け 一人ひとりに寄り添った 子どもの安全保障を考える

「子どもの権利条約」を基本理念として児童福祉法が改正されてから6年が経過しましたが、子どもの権利について、社会の理解は深まっているのでしょうか。今回は、ユニセフで南アジアの子ども支援に携わった経験を持ち、子どもの権利を専門に研究する社会学部社会福祉学科の小野道子准教授の研究や活動をお伝えします。

Summary

- ・子どもの安全保障＝発展途上国や貧困地域だけの問題ではない
- ・日本でも災害などの有事が発生した際に、安全保障や居場所づくりは子どもの心をケアする上で非常に重要
- ・「こども基本法」の成立や「こども家庭庁」発足など子どもの権利を守るための新たな動きに注目したい

「ベンガリー」との出会いから、 子どもの安心・安全な居場所づくりを目指す

現在までの活動と研究内容について教えてください。

私は人間の安全保障の中でも、特に子どもに焦点を絞った「子どもの安全保障」について研究を進めてきました。人間の安全保障とは、人々を貧困や紛争、災害などの脅威から守り、それぞれが可能性を実現する機会・選択肢を手にするために、一人ひとりの人間に着目し、その能力強化を通じて持続可能な個人の自立と社会づくりを促す考え方です。これは、SDGsの理念である「誰一人取り残さない」にも通じます。その一つとして、「ベンガリー」と呼ばれるパキスタンに在る無国籍の子どもの安全保障について研究しています。大学1年の時に参加したバングラデシュでのスタディーツアーをきっかけに南アジアに興味をもち、バングラデシュの研究に注力。その後パキスタンにJICAで2年、ユニセフで3年半、計5年半ほど駐在し、教育や子どもの保護などの事業に携わってきました。



「ベンガリー」の多くは、無国籍が原因で多くの不利益を被っています。なぜ子どもたち、特に女の子たちが「路上」で物売りや物乞いをするのか、安心や安全をどのように捉えているのか。我々からみた「路上」と、「ベンガリー」の子どもたちにとっての「路上」の捉え方には違いがあるのではないかと。パキスタンに暮らす「ベンガリー」の子ども、特に女の子たちの安全保障の問題に非常に興味を持ち、研究者の道に進むことにしました。

パキスタンの無国籍の子どもの安全保障や支援と聞くと、遠い国の話のようにも感じられます。

SDGsが掲げる「誰一人取り残さない」という視点は、パキスタンのような開発途上国と呼ばれる地域を主対象とした目標のように感じられ、一見、日本に暮らす私たちと結びつきにくいかもしれません。しかし、災害や紛争が起これば、私たち誰もが取り残される側になる可能性もあるでしょう。私は「災害時子どものこころと居場所サポート」というNPO法人の代表として、子ども支援や子育て支援に携わる人々に災害時の子どもの居場所づくりの意義を啓発する研修を行う等、



カラチの「路上」で車の窓拭きをする女の子たち

災害時の子どもの安全な居場所づくりの重要性やその方法について社会的理解を促進する活動にも取り組んでいます。災害が起きると学校が休校になったり、避難所で生活することになったりして、子どもが安心・安全に感じられる居場所がなくなってしまいます。これは子どもにとって相当なストレスです。一方で保護者や身近な大人たちは家の片付けや生活再建に忙しく、なかなか子どものことを考える余裕がありません。そんなときに子どもたちが安心・安全に過ごせる居場所を避難所や地域に作れるように、全国で研修会を開催しています。

2022年8月には、文京区と東洋大学の企画で小学生を対象にワークショップを開催しました。災害時、避難所のどこにどのようなレイアウトで子ども用のスペースを作れば、自分たちは安心・安全だと感じられるのか、ということと一緒に考えながら実際にプランを描いてもらいました。この取り組みを通して、「自分たち（子ども）にも安心・安全な居場所を持つ権利がある。だからそういう居場所が欲しいと言っていいんだ」と感じてもらいたいです。



災害時の子どもにやさしい空間を考える研修会の様子

国内外の垣根を越えて、子どもの権利に主眼を置いた取り組みを

子どもの安全保障や居場所づくりで、今後私たちはどのようなことに取り組むべきだとお考えですか。

災害時の子どもの支援活動の多くは平時から準備できることです。普段から子どもたちの声に耳を傾ける仕組みがあれば、災害時にも子どもに寄り添った支援が可能になります。

海外の子どもと日本の子どもを分けて考えるのではなく、一人ひとりに寄り添い子どもの権利に主眼を置いた取り組みがより活発化していくことを期待しています。子どもの権利という視点についても、日本でまだまだ定着しているとは言えない状況です。しかし2016年に児童福祉法が改正され、子どもの権利条約の主要な理念が盛り込まれたことで、子どもの権利に対する理解が促進されてきています。さらに、今年6月に「こども家庭庁設置法案」と「こども基本法案」が成立し、2023年4月には「こども家庭庁」が設置されることが決まりました。こうした子どもの権利を守るための新たな動きに注目し、さまざまな角度から研究を推進したいと考えています。



小野 道子（おの みちこ）

東洋大学社会学部社会福祉学科准教授/博士（国際貢献）

専門分野：子どもの権利学、子どもの安全保障

研究キーワード：子どもの権利、災害子ども支援、南アジア地域の子ども保護

著書・論文等：「震災による父子家庭支援の現状と支援の課題」『教育と医学』62巻3号ほか

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課
MAIL: mlkoho@toyo.jp
取材お申し込みフォーム
<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

[https://www.toyo.ac.jp/sdgs/
SDGs_NewsLetter/](https://www.toyo.ac.jp/sdgs/SDGs_NewsLetter/)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals



想定外の災害にどう立ち向かうか これからの日本の防災に 求められるものとは？

地震、台風、集中豪雨…。自然の猛威に対して「一人の犠牲者も出さない」ようにするために行政から住民に発信される避難情報ですが、はたして今の在り方に問題はないのでしょうか。「避難情報廃止論」を唱える理工学部都市環境デザイン学科の及川康教授が、日本の防災の課題や展望について語ります。

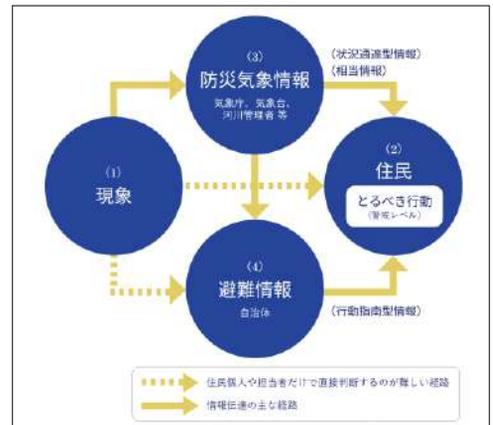
Summary

- ・日本の防災の問題点の1つとして住民の行政依存による主体性の弱体化が考えられる
- ・防災をめぐる行政と住民のコミュニケーションの在り方が、避難情報に別の価値を持たせる
- ・「諦観」の概念を持ち、行政と住民が一体となって災害に立ち向かっていくことが重要である

防災をめぐるコミュニケーションと「避難情報廃止論」

日本における防災の現状と課題について教えてください。

日本の場合、「防災は行政がやるもので、住民は守られる立場」という考え方が根深くあるのではないのでしょうか。住民は「自分たちは行政に守ってもらって当たり前で、災害は防災行政によりある程度制御できるもの」と考えがちで、行政もそれに全力で応えなければならぬと思いつめる、ゆがんだ構造となっているように見えます。その結果、住民の行政依存が進み、自分の命であるにもかかわらず自分で守るという主体性が弱体化してしまっていると思います。



「防災気象情報」「避難情報」「取るべき行動」の関係

確かに、住民側としては「行政から何らかの指示が出る」のは当たり前と考えるかもしれません。

行政と住民は防災に関する「コミュニケーション」が取れていないように感じます。コミュニケーションという言葉を使うと、情報が双方向に行き来するイメージを持てますが、そのように情報の発信側と受信側がはっきり区別されている状態を前提とすると、「避難情報は出したので」あるいは「避難情報が出なかったから」と責任の押し付け合いが起りやすく、これは防災上望ましくない状態です。私は、本来の「コミュニケーション」は双方の境界線をあいまいにしていくプロセスのことだと思います。発信する「私 (I)」と受信する「あなた (You)」ではなくて、「私たち (We)」で自然の猛威にどう立ち向かっていくか考えることが防災のあるべき姿と考えます。



近年、避難情報の遅れに対する行政の社会的責任を問う事例は後を絶ちません。しかし、行政と住民が「私たち (We)」という意識を持つことができれば、行政からの避難情報を待たずに自分の命を守るために主体的に行動し、より円滑かつ迅速な防災対策を実現できるのではないのでしょうか。

その考え方が先生の唱える「避難情報廃止論」につながるのですね。

避難情報というのは、気象庁が観測データに基づいて出す防災気象情報と違い、行政の担当者が自ら判断して出すものです。ですから、その判断に空振りや見逃し等の誤りがあれば、住民やメディアからの非難は避けられません。結果、担当者はできるだけ機械的に避難情報を出し続けることになり、それがシステムの形骸化を招きます。行政と住民とが完全に分断されてお互いに主体性を持ってなくなるくらいなら、避難情報などは廃止してしまった方がよいというのが「避難情報廃止論」です。

ただし、この主張は行政からの避難情報自体を不要と断じるものではなく、あくまで防災をめぐる社会やコミュニケーションの在り方について議論するための問題提起が主目的にあります。

行政と住民が連携して「私たち（We）」の関係を築くことができれば、「私たちみんなでこの地域から一人の犠牲者も出さない」という決意を共有する上で、行政からの避難情報は別の価値を持つのではないかと考えます。本来、災害は「起こらなくてよかった」というもので、「私たち（We）」の意識になれば住民も避難情報が外れることを祈るでしょう。行政も「見逃しよりは空振り」という意識で避難情報を発信できるようになるはずで、避難情報廃止論が問いかけるものは、単に避難情報を廃止すべきか否かといった表面的な議論だけではなく、住民と行政（自治体）との関係性についての認識の在り方を前向きに問いかけるものなのです。

防災における「諦観」の重要性

「私たち（We）」で立ち向かうという姿勢以外に、防災に対してどんな意識が必要でしょうか。

「諦観」の概念も必要だと思います。諦観には「本質をはっきり見極めること」と「諦めること」という両方の意味があります。自然が引き起こす災害では想定外が起こりうるし、当然マニュアル通りにはいかないこともあるでしょう。そこで、問題の本質をはっきり見極めて最善策を模索すると同時に、それが絶対にうまくいくという保証はない、と無謬性への固執を諦める覚悟を持つという意味なのです。例えば、2016年公開の映画『シン・ゴジラ』では、災害に対する諦観の重要性を見事に表現しています。この映画では、ゴジラという想定外の生物に対してマニュアル通りの防災では対応できないことに気づき、「うまくいかないかもしれないが、できることをやるしかない」と考え、過去の経験を最大限に利用して未知なるものへ対応しようとする人々が描かれています。こうした姿勢は、今後の日本の防災においても重要であると考えています。「絶対に大丈夫」ということはないからこそ、一人ひとりが誰かに任せきりにしたり、依存したりせず、主体的な姿勢で全力を尽くす。その中でお互いが一体となり、「私たち（We）」という共通意識で、あらゆる災害に立ち向かっていけるのではないかと思います。



及川 康（おいかわ やすし）

東洋大学理工学部都市環境デザイン学科教授／博士（工学）

2020年9月 日本災害情報学会 廣井賞（学術的功績分野）受賞

専門分野：災害社会工学、土木計画学／研究キーワード：災害情報、避難行動、意識調査分析

著書・論文等：避難情報廃止論とは何か [災害情報, No.19(1)]

「津波でんでんこ」の誤解と理解 [土木学会論文集F6（安全問題）, Vol.73, No.1]

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課
MAIL: mlkoho@toyo.jp
取材お申し込みフォーム
<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

[https://www.toyo.ac.jp/sdgs/
SDGs_NewsLetter/](https://www.toyo.ac.jp/sdgs/SDGs_NewsLetter/)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals

SDGs NewsLetter

Vol.13

東洋大学は“知の拠点”として
地球社会の未来へ貢献します

2022.11.16発行



2100年を見据えて最適な選択を カーボンニュートラル実現に向けた 環境経済学的アプローチ

2020年以降の気候変動問題に関する新たな国際枠組みとして採択されたパリ協定を踏まえ、日本においても「2050年カーボンニュートラル」の実現を目指し、温室効果ガス削減のための気候変動緩和策を推進しています。経済学部総合政策学科の松本健一准教授が、気候変動やその緩和策が経済活動に与える影響について解説します。

Summary

- ・カーボンニュートラル実現に向けた気候変動緩和策の進捗は世界的に芳しくなく、特に日本は遅れている
- ・気候変動緩和策は、長期的に見ると、経済にプラスの影響を与える可能性を秘めている
- ・カーボンプライシングやESG投資は、カーボンニュートラル実現に向けた有効な経済施策である

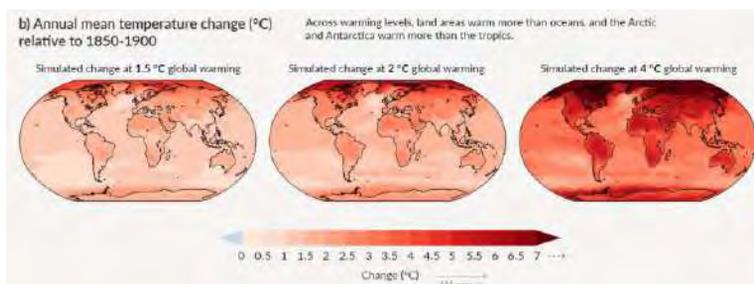
気候変動が経済に与える影響

気候変動緩和策の現状や経済に与える影響について教えてください。

パリ協定で掲げられた温室効果ガス排出削減目標を達成するため、各国は削減目標を定めて緩和策に取り組んでいますが、大きな成果を挙げている国はまだありません。他国と比べてリードしているのはヨーロッパで、気候変動問題の主因である炭素に価格を付けることで、排出者の行動を変容させる「カーボンプライシング」の導入が進んでいます。例えば、排出量に応じた課税を行ったり、企業ごとに排出量上限を定め、上限を超過する企業と下回る企業との間で排出量を取引したりといった仕組みづくりがこれにあたります。最近、日本でも導入の気運が高まってきましたが、政策的には非常に遅れています。



そもそも、気候変動に関する緩和策は短期的に見ると経済全体に対して良い影響を与えません。化石燃料の使用量を抑えるということは、経済活動の原動力であるエネルギーの消費量を減らすということです。エネルギー消費量が減れば、生産活動は縮小し、企業の収益も減少するため、必然的に経済が冷え込みます。しかし、長期的な観点に立つと話は変わります。2100年までの世界平均気温の上昇予測は1.5度程度から5度程度までいくつかのシナリオがありますが、緩和策により気候変動の上昇幅を抑えることができれば、気温上昇による労働生産性の低下などを防ぎ、経済全体に対する負の影響が小さくなるのです。また、企業単位では温室効果ガスの排出量削減に向けて投資を行い、技術開発を進めることで、環境面から経済活動が制限される時期が来たときに、取得した技術・特許で利益を得られる可能性があります。今のうちから先取りしてカーボンニュートラルを推進することにより、将来大きなメリットを享受することもできるでしょう。



左図：温暖化によって変化した全球平均気温ごとの各地域の気温上昇の程度を示している（色が濃いほどより温度が上昇することを示す）。陸地のほうが海よりも気温が上昇する傾向にある。

（出典：IPCC AR6 WG1 「Climate Change 2021: The Physical Science Basis」 Summary for Policymakers p.16）

インセンティブで企業を動かす

緩和策の経済活動に対する影響が懸念される中、企業の温室効果ガス削減を促すには、どのような方策があるのでしょうか。

例えば、カーボンプライシングによってガソリンやガソリン車の価格が上がれば、ガソリン車を購入していた消費者が電気自動車や燃料電池自動車などのゼロエミッション車への切り替えを検討し、市場を通して需要が調整されます。需要が高まれば企業もゼロエミッション車の販売に力を入れるようになり、生産拡大や設備投資が進みます。また、技術開発にかかる費用も炭素税の税収を充填することで軽減でき、社会全体でコストを負担できます。

カーボンニュートラル実現に向けた企業の活動を後押しする仕組みとしては、「ESG投資」も注目されています。ESG投資とは、Environment（環境）、Social（社会）、Governance（ガバナンス）という3要素に関する分析を重視して行う投資です。現在の社会は気候変動を緩和する方向に向かっており、企業もその潮流に合わせて企業活動を行うことで、長期的に安定した収益を得られます。3要素に注力する企業に対して投資を行うESG投資は、長期的なリターンが見込めるため、ESGを基準にして銘柄を選ぶ投資家も近年増えてきました。ESGを重視する企業がサプライチェーンを構築する際に、ESG対策を行わない企業とは取引しないということも考えられるでしょう。環境対策やガバナンスの徹底にはコストがかかりますが、ESG投資を介して資金調達を行うことが可能になれば、企業にとって大きなインセンティブとなります。

気候変動と経済活動との関係について多様な角度から研究されていますが、現在特に力を入れて取り組んでいるテーマは何でしょうか。

気候変動に伴う生物多様性損失を通じたグローバル経済の影響について研究を進めています。気候変動が複雑な生態系や農業・水産業における資源量・生産性とどのように関わり、世界経済全体へと波及していくのか。緩和策を実施した場合の経済的メリットなどと併せて考察を深めていきます。

カーボンプライシングもESG投資も、一見すると企業にしか関係のない制度のように思えます。しかし、企業が作った製品を購入し、消費するのはわれわれ最終消費者です。気候変動の緩和策が進む中で、消費財への価格転嫁が進み、値段が上がることもあるでしょう。そうした状況になった際に、何が環境にとって良いのかを考え、一人ひとりが最適だと思う選択をすることで、よりよい世界を実現できると考えています。



風力発電のような炭素を排出しない再生可能エネルギーへの転換は必須と言える（松本准教授撮影）



松本 健一（まつもと けんいち）

東洋大学経済学部総合政策学科准教授／博士（総合政策）

専門分野：環境経済学、エネルギー経済学、環境政策、エネルギー政策

研究キーワード：気候変動、持続可能な発展、経済分析

著書・論文等：Economic Instruments to Combat Climate Change in Asian Countries（共著）[Kluwer Law International]、Heat Stress, Labor Productivity, and Economic Impacts: Analysis of Climate Change

Impacts Using Two-way Coupled Modeling. [Environmental Research Communications]

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課
MAIL: mlkoho@toyo.jp
取材お申し込みフォーム
<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

[https://www.toyo.ac.jp/sdgs/
SDGs_NewsLetter/](https://www.toyo.ac.jp/sdgs/SDGs_NewsLetter/)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals

SDGs NewsLetter

Vol.14

東洋大学は“知の拠点”として
地球社会の未来へ貢献します

2022.12.1発行



プラスチックごみから 海を守るために 消費者の意識を変えるには？

2015年、鼻にプラスチック製ストローが刺さったウミガメを救助する動画が公開され、海洋プラスチックごみが全世界でこれまで以上に問題視されるようになりました。海洋プラスチックごみが抱える問題対応の観点から環境行動に対する消費者の受け止め方、賛意を高める方法を、総合情報学部総合情報学科の大塚佳臣教授がお話します。

Summary

- ・マイクロプラスチックは発がん性物質を吸着しやすく、食物連鎖を通して人体にも悪影響を及ぼす恐れがある
- ・海洋プラスチックごみを削減するためには、陸上での廃棄物の適切な管理が重要
- ・レジ袋有料化などの環境法を施行する際には、予想される定量的な効果を事前に示すべきではないか

有害物質を運ぶマイクロプラスチックごみ

海洋プラスチックごみの現状について教えてください。

海洋プラスチックごみというと、ポリ袋やスプーン、ストローなどを思い浮かべがちですが、今注目されているのは5mm以下の小さな「マイクロプラスチック」です。マイクロプラスチックは発がん性をもつPAHs（多環芳香族炭化水素）などの有害物質を吸着しやすい性質を持っています。PAHsはその大部分が化石燃料の燃焼時に発生し、化石燃料を使用する限りはなくすることが非常に困難な有害物質です。汚染されたマイクロプラスチックを海洋生物が誤食し、その体内に有害物質が蓄積されます。このように貝、魚、甲殻類などに蓄積された有害物質が、食物連鎖の過程で濃縮され、私たちの体内にも蓄積されると、発がんをはじめとした悪影響が生じる恐れがあります。

マイクロプラスチックの発生を抑制するためには、発生源を特定して対策を立てることが重要です。マイクロプラスチックは海のプラスチックごみが波にもまれて小さくなったものだと思われていますが、この細粒化は大部分が陸上で起こります。主に不法投棄やポイ捨てされたプラスチックごみが紫外線による劣化や物理的な摩耗により小さくなり、雨で流され川から海に運ばれていきます。また、化学繊維の衣類を洗濯したときの糸くずや、研磨剤に含まれるプラスチックビーズもマイクロプラスチックとして環境中に放出されます。自動車のタイヤの摩耗によって発生するマイクロプラスチックは、タイヤ片が自動車の排ガスに含まれる有害物質を吸着し、側溝から川や海へと流出するため特に問題視されています。しかし、プラスチック無しで現代の私たちの生活は成り立ちません。海洋プラスチックごみの削減における一番現実的な対策は、不法投棄をしないことや自治体が決めたりサイクルのルールに従うことなど、基本的な廃棄物管理の徹底です。日本は世界の国々と比べてプラスチック使用量が多いにもかかわらず、海洋プラスチックごみの排出量が少ないのは、廃棄物管理のための法整備が進んでいるからだと言われています。



マイクロプラスチックの一例。PAHsを吸着し、生体濃縮がはじまるきっかけとなる。(Oregon State University / CC BY-SA 2.0)

レジ袋有料化から分かる適切な情報の重要性

マイクロプラスチックが有害物質を吸着してしまうという問題については知りませんでした。

私は、海洋ごみやマイクロプラスチック問題対応の観点からの環境行動に対する消費者の受け止め方について環境心理・環境行動の視点から研究をしているのですが、マイクロプラスチックを含む海洋プラスチックごみについての情報が消費者に正しく伝わっていないと感じています。例えば、プラスチックごみを削減するためのアプローチとして記憶に新しいのが、2020年7月にスタートしたレジ袋の有料化制度。レジ袋の使用を減らすことでプラスチックごみの発生を抑制しようとする試みです。導入から4か月ほどたった時期にレジ袋有料化に対して消費者はどのような意識を持っているのか、全国の20歳以上を対象とし、独自でアンケート調査を行いました。その結果、有料化の賛否については賛成・おおむね賛成が64%、反対・おおむね反対が36%でした。4割近くの人が賛成していないと回答していますが、その理由として「レジ袋の有料化が本当に資源使用量およびプラスチックごみの削減に結びつくのか？」という実効性に対する疑問を挙げています。誰もが納得した形で制度を推進していくには、賛意を得るための工夫が必要と言えます。

消費者の賛意を高めるためには具体的にはどのような工夫が求められるのでしょうか。

情報を適切に提供すれば、消費者はより適切に行動します。レジ袋の有料化によってプラスチックの過剰な使用量が確実に減り、環境保護に効果があるというエビデンスを情報として示すことが有料化に対する賛意を高めるために求められます。定量的な情報の不足は不信感を招き、感情的な反対論者をうむだけでなく、規範を錦の御旗にした感情的な賛成論者をうむことにもなります。感情的な賛成者・反対者の発生によって集団の分断が進むと、合意形成が困難になります。マイクロプラスチックの問題にしてもレジ袋有料化制度にしても、環境問題に関する規範に訴えるだけでなく、予想される定量的な効果を示すことが合意形成を図る上で不可欠です。国や企業が積極的に情報発信をする。そして、消費者はその情報から適切に判断して行動する。そのためには発信者側がメリットとデメリットを説明し、消費者も両方の情報入手して吟味する姿勢を持つことが重要なのです。今後も適切な情報提供に基づき、私たち消費者が情報を判断しながらリユース・リデュース・リサイクルなどできることから実行すれば、海洋プラスチック問題は解決の方向に向かうのではないかと期待しています。



大塚 佳臣 (おおつか よしおみ)

東洋大学総合情報学部総合情報学科教授／博士（工学）／環境科学会、日本水環境学会理事

専門分野：都市環境工学／都市環境システム／環境行動心理

研究キーワード：環境工学／環境心理学／環境社会学

著書・論文等：マイクロプラスチック汚染研究の現状と課題[水環境学会誌 Vol. 44, No.2]、海洋プラスチック問題の情報提供がレジ袋・プラスチックストローの提供廃止賛否意識に与える影響評価[土木学会論文集G（環境） Vol.76, No.6]

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課
MAIL: mlkoho@toyo.jp
取材お申し込みフォーム
<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

[https://www.toyo.ac.jp/sdgs/
SDGs_NewsLetter/](https://www.toyo.ac.jp/sdgs/SDGs_NewsLetter/)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals



東洋大学は“知の拠点”として
地球社会の未来へ貢献します

2022.12.23発行



食品ロス問題の本質とは？ 食料経済学から考える 解決への道筋

世界的に食料不足や飢餓が深刻化し、日本でも子どもの貧困や栄養不足が問題視される中、食品ロス削減に向けた動きが活発化しています。そこで表層的なアプローチにとどまらず、社会全体の抜本的な方向転換を実現するにはどうすればいいのでしょうか。「食料経済学」を専門とする食環境科学部食環境科学科の児玉剛史准教授がその現状や解決に向けた道筋について解説します。

Summary

- ・消費者は日々の買い物を通して、自覚なく大量生産・大量廃棄のサイクルに加担している
- ・食品ロスの大幅な削減には、消費者が正しい情報に基づいて選択・行動し、企業を動かすことが重要
- ・環境負荷の少ない消費のために、食品の生産過程で生じる温室効果ガスにも目を向けるべき

消費者が気付きにくい「食品ロス」のサイクル

食料不足や日本における食品ロスの現状について教えてください。

世界の飢餓人口は8億人超に及びますが、実は食べ物の総量自体は不足していません。穀物だけを見ても、世界中の人々が十分に食べていける量が生産されています。しかし、「分配」がうまく機能していないため、国や個人によって必要な食料が手に入らない状況が生じているのです。なかには自分で作っているのに食べることができない人もいて、単純に解決できない問題です。こうした食の不均衡の是正を目指す上で、食品ロスの削減は重要です。

そもそも食品ロスとは、全ての食品廃棄物のうち「食べられるにもかかわらず廃棄されたもの」を指し、農林水産省によると2020年度の国内の推計値は約522万トン。世界の国々と比較しても、日本は多い方だと言われています。



日本で相当量の食品ロスが発生している原因はどこにあるのでしょうか。

大手スーパーやチェーン店のなかには、安く提供するために大量に仕入れ、その結果大量に売れ残りを廃棄してしまうこともあります。しかし、消費者がこの事実を認識せずに買い物を続けることがさらなる店舗数や規模拡大を促すことになり、結果として廃棄の増加につながってしまうのです。急速な経済発展の裏でこのサイクルが加速したことが、日本における食品ロスの要因の一つだと考えています。消費者からすると、自分の目の前で食品が廃棄されているわけではありません。だからこそ、気付きにくい形で進行し、大量生産・大量廃棄を前提とした社会が構築されてしまったのです。

食品ロス対策の一環として、廃棄する食品を肥料や飼料にリサイクルする活動も広がっています。しかし、国際連合食糧農業機関（FAO）が定める食品ロスの定義には「食用目的でつくられた食料を食用以外に利用する」ことも含まれ、肥料化・飼料化も有効利用ではありますが、食品ロスだと見なされます。厳しい基準ですが、あくまで食べられる食品を食べられない人に届けることが目的ですし、そもそも食品の製造過程、リサイクルする過程でもエネルギーを使っているため、食品のリサイクルを過度に推進してしまうと、「廃棄を減らす」という本来の目的から外れるのも事実です。

環境にやさしい消費を促す「情報発信」を

構造的な問題が大きい中で、食品ロス削減を実現するのは容易ではないように思えます。

それは、やはり社会が経済の論理で動いているからです。目指すべき食品ロスのない「正しい世界」とは別に、現実には「経済の世界」があります。「経済の世界」では経済合理性が最優先なので、利益を最大化するには食品ロスが一定量出ても仕方がないと判断されます。企業が「利益が出れば正義」という方針を貫く限り、「正しい世界」に近づくのは難しいでしょう。この状況を打開するには、消費者自身が正確な情報に基づいて選択・行動し、「経済の世界」の物差しで動く企業を変えていく必要があります。例えば、消費者が各スーパーの食品廃棄量を知った上で店舗を選ぶようになれば、企業も廃棄減に取り組まざるをえなくなります。一人ひとりがエビデンスに基づく意思決定を行い、行動で示すことで、抜本的・構造的な改革につなげていくのです。もちろん、そのためには企業側が積極的に情報を開示し、我々専門家が納得性のある情報を正しく発信しなければなりません。

専門家として消費者に正しい情報を発信するために、どのような研究に取り組んでおられますか。

現在進めているのは、「肉の生産に伴う温室効果ガスの排出量」の周知による消費行動の変化に関する研究です。見過ごされがちですが、食品の生産や加工、流通過程では多くの化石燃料が使われ、温室効果ガスが大量に排出されています。例えば、豚肉1kgあたり7.8kgのCO₂が発生し、個人の年間消費量で換算すると、一人につき約100kgのCO₂を排出している計算になります。「豚肉を食べる」だけでこれだけ環境に負荷を与え、かつ食べずに廃棄すると、その分資源やエネルギーが無駄になってしまうのです。その一方でイノシシ肉などの天然のジビエ、天然の海産物の場合は、餌の運搬や管理に燃料は不要で、生産におけるCO₂の発生量は限りなくゼロに近付きます。こうした情報をうまく提示すれば、「たまには豚肉を控えて、ジビエを選ぼう」という人も増えるかもしれません。今後、消費者を対象にアンケート調査を行い、「肉の種類ごとの温室効果ガス排出量を知ることによって選ぶ食材が変わる」という回答結果が多数得られれば、研究成果として社会に発信したいと考えています。

消費者としては、このように食材の生産・加工・流通時点でどれほどCO₂が排出されているかを理解することで、特定の食材をたまには控える、環境に配慮した食品を選んで購入するなど、消費行動の選択肢を増やすことができ、地球にやさしい消費を促進できるのではないかと考えています。企業は「情報開示」を、専門家は「情報発信」を。そして、個々の消費者が社会をつくる消費者としての意識で、少しの我慢と「適切な選択」をすることで、食品ロスのない「正しい世界」への道は開けると思っています。



児玉 剛史 (こだま よしふみ)

東洋大学食環境科学部食環境科学科准教授／博士（農学）

専門分野：食料経済学

研究キーワード：食料、栄養、経済学

著書・論文等：栄養素から見た野菜の生産性の季節変動 [農業経営研究]

日本型食生活の形成と定着に関する共和分析 [農業経済研究]

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課
MAIL: mlkoho@toyo.jp
取材お申し込みフォーム
<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

[https://www.toyo.ac.jp/sdgs/
SDGs_NewsLetter/](https://www.toyo.ac.jp/sdgs/SDGs_NewsLetter/)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals



SDGs NewsLetter

Vol.16

東洋大学は“知の拠点”として
地球社会の未来へ貢献します

2023.1.18発行



今ある建物や素材に価値を見いだす アップサイクルを通じて、 日本の建築の未来を考える

今あるものに価値を見だし再利用する「アップサイクル」に注目が集まっており、建築業界においても「スクラップアンドビルド」を見直す動きが徐々に広がっています。「アップサイクル」の重要性や建築業界における浸透具合について、建築家でライフデザイン学部人間環境デザイン学科教授の内田祥士教授がお話しします。

Summary

- ・アップサイクルとは、廃棄されるものに価値を見だし、付加価値を付けて新しいものに生まれ変わらせること。
- ・本来の意味における「営繕」は、建築業界や社会の持続可能性の向上に寄与する。
- ・現在の美意識や価値観を変えることも、SDGsの達成に向けた第一歩となる。

廃棄される机椅子の素材に着目。

貴重な「国産ブナ材」を用いた椅子の制作

学内で大量廃棄された講義用の机や椅子を、より座り心地のよい椅子に再生する「アップサイクル」に取り組んでいるそうですね。

大学校舎の建て替えて跳ね上げ式の机椅子が大量に廃棄されると聞き、その背板と座板を譲り受けて、ダイニングチェアに「アップサイクル」しました。アップサイクルとは、本来は捨てられるはずの製品の素材を生かし、新たな価値を与えて再生する創造的再利用のことです。家具メーカーや木工関連の工房の協力のもと、試行錯誤の末に完成させた作品「リサイクルチェア-座り心地に御記憶ありませんか」は、「木材を使った家具のデザインコンペ2016」でようやく入選を果たしました。

跳ね上げ式の机椅子と言えば、大学の講義室や高校の視聴覚教室で広く使われており、その座り心地に記憶がある方も多いのではないのでしょうか。元々跳ね上げ式の机椅子は、建築家・大江宏氏が1950年代に大学校舎で使用するためにデザインし、その後全国の大学に普及したものです。実は、この机椅子は戦後最初期の「曲げベニヤ」を使用した製品です。東洋大学（川越キャンパス内）の旧校舎にも1961年に同じタイプの椅子が設置され、長年使われていました。写真のリサイクルチェアを制作した折に、この曲げベニヤを洗浄したところ、高度経済成長期の大量消費が原因で大きく減少した「国産のブナ材」が使用されていることがわかりました。また、その後の高度経済成長期、大学、特に私立大学が、マスプロ教育に傾倒した時代に制作された机椅子には、東南アジア産の南洋材が使用されていましたが、いずれも現在では手に入りにくい貴重な木材です。

近年、跳ね上げ式の机椅子は、建て替えや老朽化による交換のタイミングで大量に廃棄されています。東洋大学でも状況は同じです。記憶に残らないほど身近な製品ですが、現代においては貴重な素材です。そこで、その廃材を利用して全く違った椅子を創りあげた次第です。



「座り心地に御記憶ありませんか」

(東洋大学研究シーズ集)
<https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/research/industry-government/ciit/seeds/2017-2018/113213.ashx>

「新しいものが美しい」という既存の価値観を変える

先生は建築がご専門ですが、現代の建築物においてもアップサイクルが進められているのでしょうか。

戦後日本では、長らく「あるものを直して使うより、新しくつくる方がよい」という価値観が広がり、アップサイクルの機運はなかなか高まりませんでした。その背景には、高度経済成長期に生まれた「建て替えは常に品質の向上につながる」という考え方がありました。

「営繕」という言葉をご存じでしょうか。現在は「修理」の意味で用いられることが多いですが、奈良時代に中国から伝わった専門用語で、本来の意味は「营造と修繕」のふたつが統合された言葉です。今日のように新築と修理を区別する考え方は、近代以前において余り明確に存在しなかったと言うことです。「新築・建て替え」だけでなく、創造行為を含む「営繕」の考え方を現代建築に取り入れることは、建築業界、ひいては社会の持続可能性の向上に寄与するはずで

現在、日本中の学校には、耐震改修が行われた後者が多数存在します。多くの子ども達が「耐震補強を施された校舎」で教育を受けています。鉄骨をVの字に取り付けた補強は、一見すると見栄えが良くない建物に見えるかもしれませんが、建て替えよりも迅速かつ現実的な対策です。耐震補強された校舎で過ごした若者たちにとって、V字の鉄骨は見慣れた存在で、そのような姿を見慣れた世代の価値観には「新しいものが美しい」という従来の価値観とは異なる感性が育まれている可能性がある——私はそのように考えています。

戦後、日本は工業化を糧として大量生産・大量消費によって経済成長を遂げてきました。しかし、少子高齢化が進み、成長が緩やかになった現代においては、「新しいものを次々に生み出すことこそ、豊かである」という考え方を見直す必要があります。アップサイクルという考え方は、従来の価値観や手法に対する問題提起を含んでいます。これからはむしろ、既存建物を修理のしやすさや保全性の高さで選別し、それをいかにして維持していくかを考えてこそ、持続可能な社会への道が現実味を帯び、建築業界や私たちのこれからの生活や社会に、新たな価値を与えることができるようになるのではないのでしょうか。多くの人々がそのように考えれば、「地獄の営繕」を「希望の営繕」に変えることができるはずで



素材となった机椅子（イメージ）



内田 祥士（うちだ よしお）

東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科教授／博士（工学）

専門分野：建築学、建築史・意匠・建築設計論

研究キーワード：建築歴史・意匠、建築設計論、営繕

著書・論文等：東照宮の近代－都市としての陽明門 [ベリカン社]、
営繕論－希望の建設・地獄の営繕 [NTT出版]

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課

MAIL: mlkoho@toyo.jp

取材お申し込みフォーム

<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

<https://www.toyo.ac.jp/sdgs/>

SDGs_NewsLetter/



Toyo University supports the Sustainable Development Goals



SDGs NewsLetter

Vol.17

東洋大学は“知の拠点”として
地球社会の未来へ貢献します

2023.1.31発行



実践による課題解決力の養成や 知識更新のための生涯教育が SDGs達成の一助となる

新学習指導要領にはじめて前文が設けられ、「持続可能な社会の創り手」「社会に開かれた教育課程」など、SDGsやESD（持続可能な開発のための教育）に関する内容が記述されました。SDGs達成の担い手育成に向けた、教育現場に対する期待の表れと言えます。今回は、情報連携学部情報連携学科にて「持続可能社会と情報マネジメント」を担当する平松あい准教授がESDの成り立ちや現状についてお話しします。

Summary

- ・ ESDは開発教育・環境（公害）教育を発端に、「環境」「経済」「社会」へと領域を拡大し統合化
- ・ 子どもの発達段階に応じた教育的アプローチで、実践しながら課題解決力を養成
- ・ 社会における常識や規範の変容に伴い、自らの知識を更新することが重要

環境・経済・社会の3分野から成るSDGsとESDとの親和性

ESD（持続可能な開発のための教育）の成り立ちについて教えてください。

日本の環境教育は公害対策に端を発します。1960年代、高度経済成長期にあった日本で工業化が進んだ結果、引き起こされたのが大気汚染や水質汚濁などの公害です。当時、欧州でも同様の問題が生じ、島国の日本とは異なり越境汚染が拡大したため、世界的にも警鐘が鳴らされました。1972年には「国連人間環境会議」が開催され、環境の保全・向上を目指す機運が高まります。1980年代に入ると、日本は都市化の一途を辿り、大量生産・大量消費・大量廃棄の時代が到来しました。それまでの公害問題は企業の経済活動に起因し、産業が市民の生活を阻害するという構図でしたが、都市化に伴い、今度は排気ガスや生活排水、家庭ごみなど人々の日常的な営み自体が汚染源となり、今日の環境問題へとつながってきました。



現代の環境教育に通じる基本的な枠組みとなったのが、1975年に作成された「ベオグラード憲章」です。当時は、経済成長とその裏側で生じる環境問題の解決について、どちらを優先するのかで活発な議論が交わされました。そして、環境破壊が年々深刻化する中で出された結論が、双方は対立ではなく補完的で共存関係にあるとする「持続可能な開発」という考え方なのです。

SDGsは、人類の課題を「環境」「経済」「社会」という3つの側面から捉えています。環境教育と聞くと自然環境保全を連想しがちですが、実際は人権侵害や雇用平等などの社会問題にも深く関わっており、さらに大きな枠組みで人々の消費や生活のあり方を考えるという方向に領域を拡大させてきました。一連のプロセスを経て提唱されたのが「ESD」であり、その後策定されたSDGsとは極めて親和性が高い概念と言えます。

実際の教育現場ではどのような取り組みが行われているのでしょうか。

新学習指導要領に盛り込まれた「主体的で対話的な深い学び」に則り、アクティブラーニングの視点から授業が展開されるようになってきています。初等中等教育、特に私立の教育機関では、論理的思考力や課題解決力を養成するSTEAM教育※に注力している学校が多く存在します。「SDGs教育」と銘打って個別の授業を設けるよりも、そういった授業にSDGsの考え方を取り入れたプランを組むことを推奨します。あらゆるテーマを通して、実践しながら解決策を見出し、SDGsへの理解を深めることに意義があると考えます。

※STEAM教育…STEM (Science, Technology, Engineering, Mathematics) に加え、芸術や政治経済など幅広い分野でA (Art) を定義し、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていくための教科等横断的な学習 (出典：文部科学省)

年齢が幼いとSDGsの概念を唐突に教えても本質的な理解は得られません。低学年など地域との関わりを通してアクションプランを実践し、学年があがるにつれてSDGsが策定された歴史的背景や重要性を学ぶなど、発達段階に応じたアプローチが必要です。小さな子どもには、ソーラーのおもちゃを通じてエネルギーを感覚的に学ぶなど、子どもの心に残るやり方で始めてもよいでしょう。また、環境意識を高めるためには、「ものを大切に作る」など、家庭全体での日常的な取り組みが重要になります。



ソーラーおもちゃを使った授業の様子

常識や規範が変容する中で、生涯学び続けることの大切さ

ESDの推進、ひいてはSDGs達成に向けて今後何が求められるのでしょうか。

環境問題をはじめとした規模が大きく、公共性の高いテーマで社会的合意を得るには、「話し合い」が不可欠です。特定の意見のみを抽出、多数決で採択といった方法では根源的な解決は望めません。多様な人々がお互いの立場を認めて理解し合うとともに、解決策を見出すために創造的な議論を重ねることが、社会的合意形成の理想的なプロセスと言えます。近年では、AIを使った合意形成プラットフォームも開発されるなど、AIが分析、分類することで多くの意見を整理することが容易になってきています。日本ではサイレントマジョリティーが多いと言われますが、より手軽に意見を出せるようになれば、新たな解決策が見つかる可能性もあります。

また、ESDでは体験すること、参加することが重要です。VRやメタバースを活用できれば、地球上のどこかで起きた問題も、当事者として現場を見るように理解することが可能になるかもしれません。そうなれば、より他者や地球とのかわりを自分事として実感できるでしょう。

そして、注意しなければならないのは、「常識や規範は変容する」という事実です。特に環境分野に関しては認識の変遷が顕著です。例えばフロンガスは、1930年代には「夢の化学物質」と呼ばれていましたが、後にオゾン層破壊の原因になると判明し、規制されました。世界的に普及した殺虫剤、農薬のDDTも然りで、開発者は当時ノーベル生理学・医学賞を受賞しましたが、その有害性から現在は使用できません。私たちが学んできたことはもちろん、子どもたちが今まさに学んでいることさえ、未来永劫に正しいとは限らないのです。

重要なのは、自らの知識を更新していくための「生涯教育」です。SDG4「すべての人々に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」は、開発途上国における就学率や識字率の向上だけを指しているのではなく、先進国を含む私たちすべての人間を対象としています。私が所属する情報連携学科でも社会人向けにリカレント教育を推進しており、学びの場を広く提供しています。定着した固定観念や先入観を、時代に合わせて新たな知識を学び続ける中で適宜更新していく。寿命が延び、健康で長く活躍できるアクティブシニアも今後増えていくと思われますし、生涯教育のさらなる普及は、SDGs達成にも大きく寄与することでしょう。



平松 あい (ひらまつ あい)

東洋大学情報連携学部情報連携学科准教授/博士 (工学)

専門分野：環境システム

研究キーワード：環境教育、持続可能性 (Sustainability)

クオリティ・オブ・ライフ (QOL)

著書・論文等：家庭科へのLCA的思考法導入に向けた教科書のテキスト分析 (共著)

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課

MAIL: mlkoho@toyo.jp

取材お申し込みフォーム

<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

<https://www.toyo.ac.jp/sdgs/>

[SDGs_NewsLetter/](https://www.toyo.ac.jp/sdgs/SDGs_NewsLetter/)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals

SDGs NewsLetter

Vol.18

東洋大学は“知の拠点”として
地球社会の未来へ貢献します

2022.02.15発行



人口減少と東京一極集中、 地方が抱える課題を解決し 多様で豊かな国づくりの実現へ

2014年に、地方各地の特色を生かして自律的で持続的な社会づくりを目指す政策「地方創生」が掲げられ、今日まで多岐にわたる取り組みが実施されてきました。国際学部国際地域学科の沼尾波子教授が、その現状や現在進められている取り組み事例についてお話しします。

Summary

- ・人口減少は地方だけの問題でなく、今後東京圏でも人材不足という深刻な課題を生む
- ・人口減少に歯止めをかけるべく、地域の特色を生かした方策で成果を上げている事例がある
- ・都市と農村それぞれの強みを生かし、連携して持続可能な社会経済の構築を目指す創造的な取り組みが必要

日本の豊かさとは、 地域に息づく風土・文化の多様性



人口減少と東京一極集中の問題点について教えてください。

日本列島の地図とヨーロッパの地図を重ねてみると、意外にも国土が広く、北欧のフィンランドからドイツ、フランス、南欧スペインにまで広がります。日本では、それぞれの地域が四季折々の気候・風土をもち、各地で様々な文化が育まれてきました。その「多様性」こそが、この国の「豊かさ」につながっていくと考えます。

今日、人口減少と東京一極集中により、地方の過疎化が進み、存続が危ぶまれる集落もあります。東京・名古屋・大阪の三大都市圏には全人口の約5割が居住するのに対し、人口1万人未満の農山漁村に住むのは全人口の2%程度。日本の国土に占める農山漁村の面積は約25%ですので、言わば国土の4分の1をたった2%の人々が担っている状況です。人材も財源も不足する中で、国土の保全と地域の暮らしをどのように維持するかが問われています。

他方で、東京圏の高齢化も深刻です。東京都の試算では、2030年には65歳以上の高齢者が都民の3割を超える見込みであり、医療・介護サービス需要が急激に高まると予想されています。人手不足を補うべく、地方から医療や介護人材を集めれば、さらなる人口の東京一極集中を引き起こすことにもつながります。

豊かな社会の実現に向けて、この国のそれぞれの地域で人材や資源をどう生かし、どう育てるのか。私たちは考えるべき時に来ていると言えるでしょう。

1970年代末に、日本では「田園都市国家構想」が出され、都市と農村、文化と産業の調和のとれた再結合を通じた豊かな社会の創造が模索されました。当時の議論はSDGsの理念と親和性のあるものです。一方、今日の「デジタル田園都市国家構想」はデジタル技術の推進に関心が向く傾向にあります。都市と農村の連携や、文化と産業の調和という視点に立った、創造性の高い地域振興を考えることが大切だと思います。

官民一体となって取り組む「地域再生」

人口減少や東京一極集中に対して、自治体はどのような対策を講じているのでしょうか。

例えば自然資源や景観の価値を磨き、その存続に向けた産業振興を図る取り組みがあります。吉野杉の産地で知られる川上村（奈良県）は、地域の自然・風土・文化を保全・継承していくことを「川上宣言」として掲げました。地域おこし協力隊を募集したり、アーティストの移住を積極的に受け入れたりすることで若者を呼び込み、地域の

担い手を育てています。東川町（北海道）は、写真の町を掲げ、自然環境の美しさと併せて、機能性を備えた美しい「デザイン」を柱に据えた町づくりを進めています。建築家の隈研吾氏がこの町にサテライトオフィスを構えることを決め、大きな注目も集めています。

人々の温かい繋がりづくりから人を呼ぶ地域もあります。松山市（愛媛県）の中島という島では、地元関係者を中心としたNPO法人が若者の移住・定住の支援をしており、移住者が地域の困りごとの解決を仕事として生活もできるような、仕事と暮らしが描ける「場」と「関係」を構築する取り組みを進めています。



北海道東川町の風景

私は「地域再生大賞※」の選考委員長を務めており、全国各地で地域づくりに取り組む方々とお会いしますが、地域の今を知り、地域にあるものを大切にしたい各地の地域再生への取り組みには、たびたび圧倒されています。

都市にも農村にもそれぞれの魅力と特性があり、その両方がなくては人々の暮らしは維持できません。近年、災害対策やエネルギー政策の視点から、都市と農村が連携し、課題解決を図る手法も広がりつつあります。例えば世田谷区（東京都）では、川場村（群馬県）や十日町市（新潟県）等と連携して、地方にあるバイオマス発電施設が生み出す再生可能エネルギーを区内で使用することにより、CO2排出量の削減を図っています。また、大田区（東京都）は、区内を流れる多摩川の最上流に位置する丹波山村（山梨県）と連携しています。大田区からは丹波山村の児童に都心部ならではの学びの場を提供し、丹波山村からは首都圏災害時の支援を行うなど、双方の強みを生かした関係が構築されています。都市部と農山漁村とが互いの強みと弱みを理解し、交流を深めることで、それぞれが持つリソースを最大限に活用することができ、持続可能な社会の構築につながるのではないのでしょうか。

豊かな自然環境とそれを活かす技術、そこで育まれた多様な文化こそが日本の強みであり、かけがえのない魅力です。東京一極集中や限界集落の消滅はやむを得ないという意見もありますが、私は置かれた現状と向き合い、多様性を守るべきと考えます。しかし、農山漁村に安易に経済的支援を行うだけでは持続可能な方法とは言えません。豊かな自然を守りながら、都市が農村の自立をサポートできるよう技術やアイデア、人的資源を提供し、連携することで共存の道を模索する。その一步一步が日本の豊かさを守るための礎になるでしょう。

※ 共同通信社と地方新聞46社により、地域活性化に取り組む優れた団体や活動を表彰している。
2010年度に始まり、2022年度は第13回。 (<https://chiikisaisei.jp/>)



沼尾 波子（ぬまお なみこ）

東洋大学国際学部国際地域学科教授／修士（経済学）

専門分野：財政学、地方財政論

研究キーワード：地方財政、地域づくり、対人社会サービス

著書・論文等：交響する都市と農山村：対流型社会が生まれる [農山漁村文化協会]、
地方財政を学ぶ [有斐閣]

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課

MAIL: mlkoho@toyo.jp

取材お申し込みフォーム

<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

<https://www.toyo.ac.jp/sdgs/>

SDGs_NewsLetter/



Toyo University supports the Sustainable Development Goals

SDGs NewsLetter

Vol.19

東洋大学は“知の拠点”として
地球社会の未来へ貢献します

2023.03.01発行

Summary

- ・日本では無償労働が女性に偏っており、有償労働における女性と男性の働き方にも影響を与えている
- ・男女間格差の解消に向けて、時間外労働の厳格な規制やハラスメントの是正が求められる
- ・企業が公表する「女性の労働に関わる情報」に個人単位で関心を持ち、活用することが重要



無償労働の偏りや賃金格差など、 女性が活躍できる社会に向けて 解決すべきジェンダー問題

私たち一人ひとりの事情に応じた多様な働き方を選択できる社会の実現に向けて、「働き方改革関連法」が施行されて4年。その中で女性の働き方はどのように変化したのでしょうか。労働社会学やジェンダー論を専門とする社会学部社会学科の村尾祐美子准教授が、日本の労働におけるジェンダー平等実現に向けた課題と展望についてお話しします。

労働における男女間格差の現状と原因

現在、日本が抱えている労働面のジェンダー問題について教えてください。

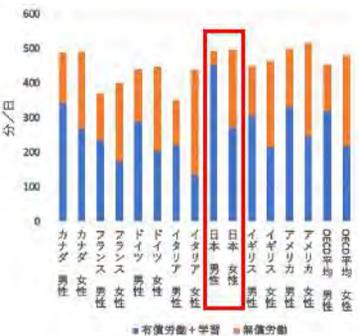
深刻な問題として挙げられるのが、無償労働が女性に偏っているという点です。授業の中で「労働とは何か?」と尋ねると、大半の学生が金銭的な報酬を伴うものだとして認識しています。しかし、国際的な基準では有償労働だけではなく、家事や育児、介護といった無償労働も、一国の経済を構成する重要な「労働」と位置づけられています。内閣府による無償労働の評価では、無償労働の約8割を女性が占めており、その貨幣価値は日本のGDP（国内総生産）の20%前後^{※1}に相当するという結果も出ているほどです。男女間格差が生じる一因としては、企業が「男性社員は無償労働を担わない」という前提で基幹的な従業員の働き方を想定していることがあげられます。そのしわ寄せが女性に対する過度な負担を引き起こしているのです。

一連の偏りは、有償労働における女性の働き方にも大きな影響を与えます。日本のパートタイマーや契約社員といった有期雇用労働者は圧倒的に女性の方が多く、さらに、管理職に占める女性の割合も約12%^{※2}と非常に低いため、男女間の賃金格差も2020年のOECD平均が12.0なのに対し、日本は22.5と大きくなっています。

「男性は仕事、女性は家庭」という考え方が無意識下に作用し、有償労働と無償労働を男女でバランスよく担うのが困難な状況にあります。性別役割分業を前提とした社会の在り方が問題の根源になっていると言えるでしょう。

なぜジェンダー問題への関心が近年高まっているのでしょうか。

理由の一つに、「日本の停滞感」が挙げられます。他の先進国が経済成長と共に賃金も上昇する^{※3}一方で、日本は経済成長が鈍化しています。そのため、女性が直面しているジェンダー問題を解決し、女性をもっと能力を発揮できるようにすることで現状を打破しようとする考え方が広がっているのです。また、海外の統計情報や賃金格差に関するデータを簡単に取得できるようになったことも大きく影響しています。海外の実情を知った各人が問題意識を持って情報発信を行う中で、より身近な課題として広く認知されるようになりました。しかし、「あの国はこうした対策を講じている」と表面的な部分だけを取り入れることはリスクがあります。国・地域によって、社会体制が構築されてきた過程は異なっており、ジェンダー平等を目指すと言っても、「他国と同じやり方をしていれば十分」ということはありません。過去の慣習やこれまで積み重ねてきた議論の問題点にも目を向けながら、日本社会に適した対策を練る必要があります。



出典: OECD, Starの2023年2月27日付けデータから筆者作成

▲G7諸国における15-64歳男女の1日あたりの有償・無償労働時間

女性が活躍する社会の実現に向けて

男女間格差の解消にはどのような施策が必要なのでしょうか。

男女間における有償労働と無償労働の配分を是正する手段として、時間外労働の厳格な規制があります。例えば、月45時間を超える時間外労働を完全に禁止すれば、男性が無償労働を担うことができ、格差縮小の効果が期待できるでしょう。また、非正規雇用者など弱い立場にある人も含め、働く人を暴力やハラスメントから守る仕組みを強化・拡大することも肝要です。全ての労働者に共通する問題ですが、特に非正規雇用者には女性の割合が高く、「訴えると仕事を失うのではないか」といった不安から声を上げづらい現状があります。問題解決に向けた法整備や環境づくりはまだ不十分であり、抜本的な改善が求められます。

そして、賃金格差は正への取り組みも喫緊の課題です。正規雇用と非正規雇用では働き方に違いはありますが、時給換算した賃金差がそのような違いの程度に見合った適切なものかどうか、賃金の決め方の妥当性に関心を向けることからすべては始まります。また、業務の負担や責任の評価にあたって、バイアスを正していく必要があります。たとえば、女性は対人サービス業など精神的な負担がかかりやすい仕事に就くことが多いですが、肉体的な負担の大きい仕事と比べて、そうした負担は過小評価され、金銭的に報われにくい傾向があります。ジェンダーの観点を踏まえて賃金の決め方や、評価基準を見直すことが、賃金格差の是正につながるでしょう。

ジェンダー問題に対して個人の観点から取り組むべきことがあれば教えてください。

企業が公表する「情報」に目を向け、活用することが重要です。2022年7月に、常時雇用労働者301人以上の企業に対して、男女間賃金格差の開示が義務付けられました。従前から女性活躍推進法に基づく行動計画の策定や届出の仕組みはできており、厚生労働省の「女性の活躍推進企業データベース」で採用や昇進、勤務時間、有給取得率など、女性の労働に関わるさまざまな情報が比較可能な形で公表されています。誰でも容易にアクセスでき、女性活躍推進の取り組みに積極的な企業を把握することが可能です。個人単位では就職活動・転職活動の企業研究に活用したり、企業単位では先行企業の行動計画を自社の参考にしたりと、幅広い用途が考えられます。一連の情報が可視化され、不特定多数の目に触れるプロセス自体が、ジェンダー平等の実現に向けて社会を変えるための役割を担っています。ぜひ皆さんもこのプロセスに参加してみてください。

※1 家事活動等の評価及び関連翻訳の公表について（内閣府）

https://www.esri.cao.go.jp/jp/sna/sonota/satellite/roudou/contents/kajikatsudou_181213.html

※2 令和3年度雇用均等基本調査（厚生労働省）

※3 OECD Average annual wages https://stats.oecd.org/index.aspx?DataSetCode=AV_AN_WAGE



村尾 祐美子（むらお ゆみこ）

東洋大学社会学部社会学科准教授／博士（社会科学）

専門分野：労働社会学、ジェンダー論、社会階層論

研究キーワード：雇用、性別分離、社会的資源、ジェンダー

著書・論文等：『労働市場とジェンダー 雇用労働における男女不公平の解消に向けて』（東洋館出版社 2003年）、「公務員の採用選考と性別情報一差別と闘うツールとしてのジェンダー統計」（法政大学大原社会問題研究所編、大原社会問題研究雑誌 第763号 2022年）

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課
MAIL: mlkoho@toyo.jp
取材お申し込みフォーム
<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

[https://www.toyo.ac.jp/sdgs/
SDGs_NewsLetter/](https://www.toyo.ac.jp/sdgs/SDGs_NewsLetter/)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals



SDGs NewsLetter

Vol.20

東洋大学は“知の拠点”として
地球社会の未来へ貢献します

2023.03.20発行



リテール業界が推進する 多彩なSDGs活動と 今、求められる産官学の連携

個人の顧客に向けて商品を販売するリテールビジネス（小売業）。多くの企業がインターネットやメディアを駆使し、自社のSDGs活動を消費者に発信しています。リテール業界におけるSDGsに関する取り組みの現状や、今後の展望について経営学部マーケティング学科の須山憲之准教授がお話します。

Summary

- ・リテール業界では、SDGsを意識した多彩な商品が企画・販売されている
- ・消費者のSDGsに対する認知率は高いが「実践」には至りにくい
- ・SDGsの浸透・啓発のために暗黙知を形式知化し、継続して社会に発信していく必要がある

リテール業界とSDGs活動

業界が取り組むSDGs活動には、どのようなものがあるのでしょうか。

最近の例では、ネスレ日本と日清紡グループのニッシントーア・岩尾株式会社による「アップサイクル衣服」の製作がユニークです※1。消費者の参加を促すためにネスレ商品の空きパッケージを回収するボックスを全国9箇所を設置し、そこで集めた空きパッケージを等から繊維を生産し、コーヒー抽出後の残渣を染料として活用した衣服を製作する試みです。両社の強みとこれまでの知見を活かしたアップサイクルの取り組みモデルとして大きな注目を集めています。



須山先生自身も百貨店と連携して、SDGsを意識した商品を企画・販売されてきたそうですね。

2020年10月、大丸東京店から「コロナ禍で疲弊した社会を元気にするために学生の力を借りて何かできないか」と声をかけていただきました。そこでゼミの学生たちと話し合い、地域活性化への貢献を見据えて、国内の各地で生産される高品質の繊維素材をそれぞれ使った8種類のマスクの販売を企画・提案したのです。翌年も大丸東京店と連携し、海洋プラスチックごみを加工して製作したアクセサリーや、玉ねぎや栗、ブルーベリーといった廃棄食材で染色した「のこり染め」の雑貨の製造・販売に取り組みました。いずれも実際に学生が店頭に立って商品説明を行い、実りあるSDGs活動になったと感じます。

その後、2022年4月より東洋大学に着任しました。私のゼミでは引き続き、大丸東京店とのコラボレーションを行う予定です。私自身が現在取り組んでいる研究は、前述の大丸東京店と連携した取り組みにおいて実施した消費者のSDGsに関する意識・行動調査です。この調査結果を見ると、SDGsの認知率は約70%で、多くの消費者がSDGsを必要だと考え、自身も活動に参加したいと回答していました。しかし、実際に行動に移している消費者の割合となると極端に数値が下がり、「実践」に至りにくい現状が読み取れます。SDGsに対する取り組みは、決してハードルが高いものばかりではありません。こまめな消灯のような小さな行動も、一人ひとりの心掛けが大きな力となり、SDGs達成に寄与するでしょう。昔からあったものが具体的な目標になっただけで、難しいものではないという認知を広めていきたいと考えています。

今後、私のゼミで行っているSDGs活動では、過去の活動で得た成果と課題を生かし、「情報発信」にも注力したいと考えています。SNSを駆使し、企業と連携した取り組みや、日常生活の中で誰もが行えるSDGs活動を紹介・発信していく予定です。

SDGsが経済活動に与える影響と今後の展望

リテール業界におけるSDGsの浸透・啓発を進める上での課題は、何でしょうか。

旗振り役である国が、誰もが取り組みやすくなるよう環境や仕組みづくり、経済的支援を実施しないことには、現状からの飛躍的な進展は望めないでしょう。過去に経済産業省主催の食品ロスと省エネに関する分科会に参加しましたが、政府と企業との間にSDGsに対する認識に乖離がみられるように感じました。SDGs活動に注力する大企業が少なくない一方で、規模や価格競争などの面で不利になりがちな中小企業では、業績向上に結びつきにくいSDGs活動に取り組むことは容易ではありません。自分のビジネスを成り立たせることが優先され、社会貢献に取り組む余力がないと考える企業もあります。まずはSDGsを理解してもらい、社会貢献と営業利益が同時に成り立つ可能性を模索すること、またSDGsを積極的に推進する政府と推進に消極的な企業との間に立ち、双方がWin-Winの関係を築けるよう橋渡しを行うことを目指しています。



大丸東京店で販売された「のこり染め」のトートバッグ

また、教育研究機関である大学も改めて原点に立ち返り、取り組みを推進すべきと考えます。学校教育法に「大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」と記されているように、大学には社会貢献という使命があります。既存の知恵だけではなかなか現状から飛躍的に改善することは困難です。知識創造社会で暗黙知を形式知化すること、ある人だけが知っていることをみんなに知らせることが必要だと考えています。SDGsの達成は1回のアプローチではなく、改善・継続していく必要があります。SDGs達成に向けたPDCAサイクル※2を、産官学が一体となって回すことができれば大きな成果が得られるはずで

私の専門領域は、消費者行動に基づき定量的にマーケティング活動を捉える「マーケティング・サイエンス」です。その一環で気温や湿度など、天候に関する変数を分析に組み込むモデルを設計しています。これは「雨が降れば客数が減り、売上が下がる」という小売業の経験則を、天候に関するデータと実際の売上をベースに可視化し、売上予測に活用しようという試みです。売上予測に応じて売れる傾向にある商品やアイテムを必要分だけを提供することができるため、コストを抑えるとともに商品ロスの削減に貢献できます。このような研究成果を社会に還元し、中小企業のSDGsの取り組みを後押しできるよう、多角的なアプローチでSDGs達成に寄与したいと考えています。

※1 出典：ネスレ日本株式会社

※2 Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（確認）→ Act（改善）の4段階を繰り返して業務を継続的に改善する方法。



須山 憲之（すやま のりゆき）

東洋大学経営学部マーケティング学科准教授／博士（商学）

専門分野：マーケティング・サイエンス、消費者行動分析

研究キーワード：データ解析、CRM、SDGs

著書・論文等：「TikTokにおける中国消費者のインフルエンサーに対する満足度の評価」（2022年第25回 APIEMSコンファレンス講演論文集 2022年11月）、「予測確率を最大化した顧客購買予測」（ACM国際会議プロシーディングシリーズ 2019年09月）

NewsLetterに関するお問い合わせ・
取材お申し込み

東洋大学総務部広報課
MAIL: mlkoho@toyo.jp
取材お申し込みフォーム
<https://www.toyo.ac.jp/press>

Toyo SDGs NewsLetter

Toyo SDGs NewsLetter

[https://www.toyo.ac.jp/sdgs/
SDGs_NewsLetter/](https://www.toyo.ac.jp/sdgs/SDGs_NewsLetter/)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals

2022年10月3日

東洋大学のシンポジウム

バイオミメティクスのものづくりと 研究者の文理横断の可能性に関する シンポジウムを開催

日時：10月8日（土） 13：00～16：05

場所：東洋大学 125記念ホール（文京区白山5-28-20）

※対面・オンラインのハイブリッド開催

東洋大学（東京都文京区／学長 矢口悦子）生体医工学研究センターは、2022年10月8日（土）に「Answer文理融合（理工学・経営学・教育心理学） 東洋大学の文系・理系研究者が「つながり」を考えてみた～バイオミメティクスの成果を例に～」をテーマにしたシンポジウムを開催します。

本シンポジウムでは「東洋大学重点研究推進プログラム」（注1）の研究プロジェクトの1つである「バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくり」（研究代表者：合田達郎 理工学部生体医工学科教授）を軸に、文理による研究の発展性に迫ります。

「バイオミメティクス」とは、生物が進化の過程で獲得してきた機能から着想を得て、それらを科学、医学、産業などの分野に生かそうとする概念ですが、プロジェクトを経て総合大学として文系・理系学部の垣根を越えた本学研究者の人的つながりが構築されています。本シンポジウムではこうした文理融合研究のあり方を報告します。

取材をご希望の方は、メールフォームから10月7日（金）17：00までにお申込みいただけますようお願い申し上げます。オンラインをご希望の場合、URLを10月7日（金）19時頃にフォームに登録されたメールアドレス宛にお知らせします。

▶メールフォーム：<https://forms.office.com/r/E7q8abf1TG>

<記>

■日時：2022年10月8日（土） 13：00～16：05

■場所：東洋大学白山キャンパス 8号館7階125記念ホール
（文京区白山5-28-20）

※対面・オンラインのハイブリッド開催

■内容：

- ・バイオミメティクス×経営学【生物模倣が生み出す新たな価値】
- ・バイオミメティクス×教育心理学【バイオミメティクス研究会の取り組み】
- ・パネルディスカッション【文系・理系研究者が「つながり」を考える】

注1 東洋大学では、超スマート社会（Society5.0）の到来に向けて、地球レベルの課題解決に貢献するとともに、本学のブランドとなり得る独創的かつ先端的な研究プロジェクトを支援することを目的に「東洋大学重点研究推進プログラム」を創設し、現在7つの研究プロジェクトが研究に取り組んでいます。

【本件に関するお問い合わせ先】

東洋大学PR事務局（株式会社電通PRコンサルティング内） MAIL：toyo@group.dentsuprc.co.jp



東洋大学 重点研究推進プログラム
バイオミメティクス活用による高機能かつ持続可能なものづくり

Symposium 2022

Answer文理融合 (理工学・経営学・教育心理学)

東洋大学の文系・理系研究者が「つながり」を考えてみた
～バイオミメティクスの成果を例に～

「バイオミメティクス」とは、生物が進化の過程で獲得してきた機能から着想を得て、それらを科学、医学、産業などの分野に生かそうとする概念です。本重点研究プロジェクトが始まり、1年と少しが過ぎました。この間、個々の研究以外に学部、キャンパスを超えた東洋大学の研究者の人的つながりが構築されました。その関係を踏まえて東洋大学における文理融合研究のあり方を楽しく考えていきたいと思えます。

13:00 – 13:10 開会挨拶

東洋大学 学長 矢口 悦子

13:10 – 14:30 経営学×バイオミメティクス
【生物模倣が生み出す新たな価値】

経営学部 経営学科 教授 山本 聡
理工学部 機械工学科 准教授 窪田 佳寛
美津濃株式会社 グローバルアパレルプロダクト本部 田中 啓之氏

14:30 – 14:40 休憩

14:40 – 15:20 教育心理学×バイオミメティクス
【バイオミメティクス研究会の取り組み】

文学部 教育学科 教授 谷口 明子
理工学部 建築学科 講師 高岩 裕也

15:20 – 16:00 パネルディスカッション
【文系・理系研究者が「つながり」を考える】

登壇者：矢口、合田、窪田、谷口、高岩、山本

16:00 – 16:05 閉会挨拶

理工学部 生体医工学科 教授 合田 達郎

主催 生体医工学研究センター

共催 工業技術研究所

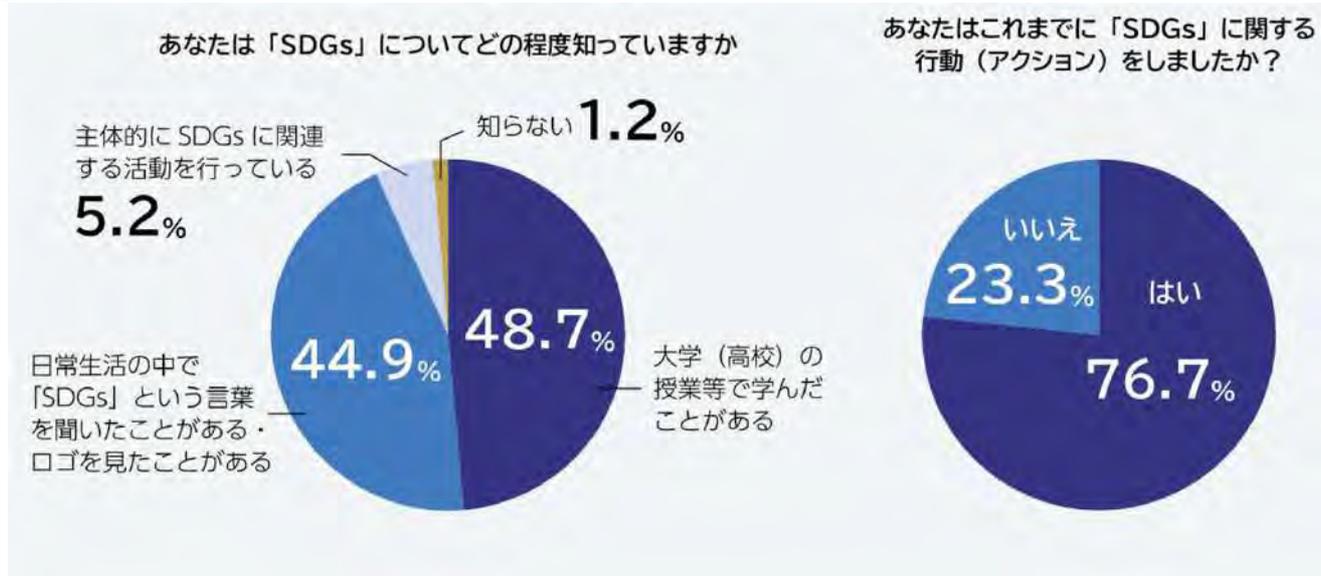
2022年10月7日

東洋大学のSDGsムーブメントを醸成し
「主体的に行動する人」の育成を目指す月間
TOYO SDGs Weeksを開催
2022年10月10日（月）～11月6日（日）

東洋大学（東京都文京区／学長 矢口悦子）は、学内のSDGsムーブメントのさらなる醸成と、地球社会の未来のために「主体的に行動する人」の育成を目指して「TOYO SDGs Weeks」と題した各種プログラムを10月10日から11月6日まで開催します。

学校法人東洋大学では、昨年6月6日に「学校法人東洋大学SDGs行動憲章」を制定。SDGsの理念に賛同し、地球社会の明るい未来づくりへの貢献を誓いました。SDGsの理念に賛同し、地球社会の明るい未来づくりに貢献するために「教育」「研究」「社会・国際貢献」「環境貢献」「ダイバーシティ&インクルージョン」の5領域において行動目標を定めています。この憲章に基づき、SDGsに焦点を当てた教育プログラムの展開や、「東洋大学重点研究推進プログラム」によるSDGs達成に貢献する研究を推進。またSDGs活動に取り組む本学の学生や学生団体を「東洋大学SDGsアンバサダー」に認定する制度の創設など、学生、教職員とともに多面的な取り組みを展開しています。

「TOYO SDGs Weeks」の開催に先立ち、東洋大学の学生を対象に行ったSDGs認知度調査では、SDGsの認知は9割を超え、76.7%がSDGsに関する行動を起こしていることが分かりました。



2回目の開催となる本年の「TOYO SDGs Weeks」では、シンポジウムやコンテスト、講演会、ワークショップなど、SDGsに関連する計11件（10月7日現在）のプログラムを開催し、「主体的に行動する人」の育成を目指します。また、一部のプログラムは一般の方にも参加いただける内容であり、地域社会のSDGsへの理解促進を推進します。

■TOYO SDGs Weeks 概要

期間： 2022年10月10日（月）～ 11月6日（日）

公式サイト： <https://www.toyo.ac.jp/sdgs/weeks>

参加対象： 主に学生・教職員・関係者。

一部のプログラムは一般の方も参加可能。

※申込方法等の詳細は上記公式サイトをご参照ください。

【一般参加可のプログラム】

開催日/期間	種別	タイトル
10月22日	シンポジウム	東洋大学SDGs推進センター設立記念シンポジウム 「SDGs × カーボンニュートラル —いま、わたしにできること。—」
10月29日、30日	コンテスト	第2回TUEP (Toyo University Eco Projects) デザインコンテスト 結果発表

【一般参加可のプログラム概要】

●東洋大学SDGs推進センター設立記念シンポジウム

「SDGs × カーボンニュートラル —いま、わたしにできること。—」

日時： 10月22日（土） 13時30分～16時30分

開催形式： オンラインシンポジウム

主催： 東洋大学 SDGs 推進センター

登壇者： 東洋大学 学長 矢口 悦子
東洋大学SDGs推進センター センター長 川口 英夫
東洋大学社会貢献センター センター長 高山 直樹
東京大学 教授 平尾雅彦氏（基調講演）
株式会社進研アド 取締役 田邊心技氏
東洋大学附属姫路高等学校 地域活性化部 等

＜内容＞

1. 学長挨拶
2. 本学の取り組み報告
 - ①SDGs認知度調査結果報告
 - ②取り組み事例報告
 - ③パネルディスカッション
3. シンポジウム（テーマ：カーボンニュートラル）
 - ①基調講演
 - ②講演
4. 質疑応答
5. SDGs推進センター長挨拶

詳細・配信： <https://www.toyo.ac.jp/sdgs/center/sympo2022/>

●第2回TUEP (Toyo University Eco Projects) デザインコンテスト【一般受付終了・発表時の視聴可】

TUEPは企業と連携し、SDGs達成に向けた活動を行っている学生チームです。2022年は紙の繊維から誕生したトートバッグと紙製マスクケースのデザインを学内外から募集しました。

本コンテストの入賞作品発表を、大学祭「白山祭」のオンライン配信で行います。

応募期間： 9月13日（火）まで 【募集終了】

入賞発表： 10月29日（土）30日（日）オンラインで配信（大学祭「白山祭」の配信にて）

詳細： <https://www.toyo.ac.jp/news/academics/student-support/TUEP/>

【学生対象のプログラム】

開催日/期間	種別	タイトル
10月1日～10月15日	講座	e-ラーニングでSDGsの基礎を学ぶ
10月1日～11月6日	コンテスト	2022東洋大学SDGsコンテスト
10月7日～11月6日	図書館展示	図書館でSDGs遊学「外来生物と持続可能性」
10月11日	ワークショップ	SDGs VTuber きらめきひろの SDGs クイズショー
10月13日	シンポジウム	東洋SDGsグリーンフォーラム2022
10月13日	講座	公開授業「里親と暮らす子どもたちについて知ろう」
10月21日	講座	持続可能な食料生産を切り開く最新の農業技術
10月22日	ワークショップ	TGLキャンプ「SDGsカードゲーム」
11月5日	ワークショップ	生命科学部のコミュニティー活性化を目指した学生ファシリテーター養成プログラム

【報道関係者様からのお問い合わせ先】

東洋大学PR事務局（電通PRC内） 担当：神崎

MAIL： toyo@group.dentsuprc.co.jp

年月指定: ~ フリーワード:

最新ニュース 大学ニュース 中高ニュース ニュース特集 海外向けニュース

東洋大学

東洋大学がSDGs推進センター設立記念シンポジウムを開催「SDGs × カーボンニュートラル -- いま、わたしにできること。 --」【10月22日オンライン開催／無料】

大学ニュース / イベント / 学生の活動 / 地域貢献
2022.10.14 15:00いいね! 14 シェアする ツイート 

東洋大学（東京都文京区／学長 矢口悦子）は、2022年10月1日付でSDGs推進センターを設立しました。それに伴い、2022年10月22日（土）に「SDGs × カーボンニュートラル - いま、わたしにできること。 -」をテーマとしたSDGs推進センター設立記念シンポジウムを開催します（オンライン開催／無料）。本シンポジウムでは昨今よく見聞きする「SDGs」「カーボンニュートラル」について、2030年の未来に向け、身近な生活の中で私たち一人ひとりができることを考えていきます。

本シンポジウムはSDGs認知度調査の結果報告を含む東洋大学の取り組み紹介のほか、身近なカーボンニュートラルをテーマとする講演がなされます。なお、本学は学内のSDGsムーブメントのさらなる醸成と、地球社会の未来のために「主体的に行動する人」の育成を目指して、10月10日から11月6日までの期間を「TOYO SDGs Weeks」と題し、SDGsに関連した各種プログラムを開催しており、本シンポジウムを含めたいくつかの企画は一般公開されています。

●東洋大学SDGs推進センター設立記念シンポジウム 「SDGs × カーボンニュートラル - いま、わたしにできること。 -」

<日 時>

2022年10月22日（土） 13:30～16:30

<開催・申込方法>

オンライン開催／事前申込不要・参加無料

時間になりましたら、以下ページからシンポジウムの映像をご覧ください。

<https://www.toyo.ac.jp/sdgs/center/sympo2022/>

<内 容>

- ・学長挨拶
- ・東洋大学の取り組みの紹介
 - (1) SDGs認知度調査 結果報告
高山 直樹（東洋大学 社会貢献センター長）
 - (2) SDGs取り組み報告
 - ・東洋大学 国際学部国際地域学科 教授『SDGs Students Project 学生起業に向けて』
 - ・東洋大学 SDGsアンバサダー（団体）「Smile F LAOS」
 - ・東洋大学附属姫路高等学校 地域活性部『高校生による自然活用型社会を目指した活動』
 - (3) パネルディスカッション
ファシリテーター：高山 直樹（東洋大学 社会貢献センター長）
パネラー：田邊 心技 氏（進研アド 取締役）／北脇 秀敏（東洋大学 国際学部国際地域学科 教授）
東洋大学SDGsアンバサダー学生／東洋大学附属姫路高等学校 地域活性部
- ・シンポジウム
 - (1) 基調講演「ライフサイクル思考で実現するカーボンニュートラル社会」
平尾 雅彦 氏（東京大学先端科学技術研究センターライフサイクル工学分野 教授）
 - (2) 講演「地域の脱炭素化と市民の貢献」
荒巻 俊也（東洋大学SDGs推進センター 副センター長／国際学部 学部長）

▼本シンポジウムに関する問い合わせ先

東洋大学SDGs推進センター事務局

Mail: ml-sdgs@toyo.jp

▼報道関係の方による取材の問い合わせ先

東洋大学総務部広報課

TEL: 03-3945-7571

Mail: mlkoho@toyo.jp



東洋大学のその他のニュースはこちら

大学・学校情報

大学・学校名
東洋大学



URL
<https://www.toyo.ac.jp/>

住所
東京都文京区白山5-28-20

1887（明治20）年、哲学者・井上円了によって創立された東洋大学は、「諸学の基礎は哲学にあり」を建学の精神として掲げる私立大学。東洋大学の考える「哲学」とは、つねに疑問と好奇心を持ち、自ら考える力を養うこと。全国から約3万人の学生が在籍し、文系・理系合わせて13学部15研究科の幅広い学問領域から学べる総合大学です。

学長（学校長）
矢口 悦子



大学探しナビで東洋大学の情報を見る

東洋大学の 最近のプレスリリース

東洋大学がSDGs特設サイト内コンテンツ「SDGs Newsletter」にて、SDGsに関する注目キーワードに基づく2022年度制作記事10本紹介
2023.03.29

【東洋大学】中高大連携 課題発見講座 第4回「未来の科学者育成プロジェクト」2022年度成果報告会を開催しました
2023.03.27

東洋大学が創業者・井上円了の生涯を漫画化した『円了』を制作
2023.03.20

東洋大学オウンドメディア「LINK @ TOYO」人気記事の続編公開&2022年度人気記事紹介
2023.03.14

【東洋大学】中高大連携 課題発見講座 第4回「未来の科学者育成プロジェクト」2022年度成果報告会を3月16日に開催
2023.03.08

- ▶ ご利用案内
- ▶ 大学・中高会員様へ
- ▶ 記者・マスコミの皆様へ
- ▶ 一般の皆様へ
- ▶ 配信先一覧
- ▶ 会社概要
- ▶ プライバシーポリシー
- ▶ 利用規約

© 2023 DAIGAKU PRESS CENTER. ALL RIGHTS RESERVED.

2022年10月26日

どなたでも参加いただける無料のオープンセミナー

月経をとりまく諸問題に光をあてる オープンセミナーを開催

日時：10月31日（月） 14：45～16：15

場所：東洋大学白山キャンパス（文京区白山5-28-20）

※対面・オンラインのハイブリッド開催

東洋大学（東京都文京区／学長 矢口悦子）国際共生社会研究センターは、2022年10月31日（月）に「MeW Project」「月経をとりまく諸問題に光をあてる試み」をテーマに無料のオープンセミナーを開催します。

近年、国際開発（開発支援）の場では、月経の対処、つまり生理用品の入手や生理用品を取り替えやすいトイレの整備、月経教育などが「解決すべき課題」として認識され、国際機関やNGOによる支援が広がっています。

月経をめぐる問題は、開発途上国だけでなく先進国とよばれる欧米などでも、貧困に起因して生理用品が入手困難な状況があることに対して女性たちが声を上げ、“period poverty（生理の貧困）”という言葉とともにこの状況を打開しようというムーブメントが大きくなりつつあります。

「MeW（ミュー）：Menstrual Wellbeing by/in Social Design」とは、社会のデザインを見直すことで月経をとりまく諸問題を明らかにし、その解決を通してよりよい未来を目指していくというものです。

具体的には《生理用品の無償提供用のディスペンサーがトイレ内にあること》によってもたらされる変化を記録し、また、この変化をきっかけに、当事者たちがこれまで誰にも開示することがなかった苦痛や不満などの声を発する機会を創出すること、そして、そうした声をすくいあげて分析することを通して、月経をとりまく諸問題をさまざまな角度から明らかにすることを目的としています。

独自に開発した生理用品の無償提供用のディスペンサーを大学内のトイレに設置し、利用者の声や消費の実績を記録する。こうした実証実験と意見の収集を通じて、日本における月経の諸課題を明らかにし、月経のある人の生活改善を目指すものです。

本センター客員研究員であり、大阪大学大学院人間科学研究科の杉田映理教授の大阪大学での試みが起因となり、東洋大学でもMeWプロジェクトが始動しています。



ディスペンサー設置の様子

<記>

- 日時：2022年10月31日 月曜日 14:45～16:15
- 場所：東洋大学白山キャンパス8号館8601号室（文京区白山5-28-20）
※対面（事前申し込み制）とオンラインのハイブリッド開催

■プログラム

- ・「月経をめぐる今日的なグローバルなムーブメント」
杉田映理（センター客員研究員、大阪大学大学院人間科学研究科）
- ・「進化したサニタリーボックスと生理用品の廃棄への問題提起」
西島一男（日本カルミック）
- ・「大阪大学におけるMeWプロジェクト」
小塩若菜（大阪大学大学院人間科学研究科大学院生）
- ・「東洋大学におけるMewプロジェクトの始動」
中村香子（センター研究員、東洋大学国際学部）・坂本楓（東洋大学国際学部4年生）

- 詳細は、本学公式Webサイトをご確認ください。

<https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/orc/event/2022/1031/>

■取材申し込み方法

- ・対面参加の場合 ※事前申し込み制 **10月31日（月）10：00まで**
対面での取材を希望される方は、以下の申込みフォームより事前申し込みの上、ご来場ください。

<https://forms.gle/g26RPo3336REwqA29>

- ※メディア以外の対面参加希望者は、10月31日（月）11：00までに
国際共生社会研究センター（cesdes.sec@toyo.jp）宛のメールにて
参加者氏名、所属（ご職業など）をお知らせの上、ご来場ください。



- ・オンライン参加の場合

取材申し込みは**必要ありません**。以下のURLから、ご参加いただけます。

<https://zoom.us/meeting/register/tJModu2srjliHtURuBuSCMC5B7kRL4QVwoMW>



【本件に関するお問い合わせ先】

東洋大学PR事務局（株式会社電通PRコンサルティング内） MAIL： toyo@group.dentsuprc.co.jp

2022年11月25日

～東洋大学重点研究推進プログラム～
水のシンポジウム
『安心な水を未来へ』

日時：12月3日（土） 10：30～12：20

場所：東洋大学 川越キャンパス 721教室（川越市鯨井2100）

※対面・オンラインのハイブリッド開催

東洋大学（東京都文京区／学長 矢口悦子）の水再生循環プロジェクトは、第3回水のシンポジウム「安心な水を未来へ」を12月3日（土）に開催します。

「化学」と「生物」の融合で排水を浄化し、このきれいな水環境を次世代につなぎたい。本プロジェクトでは効率的な水循環を実現するため、社会実装を最終的なゴールとし、きれいな水環境を守るための省エネ型の排水処理システム開発を目指しています。

「化学の力」により生活が豊かになる一方で、環境汚染など負の側面ももたらしました。しかしながら、環境をきれいにする力もまた「化学の力」にはあります。

昨年の水のシンポジウムは「サステナブルな社会の実現を水環境から考える。-SDGsと水-」のテーマで開催しましたが、今回は「安心な水を未来へ」をテーマに、東洋大学重点研究推進プログラム（注1）の研究プロジェクトの1つである「安心な水を未来へ～有用細菌による排水処理技術の開発と普及に向けて～」（研究代表者：井坂 和一 理工学部応用化学科准教授）チームのこれまでの研究成果を発表するとともに社会実装に向けて検討していきます。

（注1）東洋大学では、超スマート社会（Society5.0）の到来に向けて、地球レベルの課題解決に貢献するとともに、本学のブランドとなり得る独創的かつ先端的な研究プロジェクトを支援することを目的に「東洋大学重点研究推進プログラム」を創設し、現在7つの研究プロジェクトが研究に取り組んでいます。（<https://www.toyo.ac.jp/contents/research/tprp/>）

つきましては、本シンポジウムをご取材賜りたく、ご案内申し上げます。

取材をご希望の方は、メールフォームから12月2日（金）17：00までにお申込みいただけますようお願い申し上げます。

▶メールフォーム：<https://forms.office.com/r/8VnA6ZaDZ7>

なお、オンラインをご希望の場合、URLを12月2日（金）19時頃にフォームに登録されたメールアドレス宛にお知らせします。

<記>

■日時：2022年12月3日（土） 10：30～12：20

■場所：東洋大学川越キャンパス 721教室（川越市鯨井2100）

※研究発表者に直接ご取材を希望される場合は、終了後に時間を設けますので通信欄にその旨ご記入ください。

■主催：東洋大学 水再生循環プロジェクト

■後援：東洋大学 工業技術研究所

■内容：次ページの通り



第3回 水のシンポジウム 「安心な水を未来へ」

<開会 ご挨拶> 10:30~10:35

「東洋大学におけるSDGsの取り組み」

矢口 悦子（東洋大学 学長）

<基調講演> 10:35~10:55

「これからの地域環境研究を考える」

大原 利真 氏（埼玉県環境科学国際センター 研究所長）

<研究発表> 11:00~12:00

～環境負荷を考慮した水循環～ 「水システムに対する住民意識」

大塚 佳臣（東洋大学 総合情報学部 教授）

「微量金属による新しい微生物機能の制御手法」

井坂 和一（東洋大学 理工学部 准教授）

「開発途上国の排水処理と適正技術」

北脇 秀敏（東洋大学 国際学部 教授）

「微生物の系統分類学から水処理を考える」

峯岸 宏明（東洋大学 理工学部 准教授）

「廃棄物と下水汚泥の連携処理の評価」

後藤 尚弘（東洋大学 情報連携学部 教授）

<パネルディスカッション（全体質疑）> 12:00~12:15

<閉会 ご挨拶> 12:15~12:20

川口 英夫（東洋大学 副学長）

【本件に関するお問い合わせ先】

東洋大学PR事務局（株式会社電通PRコンサルティング内）

MAIL： toyo@group.dentsuprc.co.jp

年月指定: ~ フリーワード:

最新ニュース 大学ニュース 中高ニュース ニュース特集 海外向けニュース

東洋大学

東洋大学が中小企業経営者、大学、自治体、産業支援機関向けシンポジウム「TOKYO イーストのHTTと中小企業経営」を開催（共催：東洋大学・東京東信用金庫／後援：東京都）【無料/申込受付中】

大学ニュース / イベント / 産官学連携

2022.12.13 12:00

いいね! 0 シェアする ツイート 

東洋大学（東京都文京区／学長 矢口悦子）は、2022年12月20日（火）に東京東信用金庫（東京都墨田区／理事長 中田清史）との共催で「TOKYOイーストのHTTと中小企業経営 経営環境の激変を「電力をH減らす・T創る・T蓄める」で乗り越えるには？ ～SDGs経営の実践～」と題したシンポジウムを開催いたします。参加費無料で、申込みは本文記載のフォームから受付中。

現在、ウクライナ戦争や円安といった外部要因から、電力不足と電力価格の高騰が生じています。今冬はさらに電力・エネルギー不足が深刻化するとも言われています。

こうした中で、東京都では2022年度の重要施策として、HTT<電力をH減らす・T創る・T蓄める>を掲げています。その上で、2022年6月にHTT・ゼロエミッション推進協議会も設立しています。

電力・エネルギー不足や電力価格の高騰は中小企業経営にも負の影響を与えています。また、省エネやゼロエミッションは中小企業経営における古くて新しい課題でもあります。HTTに対応するかたちで、城東地域の中小企業の経営者がどのように電力不足に対応し、乗り越えているか、ゼロエミッションを実現しようとしているか、その姿を発信し、議論することは意義あることと言えるでしょう。

以上を踏まえ、東洋大学、東京東信用金庫、東京都の産官学連携として、TOKYOイーストのHTTと中小企業経営を開催します。

TOKYOイーストのHTTと中小企業経営

経営環境の激変を「電力をH減らす・T創る・T蓄める」で乗り越えるには？

～SDGs経営の実践～

<開催概要>

- 共催：東洋大学、東京東信用金庫
- 後援：東京都
- 日時：12月20日（火）16：00～17：50
- 場所：東洋大学白山キャンパス 井上円了ホール（東京都文京区白山5-28-20）
- 申込：定員200名（先着）。下記URL（申込みフォーム）からお申込みください。
<https://forms.gle/kZM9aBH2TqVwwmX97>
申込締切：2022年12月16日（金）

■プログラム（予定）：

- ・開会挨拶 東京東信用金庫 理事長 中田清史
- ・来賓挨拶 東京都 知事 小池百合子氏（ビデオメッセージ）
- ・講演1 東京都産業労働局
- ・講演2 企業事例発表
株式会社浜野製作所 代表取締役CEO 浜野慶一氏
常木鍍金工業株式会社 取締役営業部長 池田岳浩氏
東京東信用金庫 常勤理事 湯浅博氏
- ・まとめ 東洋大学経営学部 教授 山本聡
- ・閉会挨拶 東洋大学 学長 矢口悦子

▼本シンポジウム掲載情報（東洋大学公式Webサイト）

<https://www.toyo.ac.jp/events/research/cooperation/ciit/tokyoeast2022/>

▼本件に関する問い合わせ先

東洋大学研究推進部産官学連携推進課

TEL : 03-3945-4199

Mail : ml-chizai@toyo.jp



シンポジウムチラシ



申込フォーム

東洋大学のその他のニュースはこちら

大学・学校情報

大学・学校名
東洋大学



URL
<https://www.toyo.ac.jp/>

住所
東京都文京区白山5-28-20

1887（明治20）年、哲学者・井上円了によって創立された東洋大学は、「諸学の基礎は哲学にあり」を建学の精神として掲げる私立大学。東洋大学の考える「哲学」とは、つねに疑問と好奇心を持ち、自ら考える力を養うこと。全国から約3万人の学生が在籍し、文系・理系合わせて13学部15研究科の幅広い学問領域から学べる総合大学です。

学長（学校長）
矢口 悦子



大学探しナビで東洋大学の情報を見る

東洋大学の

最近のプレスリリース

東洋大学がSDGs特設サイト内コンテンツ「SDGs Newsletter」にて、SDGsに関する注目キーワードに基づく2022年度制作記事10本紹介
2023.03.29

【東洋大学】中高大連携 課題発見講座 第4回「未来の科学者育成プロジェクト」2022年度成果報告会を開催しました
2023.03.27

東洋大学が創業者・井上円了の生涯を漫画化した『円了』を制作
2023.03.20

東洋大学オウンドメディア「LINK @ TOYO」人気記事の続編公開&2022年度人気記事紹介
2023.03.14

【東洋大学】中高大連携 課題発見講座 第4回「未来の科学者育成プロジェクト」2022年度成果報告会を3月16日に開催
2023.03.08

- ▶ ご利用案内
- ▶ 大学・中高会員様へ
- ▶ 記者・マスコミの皆様へ
- ▶ 一般の皆様へ
- ▶ 配信先一覧
- ▶ 会社概要
- ▶ プライバシーポリシー
- ▶ 利用規約

© 2023 DAIGAKU PRESS CENTER. ALL RIGHTS RESERVED.

2023年2月24日

～東洋大学重点研究推進プログラムシンポジウム～

『アスリートからヘルスサポート研究の
Now and in the Future』最終研究成果発表

日時：3月1日（水）13：00～16：10

場所：東洋大学白山キャンパス 8号館7階125記念ホール
（文京区白山5-28-20）※オンライン視聴可能

東洋大学（東京都文京区／学長 矢口悦子）の生体医工学研究センターは、東洋大学重点研究推進プログラムシンポジウム「アスリートからヘルスサポート研究の“Now and in the Future”」を3月1日（水）に開催します。

東洋大学生体医工学研究センターは、国民の健康の維持・増進を図り、幅広く社会に還元することを目的に、「アスリートサポート技術の開発研究」、「熱中症対策研究」、「高齢者の健康福祉増進研究（ヘルスケアサポート研究）」の3つの柱を基盤に研究を行っております。これまでの研究成果として、「競技用国産カーブ開発」、「血管保護効果の機能性表示食品を企業と共同開発」、「高齢者に多い嚥下機能低下を、非侵襲的に計測・解析できるシステムの開発」など、様々な研究成果を社会実装化してきました。

このたび「アスリートからヘルスサポート研究の“Now and in the Future”」をテーマに、東洋大学重点研究推進プログラム（注1）の研究プロジェクトの1つである「多階層的研究によるアスリートサポートから高齢者ヘルスサポート技術への展開～社会実装に向けての研究連携組織の構築～」（研究代表者：加藤 和則 生体医工学研究センター教授）の3年間の最終研究成果を発表します。

つきましては、本シンポジウムをご取材賜りたく、ご案内申し上げます。

取材をご希望の方は、メールフォームまたはQRコードから2月28日（火）17：00までにお申込みいただきますようお願い申し上げます。

▶メールフォーム：<https://forms.office.com/r/MtvxP4AJVR>

なお、オンライン視聴をご希望の場合、URLを2月28日（火）19時頃にフォームに登録されたメールアドレス宛にお知らせします。

<記>



■日時：2023年3月1日（水）13：00～16：10

■場所：白山キャンパス 8号館7階125記念ホール（東京都文京区白山5-28-20）

※対面参加のみ、研究発表者に直接ご取材を希望される場合は、終了後に時間を設けますので通信欄にその旨ご記入ください。

■主催：生体医工学研究センター

■内容：次ページの通り

（注1）東洋大学では、超スマート社会（Society5.0）の到来に向けて、地球レベルの課題解決に貢献するとともに、本学のブランドとなり得る独創的かつ先端的な研究プロジェクトを支援することを目的に「東洋大学重点研究推進プログラム」を創設し、現在7つの研究プロジェクトが研究に取り組んでいます。（<https://www.toyo.ac.jp/contents/research/tprp/>）

東洋大学重点研究推進プログラムシンポジウム

『アスリートからヘルスサポート研究の“Now and in the Future”』

＜基調講演＞ 13:10～14:20

「熱中症予防対策研究の最近の話題～労働衛生の観点から自験例を中心として～」

澤田 晋一 氏（東京福祉大学・大学院 教育学部 教授）

＜研究報告＞ 14:30～16:00

1.アスリートサポート技術開発グループ 「デジタルイゼーションとアスリートサポート」
窪田 佳寛（東洋大学 工学部機械工学科 准教授）

これまで進めてきたスラローム競技用カヌー開発プロジェクトをもとに、ものづくりのデジタル化（デジタイゼーション、デジタルイゼーション）の観点からアスリートサポートについて報告する。

2.熱中症対策グループ 「熱中症対策機能性成分の探索研究から社会実装まで」

加藤 和則（東洋大学 工学部生体医工学科 教授・生体医工学研究センター センター長）
柑橘系果皮由来成分“オーラプテン”が、暑熱ストレス耐性機能を有することを新たに発見し、新しい概念にもとづいた熱中症対策製品の開発と地域活性化を目指した産官学連携活動を紹介する。

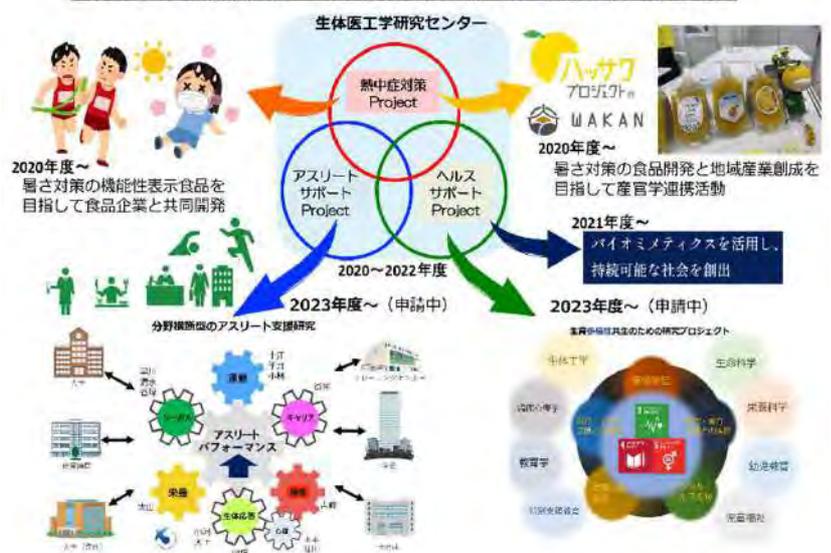
3.高齢者サポート技術開発グループ 「認知機能とドレブリン」

児島 伸彦（東洋大学 生命科学部生命科学科 教授）
脳ニューロンのシナプス後部の構造は認知機能と深く関連している。ドレブリンはシナプス後部に局在するタンパク質であり認知症で早期から減少することが知られている。本講演ではドレブリンの認知機能における役割に関する最近の研究成果を紹介する。

＜総括と今後の研究計画＞ 16:00～16:10

加藤 和則

重点研究推進プログラム(第1期)を終えて 生体医工学研究センターを中心とした各プロジェクトの飛躍的發展



【本件に関するお問い合わせ先】

東洋大学PR事務局（株式会社電通PRコンサルティング内）

MAIL : toyo@group.dentsuprc.co.jp

SDGsを推進する大学

大学は、研究やさまざまな活動を通じて、SDGsを推進しています。大学の具体的な取り組みを紹介します。

広告



学生が街おこし 地域イベントを開催

学生主体で、地域や企業と連携した街おこしに取り組んでいます。「桑の日」である9月8日には、「文学部インターゼミ桑都プロジェクト」と八王子産の食用桑を扱う企業がコラボしたイベントを開催しました。地域振興と市民の健康増進、八王子の大地を守る桑畑の持続可能性を目指した活動を展開しています。



お問い合わせ先
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
☎042-691-9442
MAIL:sokauniv-sdgs@soka.ac.jp (SDGs推進センター)
URL:https://www.soka.ac.jp/entrance/



東洋大学

学生発 SDGs アクションの 加速化

東洋大学は、2021年6月に「学校法人東洋大学SDGs行動憲章」を制定、SDGs活動の一層の活性化に向けて、2022年度は「東洋大学SDGsアンバサダー」としてSDGsを推進する学生78名を認定しました。8つのテーマを設定し、学生たちが自ら考え、企画等を検討し、学生目線でのSDGsの発信を実施していきます。



お問い合わせ先
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
MAIL:mlkoho@toyo.jp
URL:https://www.toyo.ac.jp/sdgs/



新たなSDGs 教育プログラムを開始

法政大学は、新たなSDGs教育プログラム「STARTプログラム」を開始しました。大学生に加え高校生・社会人も参加し、SDGsに取り組む企業による講義や、グループワーク、現地フィールドワークなどを行います。世代を超えた交流を通して、価値観の多様性や横断的な専門知識の重要性の認識を深めていくことを目指します。



お問い合わせ先
〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
☎03-3264-9300 (入学センター)
MAIL:NKadm@ml.hosei.ac.jp
URL:https://nyushi.hosei.ac.jp/



約 30,100,000 件 (0.35 秒)

 THE世界大学ランキング 日本版
https://japanuniversityrankings.jp/sdgs

大学についてのSDGs - THE世界大学ランキング 日本版

SDGsとは・1. 貧困をなくそう・2. 飢餓をゼロに・3. すべての人に健康と福祉を・4. 質の高い教育をみんなに・5. ジェンダー平等を実現しよう・6. 安全な水とトイレを世界中 ...

 SDGs media
https://sdgs.media/blog

【大学のSDGs事例】 ランキングと取り組む理由

2020/07/10 — 大学がSDGsに取り組む理由はさまざまですが、「大学の研究がイノベーションや新事業創出を目指す国・自治体や企業から注目されている（産学官 ...

SDGsのすゝめ第1回：SDGs基礎知識・外部... ビジネスと人権：「ビジネスと人権」の基...
日本の11大学のSDGsの取り組み... 大学の活動でSDGsが求められ...

 明治大学 x SDGs
https://www.meiji-sdgs.jp

明治大学 x SDGs

明治大学のSDGs達成に向けた取り組みを紹介するWEBサイトです。SDGsの目標ごとに教育・研究・社会貢献等の取り組みや担当教員を検索することができます。

 東洋大学
https://www.toyo.ac.jp/sdgs

東洋大学のSDGsへの取り組み | Toyo University

東洋大学のSDGsへの取り組みを紹介する特設Webページです。SDGsの17のゴールごとに関連する取り組みを紹介しています。東洋大学は知の拠点としてSDGsに取り組み、地球 ...

他の人はこちらも質問 :

大学 SDGs なせ？

SDGs 誰でもできる取り組み？

SDGs 小学生 何ができる？

フィードバック

大学 SDGs の画像検索結果

-  麗澤
-  関西大学
-  東京大学
-  琉球大学
-  広島大学



約30,100,000件 1ページ目

大学 sdgs 取り組み 大学 sdgs ランキング 大学 面接 sdgs sdgs 取り組み 大学 sdgs 大学 名古屋 sdgs を学べる大学 sdgs 学べる大学 で検索

Yahoo!ニュース

大学 SDGsのニュース

[男性ブランコが「お笑いをやる」覚悟を決めた時「大学中退を親に伝えたのは.....」](#)

「キングオブコント2021」で一気に人気に火がついた「男性ブランコ」。“...
現代ビジネス - 29分前

[【SDGsを機に飛躍するアカデミア】第3回国際的な指標 地域などとの連携に高評価続々](#)

2015年から始まり達成年限が2030年のSDGsにとって、23年は折り返しの年...
Science Portal - 56分前

[笑顔のおむすび 取材を通じて福祉を学ぶ](#)

シリーズ「笑顔のおむすび」です。「子ども食堂」はSDGs17の目標のうち6...
O A B 大分朝日放送 - 22時間前

<https://japanuniversityrankings.jp> > sdgs ▾

大学にとってのSDGs - THE世界大学ランキング 日本版

SDGsとは・1. 貧困をなくそう・2. 飢餓をゼロに・3. すべての人に健康と福祉を・4. 質の高い教育をみんなに・5. ジェンダー平等を実現しよう・6. 安全な水とトイレを世界中 ...

<https://sdgs.media> > blog ▾

【大学のSDGs事例】ランキングと取り組む理由

2020/7/10 - 大学がSDGsに取り組む理由はさまざまですが、「大学の研究がイノベーションや新事業創出を目指す国・自治体や企業から注目されている（産学官 ...

日本の11大学のSDGsの取り組み ... - 大学の活動でSDGsが求められ ...

<https://www.meiji-sdgs.jp> ▾

明治大学 x SDGs

明治大学のSDGs達成に向けた取り組みを紹介するWEBサイトです。SDGsの目標ごとに教育・研究・社会貢献等の取り組みや担当教員を検索することができます。

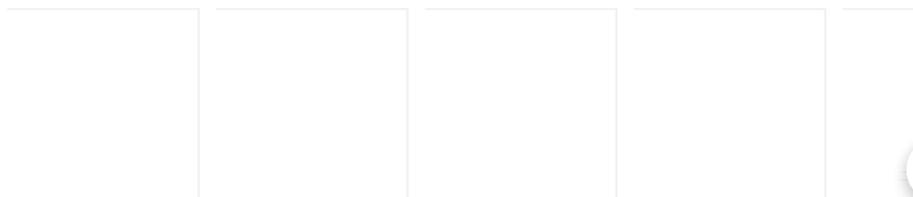
<https://www.toyo.ac.jp> > sdgs ▾

東洋大学のSDGsへの取り組み | Toyo University

東洋大学のSDGsへの取り組みを紹介する特設Webページです。SDGsの17のゴールごとに関連する取り組みを紹介しています。東洋大学は知の拠点としてSDGsに取り組む、地球 ...

PayPayフリマ

大学 SDGsをすべて見る (29件)



新品送込 SDGs 英語長文 core thi...	新品送込 SDGs 英語長文 think.sha...	【2冊セット】ホームページ担当者...	新品送込 SDGs 英語長文 コア core...	【送料決】読
3,690円	3,690円	1,580円	7,190円	3,899円
送料無料	送料無料	送料無料	送料無料	送料無料